太宰府市の文化財　第33集

辻　遺　跡

「歴史の散歩道」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

太宰府市教育委員会

辻　遺　跡

「歴史の散歩道」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

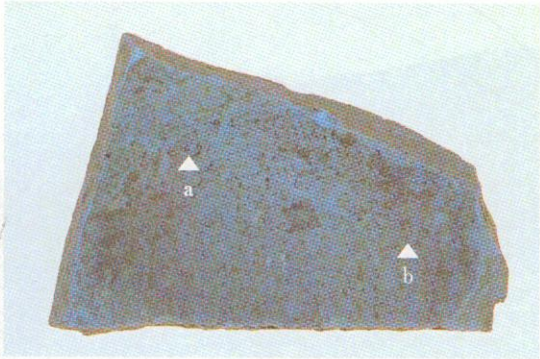
太宰府市教育委員会



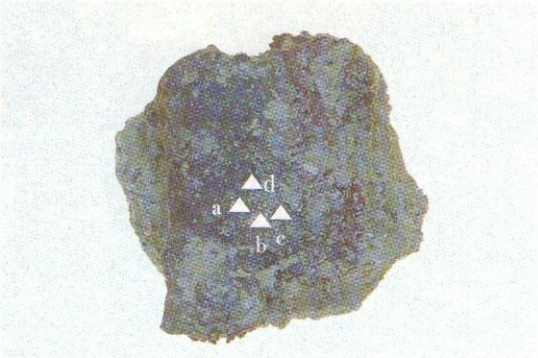
辻遺跡（文化ふれあい館建設予定地）の遠景（南西から）



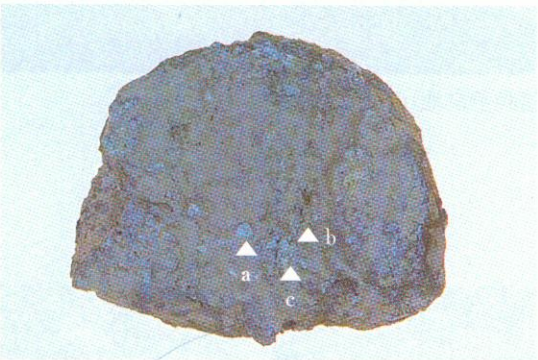
辻遺跡の桜並木



a.TU0102
b.TU0103
c.TU0101（高台端部）
灰釉陶器分析点（4区暗灰褐色土出土）



a.TU0201
b.TU0202
c.TU0203
d.TU0204
土製品分析点（2区表土）



a.TU0301
b.TU0302
c.TU0303
坩堝分析点（4区S-10出土）



a.TU0401
b.TU0402
坩堝分析点（4区S-202出土）

図7　螢光X線分析試料各分析点（付編参照）

序

本書は本市が平成７年度までに実施した「歴史の散歩道」事業に伴う発掘調査の報告書であります。「歴史の散歩道」事業は本市が掲げています「歴史とみどり豊かな文化のまち」作りの一環として、太宰府天満宮から水城跡までを散策できるように道路、公園、さらにガイダンス施設（太宰府市文化ふれあい館）を整備することを計画したものです。計画にあたって遺跡破壊を極力避けるように進めましたが、一部の公園とガイダンス施設については発掘調査による記録保存をおこなわざるを得ませんでした。歴史・文化に触れるために遺跡と引き替えに建設された施設等であることから、よりいっそうの文化財の保護と情報の提供、活用をはかりたいと考えております。

今回報告しております調査地は、筑前国分寺・国分尼寺と古代官道を結ぶ計画道路の存在などの新知見をもたらしました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

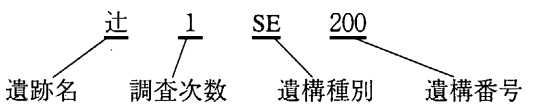
平成９年３月

太宰府市教育委員会

教育長　長野　治己

例　　言

1. 本書は太宰府市教育委員会が平成４・５年度に「歴史の散歩道」事業にかかわり発掘調査をおこなった辻遺跡第１次調査、御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査の報告書である。あわせて「歴史の散歩道」の中核施設となる「太宰府市文化ふれあい館」の概要を掲載する。
2. 発掘調査は上記の主体によりおこなわれ、調査組織は本文の「調査組織」のなかで示している。
3. 遺構の実測は調査担当者がおこなったが、辻遺跡第１次調査については写測エンジニアリング株式会社福岡支店による航空測量による図化作業をおこなった。また実測作業に関して、谷由紀子・永田佳子・藤村賢訓・立野真崇の援助を得た。図の浄書は谷がおこなった。
4. 遺物の実測は調査担当者ならびに中島恒次郎・森田レイ子・鶴味加代子・松隈里恵子・白水文恵・酒井美保子・相川寿美子・山本麻里子・谷がおこなった。図の浄書は谷がおこなった。
5. 遺構の写真撮影は調査担当者がおこない、空中写真は（有）空中写真企画がおこなった。遺物の写真撮影は狭川真一・中島がおこなった。
6. 遺構実測図および遺構配置図はすべて国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。磁北の座標北との偏差は西偏６度30分（1992年）である。
7. 出土した金属製品および脆弱遺物の応急処置と保存処理は山中幸子・下川可容子がおこなった。
8. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。



9. 残存脂肪酸分析については（株）ズコーシャ総合科学研究所に、種実・昆虫種同定はパリノ・サーヴェイ（株）に委託した。その結果は付編に示されている。
10. 本書の執筆は目次に示し、編集は谷の協力のもと城戸がおこなった。
11. 出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
12. 本書に掲載した遺物の分類は、以下に記載された分類によっている。

土器　太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡Ⅱ』
太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡Ⅱ—窯跡篇—』

陶磁器　太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡Ⅱ』

瓦　石松好雄・高橋章（1983）「大宰府出土瓦について（二）」『九州歴史資料館研究論集４』

焼塩壷　森田勉（1983）「焼塩壷考」『大宰府古文化論叢—下巻—』

石鍋　森田勉（1983）「滑石製容器—とくに石鍋を中心として—」『仏教藝術』148号
木戸雅寿（1993）「石鍋の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ

目　　次

Ⅰ．はじめに……（城戸康利）1
Ⅱ．調査組織……（城戸）2
Ⅲ．調査の概要
1．辻遺跡第1次調査……6
調査に至る経緯……（城戸）6
層　　位……6
検出遺構……6
出土遺物……（谷由紀子）15
小　　結……（城戸）43
2．御笠団印出土地周辺遺跡第8次調査……45
調査に至る経緯……（井上信正）45
検出遺構……45
出土遺物……（中島恒次郎）46
小　　結……（中島・井上）51
Ⅳ．ま　と　め……（城戸）53
付編
辻遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析……（中野益男・中野寛子・長田正宏）56
辻遺跡第1次調査種実・昆虫同定……（パリノ・サーヴェイ（株））65
辻遺跡出土資料の螢光X線分析……（中島）69
別表
遺構番号台帳・出土遺物一覧・計測表……73
別編
太宰府市文化ふれあい館の設計と建設……（狭川真一）117
1．文化ふれあい館の性格と建設の経緯……117
2．設計における留意点……118
3．開館準備……168
4．今後へ向けて……174
文化ふれあい館設置の保存科学処理機器……（中島）181

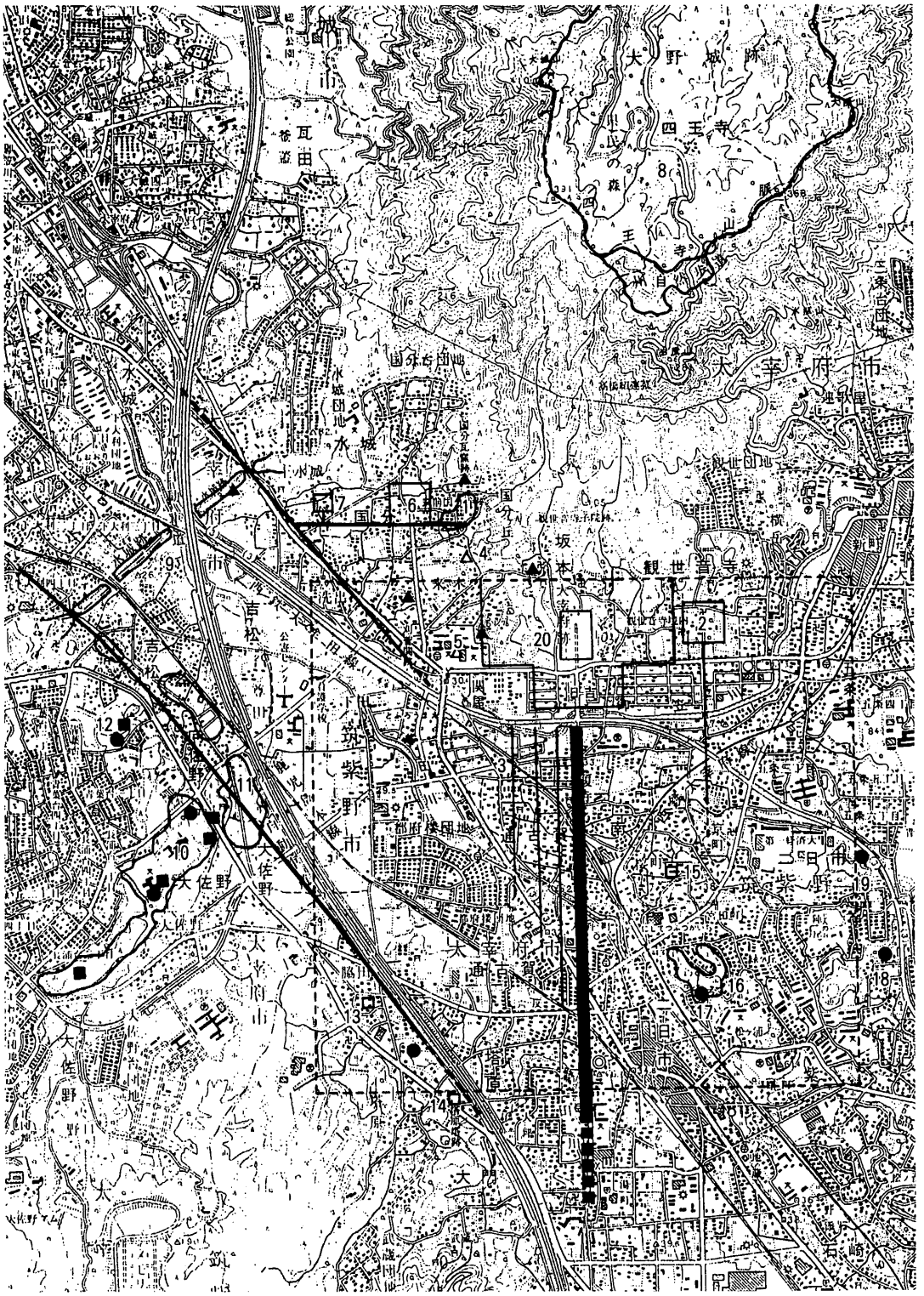


Fig. 1　太宰府市周辺の遺跡分布図（1／30000）　（主として奈良時代の遺跡に限った）

● 墳墓　■ 須恵器窯　▲ 瓦窯

Ⅰ．はじめに

太宰府市の所在する福岡平野の南深部は、西から脊振山地、東から三郡山地という比較的急峻な山々が迫り会合する部分で、福岡平野のなかでも袋状の小平野を形成し盆地的様相を呈している。この小平野を貫流する河川は西から大佐野川、鷺田川、御笠川であり合流して御笠川となり北流し、さらにいくつかの河川と合流しながら博多湾に注ぐ。この小平野はまた福岡平野と筑紫平野を結ぶ地峡部にあたり交通の要衝の地となっている。

調査地周辺は推定大宰府条坊（鏡山猛案・以降特に注記ない場合はこれに準じる）の北辺西部にあたる。北と東は四王寺山の丘陵がせりだし南にも丘陵の先端が低いながら回り込んでおり、西の平野部に向かってのみ開かれている。辻遺跡から筑前国分寺跡までは台地状の、国分寺から国道３号線までは扇状地の様相を呈する。この台地上にはおもに古代から中世の遺構群が、扇状地には弥生時代以降の遺構群が展開している。

今回報告する辻遺跡第１次調査と御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査は太宰府市が平成元年から計画した「歴史の散歩道」事業にともない発掘調査をおこなったものである。「歴史の散歩道」事業は本市総合計画（昭和62年）で掲げられた「まほろばの里づくり」の一環として太宰府天満宮から水城東門跡までを歴史的遺構や建造物などの文化財でつなぎ、徒歩や自転車で散策し広く文化に親しむことを目的として計画されたものである。主な整備は、散歩道の道路整備、適所での公園整備、中核となるガイダンス施設の建設である。

辻遺跡第１次調査は推定大宰府条坊外で筑前国分寺跡から東へ約250mにあり、大野城のある四王寺山の麓から丘陵よりの南斜面に位置し東側は丘陵がせまっている。調査地の南と北には東西へ谷が入っており、北側の谷の斜面には国分瓦窯が存在する。南の谷は大雨の度に増水ししばしば調査地は水の被害を被っていた。標高は約55～60mで南から北へ高くなっている。「歴史の散歩道」ガイダンス施設「太宰府市文化ふれあい館」建設用地にあたる。

御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査は大宰府政庁跡の北西約400mで推定大宰府条坊右郭一条四坊にあたり、四王寺山の南麓に位置する。調査地の北西約200mからは1927（昭和２）年に「御笠團印」という朱文の銅印一顆が発見されており、周辺に律令制下の軍団に関係する遺構が存在する可能性が考えられている。標高は約40mである。坂本公園用地にあたる。

１．辻遺跡
２．観世音寺
３．大宰府条坊跡（破線は推定域）
４．御笠軍団推定地
５．遠賀軍団推定地
６．筑前国分寺跡
７．筑前国分尼寺跡
８．大野城跡
９．水城跡
10．宮ノ本遺跡
11．前田遺跡
12．篠振遺跡
13．杉塚廃寺
14．搭原廃寺
15．般若寺跡
16．峯畑遺跡
17．峯火葬墓
18．米噛火葬墓
19．結ケ浦火葬墓
20．大宰府跡

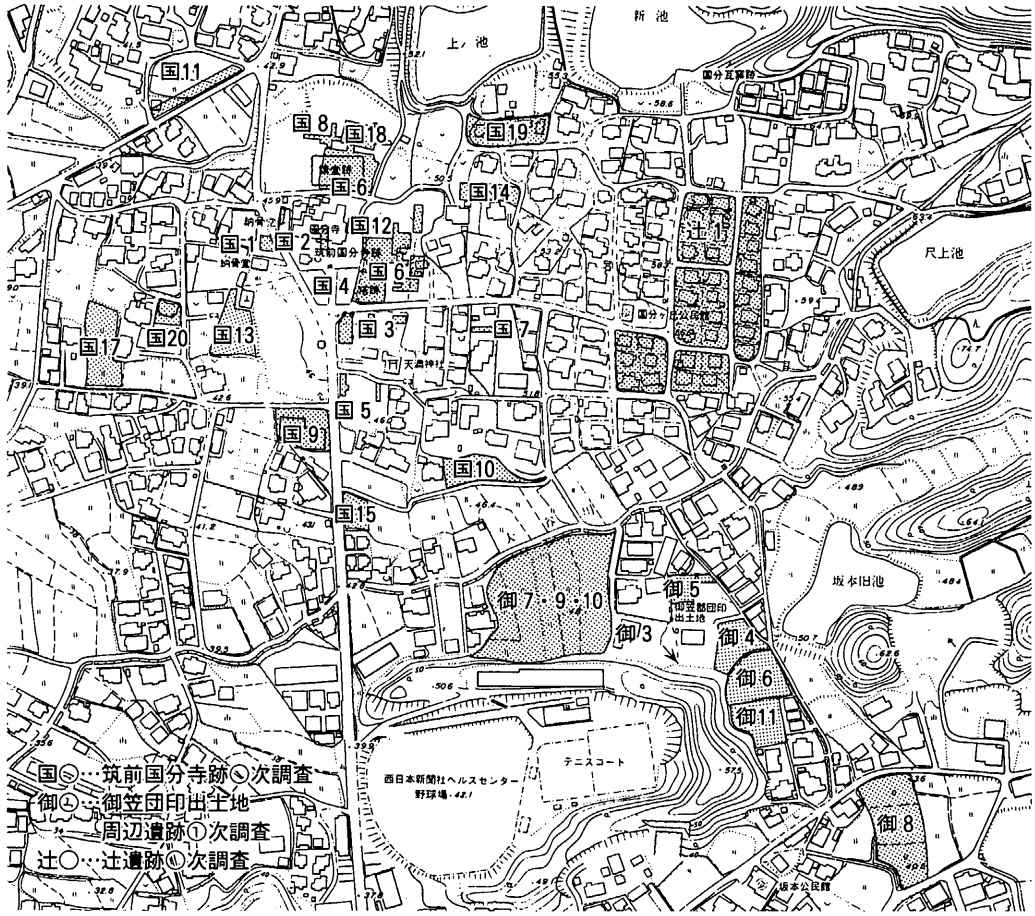


Fig. 2　調査地と周辺の既調査地位置図（1／5000）

Ⅱ. 調査組織

今回報告する調査は、複数年度にわたっているため、各当該年度の調査組織を掲げる。整理作業は平成5年度から徐々におこなってきたが、ここでは最終年度の平成8年度の組織を掲げる。調査主体はすべて太宰府市教育委員会である。ゴチックが調査を担当した。

平成4年度

総括	教育長	長野　治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤　恭宏
	埋蔵文化財係長	高田　克二
	文化振興係長	大田　重信
	主任主事	岡部　大治

		川谷　豊
調査	主任技師	山本　信夫
		狭川　真一
		城戸　康利
		緒方　俊輔
		山村　信榮（5年7月1日～）
	技師	山村　信榮（～4年6月30日）
		中島恒次郎
		塩地　潤一
	技師（嘱託）	田中　克子

平成5年度

総括	教育長	長野　治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤　恭宏
	埋蔵文化財係長	高田　克二
	文化振興係長	大田　重信
	主任主事	岡部　大治
		川谷　豊
調査	技術主査	山本　信夫（5年10月1日～）
	主任技師	山本　信夫（～5年9月30日）
		狭川　真一
		城戸　康利
		緒方　俊輔
		山村　信榮
		中島恒次郎
	技師	**塩地　潤一**
	技師（嘱託）	田中　克子
		重松麻里子（5年6月1日～）
		井上　信正（5年7月1日～）

平成8年度

総括	教育長	長野　治己
庶務	教育部長	小田　勝弥

	文化課長	津田　秀司
	文化財保護係長	和田　敏信
	文化振興係長	大田　重信（～８年６月30日）
		田中　利雄（８年７月１日～）
	主任主事	岡部　大治
		川谷　　豊
	主事	今村江利子
整理	技術主査	山本　信夫
	主任技師	狭川　真一
		城戸　康利
		山村　信榮
		中島恒次郎
		井上　信正
	技師	髙橋　　学
		宮崎　亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

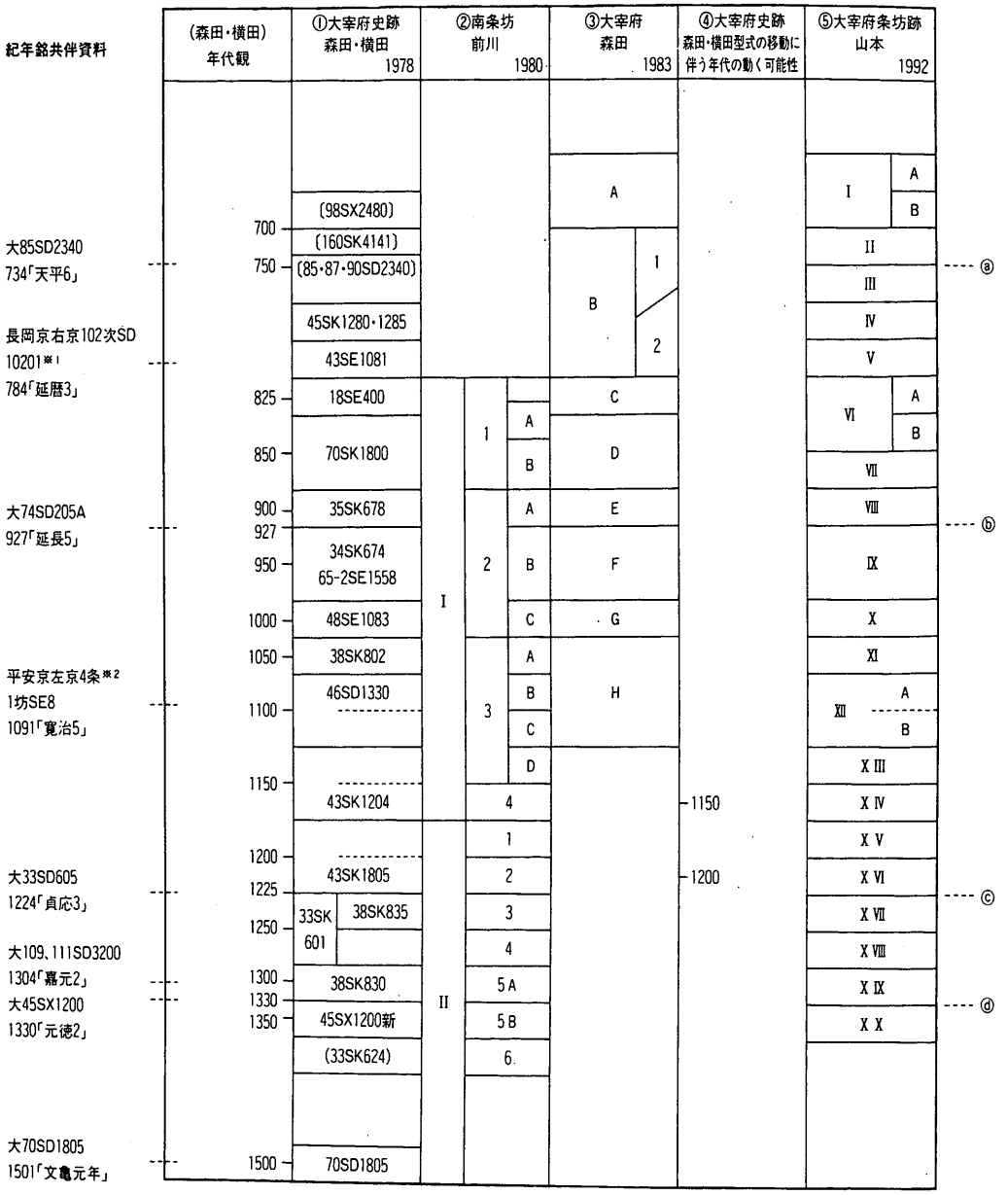
調査・整理方法

辻遺跡第１次調査は現状の街区割りに合わせて１～５区に分割した。他については太宰府市の従前の方法に従い、公共座標に乗った３ｍグリットを組んで１／100の略測図を作成し、全体の遺構平面図は写真測量をおこない１／50で作成した。略測図は遺構がほとんど検出できなかった４区と５区北半は任意のスケールでおこなっている。また４区で写真測量後に一部調査区の拡張をおこなったためその分については平板測量をおこない、写真測量の図に重ねている。遺構番号は現場ではＳ－○○と表記し１から順に付けるが、今次調査では調査区を複数に分けたためかなりの欠番が生じている。略測図に付した番号はこの場合のＳ－○○の番号である。遺構番号との対照は遺構番号台帳で可能である。

御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査は調査区全体が河川の堆積層であったため、個別遺構図は存在せず、調査区と周辺の地形測量を平板測量でおこなっている。また、遺物については一部他の調査地点に紛れ込んでいる可能性があり、これについては出てきた段階で報告することとしたい。

整理の方法も調査と同様、従来の方法を踏襲している。詳細は『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財　第14集　1989）を参照されたい。また、報告文中に示される時期設定はTab.１のように理解される。

tab. 1　大宰府の土器形式と年代



〔 〕：後日追加された標識遺構
( )：②で前川氏が比定した遺構
①横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集　2』
②前川威洋（1978）「土師器の分類および編年とその共伴土器について」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集（下）』
③森田勉（1983）「大宰府の出土品③　土器・陶磁器」『佛教藝術　146』
④山本信夫（1988）「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究　Ⅳ』
⑤山本信夫（1992）「大宰府」『第1回古代土器研究会資料』
なお文献①③は、森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会（1995）『大宰府陶磁器研究』に再録。

※1　筑前型土師器が長岡京より出土
中島恒次郎（1992）「都へ行った土器」『古文化談叢　第28集』
※2　陶磁器の共伴
平安京調査会（1975）『平安京跡発掘調査報告　-左京四条一坊-』
ⓐ大85SD2340は、IIとIIIを含む。IIIは少ない。
ⓑ大74SD205Aは、VIIIとIXを含む。
ⓒ大33SD605はXVIとXVIIを含む。
ⓓ大45SX1200はXIXとXXを含む。

Ⅲ．調査の概要

1．辻遺跡　第1次調査

1）調査にいたる経緯

平成元年度から計画されていた「歴史の散歩道」事業が実施されるに当たり、平成4年度分として太宰府市国分4丁目5・7・9において発掘調査を実施した。調査対象面積は9500㎡で、実施面積は対象地内に市道があることや、市道に沿ってある桜並木を保存するという前提のため、7000㎡分をおこなった。(結果的には桜並木は建設に当たり全て伐採された。)

調査地は市道に区切られ大きく5つの街区に分割されている。調査に際してもこの街区を生かし便宜上1～5区に分割した。調査期間は平成4年10月13日から平成5年3月31日までおこない、緒方俊輔、城戸康利が担当した。

2）層位

調査地の現況は昭和20年代に造成された、県営住宅の跡地である。全体の地形として南から北に高くなっており、区画毎に段造成が施されていた。また宅地化する以前は桑畑として使用されており、石を除くなど地形の改変がおこなわれていた。また、現代のごみ穴や植樹跡等が多く、遺構面の撹乱が激しかった。このため北側の4・5区は遺構の残存状態はきわめて悪かった。

層位は現代の表土面の下に耕作土があり、その下に茶褐色または暗灰褐色の包含層が堆積している。表土と包含層の厚さは0.1～0.5m程である。この包含層下に遺構面が存在し、遺構は基本的に地山に穿たれている。ただ2区の一部では小礫を含む灰～黒褐色の砂質土が、3区北側および南東隅と5区南半で黒褐色と明橙黄色の砂質土の下層包含層が検出された。いずれも自然堆積によるものである。地山は礫や黒色の微粒子を含んでいるが、基本的には花崗岩風化土の二次堆積と考えられる。

3）検出遺構

掘立柱建物（Tab.2）

1 SB005　2区の北端で検出した。東西1間、南北3間以上である。北側は調査区外のため南北は確定できない。検出された柱間はa～hへ順に1.1・1.6・1.2・2.1・1.5・1.6・1.2・2.2mである。柱掘り方は0.6～1.0m、柱痕跡は判明した分で0.2m程である。埋土は明茶灰色で簡単に埋め戻されていて、層状の土層は観察できない。建物主軸の振れは北を基準にしてN－0°40′－W前後である。

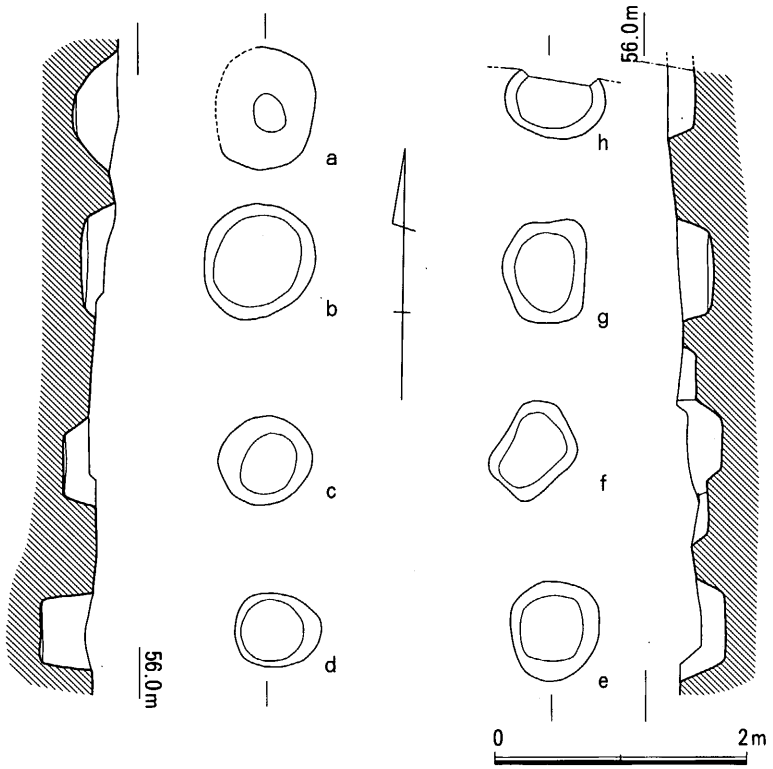


Fig. 3　1SB005実測図（1／60）

Tab. 2　建物柱穴標高一覧

	柱穴記号	標高（上）(m)	標高（下）(m)	高低差 (m)	標高（下）平均(m)
SB005	a	55.693	55.460	0.233	55.390
	b	55.713	55.510	0.203	
	c	55.545	55.350	0.195	
	d	55.538	55.230	0.308	
	e	55.593	55.280	0.313	
	f	55.493	55.280	0.213	
	g	55.635	55.490	0.145	
	h	55.744	55.520	0.224	
SB130	a	54.645	54.420	0.225	54.386
	b	54.605	54.370	0.235	
	c	54.580	54.340	0.240	
	d	54.415	54.260	0.155	
	e	54.405	54.120	0.285	
	f	54.580	54.380	0.200	
	g	54.625	54.410	0.215	
	h	54.665	54.460	0.205	
	i	54.735	54.510	0.225	
	j	54.700	54.510	0.190	
	k	54.605	54.400	0.205	
	l	54.565	54.450	0.115	
SB260	a	57.820	57.790	0.030	57.853
	b	—	—	—	
	c	58.165	58.030	0.135	
	d	57.960	57.910	0.050	
	e	57.865	57.720	0.145	
	f	57.945	57.800	0.145	
	g	58.050	57.870	0.180	

1 SB130　1区中央で検出した。東西2間、南北2間に北側に1間の庇が取り付く総柱建物である。検出された柱間はａ～ｌへ順に1.3・2.3・2.1・2.2・2.0・1.4・2.2・1.5・2.0・2.2ｍ、ａ－ｈ間が2.3m、ｅ－ｌ間が2.2mを測る。柱掘り方は0.3～0.5mの略円形を呈する。柱痕跡は検出できなかった。建物主軸の振れはＮ－4°56′－Ｅ前後である。

1 SB260　3区北東部分で検出した南北2間、東西3間以上の東西棟建物である。東側が調査区外にのびている。検出された柱間はａ～ｇへ順に3.3・3.5・3.0・3.0・3.5・3.5mである。ａ・ｂ・ｄは1 SD275により切られており特にｂは痕跡を留めるのみである。柱掘り方は0.9ｍ程の隅丸方形を呈するが上述のようにａ・ｂ・ｄは1 SD275により変形していると考えられる。主軸の振れは北を基準として約Ｎ－87°02′－Ｗである。

井戸

1 SE115　1区の北東で検出した井戸で、直径約1.5mを測る略円形を呈し、完掘時の深さ

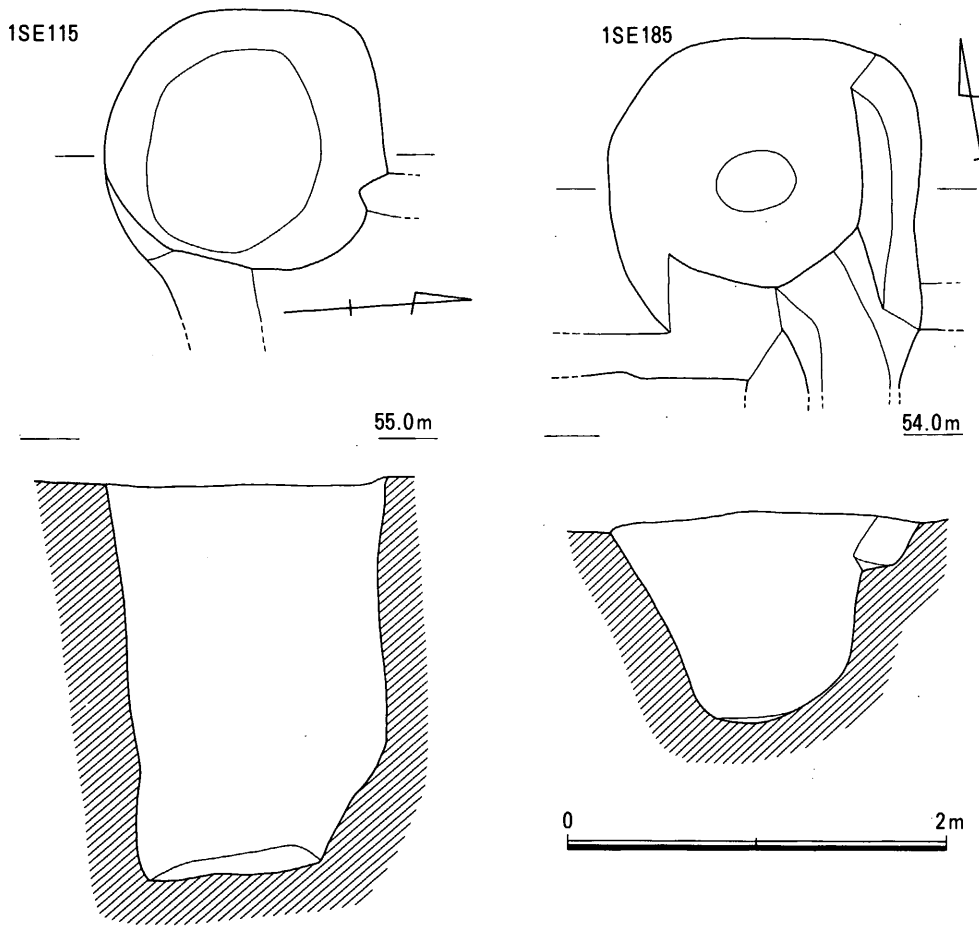


Fig. 4　1SE115・185実測図（1／40）

は約2.10mである。井戸枠は検出されず、掘り方と区別ができなかった。埋土は上層から明茶色土、暗茶色粘質土、青灰色粘質土の順である。遺物は各層から散漫に出土している。

1 SE185　1区南西部で検出した直径約1.3mを測る略円形の井戸である。深さは約1.0mである。上部は撹乱である1 SX175に切られている。また溝1 SD170を切っている。埋土は淡茶色粘質土で、遺物は少量出土した。井戸とすることには不安があるが1 SE115と形態が類似していること、近接してあと2基あることから井戸としている。

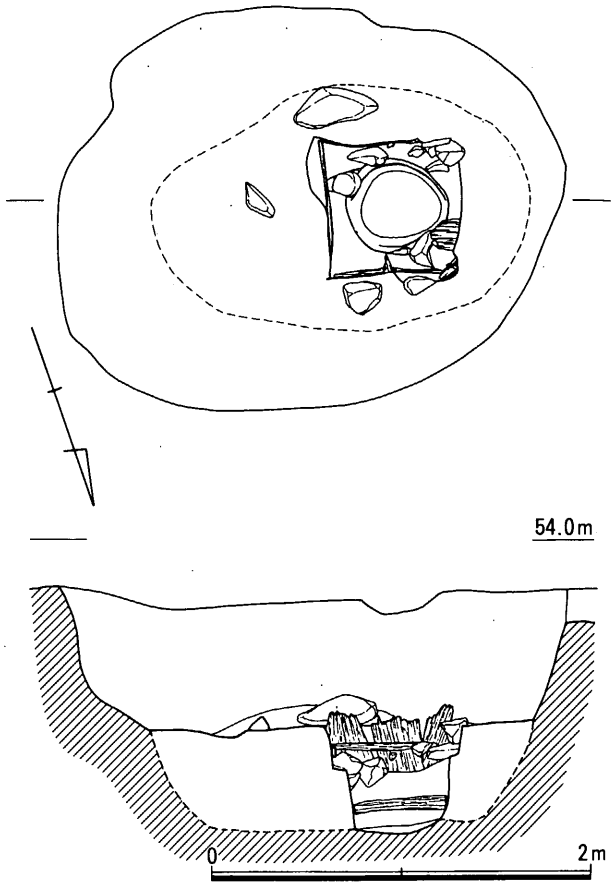


Fig. 5　1SE195実測図（1／40）

1 SE195　1区南部中央で検出した方形板組の井戸である。一辺が約0.7mを測り、検出面からの深さは約1.3mである。また掘り方は約2.7×2.1mの楕円形を呈し、方形の井戸枠はその西側に偏って設置してある。井戸枠は腐植して底に近い部分しか残存していなかったが、幅0.3m程の板材を縦に並べ、その内側に角材で桟を組んでとめている。さらに底には直径約0.5mの曲げ物を設置している。裏込めには人頭大程の石を詰めている。埋土は井戸枠を検出するまでは暗茶色土、井戸枠内は青灰色粘質土である。溝1 SD170を切っている。

1 SE200　1区南東部で検出した直径約0.9mを測る円形の井戸である。検出面からの深さは約1.5mである。掘り方は約1.6mの円形を呈し裏込めに人頭大から拳大の花崗岩と瓦片を密に積んでいる。当初は石組み井戸の可能性が考えられたが、底に残存する板片や遺物との整合性から板組の井戸枠と推定している。井戸枠の構造は不明である。埋土は上層が淡茶色粘質土、下層が青灰色粘質土である。

溝

1 SD010・170　それぞれ2区と1区で検出した東西の溝で、同一のものと考えられ、断面はほぼ逆台形状を呈している。両者を合わせた検出長は約61.5mで、幅約2.0m、深さは約0.8m

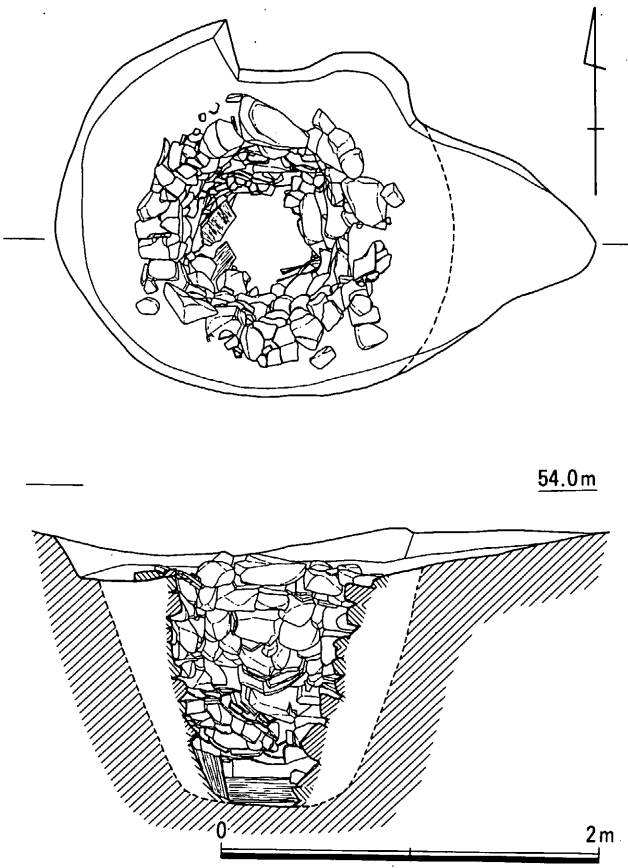


Fig. 6　1SE200実測図（1／40）

を測る。東端は調査区端近くで立ち上がっている。東端での深さは約0.2mである。埋土は上から黄茶色土・暗茶褐色土・灰色土の順である。黄茶色土は溝の全体には分布しておらず、また中世の遺物を含むことから包含層が沈降したものと考えている。灰色土には礫が含まれる。溝の振れは検出した両端の任意中点で北を基準にしてN－89°55′－E前後である。1SD180と対になる道路側溝で9世紀中～後半の埋没と考えられる。

1SD180　1区で検出した東西方向の溝で、断面は逆台形状をしていたと思われる。検出長は約20m、幅1.0m以上、深さ約0.3mを測る。1SD190に切られており北側の肩だけが残存している。埋土は灰色の砂質土で遺物は散漫に出土した。遺物は近世のものが混入している。溝の振れは検出した両端の肩で北を基準にしてN－87°53′－E前後である。1SD010・170と対になる道路側溝と考えられる。

1SD190　1区で検出した東西方向の溝である。1SD180にほぼ重複しており、1SD180の掘り直しの可能性がある。検出長約16.5m、幅約3.5m、深さ約1.5mを測る。埋土は大きく3つのユニットに分かれ、それぞれが自然堆積と考えられる。溝の振れは検出した両端の肩で北を基準にしてN－94°46′－E前後である。最終埋没は14～15世紀と考えられる。

tab. 3　検出溝座標値一覧

遺構番号	計測位置	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
辻1SD170	WP	57,380.96	-45,407.28	N89° 54′ 53″ E
辻1SD010	EP	57,381.05	-45,346.91	
辻1SD190	WP	57,372.73	-45,406.93	N94° 45′ 49″ E
	EP	57,371.84	-45,396.25	
辻1SD180	WP	57,374.64	-45,404.25	N87° 52′ 58″ E
	EP	57,375.25	-45,387.75	
辻1SD202	NP	57,496.30	-45,361.46	N2° 31′ 51″ E
	SP	57,478.20	-45,362.26	

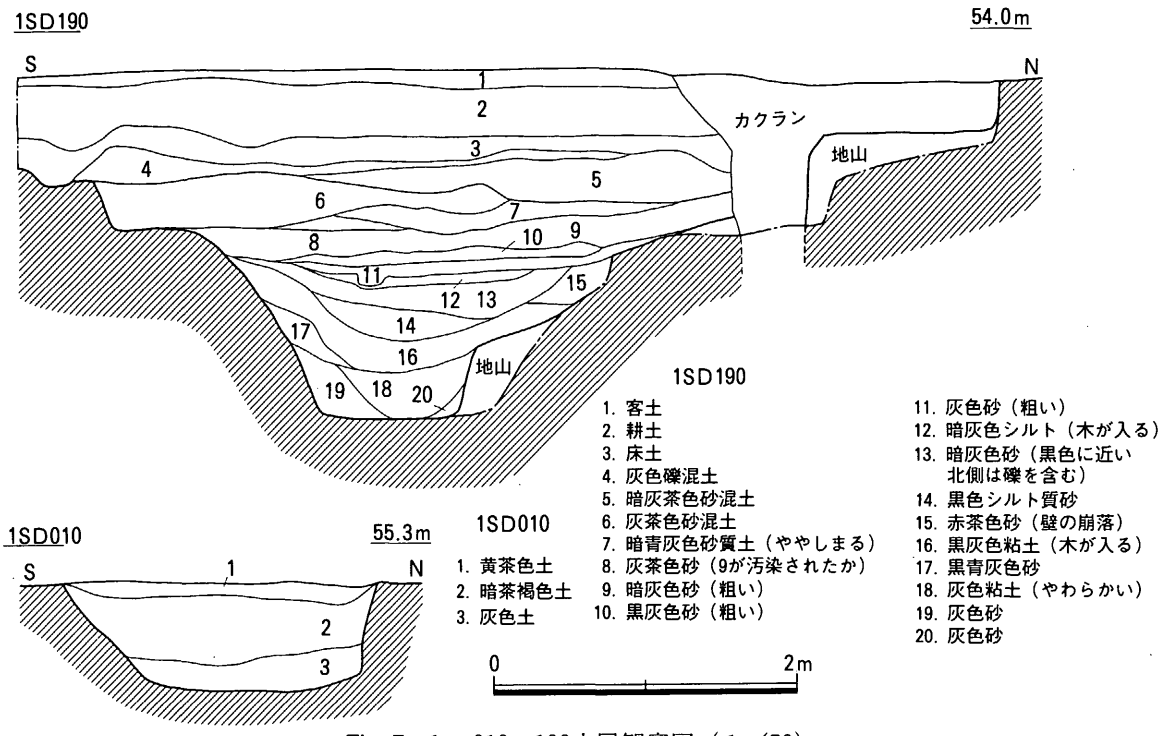


Fig. 7　1SD010・190土層観察図（1／50）

1 SD202　4区北西端で検出した南北方向の溝である。検出長は約24m、幅約3.0mである。深さは北端で約0.9mを測るが南側は削平されており、本来はさらに南にのびていたと考えられる。確認調査の際に重機であけたトレンチが重複しており、溝の埋土は撹乱されていた。埋土（茶灰色砂質土）が残存していたのは北端の一部だけだった。溝の振れは検出した両端の任意中点で北を基準にしてN－2°32′－E前後である。国分寺の中軸線からの距離は東へ約233.6mである。

墓

1 ST015　2区中央で検出した隅丸方形の土壙で墓と考えられる。1SD010を切っている。長辺2.3m、短辺0.9m、深さ0.8mを測る。主軸方向は北を基準にしてN－3°23′－W前後である。底は南に低くなっており、南端は窪み状になっている。埋土は凹凸のある底を平坦になるように明茶褐色土が堆積し、これになかば埋もれて大小の礫が敷いてある。その上部は暗茶褐色土の単一層であった。遺物は礫の間から瓦片が、暗茶褐色土層から陶器片などが出土した。土壌サンプルを採取し、残存脂肪酸分析をおこなった。その結果（付編参照）、「ヒト遺体を直接埋葬した場合の試料やヒトの体脂肪試料と類似する」と判定されたが、墓壙内より周辺の地山から抽出された脂肪酸のほうが多かったのは、現代の生活面からの汚染の可能性も考えなければならない。

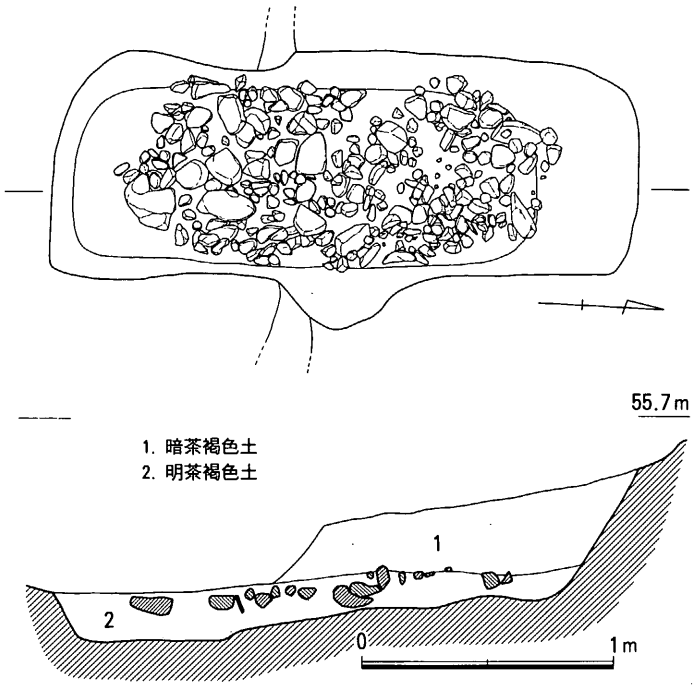


Fig. 8　1ST015実測図（1／30）

土壙

1 SK050　2区南東部で検出した不整形の土壙である。規模は長軸方向約0.7m、短軸方向で約0.5mである。埋土は黒灰色土で鋳型が出土している。1 SX055を切っている。焼土壙とされるが図等の記録がなく詳細は不明である。

その他の遺構

1 SX028　2区南側で検出した隅丸長方形の遺構である。長辺は約3.7m、短辺約2.1m、深さ約0.1mである。埋土は暗褐茶色土である。

1 SX055　2区東端で検出した。1 SK050に切られている。規模は直径約2.0mの略円形を呈する。深さは0.1m程である。埋土は人為的に埋められたと考えられ、淡白色から淡赤色の粘質土で構成されている。底面には一部に焼け面が認められた。

1 SX060　2区で1 SX055の下に重なるようにして検出した灰褐色の炭を多く含む層である。検出時には一部が1 SX055の浅いところから観察できていた。1 SX055と一体の可能性が強い。遺構上面で須恵器と土師器の蓋が完形に近い状態で出土した。

1 SX066　2区西端、1 SD010の北側で検出した小穴である。8世紀代の遺物が出土したが黒曜石の剥片も検出した。

1 SX105　1区西端で検出した胴が張った隅丸長方形の遺構である。長辺約2.1m、短辺約1.1m、深さ約0.1mを測る。埋土は炭化物を含む褐灰色土であった。

1 SX110　1区西部分で検出した円形の遺構である。直径約1.0m、深さ約0.5mである。埋土は褐灰色土である。

1 SX152　1区中央で検出した不整形の遺構である。長軸約1.1m、短軸約0.8m、深さ約0.25mである。埋土は赤茶色土で焼土塊や炉体の破片と推定されるものが出土した。

1 SX173　1区、1 SD170の北側で検出した長円形の遺構である。長軸約1.7m、短軸約0.6m、深さ約0.1mである。

1 SX175　1区、1 SE185の上部で検出した現代の撹乱である。1 SE185にほぼ重なってお

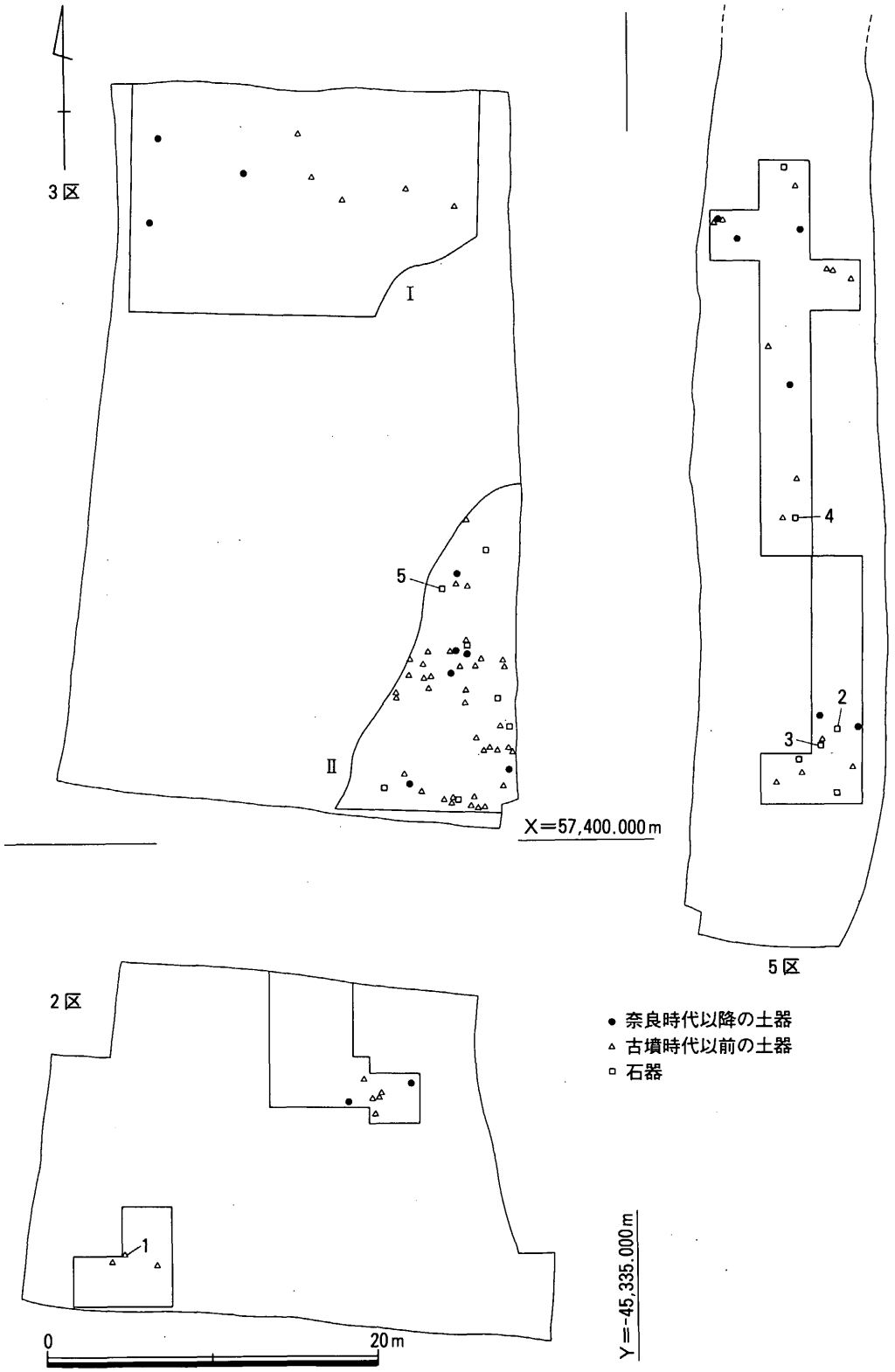


Fig. 9 下層掘り下げ範囲及び遺物出土地点図（1／400）

り、１SE185に属すると考えられる遺物を含む。

１SX181　１区で検出した。１SD170に切られている。長軸1.9m以上、短軸約1.0m、深さ約0.75mの遺構である。埋土は明茶色の粘質土である。古墳時代後期の高坏２点をほぼ完形で出土した。

１SX201　４区北側で検出した長軸約3.3m、短軸約2.2m、深さ約0.3mの遺構である。埋土は暗褐色土である。遺物には現代の植木鉢片が混入していた。

１SX212　５区中央で検出した隅丸方形の遺構である。長辺約4.0m、短辺2.0m、深さ約0.１mである。埋土は暗黄灰色土である。出土遺物に１SD202出土品と接合するものがあった。

１SX245　３区南西で検出した遺構である。長軸約2.5m、短軸約0.75m、深さ約0.25mを測る。埋土は暗褐色土である。

下層包含層

２区の北東部と南西部、３区では１SD275の北側と南東部、また５区南半では黒褐色砂質土と明橙黄色砂質土の斑の層に礫が含まれる土が広がっていた。この土から遺物が検出されたため、設定しているグリットを使用して土層を掘り下げた。その結果いずれも奈良時代までの遺

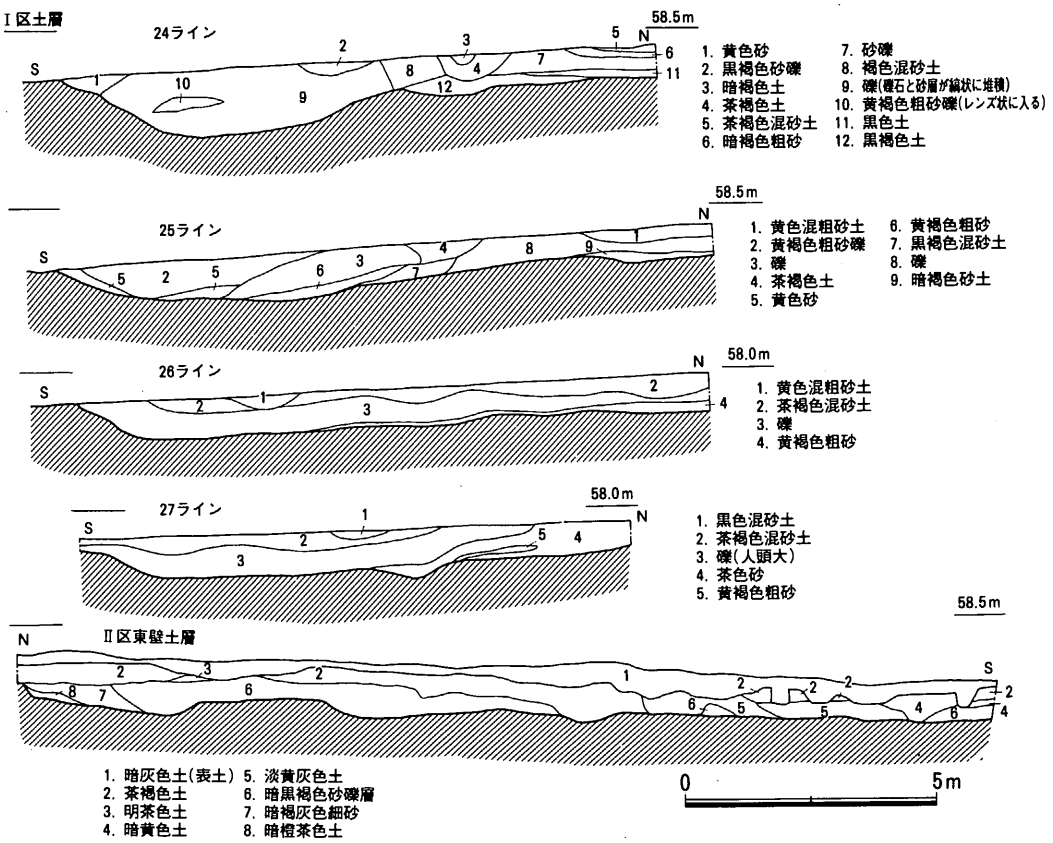


Fig. 10　下層土層観察図（１／150）

物を含み、下層面には遺構は検出されず凹凸の状況を示している。層序は砂層を中心としている。このことからこれらの堆積は四王寺山からの谷が氾濫した際の流路とその堆積物と判断される。

4）出土遺物

井戸出土遺物

1 SE115明茶色土（Fig. 11）

須恵器

転用硯（猿面硯）（1・2）　1・2とも硯面は使用のため、側面は調整により研磨されて、非常になめらかである。硯面に叩き調整の当て具痕、裏面に叩き調整痕が残り、甕の体部を転用したことがわかる。硬質で灰色を呈し、1は現存長10.3cm、幅10.5cm、厚さ1.25cm。2は現存長5.7cm、幅5.7cm、厚さ0.85cmを測る。

土師器

小皿c（3）　口径11.2cm、器高1.9cm、底径6.55cm。底部はヘラ切りか。磨滅が著しくその他の調整についても判然としない。白色砂粒、暗赤色粒子を多く含み、淡黄橙色を呈する。

石製品

鏃（4）　黒曜石製である。深めに抉りを入れ、両面とも丁寧に二次加工を施す。現存長3.8cm、幅2.3cm、厚さ0.65cmを測り、不透明な黒色を呈する。

1 SE115暗茶色粘質土（Fig. 12）

土師器

坏a（5）　口径11.0cm、器高2.0cm、底径7.85cm。底部はヘラ切り。その他はヨコナデを

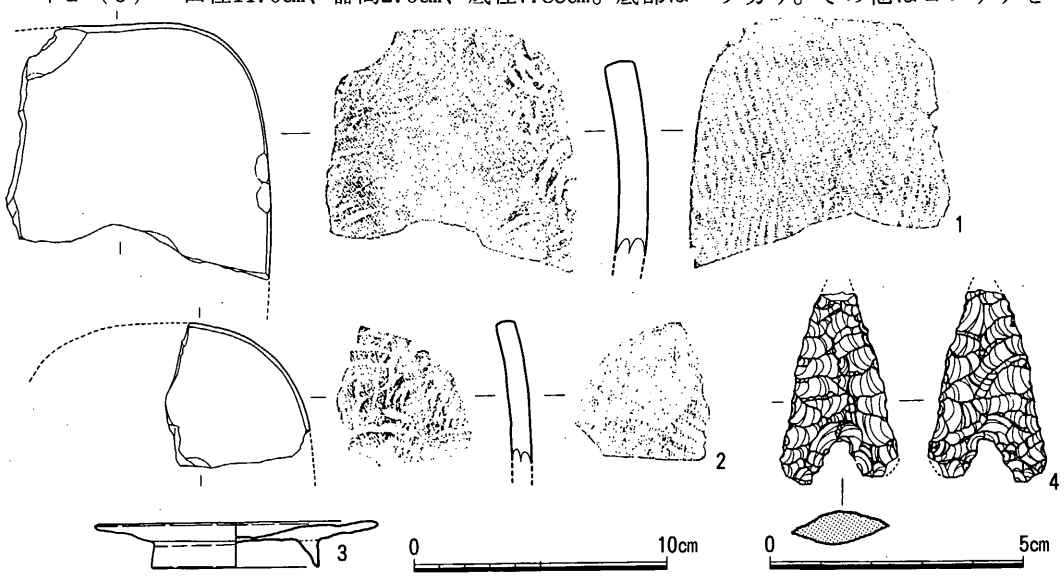


Fig. 11　1SE115明茶色土出土遺物実測図（2／3・1／3）

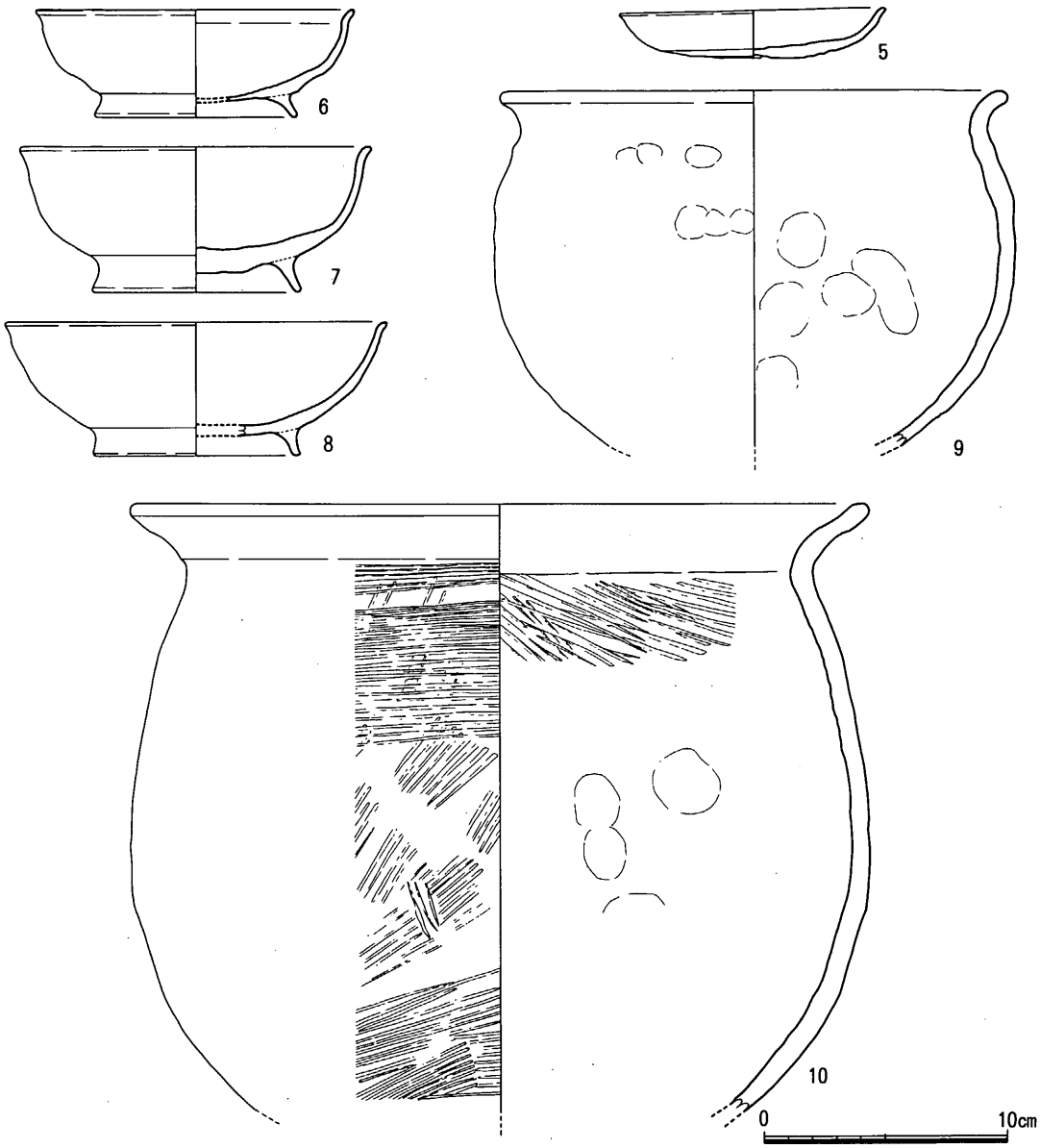


Fig. 12　1SE115暗茶色粘質土出土遺物実測図（1／3）

施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒、暗赤色粒子を少量含み、くすんだ橙色を呈する。

碗ｃ（6～8）　口径13.2～15.8cm、器高4.5～6.0cm、底径8.4～8.6cm。底部は7がヘラ切り、その他は不明。その他の部分はヨコナデを施し、6には内底部にミガキを加えた可能性も考えられる。白色砂粒を少量含み、6・8は灰茶色、7は淡茶色を呈する。

甕（9・10）　9は口径21.0cm。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面上位に指頭圧痕、内面に当て具痕跡と考えられる窪みが残る。白色砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。また外面には底部から口縁端部まで黒色の煤が付着する。10は口径30.6cm。口縁部はヨコナデを施し、体部

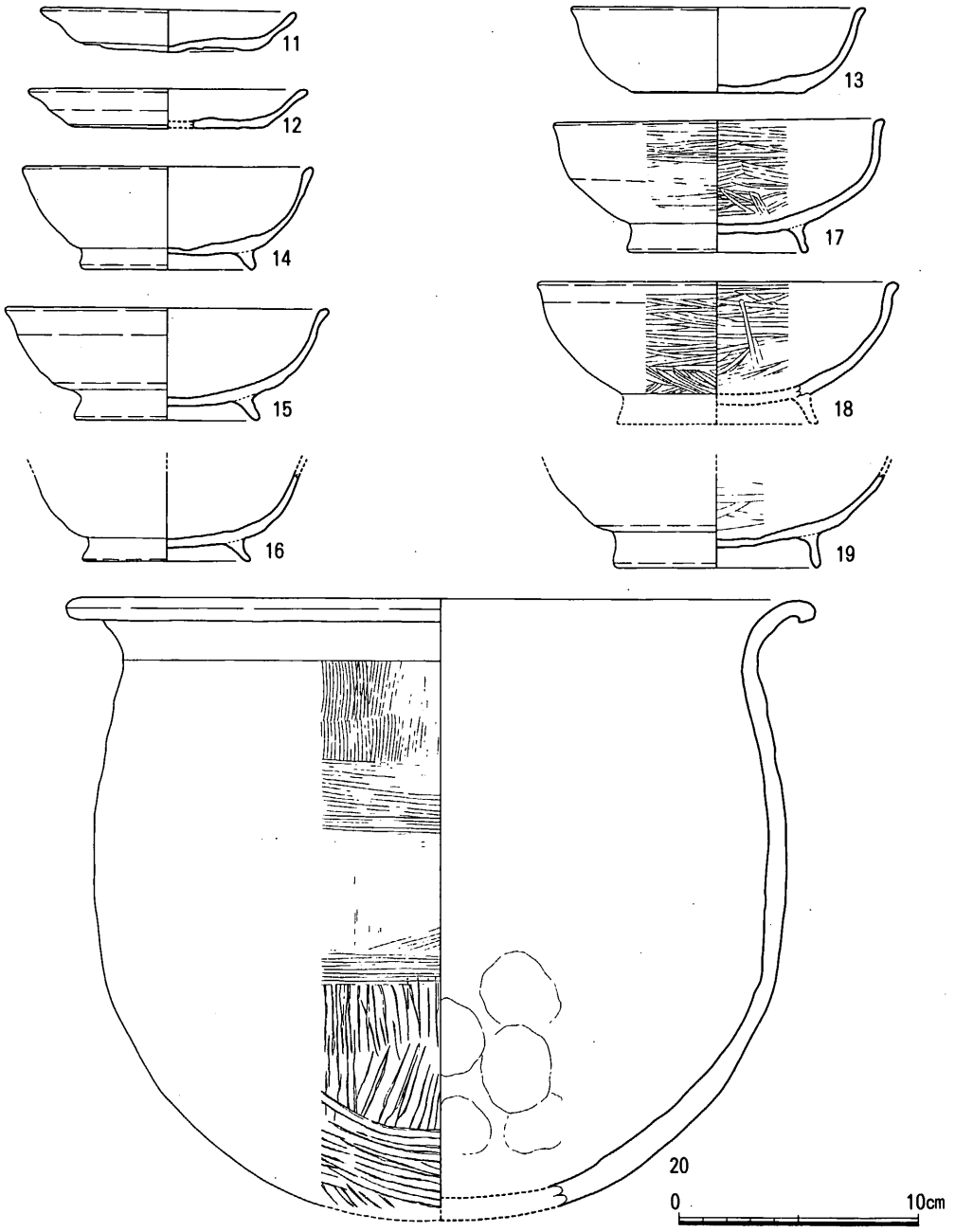


Fig. 13　1 SE115青灰色粘質土出土遺物実測図（1／3）

外面は叩き後上位に粗い刷毛目調整を施す。内面には叩き調整の当て具痕が残り、胴部上位には強い刷毛目調整が施される。白色砂粒を多く含み、内面灰茶色、外面黒褐色を呈する。

1 SE115青灰色粘質土（Fig. 13）

土師器

坏a（11・12）　11は口径10.8cm、器高1.9cm、底径7.6cm。12は口径11.8cm、器高1.7cm、底径8.4cm。底部はヘラ切り。その他はヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。どちらも白色砂粒、微細な雲母片を多く含み、くすんだ茶色を呈している。12の底部

及び内底部は黒色を呈する。

碗ａ（13）　口径12.4cm、器高3.6cm、底径7.4cm。底部はヘラ切り。その他はヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒、微細な雲母片を少量含み、淡茶色を呈する。

碗ｃ（14～16）　口径12.2～13.6cm、器高4.35～4.75cm、底径7.1～7.8cm。底部は14がヘラ切り、15・16は不明。その他はヨコナデを施す。15は切り離し後、幅0.2cm前後の板状圧痕が残る。内面には焼成後の細かい傷が一面に残り、墨痕も認められることから、硯として使われた可能性が考えられる。白色砂粒を少量含み、14は淡橙茶色、15は灰茶色、16は淡茶色を呈する。

甕（20）　口径31.45cm。口縁部は端部を外側へ折り返し、ヨコナデを施す。胴部外面は叩きを施した後、上位から中位まで刷毛目調整を行う。内面はナデを施すが、底部付近には叩き調整の当て具痕が残る。凹凸をならすように粗いケズリを行ったと考えられる痕跡も残る。白色砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈し、外面一面に煤が付着する。

黒色土器

碗ｃ（17～19）　17は口径13.95cm、器高5.65cm、高台径7.65cm。高台貼り付け後、内外面に細かいミガキcを施す。白色砂粒を多く含み、内面は黒色、外面は淡茶色で口縁～体部下半にかけて黒色を呈する。A類。18は口径15.2cm。高台が付いていたと考えられる。内外面ともナデをおこなった後ミガキcを施し、高台を貼り付けたあと接合部付近にミガキ様の再調整をおこなう。白色砂粒、微細な雲母片を極少量含み、内面は黒色、外面は淡茶色を呈する。A類。19は高台径8.7cm。ヘラ切り後、1.4cm幅の板状圧痕がつく。内面はやや幅の広いミガキcを施すが、外面は磨滅が著しく調整は不明。微細な白色砂粒を多く含み、内面は黒褐色、外面は淡茶色を呈する。A類。

1 SE185（Fig. 14）

瓦類

軒平瓦（1）　上外区部分がわずかに残る。凸面の平瓦との接合部付近に沈線が一条入る。接合の目安としたものか。白色砂粒を多く含み、やや軟質に焼け、灰白色を呈する。

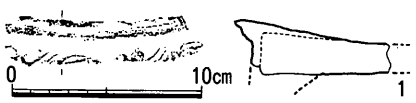


Fig. 14　1SE185出土遺物実測図（1／4）

1 SE195（Fig. 15）

土師器

鉢（1）　底径10.05cm。全体に磨滅が著しく調整不明で、土師器かどうかも判然としない。白色砂粒を非常に多く含み、軟質で内面明灰色、外面明灰橙色を呈する。

越州窯系青磁

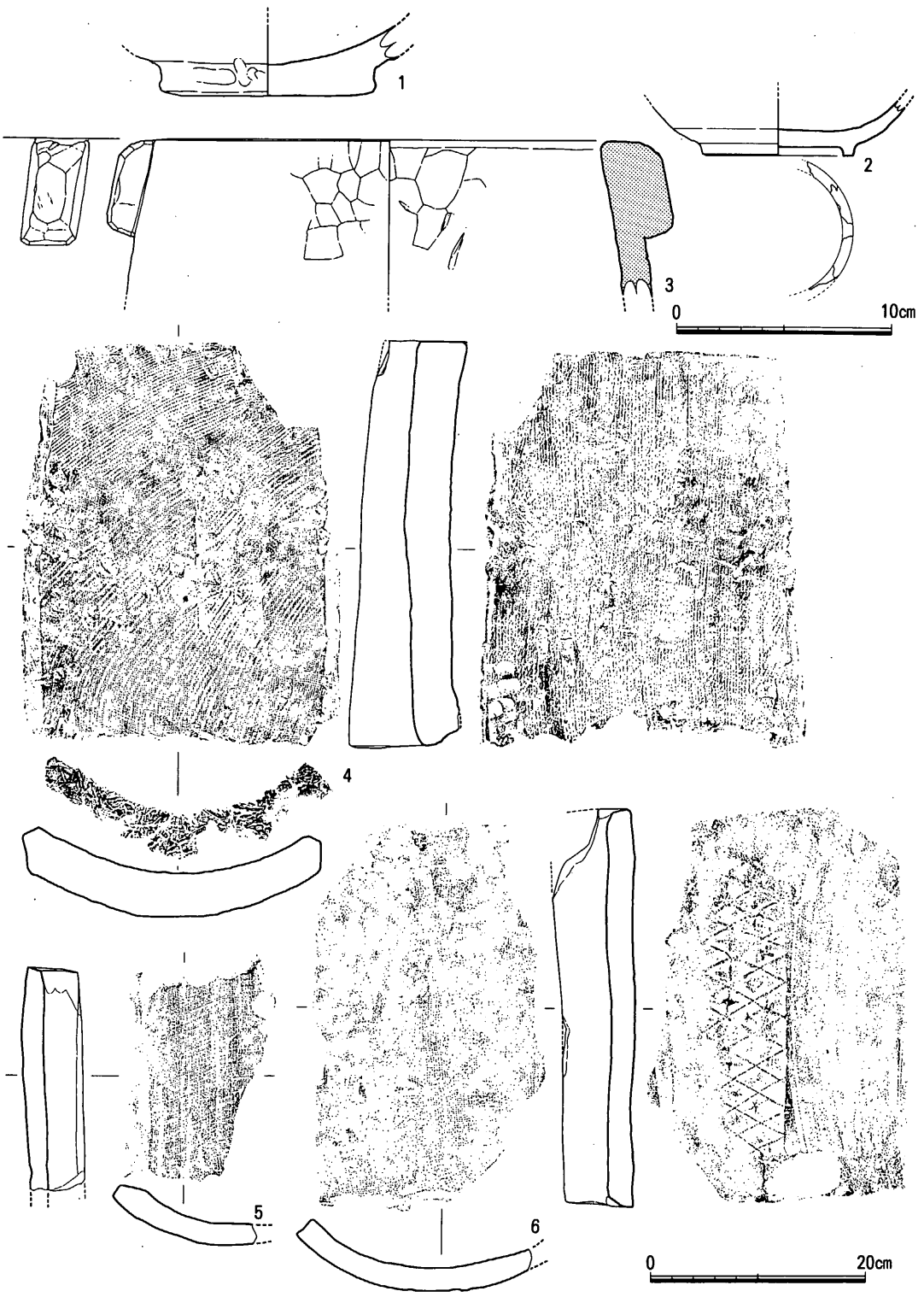


Fig. 15　1SE195出土遺物実測図（1／3・1／6）

碗（２）　高台径7.1cm。全面施釉後、畳付け部分の釉をふき取る。釉は緑灰色の透明釉で光沢があり、内外面とも貫入がある。胎土は硬質で灰白色を呈し、見込み及び畳付けに横長の目跡が残る。Ⅰ－２類。

石製品

鍋（３）　滑石製で淡茶灰色を呈する。小片であるが、口径22cm前後に復元できる。削り出しによる縦長の耳を持つが、数は不明である。耳の側面には煤が付着する。木戸分類によるⅡ－ａ－２、森田分類によるＡ－１類。

瓦類

平瓦（４～６）　４は凹面に布目→刷毛目→指頭痕の順番で痕跡が残る。凸面は縄目の叩きを施した後、部分的にナデ消している。端面は削りをおこない、凸面側に面取りを施す。幅27.４cm、長さ37.6cm、厚み4.2cm。白色砂粒を多く含み、硬質に焼け、淡黄灰色を呈する。５は凹面にやや細かい布目痕、凸面に縄目の叩き痕跡が残る。端面は削りを行い、凹面側に面取りがある。白色砂粒を少量含み、やや軟質に焼け、内面暗灰色、外面淡灰色を呈する。６は凹面にやや細かい布目痕、凸面には斜格子の中に「太」や「十」字、菱形が入る叩き調整痕が残る。ⅩⅥ類。端面は削りを行う。幅23.4cm、長さ36.8cm、厚み2.5cm。白色砂粒を多く含み、凹面淡灰色～暗灰色、凸面暗灰色を呈する。

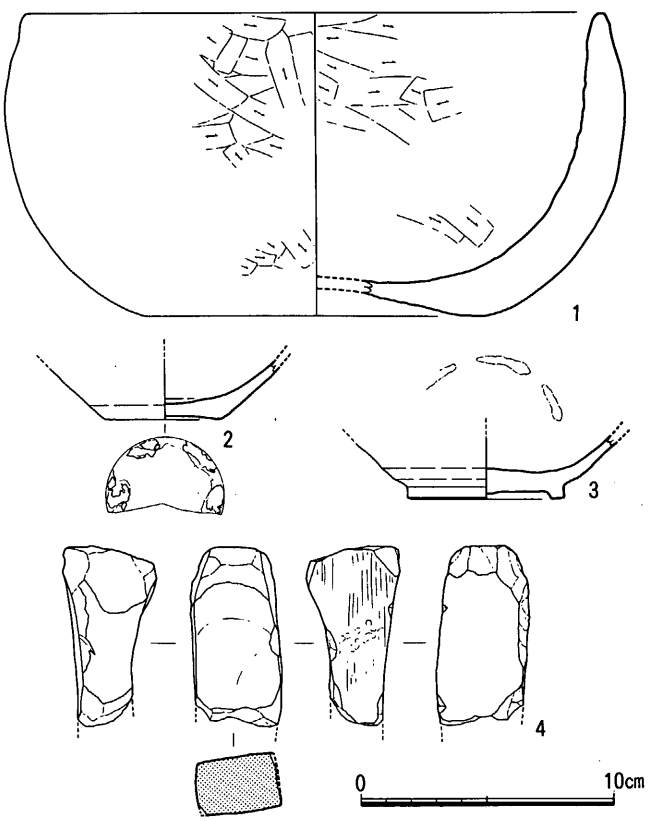


Fig. 16　1SE200出土遺物実測図（１／３）

１ SE200（Fig. 16）

須恵器

鉢ａ（１）　口径23.0cm、器高12.0cm、底径13.5cm。底部に比べ体部は厚みがある。内外面ともヘラ削りを施し、外面には口縁部付近に指頭痕が残る。やや大粒の白色砂粒を非常に多く含み、淡灰色～明灰色を呈する。

越州窯系青磁

坏（２）　底径4.6cm。ヘラ削り後全面施釉され、底部には白色の目跡が残る。釉は黄色味を帯びた灰緑色の透明釉で光沢がある。内外面に大きめの貫入がある。胎土はやや軟質で灰黄色を呈する。Ⅰ－３類。

碗（３）　高台径6.2cm。全面

施釉後畳付けの釉をふき取る。釉は青みを帯びた灰緑色の半透明釉で光沢がある。胎土は硬質で淡黄灰色を呈し、見込み及び畳付けに横長の目跡が残る。Ⅰ－２類。

石製品

砥石（４）　三面を使用し、表面は非常になめらかである。片面には敲打痕及び縦方向の条痕が残る。砂岩製で黄白色～明茶色を呈する。現存長7.2cm、幅3.6cm、厚さ2.1cm。

溝出土遺物

１SD010（Fig.17）

須恵器

蓋３（１）　口径18.0cm。天井部は回転ヘラ削り、その他はヨコナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を極少量含み、やや軟質で、淡灰色を呈する。黄茶色土出土。

皿ａ（２）　口径17.0cm、器高2.0cm、底径13.7cm。底部はヘラ切り後粗いナデを施し、その他はヨコナデをおこなう。白色砂粒をやや多く含み、硬質で、灰色を呈す。黄茶色土出土。

甕（３）　口径20.0cm。口縁部はヨコナデを施す。体部外面の調整は不明であるが、内面には叩き調整の当て具痕が残る。白色砂粒を非常に多く含み、硬質で、暗紫灰色を呈し、外面には光沢のある暗緑色の自然釉がかかる。灰色土出土。

壺（４）　頸部と底部を欠く。胴部最張幅11.7cm。ヨコナデ後、外面に三条の沈線と波状文、刺突文を施す。白色砂粒を多く含み、硬質で、淡灰色、外面下位は暗灰色を呈する。黄茶色土出土。

土師器

坏ａ（５・６）　５は口径12.9cm、器高3.2cm、底径7.0cm。全体に磨滅が著しく調整は不明。白色砂粒を多く含み、黄茶色を呈する。暗茶褐色土出土。６は口径14.8cm、器高3.0cm、底径10.6cm。底部はヘラ切りで、その他はヨコナデを施す。内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒、暗赤色粒を多く含み、明橙色を呈する。黄茶色土出土。

すり鉢（７）　推定口径36.8cm。口縁端部はヨコナデを施す。その他は磨滅が著しく調整不明。内面にわずかに縦方向の条痕が残る。白色砂粒を少量含み、軟質で、淡茶灰色を呈す。黄茶色土出土。

青磁

水注×壺（８）　推定底径12.2cm。底部は削りだしで、その他はヨコナデを施す。化粧土をかけた後、光沢のある黄土色の釉を体部下半まで施釉する。釉には細かい貫入が入る。胎土はやや硬質できめ細かく、淡茶色を呈する。越州窯系か。暗茶褐色土出土。

土製品

ふいご羽口（９）　小片であるが、直径6.0cm前後に復元できる。外面には指頭痕が残る。

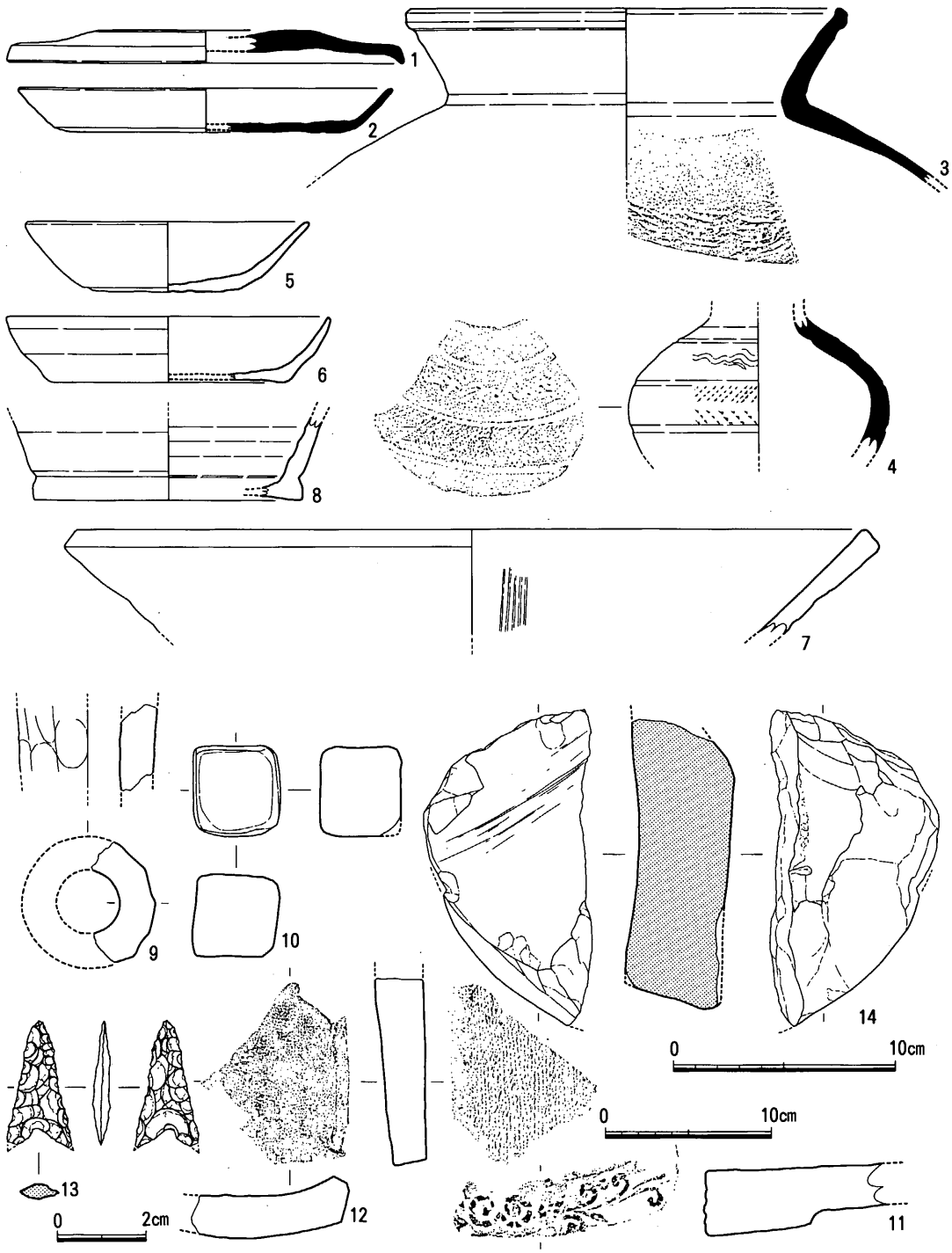


Fig. 17　1 SD010出土遺物実測図（2／3・1／3・1／4）

きめ細かく、やや大粒の白色砂粒を多く含む。二次加熱のため硬く焼き締まっており、外面淡青灰色、内面明橙色～赤褐色を呈する。黄茶色土出土。

立方体（10）　表面は磨滅が著しく調整不明であるが、4.1×4.0×3.7cmの立方体に形造る。白色砂粒を多量に含み、軟質で、淡白茶色を呈する。灰色土出土。用途は不明。

瓦類

軒平瓦（11）　瓦当面には均正唐草文を配する。一度笵を押し直したため、ずれた痕跡がある。凹面にはやや目の粗い布目痕、凸面には縄目の叩き調整痕をなで消した跡が残る。大粒の白色砂粒を多く含み、軟質で灰白色を呈する。

平瓦（12）　凹面には布目痕をナデ消した跡、凸面には縄目の叩き痕が残る。白色砂粒を多く含み、非常に硬質で、灰色を呈する。黄茶色土出土。

石製品

鏃（13）　安山岩製で両面とも二次加工を施す。暗灰色を呈し、長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。黄茶色土出土。

砥石（14）　きめの細かい砂岩製で、上下二面を使用していたと考えられる。くすんだ黄茶色を呈し、現存長14.2cm、幅7.6cm、厚さ5.0cmを測る。

1 SD170（Fig. 18）

須恵器

蓋1（1～5）　口径12.0～16.6cm。1～3は全体にヨコナデをおこなう。4は天井部は回転ヘラ削り、口縁部はヨコナデ、天井部内面は不定方向のナデを施す。かえりは口縁端面より内側へ後退する。1は白色砂粒を少量含み、硬質で、暗灰～黒灰色、2は白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色、3は白色砂粒を多く含み、硬質で、淡灰色～暗灰色、4は微細な白色砂粒を少量含み、硬質で、黒灰色を呈する。5は推定口径19.0cm。全体にヨコナデを施す。微細な白色砂粒を多く含み、硬質で、酸化焔焼成のため外面暗灰赤色、内面くすんだ赤色を呈する。壺蓋と考えられる。

蓋3（6）　推定口径15.0cm。全体にヨコナデを施し、天井部内側にはさらに不定方向のナデを加える。微細な白色砂粒を多く含み、硬質で、酸化焔焼成のため暗赤灰色を呈する。

皿a（7）　口径17.3cm、器高1.85cm、底径14.5cm。底部の調整は不明。その他はヨコナデを施し、内底部には約1.0cm幅の板状工具による不定方向のナデを加える。微細な白色砂粒を多く含み、硬質で、淡灰色～暗灰色を呈する。

坏c（8・9）　8は高台径6.5cm。底部はヘラ切り。その他はヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、淡灰色～茶灰色を呈する。9は高台径8.0cm前後に復元できる。全体にヨコナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒をかなり多く含み、硬質で、暗青灰色を呈する。

甕（10・11）　10は口径16.7cm。胴部外面には平行叩き痕、内面には同心円の当て具痕が残る。その他はヨコナデをおこなう。内面口縁部から外面にかけて濃緑色の自然釉がかかる。白色砂粒を極少量含み、硬質で、淡茶灰色を呈する。11は口径30cm前後と推定される。胴部外面に格子目の叩き調整痕が残る。内面は当て具痕を粗いナデにより消している。その他はヨコナデを施す。微細な白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。

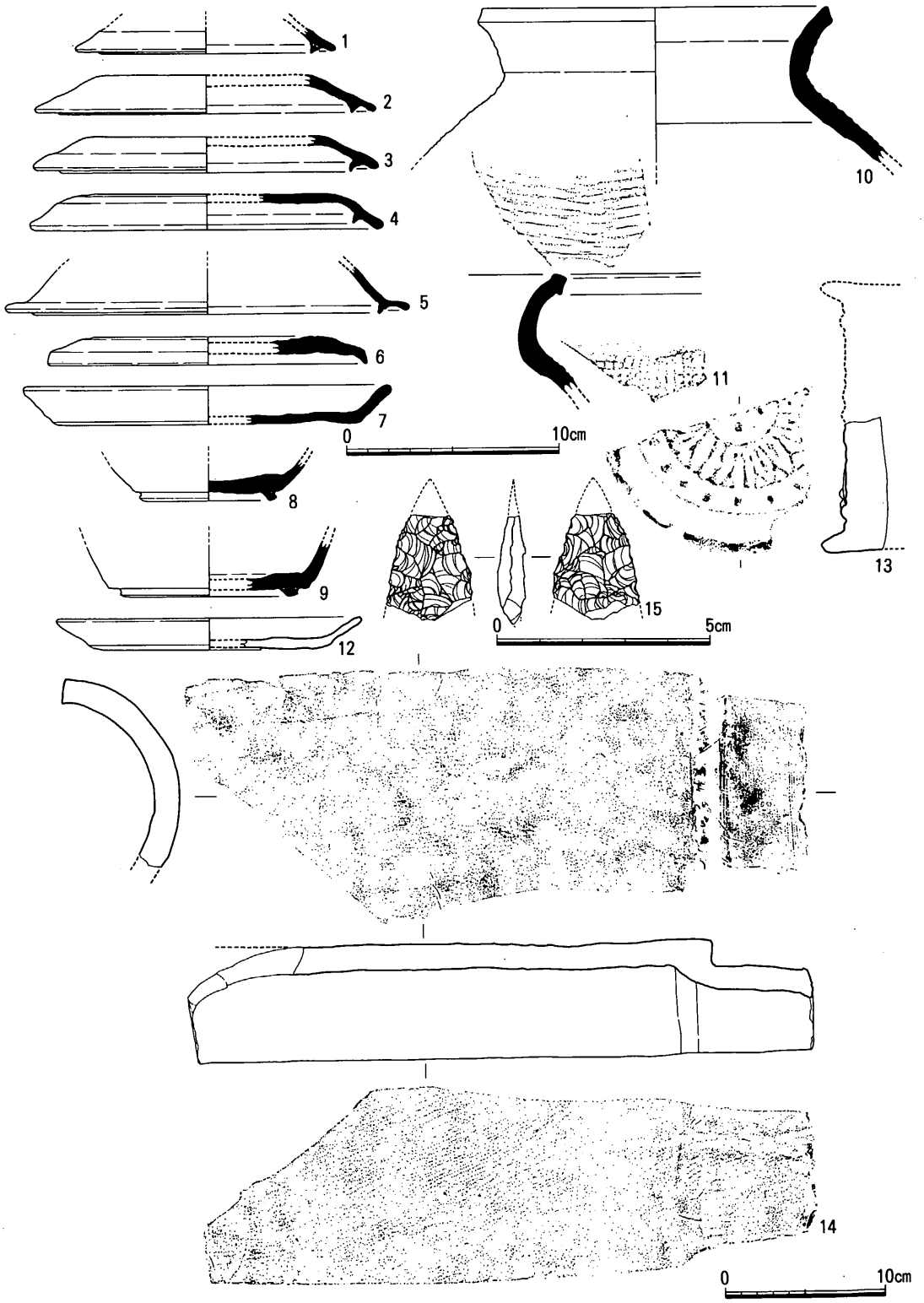


Fig. 18 1SD170出土遺物実測図（2／3・1／3・1／4）

土師器

皿ａ（12）　口径14.4cm、器高1.5cm、底径11.5cm。全体に磨滅が著しく調整不明。白色砂粒を多く含み、淡橙茶色を呈する。

瓦類

軒丸瓦（13）　細単弁二十一弁蓮華文で、外区内縁に21個の珠文を、内区中房に１＋８個の蓮子を配すると考えられる。筑前国分寺跡出土の瓦の中に、酷似するものがあり同笵の可能性がある（『筑前国分寺』福岡県教育委員会1978、石松好雄「老司式軒先瓦について」『九州歴史資料館研究論集８』1982)。白色砂粒を非常に多く含み、軟質で、淡茶色～褐色を呈する。

丸瓦（14）　凹面には目の細かな布目痕、凸面には縄目の叩き調整痕を部分的になで消した跡が残る。切り離しの切り込みは内側から入れている。微細な白色砂粒を非常に多く含み、硬質で、灰色を呈する。

石製品

鏃（15）　黒曜石製で、切っ先と抉り部分を欠損するが、両面とも丁寧な二次加工を施す。現存長2.45cm、幅2.05cm、厚さ0.65cmを測り、不透明な黒色を呈する。

１SD180（Fig.19）

軒丸瓦（１）　瓦当部の小片で、内区部分と考えられる。来木２号窯跡出土瓦と同じ、複弁十弁蓮華文で、中房に１＋４個の蓮子を配し、外区に17個の珠文を配するタイプの瓦と考えられる。白色砂粒を多く含み、硬質で、青灰色を呈する。



Fig.19　１SD180出土遺物実測図（１／４）

１SD190（Fig.20）

土師器

坏ａ（１）　口径12.2cm、器高3.1cm、底径7.1cm。底部は糸切り後、1.4cm幅の板状圧痕がつく。その他はヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈する。

越州窯系青磁

壺×水注（２）　高台径7.2cm。外面は高台削りだし後、光沢のある暗灰緑色釉が全面施釉される。畳付け部分は焼成前に欠損しているが、白色の目跡が残る。内面は回転ナデを施し、施釉されない。内底には1.0～1.5cmの粘土滓が付着する。胎土は硬質で、淡茶灰色を呈する。

瓦質土器

火鉢（３）　小片であるが43cm前後に復元できる。全体に丁寧なヨコナデを施し、外面には二条の沈線と梅の花文様のスタンプを、内面体部下位には刷毛目調整を加える。白色砂粒を多く含み、外面灰褐色、内面淡茶灰色を呈する。内面体部から口縁部にかけて黒褐色の煤が付着する。灰色砂出土。

龍泉窯系青磁

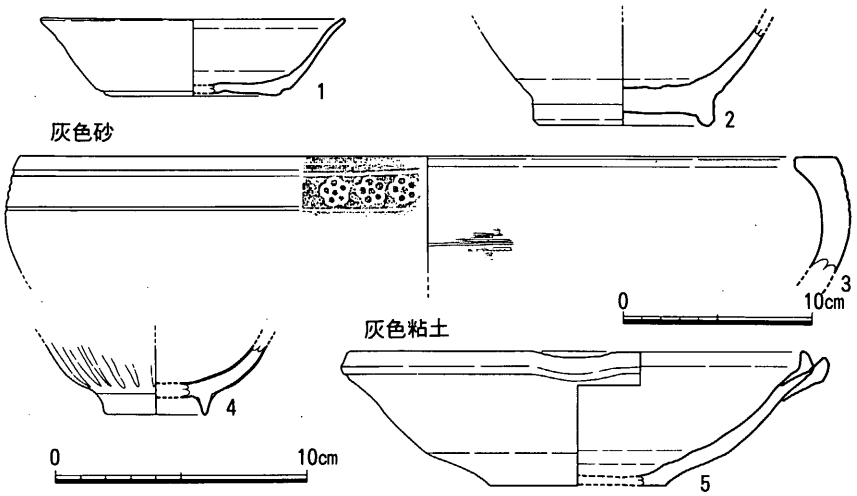


Fig. 20　1SD190出土遺物実測図（1／3・1／4）

碗（4）　高台径4.2cm。体部に陽刻蓮弁を削り出す。光沢のある緑灰色釉を厚めに全面施釉したのち、畳付けの釉をふき取る。胎土はきめ細かく硬質で、淡灰色を呈する。Ⅲ－2類。

須恵質土器

片口鉢（5）　口径18.8cm、器高5.4cm、底径7.0cm。底部は糸切り。その他はヨコナデを施すと考えられる。白色砂粒を多く含み、明灰色～明黄灰色を呈し、部分的に黒褐色の煤が付着する。東播磨系と考えられる。

1 SD202（Fig. 21～23）

須恵器

すり鉢（1）　底部の小片であるが、粘土紐のつなぎ目と、外底部から内底部に向けて穿孔された多数の穴が観察できる。穴の直径は3～4㎜前後、深さは10～16㎜で内底部まで貫通していない。白色砂粒を極少量含み、硬質で、暗灰色を呈する。

土師器

小皿a（2～14）　口径9.1～10.4cm、器高0.85～1.6cm、底径7.4～9.1cm。底部は8・10・11・13・14がヘラ切り、その他は糸切りで、12・13を除いて板状圧痕がつく。その他はすべての個体でヨコナデをおこない、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を極少量含み、2・3・5は淡明茶色（5の外底部暗灰色）、4は淡黄茶色、6は明灰茶色（外底部暗灰色）、7・9はくすんだ橙色、8は灰茶色、10は淡桃茶色、11はくすんだ桃茶色、12は淡黄茶色（外底部暗灰色）、13は淡茶色、14は暗茶褐色を呈する。

丸底坏a（15～23）　口径15.2～17.6cm、器高3.0～3.5cm。底部はすべてヘラ切り後押し出す。16・18・19以外は板状圧痕がつく。19が磨滅のため調整不明の他は、すべての個体で、外面はヨコナデを施し、内面はミガキbをおこなう。白色砂粒を極少量含み、15は内面淡橙茶色、外面灰茶～桃茶色、16は淡黄茶色、17は明茶色、18は淡茶黄色、19は淡黄白色、20は淡茶色、21はくすんだ桃茶色、22は黄茶～茶灰色、23は暗茶灰色を呈する。15の外面には重ね焼きの跡が残る。

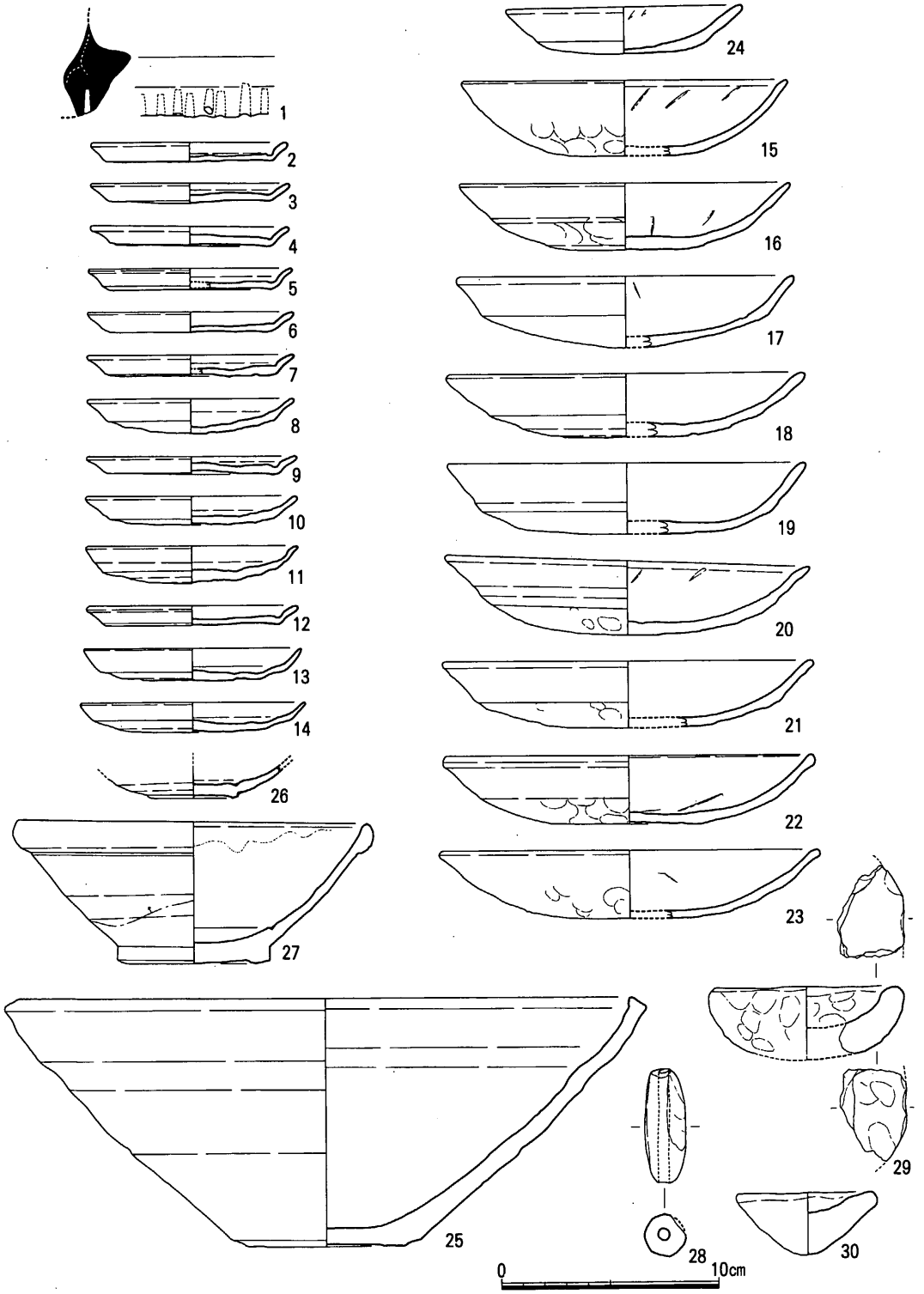


Fig. 21　1SD202出土遺物実測図（1）（1／3）

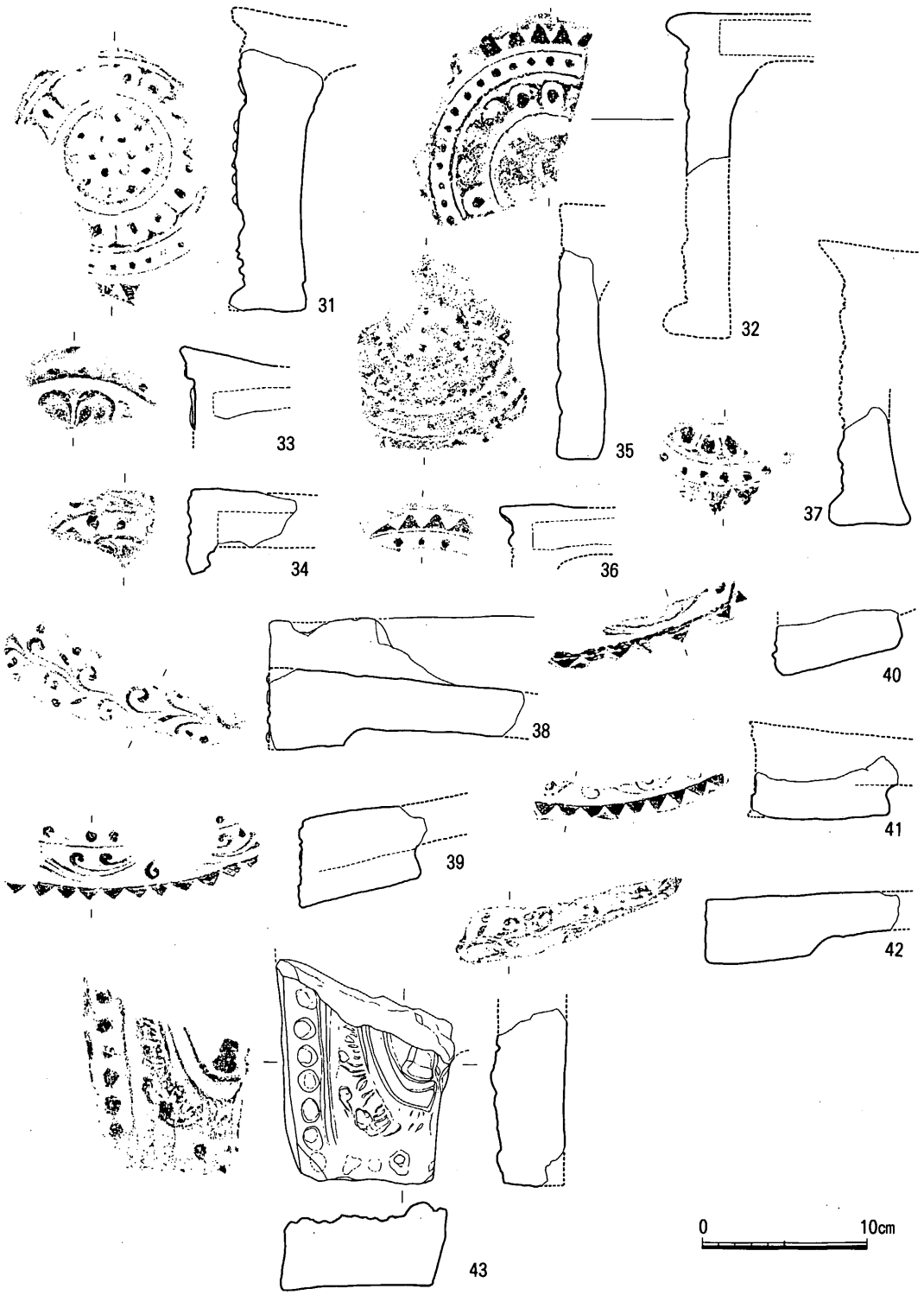


Fig. 22　1SD202出土遺物実測図（2）（1／4）

瓦器

小皿ａ（24）　口径11.0cm、器高2.2cm。底部はヘラ切り後押しだす。その他はミガキbをおこなう。白色砂粒を少量含み、黄灰色、口縁部暗灰色を呈する。

須恵質土器

鉢（25）　口径29.5cm、器高11.5cm、底径8.6cm。底部切り離し後、全体にヨコナデを施すが、内面中位以下は使用により平滑になっている。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。

白磁

皿（26）　高台径4.1cm。見込みに段を有する。高台削りだし後、底部を除いて淡い空色の半透明釉を施釉する。釉は光沢があり、貫入が入る。胎土は白色できめ細かい。Ⅶ類か。

碗（27）　口径16.5cm、器高6.6cm、高台径7.1cm。玉縁のつくりは雑で、見込みに段１を有する。高台削りだし後、わずかに空色味を帯びた灰白色の不透明釉を、体部下半まで施釉する。釉は光沢があり、ピンホールが認められる。胎土はきめ細かく、灰白色を呈する。Ⅳ－１－ａ類。

土製品

土錘（28）　現存長5.3cm、幅1.9cm、直径2.0cm。中心を直径0.5cmの穴が貫通する。白色砂粒を多く含み、硬質で、黒灰色を呈する。

坩堝（29）　口径9.0cm。手捏ねにより形作る。白色砂粒を非常に多く含み、きめは粗いが、二次焼成を受けて硬く焼き締まる。内面にはガラス質の物が付着し、黒灰色を呈する。外底部は灰白色になり他の部分より強く被熱している。

不明製品（30）　直径6.5cm、器高2.9cmの円錐形で、平坦部に窪みをつける。磨滅のため調整不明であるが手捏ねと考えられる。白色砂粒を非常に多く含み、きめは粗く、淡茶褐色を呈する。

瓦類

軒丸瓦（31～37）　31・32は老司系の単弁十六弁蓮華文で、31は外区外縁に外向する凸鋸歯文、外区内縁に36個の珠文、中房に１＋６＋10個の蓮子を配すると考えられる。白色砂粒を多く含み、やや軟質で、暗灰色を呈する。瓦当の直径は18.5cmに復元できる。32は外区外縁に外向する凸鋸歯文を36個前後、外区内縁に珠文を38個前後配すると考えられる。内区は磨滅が著しく蓮子の数は確認できない。白色砂粒を少量含み、やや軟質で、暗灰色を呈する。33は複弁蓮華文で、外区内縁には４個の珠文が現存する。丸瓦部分の凹面には1.0～2.5㎜幅の切り込みが残る。白色砂粒を少量含み、やや軟質で、黄灰色を呈する。34は損耗がひどく、わずかに外区内縁の珠文が３個確認できるのみである。白色砂粒を少量含み、やや軟質で、淡灰色を呈する。35も磨滅が著しいが、外区内縁に珠文、内区に花弁、中房に１＋４＋８個の蓮子を配すると考えられる。白色砂粒を多く含み、やや軟質で、淡茶灰色を呈する。直径15cm前後に復元できる。36は外区外縁に外向する凸鋸歯文、外区内縁に珠文を配すると考えられる。丸瓦部分の凹面に

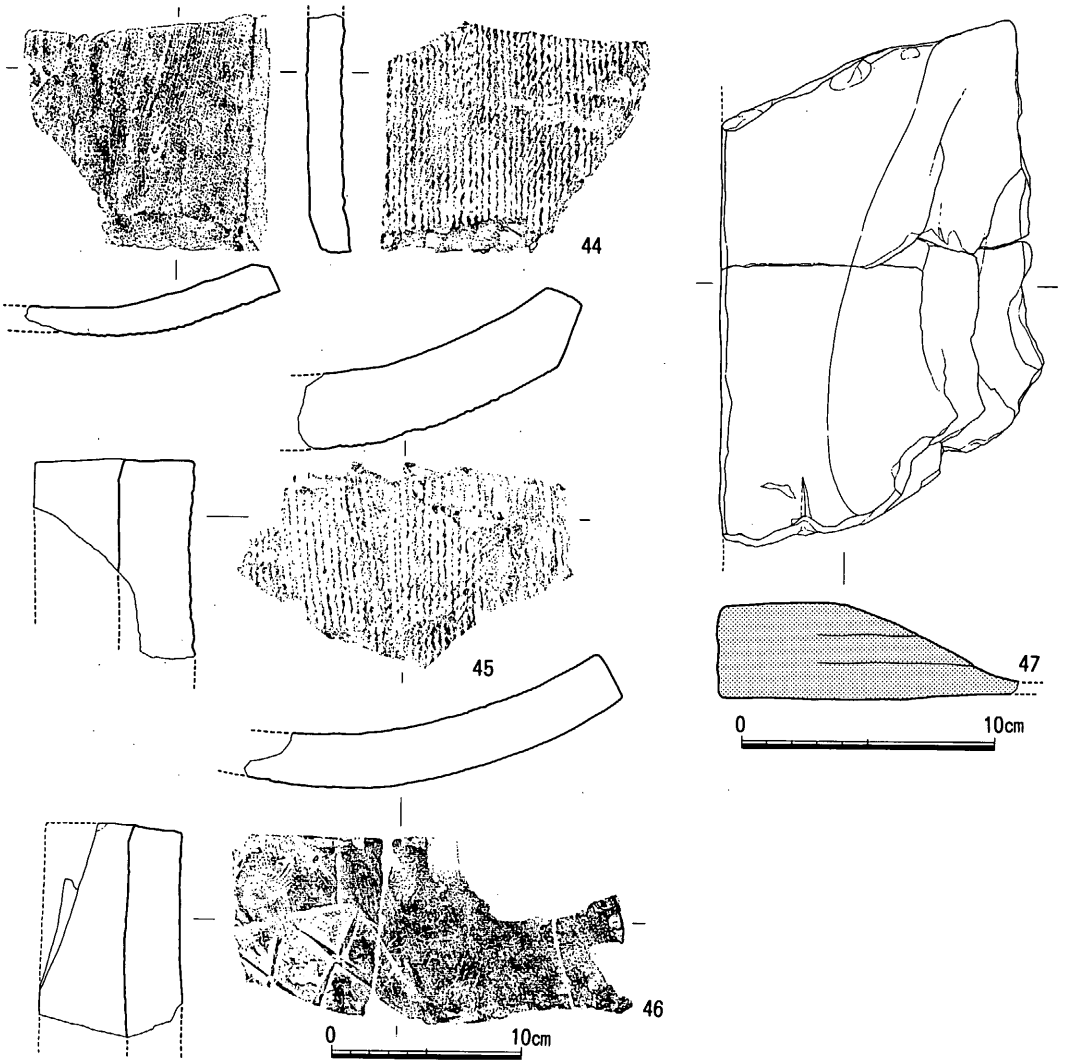


Fig. 23　1SD202出土遺物実測図（3）（1／3・1／4）

は目の細かい布目痕が残る。白色砂粒を少量含み、硬質で、暗灰色を呈する。37は老司系の単弁十六弁蓮華文で、外区外縁に外向する凸鋸歯文、外区内縁に珠文を配すると考えられる。鋸歯文が2個、珠文が6個現存する。白色砂粒をやや多く含み、軟質で、暗灰色を呈する。

軒平瓦（38～42）　38は外区と内区の区別はなく、均正唐草文の上下に珠文を配する。平瓦の凸面には縄目の叩き調整痕が残る。白色砂粒を多く含み、やや軟質で、淡灰色を呈する。39は老司Ⅱ式と考えられる。上外区に珠文、内区に偏行唐草文、下外区に外向する凸鋸歯文を配し、平瓦の凹面には布目痕が残る。全体に丁寧なつくりである。白色砂粒を極少量含み、やや軟質で、暗灰色～灰白色を呈する。40は老司系と考えられ、下外区の鋸歯文と内区の唐草文の一部が観察できる。白色砂粒を多く含み、軟質で、暗灰色を呈する。41も下外区の鋸歯文と内区の唐草文の一部が確認できるのみである。平瓦の凸面には縄目の叩き調整痕が残る。白色砂粒を多く含み、硬質で、灰色を呈する。鴻臚館系か。42は磨滅が著しいが偏行唐草文を配する

と考えられ、平瓦の凸面には縄目の叩き調整痕が残る。白色砂粒を多く含み、やや軟質で、淡茶灰色を呈する。

鬼瓦（43）　鬼面文鬼瓦の下端の部分と考えられる。下顎の表現が下牙の下方に大きく廻り込んでおり、大宰府政庁出土のものと異り、やや小ぶりで全体に上方に広がる形と推測される。筑前国分尼寺跡第７次調査出土（７SD027下層出土・Ｒ－002　『太宰府市の文化財　第16集』36ページ・Pla.25－ｂ）のものと酷似する。現存長13.6cm、幅10.9cm、最大厚5.6cm。白色砂粒を多く含み、やや軟質で、黄灰白色を呈する。

平瓦（44～46）　44は凹面に目の細かい布目痕、凸面に縄目の叩き調整痕が残り、布目は部分的になで消されている。側面は丁寧に削り、凹面側に面取りがある。白色砂粒および黒色の粒子を多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。45も凹面に目の細かい布目痕、凸面に縄目の叩き調整痕が残り、側面は丁寧に削り、凸面側に面取りがある。白色砂粒を少量含み、黄灰色を呈する。部分的に黒褐色の煤が付着する。46は凹面に目の細かい布目痕、凸面に大きめの斜格子の叩き調整痕（分類不明）が残る。白色砂粒を多く含み、暗黒灰色を呈する。

石製品

砥石（47）　砂岩製で、図上右側の斜面と下側の右から三分の一強を使用する。現存長21.0cm、幅12.8cm、厚さ3.9cmで、淡黄灰色を呈する。

１SD230（Fig.24）

土師器

丸底坏ａ（１）　口径15.3cm、器高3.0cm。底部はヘラ切り後押し出す。見込み部分はミガキｂを、その他はヨコナデを施す。白色砂粒を少量含み、淡黄茶色を呈する。



Fig.24　１SD230出土遺物実測図（１／３）

墓出土遺物

１ST015（Fig.25）

陶器

壺（１）　底径5.5cm。底部から体部下半までヘラ削り、その他はヨコナデを施す。光沢のない暗褐色釉を内外面に薄く施釉する。底部には大きめの目跡が残る。胎土は白色砂粒をやや多く含み、硬質で、暗赤褐色を呈する。Ⅳ類か。

瓦類

軒丸瓦（２）　複弁蓮華文で、外区内縁に珠文、中房に１＋４＋８個の蓮子を配する。珠文を32個有する鴻臚館系Ⅰ－６類か。丸瓦部分には布目痕が残る。白色砂粒を多く含み、軟質で、淡灰色を呈する。

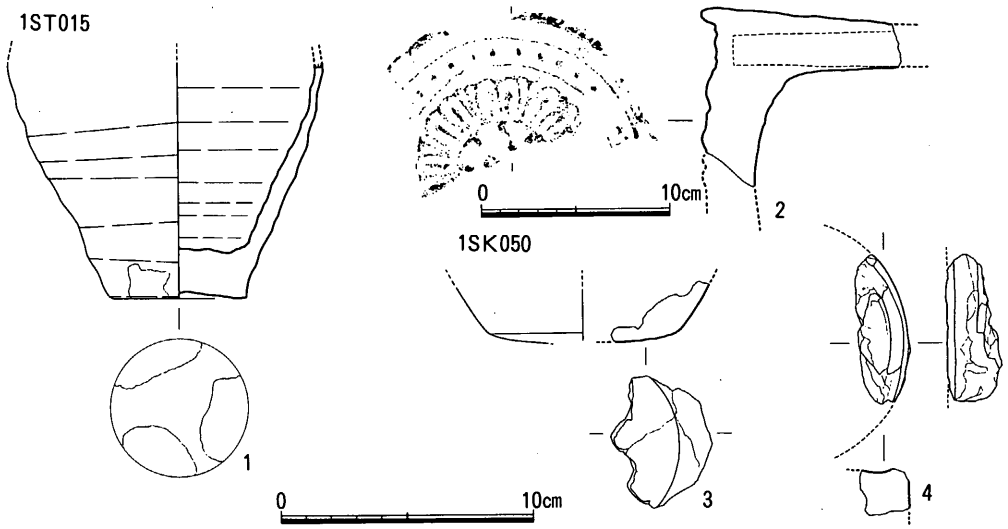


Fig. 25　1ST015・1SK050出土遺物実測図（1／3・1／4）

土壙出土遺物

1 SK050（Fig. 25）

土製品

鋳型（3・4）　3は中子で鍋底のような形状をとるが、製品は不明。屈曲部の直径は7.6cmである。表面から3.0～5.0㎜はアゲマネで、きめ細かく砂っぽい。他は白色砂粒とスサを多く含み、きめが粗くなる。被熱しており、外面暗灰色、内面灰茶色を呈する。4も中子で円筒形の角に突起があったが欠損している。表面はきめ細かいが、その他は白色砂粒やスサを多く含み、きめが粗くなる。暗茶灰色～茶灰色を呈する。

その他の遺構出土遺物

1 SX028（Fig. 26）

1は高麗青磁か瀬戸の鉢または碗と考えられる。推定口径18.7cm、器高7.7cm、高台径7.7cm。体部下半から高台にかけてヘラ削りをおこない、内面には浅い沈線が三条はいる。釉は光沢があり灰緑色を呈するが、細かい貫入のためにかなり白濁している。胎土はきめ細かく緻密で、明灰色～灰色を呈する。

1 SX045（Fig. 26）

石製品

鏃（2）　両端を欠損するが、鏃と考えられる。黒曜石製で、片面は全面に二次加工を施すが、もう一面は周辺部を整えるのみである。現存長2.2cm、幅2.15cm、厚さ0.4cm。不透明な黒色に灰色の縞模様がはいる。

1 SX060（Fig. 26）

須恵器

蓋ｃ３（３～５）　口径12.7～15.2cm、器高1.9～2.4cm。天井部は回転ヘラ削り、その他はヨコナデを施し、内面天井部にはさらに不定方向のナデを加える。３は天井部にヘラ記号を付す。白色砂粒をやや多く含み、３は暗青灰色、４は暗茶灰色、５は暗灰色を呈する。４はやや軟質である。

坏ｃ（６）　口径14.6cm、器高3.4cm、高台径10.9cm。底部はヘラ切り、その他はヨコナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒をやや多く含み、硬質で、外面暗灰色、内面暗赤灰色を呈する。

土師器

蓋ｃ４（７）　口径20.0cm、器高3.4cm。天井部は回転ヘラ削り後ミガキａ、その他はミガキａを施すと考えられるが、内面は磨滅が著しく判然としない。白色砂粒を非常に多く含み、橙茶色を呈する。

1 SX066（Fig.26）

石製品

剥片（８）　姫島産と考えられる黒曜石で、周辺部に二次加工が加えられる。製品に加工途中のものか。現存長2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmを測り、暗黒灰色を呈す。

1 SX105（Fig.26）

越州窯系青磁

碗（９）　口径17.6cm、器高6.3cm、高台径8.2cm。外面体部下半に縦方向のヘラ押さえが一ヵ所残る。全面施釉後、畳付けの釉をふき取る。見込みには連続する白色の目跡および茶褐色の付着物が残る。畳付けにはわずかに白色の目跡が残る。釉は鈍い光沢があり、濁った黄茶色を呈する。胎土はきめ細かく緻密で、淡灰茶色を呈する。Ⅰ－２類。

陶器

盤（10）　口径28.8cm。全体にヨコナデを施し、光沢のある暗黄緑色釉を厚めに施した後、口縁部の釉をふき取る。釉には細かい貫入がはいる。胎土はきめ細かく緻密で、白色砂粒を少量含み、淡灰茶色を呈する。Ⅲ類。

1 SX110（Fig.26）

鉄製品

11は現存長7.4cm、幅5.3cm、厚さ1.5cmを測り、長方形を呈するが、用途は不明である。

1 SX152（Fig.26）

土製品

焼土塊（12）　仮に上面とした面はわずかに湾曲しているが、全体の形状は不明である。現存長11.0cm、幅7.7cm、厚さ5.0cmを測り、かなりの厚さがあるにも係わらず、焼き締まっており、高温下に置かれたと考えられる。大粒の白色粒子を多く含み、橙茶色を呈する。

1 SX173（Fig.26）

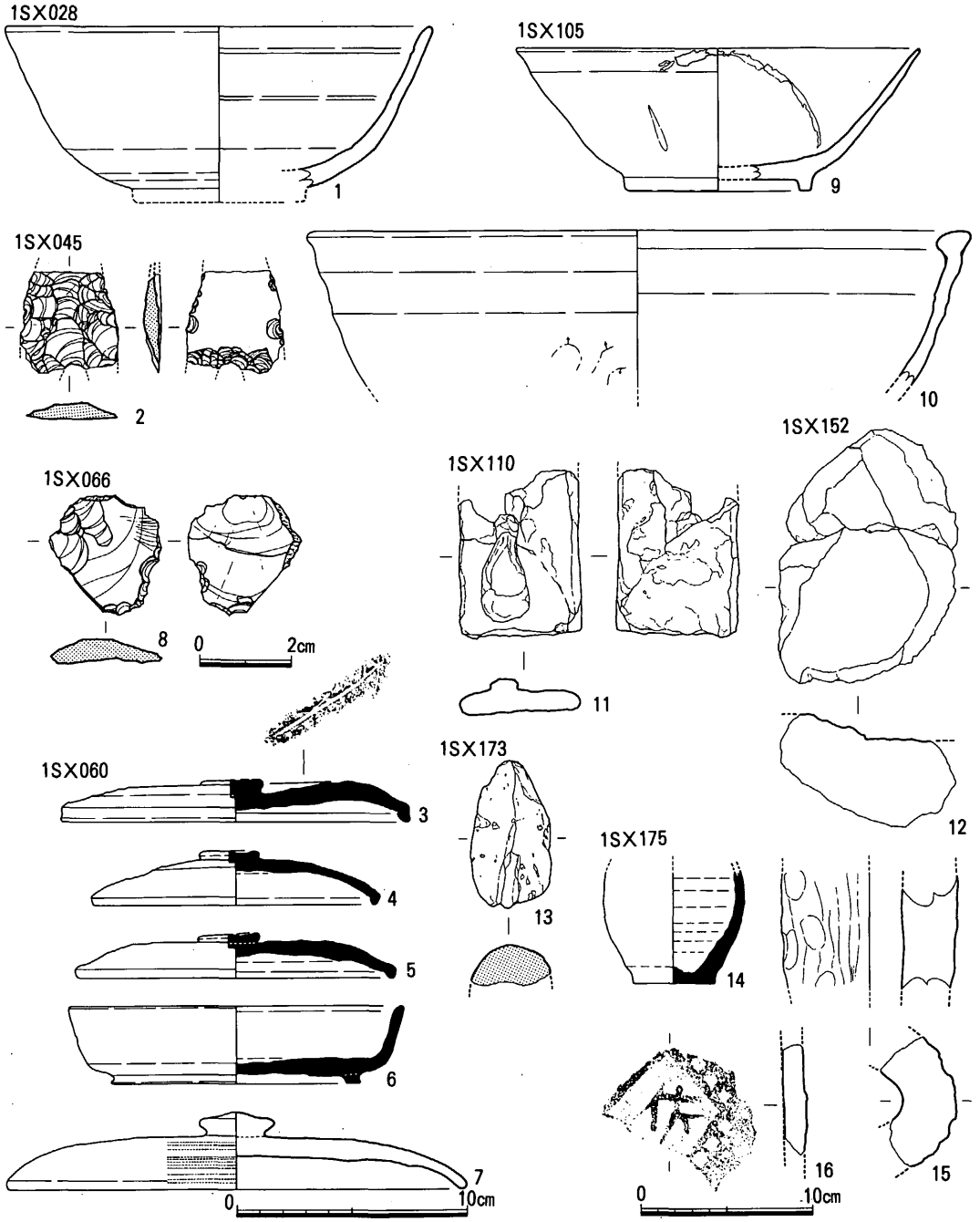


Fig. 26 1SX028・045・060・066・105・110・152・173・175出土遺物実測図（2／3・1／3・1／4）

石製品

13は軽石製である。用途は不明である。現存長6.5cm、幅3.55cm、厚さ1.8cmを測り淡茶色を呈する。

1 SX175（Fig. 26）

須恵器

小壺（14）　底径3.6cm。底部は糸切りで、その他はヨコナデを施す。白色砂粒を極少量含み、硬質で、灰色～暗灰色を呈する。搬入品と考えられる。

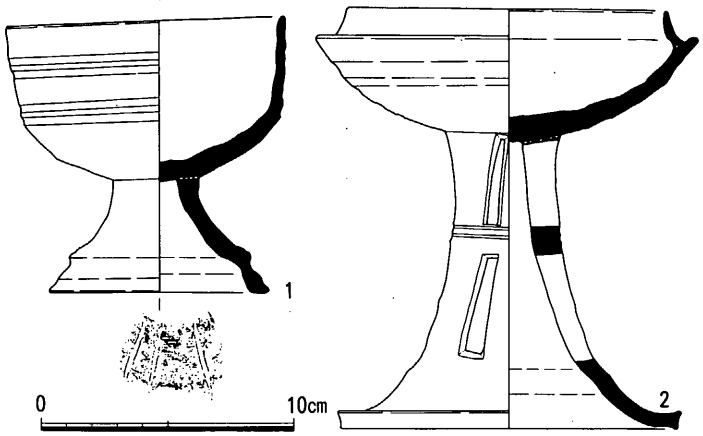


Fig. 27　1SX181出土遺物実測図（1／3）

土製品

ふいご羽口（15）　直径7.6cmに復元できる。外面には指頭痕と絞ったような皺が残る。白色砂粒を少量含み、被熱して明灰色～淡橙色を呈する。

瓦類

文字瓦（16）　凹面には布目痕、凸面にはⅡ－3類の叩き調整痕が残る。白色砂粒を多く含み、軟質で、凹面は淡茶色、凸面は暗灰色を呈する。

1 SX181（Fig. 27）

須恵器

高坏（1）　口径11.1cm、器高10.8cm、脚部径8.8cm。全体にヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。坏部外面には浅く凹線が四条めぐる。脚部内面には縦方向に三本のヘラ記号を付す。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗青灰色を呈する。

有蓋高坏（2）　口径12.8cm、器高16.7cm、脚部径13.4cm。全体にヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。脚部には長方形の二段透かしを三方向にいれる。上位と下位の透かしの間には二本の浅い沈線がめぐる。白色砂粒をやや多く含み、硬質で、灰色～暗黒灰色を呈する。

1 SX201（Fig. 28）

土師器

小皿a（1～4）　口径9.3～10.0cm、器高1.3～1.5cm、底径6.4～8.2cm。底部はヘラ切りで、2を除いて板状圧痕が残る。その他はヨコナデを施し、内底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を少量含み、1から順にくすんだ橙茶色、灰黄色、淡橙茶色、淡茶色を呈する。

丸底坏a（5～12）　口径14.8～17.2cm、器高3.2～3.4cm。底部はヘラ切り後押し出され、すべてに板状圧痕が残る。その他は外面はヨコナデ、内面は5が磨滅により確認できないほかは、ミガキbを施す。白色砂粒を少量含み、5から順に淡橙茶色、くすんだ黄茶色、淡黄茶色、くすんだ橙茶色、淡白茶色、橙茶色、淡茶色、淡桃茶色を呈する。

須恵質土器

鉢（13）　底部と口縁部の破片で、接合しないが同一個体と考えられる。推定口径30.2cm、

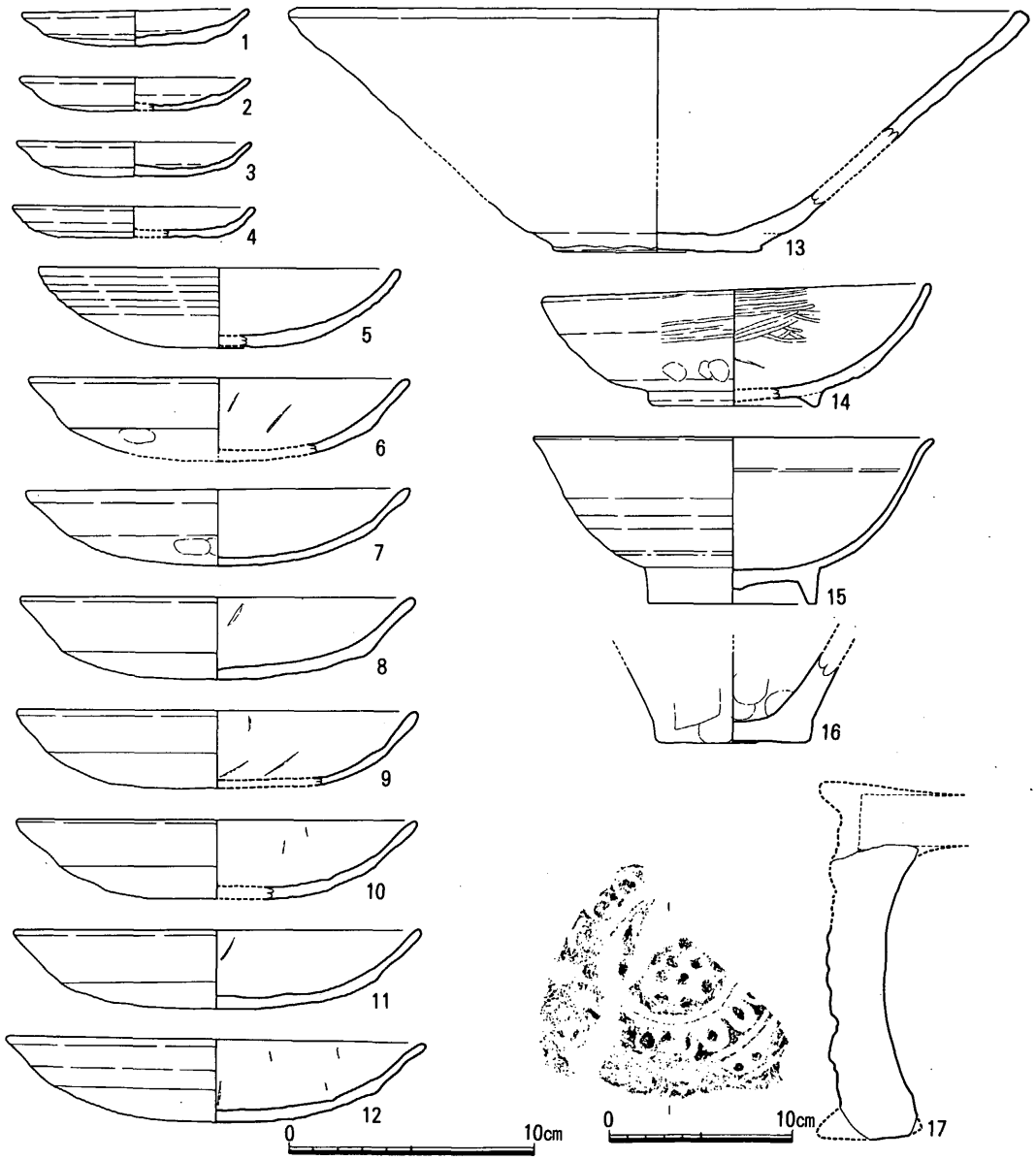


Fig. 28　1SX201出土遺物実測図（１／３・１／４）

器高10.0cm、底径8.6cm。底部は糸切りで、その他はヨコナデをおこなう。内面は口縁端部から4.0cm程から下は使用により平滑になる。外面には口縁部から体部にかけて煤が付着する。白色砂粒を少量含み、硬質で、明灰色を呈する。東播磨系と考えられる。

瓦器

碗ｃ（14）　口径16.0cm、器高5.8cm、高台径7.0cm。底部はヘラ切り後押し出す。外面は粗いミガキｃ、内面はミガキｂを施した後ミガキcを施すと考えられる。白色砂粒を極少量含み、外面口縁から体部中位までは黒灰色、以下底部にかけては茶白色、内面黒灰色を呈する。

白磁

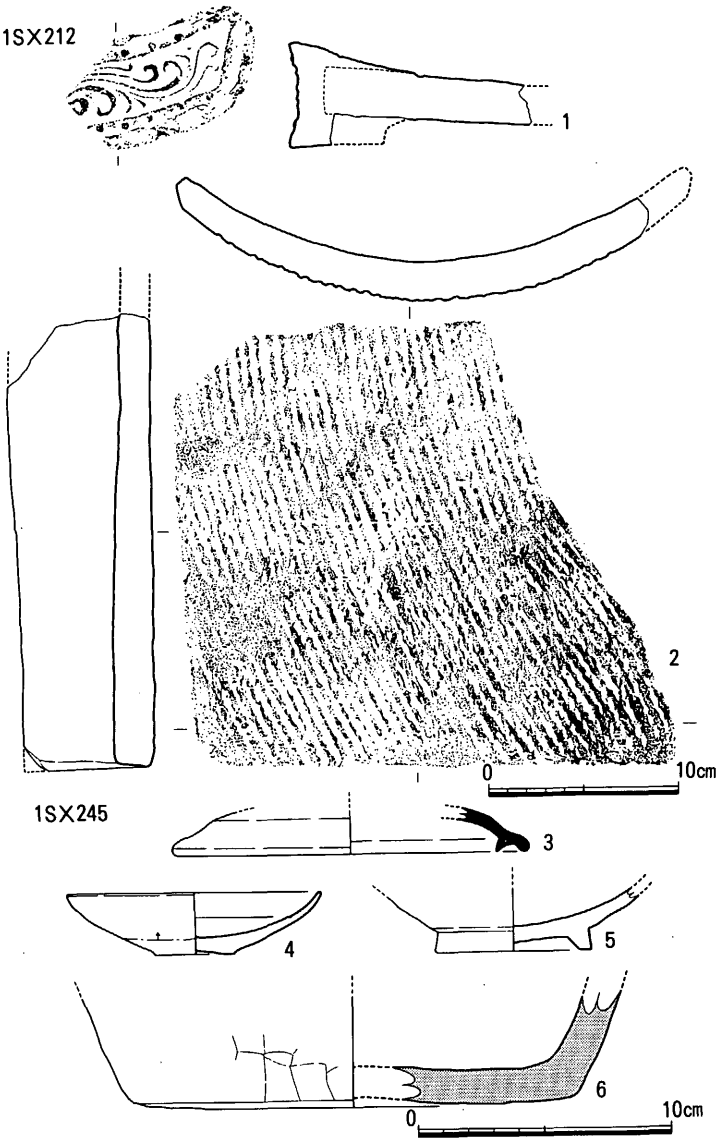


Fig. 29　1SX212・245出土遺物実測図（1／3・1／4）

碗（15）　口径16.4cm、器高6.85cm、高台径7.0cm。体部下位から底部にかけてはヘラ削り、その他はヨコナデを施し、内面には浅い沈線を一条めぐらせる。黄灰白色で光沢のある透明釉を体部下半まで施釉する。胎土はきめ細かく、灰白色を呈する。外面に焼成時の溶着痕が残る。V－2類。

弥生土器

甕（16）　小片であるが底径6.4cmを測る。内外面に指頭痕が残る。外面には工具によるナデ上げの痕跡も残る。白色砂粒を非常に多く含み、やや硬質で、橙茶色～黄茶色を呈する。

瓦類

軒丸瓦（17）　単弁蓮華文で、外区内縁に珠文を、中房に1＋6＋10個前後の蓮子を配すると考えられる。丸瓦との接合面には丸瓦についていたと思われる布目痕が残る。白色砂粒を少量含み、やや軟質で、暗灰色を呈する。

1 SX212（Fig. 29）

瓦類

軒平瓦（1）　外区に珠文を、内区に唐草文を配すると考えられる。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。

平瓦（2）　凹面には布目痕、凸面には縄目の叩き調整痕が残る。端面は削りを行い、凸面側に面取りがある。幅24.0cm、長さ25.0cm、厚み2.2cm。白色砂粒をかなり多く含み、軟質で、淡灰白色を呈する。

1 SX245（Fig. 29）

須恵器

蓋１（３）　口径14.2cm。全体にヨコナデをおこなう。かえりは口縁端部と同一水平面をなす。白色砂粒を少量含み、硬質で、暗灰色を呈する。

白磁

皿（４）　口径10.1cm、器高2.5cm、底径3.2cm。底部は回転ヘラ削り、その他はヨコナデを施した後、明茶白色の半透明釉を体部下半まで施釉する。釉は鈍い光沢があり、細かい貫入が入る。胎土はきめ細かく硬質で、淡黄灰色を呈する。Ⅵ－１－ａ類。

碗（５）　高台径6.2cm。高台から体部下半にかけて回転ヘラ削りをおこなう。化粧土をかけた後、灰黄色の半透明釉を体部下半まで施釉する。釉は柔らかな光沢があり、細かい貫入が入る。胎土はきめ細かく硬質で、淡黄灰色を呈する。Ⅱ類。

石製品

鍋（６）　滑石製で、小片ではあるが底径17.0cm前後に復元できる。全体に丁寧な削りを施す。暗灰色を呈し、外面は全面に煤が付着する。

下層包含層出土遺物（Fig.30）

縄文土器

１はごく小片であるが、内外面に条痕が残る。きめ細かく、大粒の白色砂粒を多く含み、やや硬質で、外面黄茶色～暗褐色、内面淡茶褐色を呈する。

石製品

錐（２・３）　ともに黒曜石製で、２は不透明な黒色、３は半透明の淡黒色を呈する。２は周辺部にのみ二次加工を加え、簡単に整える。現存長3.1cm、幅1.75cm、厚さ0.75cm。３も主に周辺部に二次加工を加える。鏃の可能性もある。現存長1.9cm、幅2.2cm、厚さ0.25cm。

剥片（４）　黒曜石製で、現存長1.7cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmを測り、半透明な黒色を呈する。

核×剥片（５）　安山岩製で、左右両方向からの剥離痕が認められる。現存長9.05cm、幅6.45cm、厚さ2.25cmを測り、暗黒灰色を呈する。

包含層出土遺物（Fig.31）

須恵器

坏ｃ（１）　高台径8.3cm。底部はヘラ切り後ナデ、その他はヨコナデを施し、内底部は不定方向のナデをおこなう。内底部にはヘラ記号を付す。微細な白色砂粒を多く含み、硬質で、内面くすんだ茶灰色、外面暗灰茶色～灰赤色を呈する。

土師器

小皿ａ（２～４）　口径9.6～10.0cm、器高0.85～1.45cm、底径6.4～7.4cm。底部は２・３

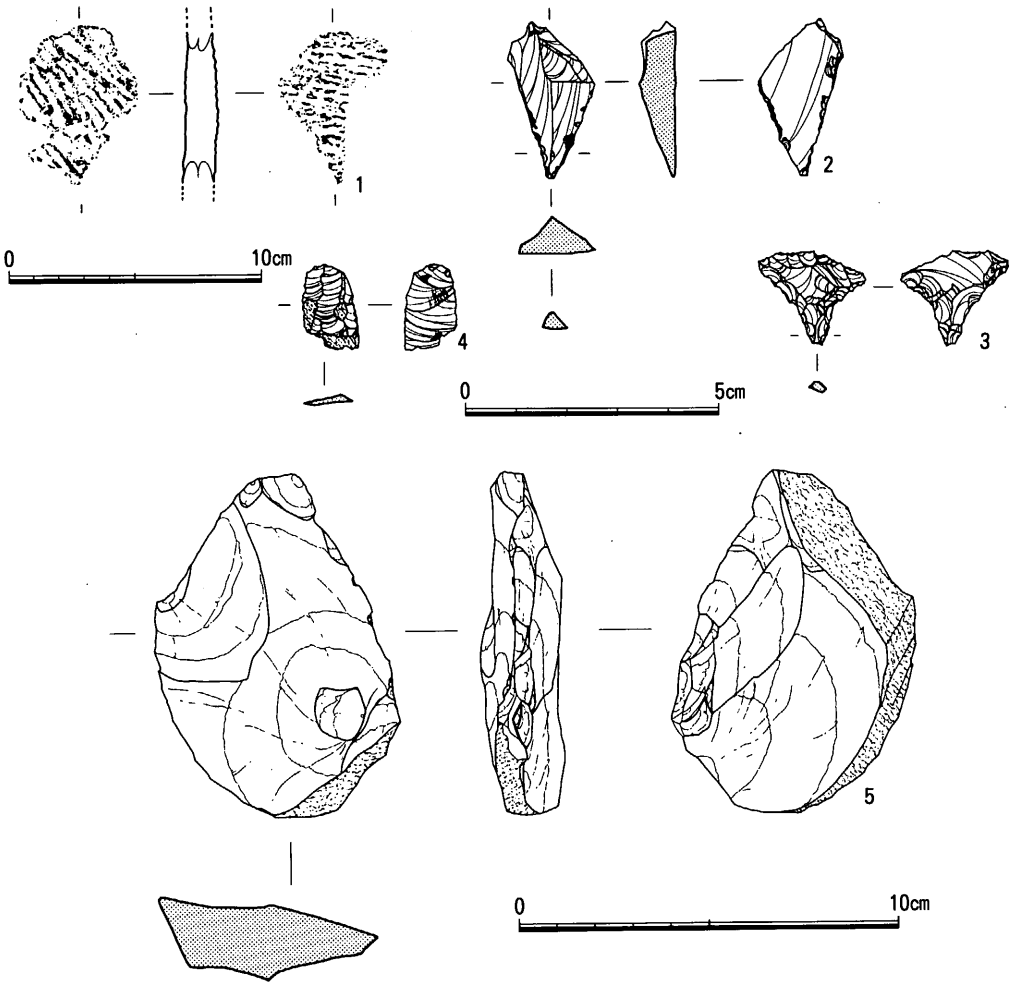


Fig. 30　下層包含層出土遺物実測図（2／3・1／2・1／3）

がヘラ切り、4が糸切りで、すべてに板状圧痕が残る。その他はヨコナデを施し、内底部には不定方向のナデを加える。白色砂粒を極少量含み、2は淡桃茶色、3は内面明橙茶色、外面灰茶色、4は淡茶色を呈する。4の内面には一面に黒色の炭化物が付着する。

丸底坏a（5）　口径16.4cm。底部はヘラ切り後押し出す。その他は外面はヨコナデ、内面はミガキbをおこなう。白色砂粒を少量含み、淡茶色～淡白茶色を呈する。

灰釉陶器

碗（6）　高台径4.7cm。全体にヨコナデを施した後、明灰緑色の釉を体部下半まで施釉すると考えられる。内底部の釉は磨耗してほとんど残っておらず、表面が非常に平滑になり、暗赤褐色の顔料が付着している。顔料を擂り潰すのに使用したものと考えられ、分析結果ではベンガラと判断された。胎土はきめ細かく、淡灰茶色を呈する。

弥生土器

甕（7）　底径8.4cm。磨滅が著しく調整は不明。白色砂粒および雲母片を非常に多く含み、

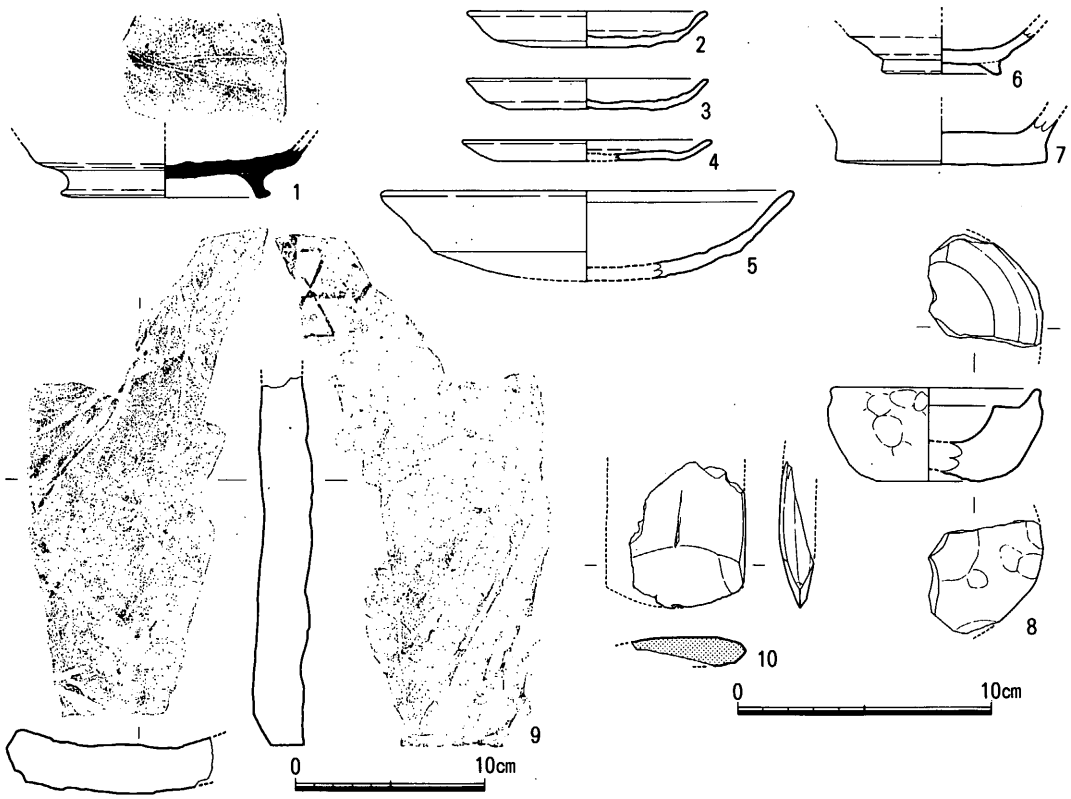


Fig. 31　包含層出土遺物実測図（1／3・1／4）

内面暗茶灰色、外面体部明橙茶色、底部暗茶褐色を呈する。

土製品

鋳型（8）　直径7.8cm、厚さ3.8cmに復元できる外型である。半球を扁平にし、根元に段を付けた形状をしている。金具の類とも考えられるが製品は確定できない。土はきめ細かく白色砂粒および雲母片を非常に多く含み、外面明橙茶色、鋳型面は被熱のためか淡灰茶色～暗灰色を呈する。

瓦類

平瓦（9）　凹面には目の細かい布目痕、凸面は一部に斜格子の叩き調整痕が残るが、雑な仕上げである。白色砂粒をかなり多く含み、硬質で、暗青灰色を呈する。

石製品

斧（10）　粘板岩製で、暗黒灰色を呈する。丁寧に形造られ、刃部には使用によると考えられる刃こぼれが確認できる。現存長5.8cm、幅4.6cm、厚さ1.5cmを測る。

表土出土遺物（Fig. 32）

須恵器

坏c（1）　口径15.0cm、器高5.45cm、高台径9.75cm。底部はヘラ切り後、5～6㎜幅の板

状圧痕が残る。その他はヨコナデをおこない、内底部には不定方向のナデを加える。微細な白色砂粒を非常に多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。

土師器

小皿ａ（２・３）　口径9.8・10.8cm、器高1.2・1.6cm、底径7.3・7.9cm。底部はヘラ切りで、３には板状圧痕が残る。その他はヨコナデをおこない、内底部には不定方向のナデを加える。２は白色砂粒を少量含み、明茶色、３は白色砂粒を多く含み、淡茶褐色～暗灰茶色を呈する。

小皿ｃ（４）　口径11.5cm、器高1.6cm、高台径7.5cm。底部はヘラ切り後、板状圧痕が残る。その他はヨコナデをおこない、内底部には不定方向のナデを加える。微細な雲母片を多く含み、茶灰色を呈する。

縄文土器

５は押形文土器の小片であり、外面の山形の波状文が観察できる。胎土はきめ細かく、白色砂粒を少量､角閃石をかなり多く含む｡やや硬質で､外面黄茶色～褐色､内面淡橙茶色を呈する。

土製品

鋳型（６・７）　ともに製品は確定できない。６は外型で鋳型面の中ほどを少し盛り上がった部分が弧状に巡っている。土は表面から２～３㎜の部分は、きめが細かいアゲマネで茶灰色を呈する。その他の部分はきめが粗く、白色砂粒を多く含み、暗茶灰色～茶橙色を呈する。やや大型品と推定される。現存長7.85cm、幅9.8cm、最大厚2.8cm。７は断面円筒状で円に直行して直径1.3cmの穴が貫通している。土は全体にきめがかなり細かく、持った感じは軽い。外面橙茶色～茶灰色、内面橙色～暗茶灰色を呈する。現代の七輪の可能性がある。現存長11.95cm、幅10.6cm、最大厚4.3cm。

取瓶（８）　大きさは不明であるが、片口状になった部分が残る。表面は荒れており調整は不明である。被熱のため硬く焼き締まり、内底部は淡茶色、内面体部から片口にかけては灰色、口縁部は褐色に変色している。外面は底部が茶褐色で口縁に向かって明るさを増している。内面体部から口縁にかけて茶褐色の鉱物性の物質が点々と付着している。最大厚3.8cm。

瓦類

軒丸瓦（９・10）　ともに複弁八葉蓮華文で、外区内縁に32個の珠文、中房に１＋４＋８個の蓮子を配する鴻臚館系Ⅰ－６類と考えられる。外側列と中列の蓮子の接合状態が酷似しており、同笵の可能性がある。９はやや造りが雑で、白色砂粒を多く含み、軟質に焼け、くすんだ茶色を呈する。10はやや大粒の白色砂粒を非常に多く含み、軟質で、淡茶灰色～灰色を呈する。

軒平瓦（11）　外区と内区の区別がなく、唐草文と上下に珠文を配する。凹面には布目痕、凸面には縄目の叩き調整痕が残るが、部分的に工具でなで消している。白色砂粒を非常に多く含み、やや硬質で、淡茶灰色を呈する。

丸瓦（12）　凹面には布目痕、凸面にはⅠ－ｂ－５類と考えられる斜格子の叩き調整痕が残

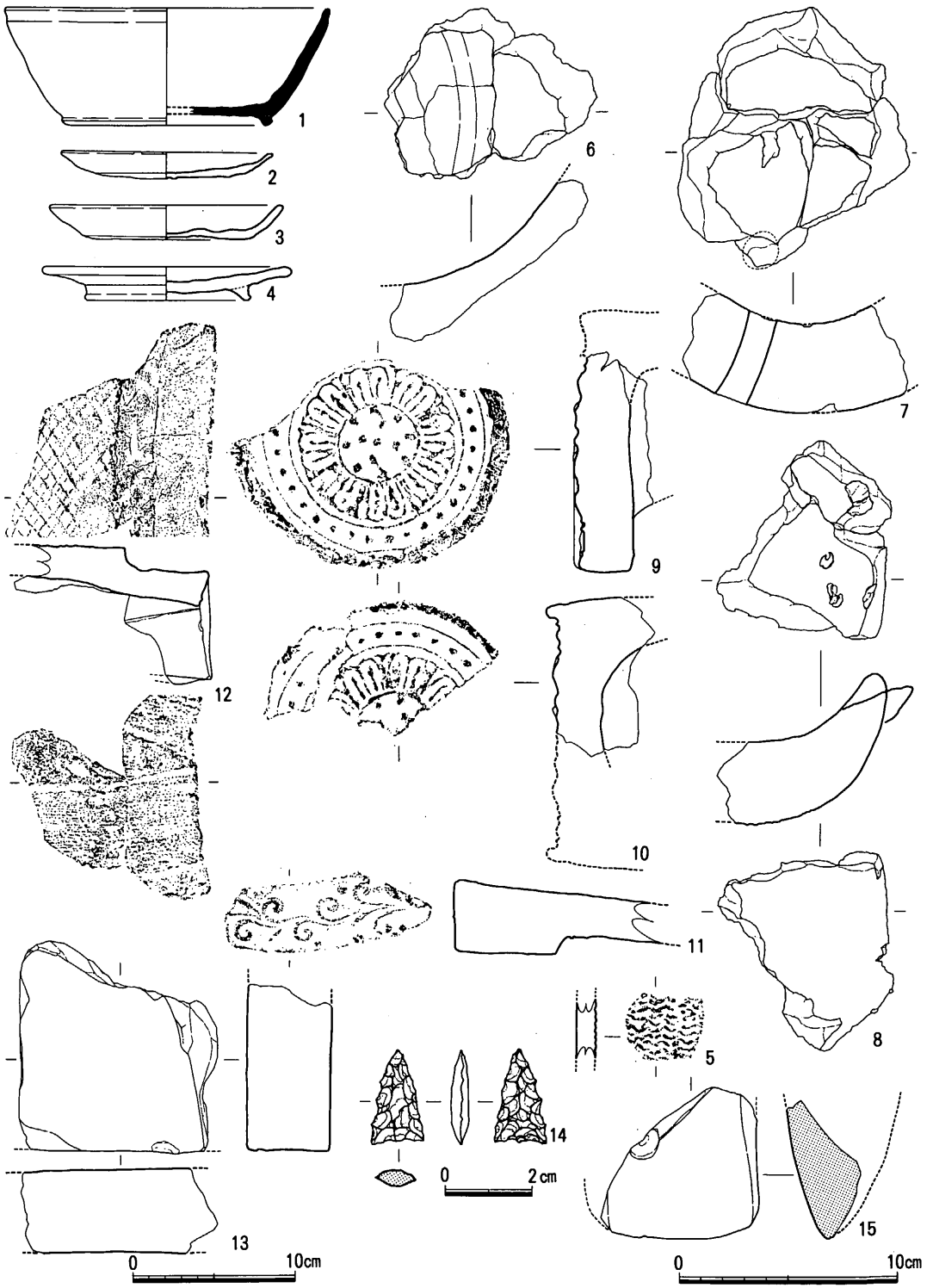


Fig. 32　表土出土遺物実測図（2／3・1／3・1／4）

る。顎の部分は強いヨコナデ、端部は工具による粗いナデで仕上げられる。白色砂粒を多く含み、硬質で、灰色を呈する。

塼（13）　現存長13.1cm、幅12.2cm、厚さ5.3cm。雑な成形をおこなっており、粘土の継ぎ目が所々で観察できる。表面はナデにより仕上げる。白色砂粒を多く含み、軟質で、淡灰茶色を呈する。

石製品

鏃（14）　安山岩製で、両面とも二次加工を施す。抉りはわずかに湾曲させる程度である。長さ2.2cm、幅1.25cm、厚さ0.4cmを測り、暗灰色を呈する。

斧（15）　玄武岩製で、太形蛤刃石斧と考えられる。表面はかなり磨滅しており、使用痕などについては不明である。現存長7.0cm、幅7.25cm、厚さ3.4cmを測り、淡灰色～淡茶灰色を呈する。

5）小結

今回の調査は筑前国分寺周辺としては、広い面積を調査することができたが、北側の遺構残存度が低く残念であった。調査の成果は以下のようになる。

・1SD010・170とSD180で挟まれた空間は道路跡の可能性が高く、各々の溝は道路側溝と考えられる。道路の敷設時期は明確でないが8世紀前半で廃絶は9世紀中～後半頃と推定される。南側の1SD180は廃絶後も水路として利用されたらしく、数度の掘り直し（1SD190）の後14～15世紀に埋没している。1区の南側の現在の街区での試掘結果はすべて氾濫原であり、この付近が度々水害に遭っていたことを考慮すると、1SD190は現在調査地の南約70mを流れる大谷川の旧河道の可能性がある。

・1SD010・170と1SD180を道路側溝とするとその規模は、路面幅約4m、側溝幅約2m弱、側溝の心々距離が約6mと推定される。

・1SD202は12世紀中頃以降の埋没と推定され、東へおよそ2°30′振れている。これは国分寺跡の中軸線の振れに近く、これに影響を受けたなんらかの区画溝の可能性が考えられる。国分寺中軸線からの距離は東へ約233.6mである。S－208・270も1SD202と連続していたかもしれない。

・掘立柱建物は奈良時代のものを2棟、平安時代と考えられるものを1棟検出したが、特に規格性は見いだし得ないが、方位には従っている。

・1SK050・1SX055・060付近では、焼土塊とともに鋳型片などが出土しており、生産関係の遺構の可能性があるが、炉跡などの検出には至っていない。また鋳型片も製品を確定できるものは出土していない。

・遺構群は1・2区と3区南側で多く検出したが、その時期的中心は平安時代中頃である。奈良時代に調査地は計画的に開発され、その後平安時代を通じて利用されていたと考えられる。

中世は調査地と国分寺跡の間の空間で集落が展開している可能性が高いが、今次調査では遺構は多くなく集落のはずれと考えるのか、遺構の削平が激しく（特に３～５区）残存していなかったと考えられるのか現状では判断できない。

2．　御笠団印出土地周辺遺跡　第８次調査

１）調査に至る経過

太宰府市坂本３丁目41－１において、太宰府市が進めている「歴史の散歩道」整備事業に伴い、道沿いに設置するポケットパーク設置の計画が平成４年に具体化し、公園建設を目的とした文化財の取り扱いに関する問い合わせが太宰府市教育委員会にあった。そこで平成４年11月２日に太宰府市建設課と文化財の取り扱いに関する協議を行い、当地の用地買収終了後試掘調査を実施し、その結果次第でそのまま本調査に入る旨を伝え、了承を得た。

その後、用地買収が進んだことから、平成５年９月22日より重機による試掘調査を実施した。この結果、厚く堆積した包含層から多量の土器を検出した。しかし堆積層が深いため、遺構面の検出に至らず、調査範囲を広げ、事実上本調査に入ることに決定した。なお、試掘調査の段階で、遺構面までの盛り土がかなりなされていることが判明したため、安全を確保する必要から調査区を当初の計画より縮小することにして調査を実施した。開発対象面積は2,291㎡、発掘調査面積は400㎡である。

発掘調査は平成５年９月22日から平成６年１月20日にかけて実施した。発掘調査は塩地潤一が担当した。なお、整理及び報告は、調査担当者が退職したため、中島恒次郎、井上信正が行った。

２）検出遺構

当地は、北東から西、南へ下る谷地形の北の落ち際にあたる。ここは昭和２年に発見された「御笠團印」（重要文化財）出土地の南東約200mに位置し、さらに南東方向に目を向けると、往時、蔵司がおかれた丘陵まで谷を挟んで約300mという重要な遺跡に囲まれた地点である。

調査の結果、調査区全面に河川堆積とみられる堆積層が確認された（８SX001）。深さは最大3.92mを測る。この流路は北東から南西へ向かって流れていた可能性があると調査時の所見では述べている。ここから、墨書土器や硯などを含む多量の遺物が出土した。

８SX001の層位について述べる（Fig.33）。上層では、上から順に青灰色土層（１）・茶色砂土層（２）・茶黒色シルト層（３）と堆積している。いずれも水平に近い状況で堆積しており、これらは一連の堆積作用によるものとみられる。

この下には暗灰色系の層（４～７層）が堆積し

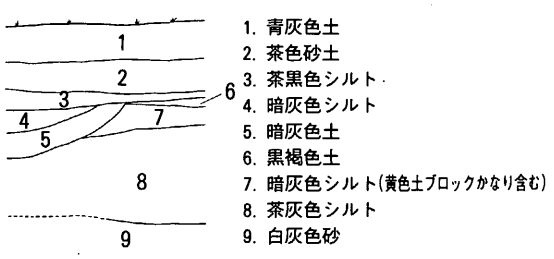


Fig. 33　御笠団印出土地周辺遺跡
第８次調査　土層模式図

ている。これらの層は、上下の層と異なった堆積をしており、土層観察により暗灰色シルト層（4）・黒褐色土層（6）と上層の茶黒色シルト層（3）との間に不整合が生じているのが確認された。これらの層はおそらく同じ層位内の層の乱れと考えられ、4～7の各層は、大きく捉えて一つの層と理解したい。特に7層に、調査地点の北側（山側）にみられる地山土に似た黄色土系のブロックがかなり含まれていることから、何らかの造成作業が行われた可能性もあるが、今回の調査では、確証を得ることができなかった。その下位には茶灰色シルト層（8）が約1.5mの厚みを有して堆積している。

最下位には白灰砂層（9）がある。この層も水成堆積されたものでいわゆる地盤ではないが、撹乱された様子もなく、遺物の検出も見なかったため、調査はこの面を検出した時点で終了している。

このほか、遺構として確認されたものはなかった。

3）出土遺物

前項にて記述してきたように、9層に分層できる状況で堆積層を確認している。遺物を出土した層は全ての層からではなく、上位より青灰色土・茶色砂質土・黒褐色土・茶灰色シルトの各層から出土している。以下に上位の土層より出土した遺物について記述していく。

青灰色土出土遺物（Fig.34）

この土層からは、須恵器・土師器とともに凸面に格子叩き痕をとどめる平瓦および丸瓦の破片や竈と考えられる土製品の破片、さらには製塩土器が出土している。

須恵器

蓋（1・2）　口径12.3・14.0cm、器高4.0・4.0cmを測る。天井部外面はいずれも回転ヘラ削りによって仕上げており、口縁部内面の形状は異なっている。1は内傾するように端部を仕上げており、2は口縁部内面に1条の沈線を巡らせている。なお1の天井部外面には三条の直線によるヘラ記号が描かれている。

蓋ｃ3（3）　口径15.4cm、器高1.8cm、つまみ径1.9cmをそれぞれ測る。天井部外面は、粗い回転ヘラ削りによって仕上げられているが、回転ヘラ切りの痕跡をわずかに残している。つまみはボタン状のつまみを貼付している。また他に、天井部内面を硯に転用したものも出土している。

椀ａ（4）　口径16.1cm、器高6.7cm、底径10.55cmを測り、体部外面下位から底部外面にかけて丁寧な回転ヘラ削りによって仕上げている。

皿ａ（5・6）　口径17.4・19.9cm、底径14.6・17.0cmを測り、器高は両者とも1.9cmを測る。直線的に外方へ立ち上がる体部形状をとり、底部外面は、粗い撫でによって仕上げている。

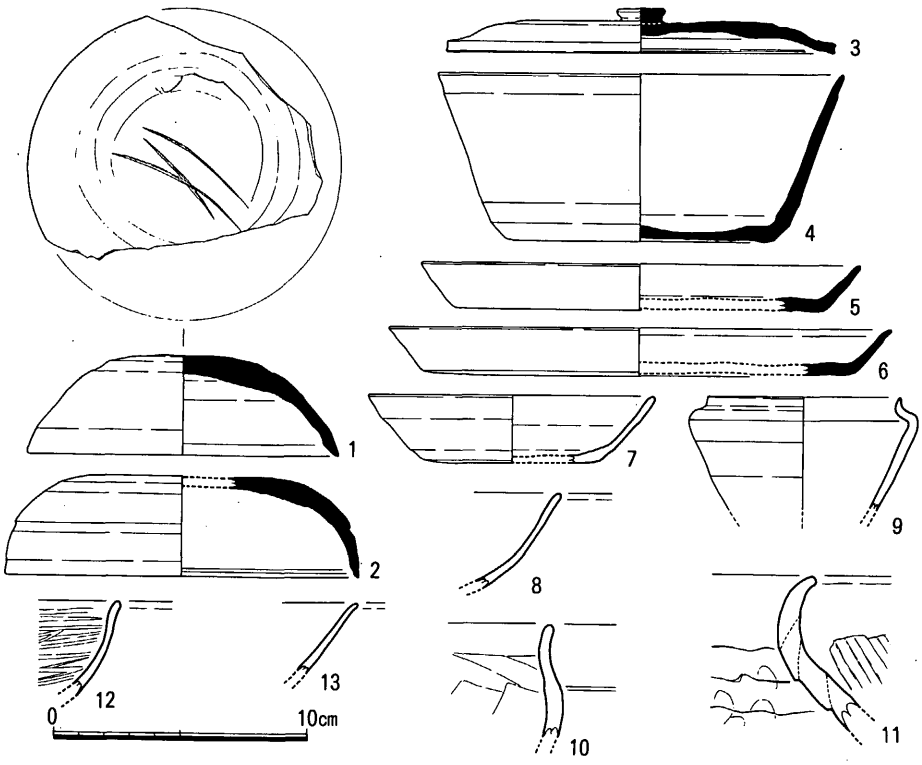


Fig. 34　御８　青灰色土出土遺物実測図（１／３）

土師器

坏ａ（７）　口径11.45cm、器高2.7cm、底径6.9cmをそれぞれ測り、底部処理はヘラ切り。

椀（８）　小破片のため口径が推定できない。内外面ともにヨコナデにより丁寧に仕上げている。

小壺（９）　口径7.7cmを測り、体部外面下半を回転ヘラ削りによって仕上げている。

甕（10・11）　いずれも小破片のため口径が推定できないが、10は内面を手持ちによるヘラ削りによって仕上げており、11は、内面に粘土紐痕跡を明瞭に残し、粗い指頭圧によって仕上げている。

黒色土器

椀（12）　小破片のため口径が推定できないが、内面をやや丁寧なミガキｃによって仕上げている。Ａ類。

越州窯系青磁

椀（13）　椀Ⅰ類の破片と考えられ、暗茶緑色の釉調で細かい貫入が入る。素地は暗茶色のきめの細かい素地特徴を有している。この他にⅡ類系の素地特徴を有する壺と考えられる破片も出土している。

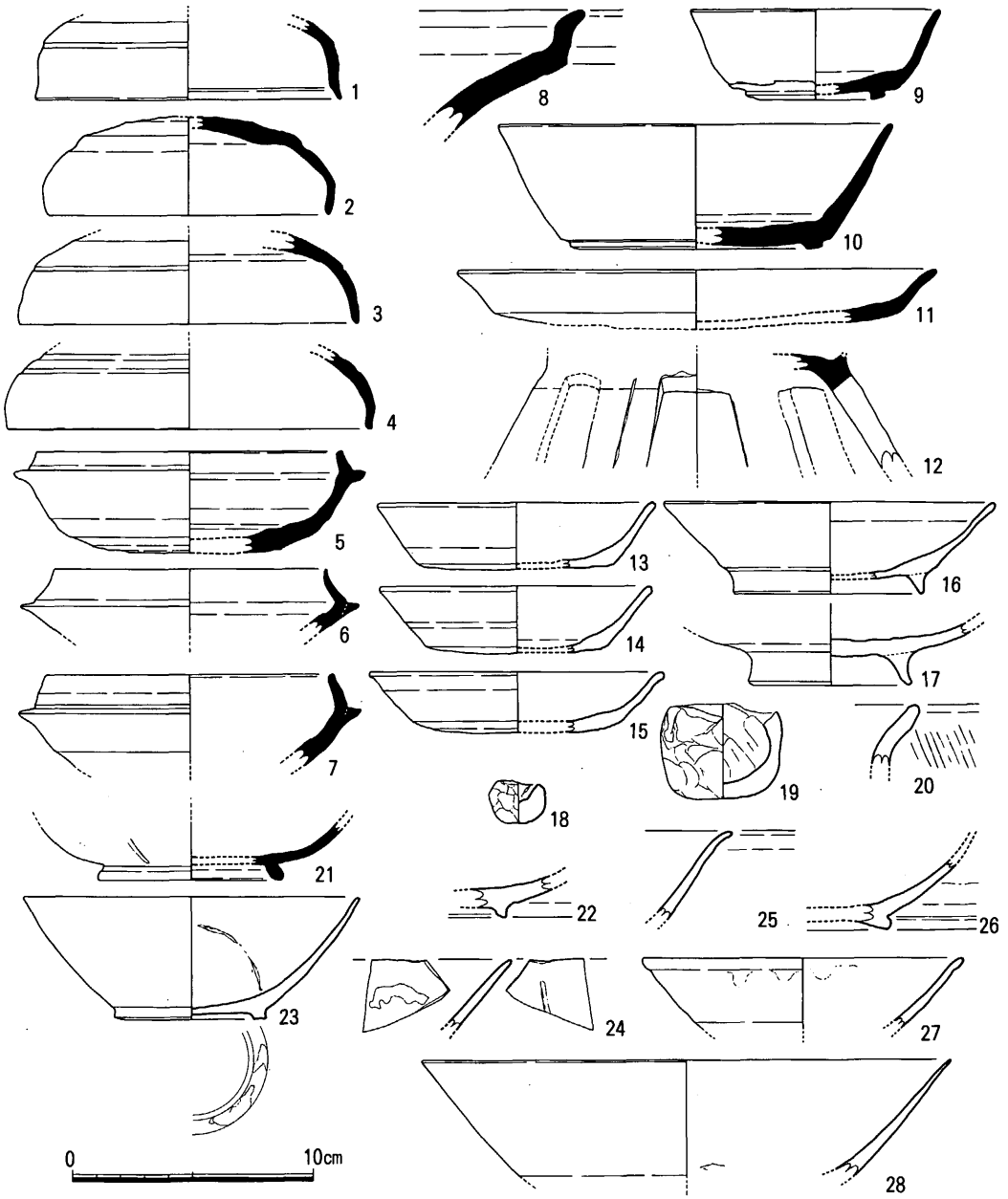


Fig. 35　御８　茶灰色砂質土出土遺物実測図（１／３）

茶色砂質土出土遺物（Fig. 35）

この土層からは、多くの遺物が出土しており、須恵器・土師器とともに格子叩きを残す平瓦、丸瓦および滑石片などが出土し、製塩土器、竈と考えられる土製品等も出土している。

須恵器

蓋（１～４）　口径11.6～15.2cmを測り、いずれも天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。１は、外面において天井部と体部の境界に凹線を付し、口縁部内面を内傾気味にやや くぼませて作り出している。２～４は外面における天井部と体部との境界は不明瞭となり、

口縁部の作りも丸く仕上げている。

坏（６・７）　口径11.25・11.9cmを測り、口縁部がやや内傾気味に立ち上がる。

小坏ｃ（９）　口径10.4cm、器高3.8cm、高台径5.8cmをそれぞれ測り、底部外面は丁寧にナデによって仕上げている。高台の接合がやや粗雑である。

坏ｃ（10）　口径16.4cm、器高5.6cm、高台径10.5cmを測り、底部外面は丁寧なナデにより仕上げている。焼成は良好であるが、還元状態が悪く、瓦質に焼き上げられている。

皿ａ（11）　口径20.0cmを測り、やや外反する体部形態をとる。

硯（12）　脚部のみの破片で全体については、不明確な資料。長方形の透かし孔を設け、外面に一条の直線をヘラ描きで描いている。

大甕ｂ（８）　口縁部のみの破片で、二重口縁状に口縁端部を作り出している。

土師器

坏ａ（13～15）　口径11.3～12.25cm、器高2.6～2.8cm、底径7.5～8.7cmを測り、いずれもヘラ切りによって底部処理を行っている。

椀ｃ１（16）　口径13.7cm、器高3.9cm、高台径7.9cmを測り、やや直線的に外方へ立ち上がる体部形態を有している。

皿ｃ（17）　高台部分の破片であることから、椀ｃ２である可能性もあるが、高台脇から体部への立ち上がり形状から、皿ｃであると判断した。高台径6.8cmを測る。

甕ａ（20）　小破片のため全体は不明だが、外面を粗い刷毛によって仕上げている。

手づくね土器

小鉢（18・19）　指頭圧によって極めて粗く仕上げられており、大小二種がある。

緑釉陶器

椀（21）　高台のみの破片で、貼り付け高台で、体部に縦方向のヘラによる沈線が入る。釉調は、大半が銀化しているため不明確だが、暗緑色を呈し、須恵質の素地特徴を有している。東海産と考えられる。

器種不明（22）　高台内面を内傾させる形状を呈しており、高台部分のみの出土であるため詳細は不明。釉調は、大半が銀化しているため不明確だが、暗黄緑色を呈しているものと考えられ、土師質の素地特徴を有している。近江産と考えられる。

越州窯系青磁

椀（23～28）　Ⅰ類およびⅡ類が出土しており、概略的には、Ⅰ類の出土量が多い。各分類は、23がⅠ－２ａ類、24がⅠ－ｂ類、25がⅠ類、26・27がⅡ－２類、28が鉢Ⅰ類。特に24の内面には漆状の付着物が観察できる。

茶灰色シルト出土遺物

この土層からは図示できる顕著な遺物は出土していないが、選別の段階で記録できたものと

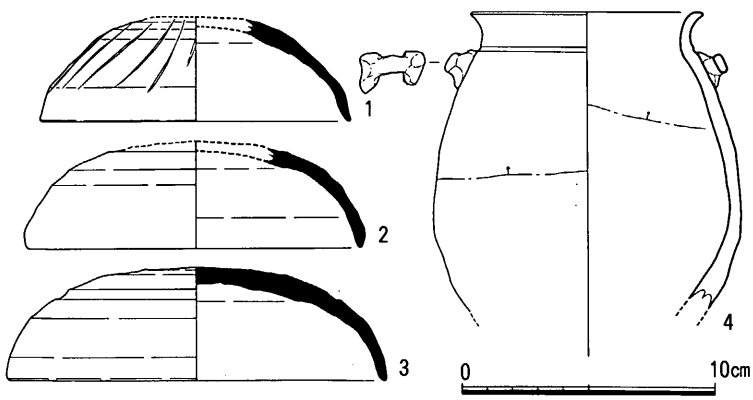


Fig. 36　御８　黒褐色土出土遺物実測図（１／３）

して、須恵器（蓋、甕）、土師器（甕ａ）等が出土している。

黒褐色土出土遺物

(Fig. 36)

この土層からは、後述する遺物の他に緑釉陶器(京都産)、縄目の叩き痕跡のある瓦、竈と考えられる土製品、製塩土器が出土している。

須恵器

蓋（１～３）　口径12.3～15.1cmを測り、いずれも口縁端部は丸く仕上げており、天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げている。また１の天井部外面には、観察可能箇所のみで六条の直線ヘラ描き文が縦方向に描かれている。

陶器

双耳壺（４）　口径9.2cmを測り、内外面ともに口縁部から体部上位まで、暗茶白色の濁った釉が掛けられ、外面には施釉の前に化粧土が塗布されている。素地は褐色の微粒子をわずかに混入しているが、きめの細かな素地特徴を有している。また横方向の耳が貼付されており、残存状況から双耳になるものと考えられる。

墨書土器（Fig. 37）

青灰色土および茶色砂質土から墨書された須恵器が出土している。また図示していないが、墨書された土師器坏と考えられる小破片が試掘調査の際出土している。なお今回の資料のみでは、遺跡の性格を限定するには至らない。

須恵器

蓋ｃ３（１）　推定口径14.2cm、器高1.4cm、つまみ径1.9cmを測り、極めて扁平な形状をとる。天井部外面は回転ヘラ切り後、丁寧な撫でにより仕上げ、ボタン状のつまみを貼付している。天井部内面に墨書がある。また口縁端部外面が暗黒灰色に変色している。茶色砂質土出土。「麿」と読むか。

坏ａ（２）　底部のみ残存する資料で、推定底径8.2cmを測る。底部は回転ヘラ切りにより処理され、底部外面中央部分に墨書されている。青灰色土出土。釈読不明。

坏ｄ（３）　推定底径9.5cmを測り、底部外面を丁寧な回転ヘラ削りによって仕上げている。底部外面に墨書されている。茶色砂質土出土。釈読不明。

4）小結

御笠団印出土地周辺遺跡にあたり、関連する遺構の存在が想定できることから、坂本公園建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施した。その結果、顕著な遺構の検出はなく、砂やシルトなど河川堆積を想定できる堆積層を確認し、各土層より各種遺物の出土をみた。遺物は、古墳時代後期から平安時代中期までを中心としており、新しいところでは近世までの遺物を出土している。出土状況が判然としないが、上層から下層に至るまで時期差を想定させ得る傾向にはないことから、今次調査で得られた成果の範囲内では、平安時代中期以降における自然崩壊に伴う堆積と考えられる。したがって、崩壊源である谷上位に今次調査にて出土した各時期の遺構が埋没している可能性が高く、今後の周辺地域の発掘調査に期するしかない。

なお特筆すべき遺物として、東海産と考えられる緑釉陶器・椀が出土しているが、整理途中の混乱で紛失する事態となり、詳細な報告ができないという残念な結果となった。したがって、本報告では出土していることを報告し、詳細については発見されしだい、機会を改めて報告したい。　また、墨書土器が3点出土している。いずれも墨痕は比較的明瞭に残存しており、肉眼での観察も可能である。これらの時期は、土器の型式より、いずれも8世紀後半～末と位置づけられる一群である。おそらく、谷上位の遺跡から流出し、ここに堆積したものであろう。中には「厨」とも読める墨書が含まれることから、付近の遺跡について性格づけするための参考資料となるとみられる。

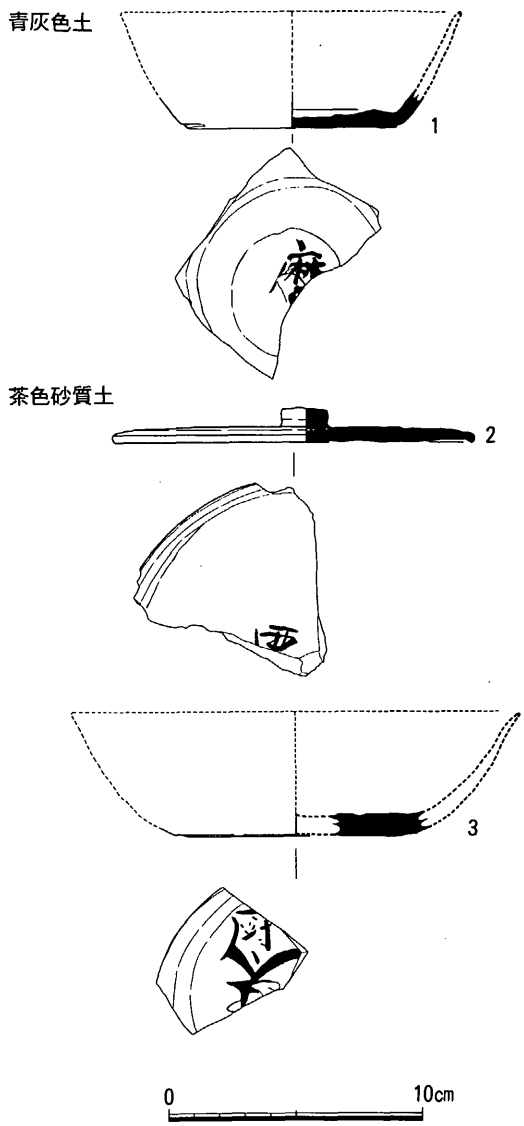


Fig. 37　御8　各層出土墨書土器実測図（1／3）

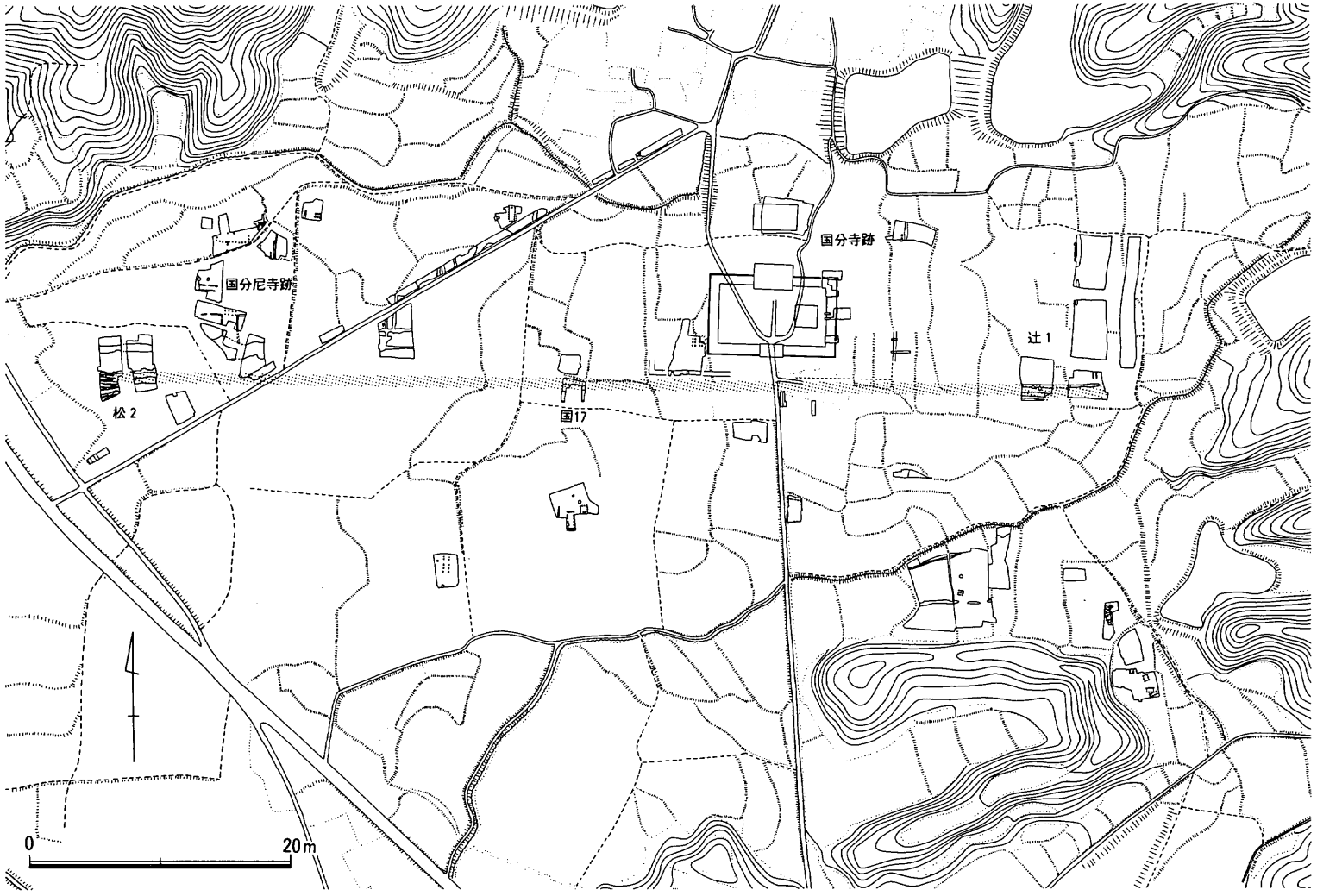


Fig. 38　関連遺跡配置図（1／5000）

Ⅳ. ま と め

辻遺跡では東西にのびる道路側溝と考えられる並行する二条の溝を検出した。概述のとおり東端は調査区内で終わっている可能性がある。西方向への延長を推定してみたい。

二条の溝を西に延長すると筑前国分寺跡第17次調査（以下「国17次」と略す、『筑前国分寺跡Ⅰ』（太宰府市の文化財第32集））、国分松本遺跡第２次調査（以下「松２次」と略す、「平成七年度　大宰府史跡調査研究指導委員会資料」）で、類似した遺構群を拾うことができる。

国17次では北側溝（国17SD030）南側溝（国17SD034）ともに平安時代前期に埋没したと考えられていて、溝心々で約10mの幅を持つ道路跡（国17SF050）が推定されている。なお、北側調査区と南側調査区は１m程の土手があり北側が高くなっている。このため北側と南側の調査区を連結して調査することができていない。

松２次では奈良時代の並行する東西溝を検出している。調査区南側に位置する松２SD080(北側)、松２SD070（南側）である。どちらも埋没過程で肩を破壊されたらしく溝幅は一定でない。また西にいくにつれて流路が多く存在し氾濫原状になっている。松２SD080の検出長は約40m、幅約１～２m、松２SD070は検出長約17m、幅約1.5～５mである。路面跡と考えられる幅は約４～５mになる。

これらの任意中点座標と距離ならびに振れの角度はTab.4に示した通りである。３地点ともほぼ同一の方向で直線上に乗ることがわかる。しかし詳細に見てみると国17SD030を北側溝と仮定すると、国17次地点で３°前後の屈曲を持つことになる。一方、国17SD030を南側溝とすれば20′前後の振れで接続する。この場合、国17次での北側溝は南北の調査区の間の土手の下に想定され、国分寺の南面築地のすぐ南を走ることになり、国分寺の南門基壇に突き当たることになるが、突き当たったところで一度北側溝がとぎれることが考えられる。国分寺の中軸線の振れをＮ－２°－Ｅとすると国17SD030を南側溝とした方が角度は近いことになる。また国分尼寺跡第11次調査では推定北側溝の位置から南は後世の段落ちで破壊されており検出不能であった。以上は計画道路が直線的なものであることを前提とし、各地点での振れの許容範囲がどの程度であるか不明であること、計測点数が３地点と少ないこと、実際のその結果が道路の設計上どれほどの誤差なのかなど、詰めきれない問題が多く残っている。側溝状の遺構だけでなく周辺の調査を検討すると、正方位を示す奈良時代の掘立柱建物や溝が確認され、国分寺・尼寺を中心にして大宰府条坊の北西に街区が形成されていた可能性は高いと考える。

一方、御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査（以下「御８次」と略す）地点は上述の街区を想定している地域から低い丘陵を隔てて南東に位置し、北からの谷が平地に出た部分にあたる。当該地の谷上位では御４・６・11次調査がおこなわれている。いずれも谷の縁に斜面を整地して張り付くように、７世紀末から平安時代にかけての遺構群が展開しており、掘立柱建物や焼土壙が検出されている。これらに連続して存在していた遺構群の遺物が崩壊して御８次調査地

tab. 4　関連遺構座標値一覧

遺構番号	計測位置	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
辻1SD010・170	WP	57,380.96	-45,407.28	N89° 54′ 53″ E
	EP	57,381.05	-45,346.91	
辻1SD190	WP	57,372.73	-45,406.93	N94° 45′ 49″ E
	EP	57,371.84	-45,396.25	
辻1SD180	WP	57,374.64	-45,404.25	N87° 52′ 58″ E
	EP	57,375.25	-45,387.75	
辻1SD202	NP	57,496.30	-45,361.46	N2° 31′ 51″ E
	SP	57,478.20	-45,362.26	
国17SD030	EP	57,382.85	-45,742.00	N88° 44′ 23″ E
	WP	57,382.52	-45,757.00	
国17SD034	EP	57,372.90	-45,743.00	
松2SD080	EP	57,399.75	-46,077.00	N90° 24′ 03″ E
	WP	57,400.00	-46,112.75	
松2SD070	EP	57,392.50	-46,069.50	N91° 03′ 39″ E
	WP	57,392.25	-46,083.00	

遺構番号	計測位置	遺構任意中点座標		方位角	距離(m)
		X座標	Y座標		
国17SD030	WP	57,382.52	-45,757.00		
辻1SD010・170	EP	57,381.05	-45,346.91	N90° 12′ 19″ E	410.09
国17SD030	EP	57,382.85	-45,742.00		
松2SD080	WP	57,400.00	-46,112.75	N92° 38′ 54″ E	371.15
辻1SD010・170	EP	57,381.05	-45,346.91		
松2SD080	WP	57,400.00	-46,112.75	N91° 25′ 03″ E	766.07
辻1SD180	EP	57,375.25	-45,387.75		
国17SD034	EP	57,372.90	-45,743.00	N89° 37′ 16″ E	355.26
国17SD034	EP	57,372.90	-45,743.00		
松2SD070	WP	57,392.25	-46,083.00	N93° 15′ 26″ E	340.55
辻1SD180	EP	57,375.25	-45,387.75		
松2SD070	WP	57,392.25	-46,083.00	N91° 24′ 03″ E	695.46
辻1SD180	EP	57,375.25	-45,387.75		
国17SD030	WP	57,382.52	-45,757.00	N91° 07′ 41″ E	369.32
国17SD030	EP	57,382.85	-45,742.00		
松2SD080	WP	57,400.00	-46,112.75	N92° 38′ 55″ E	371.15

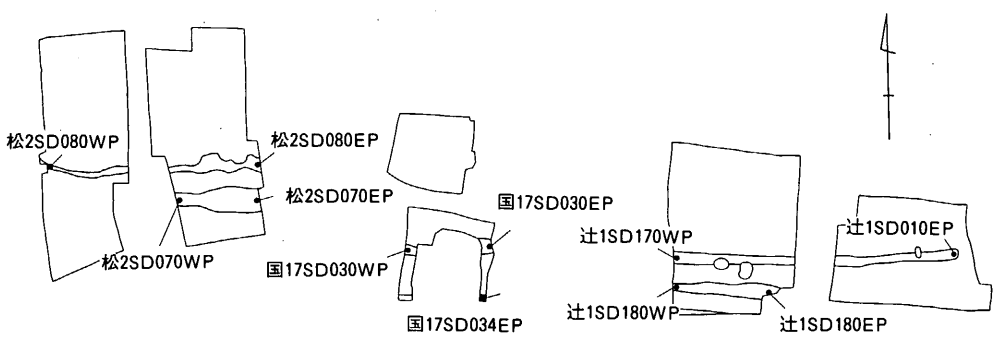


Fig. 39　関連遺構計測点模式図

に堆積したものと推定される。御笠団印出土地周辺のエリアでは建物などに規格性がみられず、地形に制約を受けているものとみられ、前述の国分寺・尼寺を中心にした街区には含まれないと推定される。

以上、国分寺周辺の地域の素描をおこなってみた。水城の東門を通る官道から分岐し、国分尼寺から南に出ている参道に接続し筑前国分寺の前面を通り、辻遺跡付近で丘陵に突き当たる道路が存在するであろうことが、おぼろげであるが判明してきた。これは国分寺に南北の参道がなく、国分尼寺には存在することを整合的に説明できることになる。またこれにともなう街区も周辺の遺構の状況から存在すると考えられる。

現状ではこれ以上の検討は困難であるが、今後の国分地区の調査によって明らかにされていくであろう。その際には大宰府条坊との関係も明瞭になってくると思う。今回は計画道路の存在と、それにともなう街区の存在を指摘しておくにとどまる。

なお、今回使用した報告書未刊行資料は概略として九州歴史資料館で毎年おこなわれている「大宰府史跡調査研究指導委員会」での資料として公表されている。

付　　編

辻遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　　中野　益男
㈱ズコーシャ総合科学研究所　　中野　寛子・長田　正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[1]、古代遺跡から出土した約２千年前のトウモロコシ種子[2]、約５千年前のハーゼルナッツ種子[3]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[4]。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している収容なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物・遺構に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて辻遺跡から出土した土壙の性格を解明しようとした。

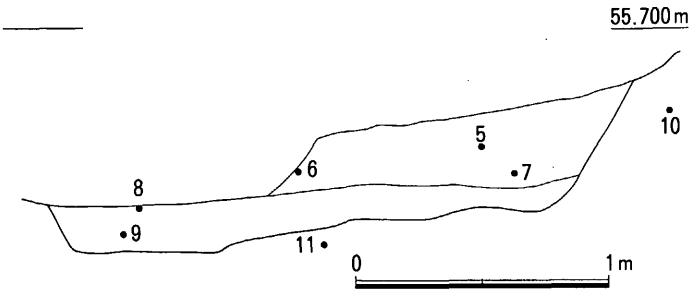


図１　S－15試料採取地点模式図

１．土壌試料

福岡県太宰府市に所在する辻遺跡から出土した土壙の土壌試料を分析した。遺構内外での試料採取地点を図１に示す。平

安時代（９世紀代）よりも新しいと推定されてはいるが、年代不明の土壙Ｓ－15（１SK015）から試料No.5～11を採取した。

２．残存脂肪の抽出

土壌試料43～486ｇに３倍量のクロロホルム－メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに２回繰り返して残存脂肪酸を抽出した。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表１に示す。抽出率は0.0012～0.0085％、平均0.0051％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壙、石器、土器などの試料の平均抽出率0.0010～0.0100％の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

表１　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(％)
5	S-15①	73.1	5.3	0.0072
6	S-15②	96.0	8.2	0.0085
7	S-15③	43.0	1.4	0.0033
8	S-15④	51.5	2.2	0.0043
9	S-15⑤	199.3	6.0	0.0030
10	S-15⑥	107.6	8.9	0.0083
11	S-15⑦	119.1	1.4	0.0012

３．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに５％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で２時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：１）またはヘキサン－エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した[5]。

残存脂肪の脂肪酸組成を図２に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：０）、ステアリン酸（C18：０）、オレイン酸（C18：１）、リノール酸（C18：２）、アラキジン酸（C20：０）、エイコサモノエン酸（C20：１）、ベヘン酸（C22：０）、エルシン酸（C22：１）、リグノセリン酸（C24：０）の９種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

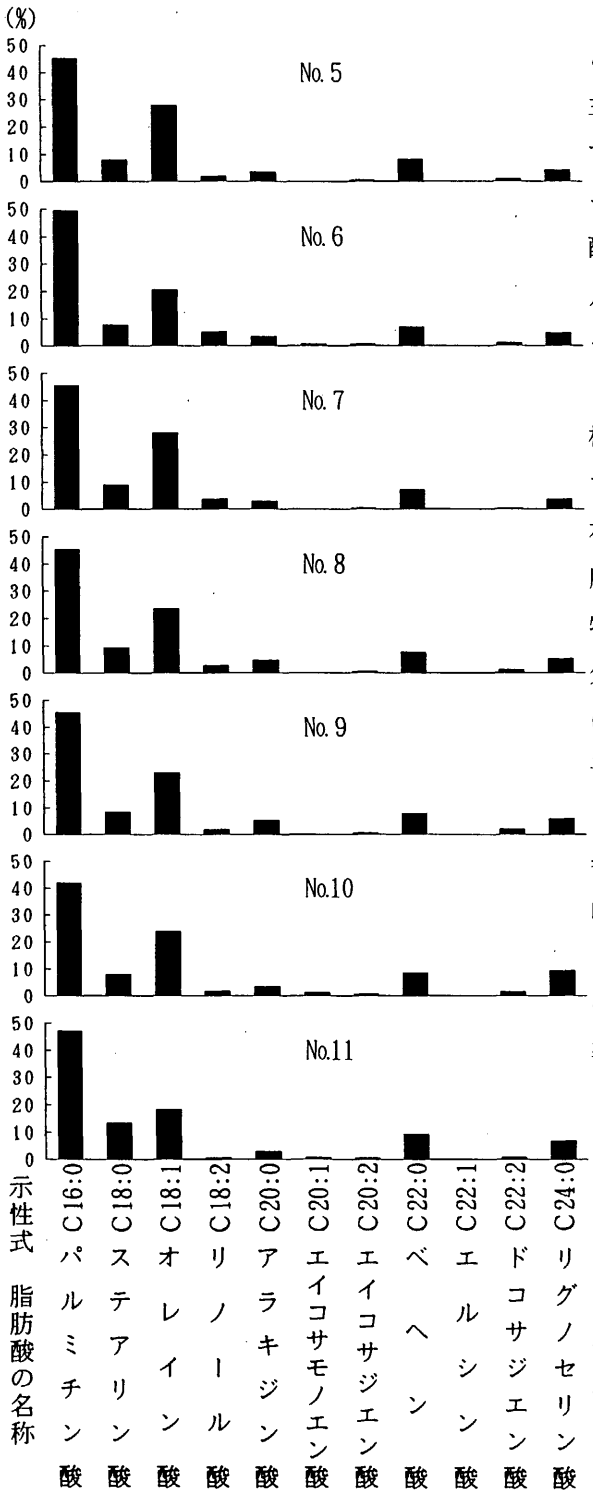


図2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

各資料中での脂肪酸組成を見てみると、炭素数18までの中級脂肪酸のうち主要な脂肪酸はパルミチン酸で、次いでオレイン酸、ステアリン酸の順であった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解しパルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率がすべての試料中に約14～21%分布していた。高級脂肪酸含有量だけで見ると、土壙の内外であまり差がなく、むしろ土壙外試料No.10・11の方が多めであった。

以上、辻遺跡試料中では、主要な脂肪酸はすべてパルミチン酸で、高級脂肪酸も多く含まれていることがわかった。

4．残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から6～21種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

試料中のステロール組成を見てみると、動物由来のコレステロールは試料No.6とNo.9に約4～6％、他のすべての試料中に約8～18%分布していた。特に土壙外試料No.11には約18%と、多めに分布していた。これは土壙底面確認面がさらに下部にあるか、動物脂肪が滲み出した可能性がある。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6％含まれている。

植物由来のシトステロールは試料No.10に約25%、他のすべての試料中に42～68%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%分布している。従って、試料中のシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中でよりも全般的に多めといえる。

クリ、クルミなどの堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは試料No.6とNo.7にカンペステロールが約14～19%、他のすべての試料中にカンペステロールが約5～9％、スチグマステロールが約3～11%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、カンペステロールは土壙内試料No.6とNo.7に多めといえる。

微生物由来のエルゴステロールは検出されないものもあったが、検出されるものには約0.5～1％分布していた。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロス

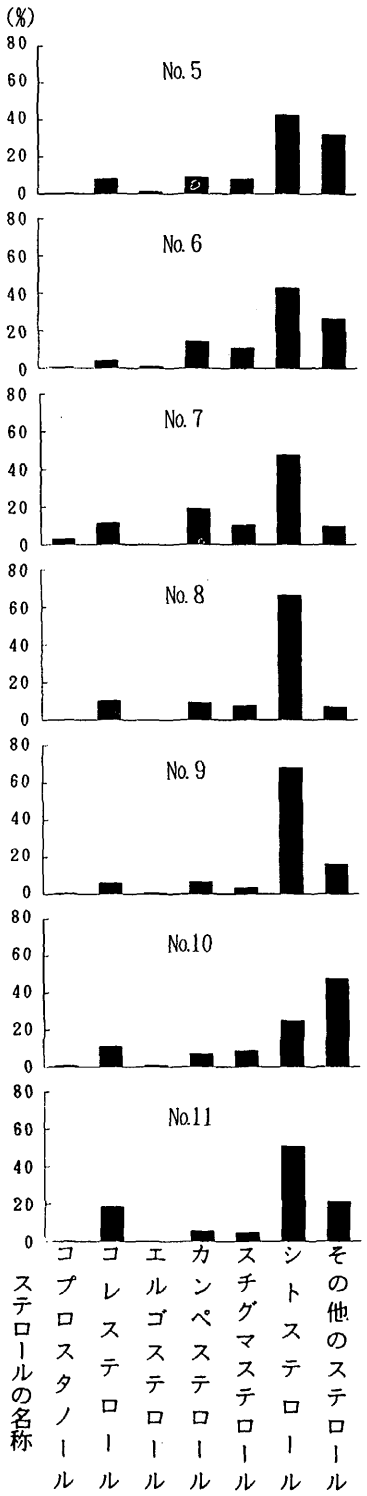


図3　試料中に残存する脂肪のステロール組成

タノールも検出されないものがあったが、検出されるものには約0.3～３％分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、１％程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある[6]。今回の分析ではコプロスタノール含有量が少ないために、コプロスタノールの分布割合から動物種を判定することはできなかったが、コプロスタノールが含まれているということは、試料採取地点付近には哺乳動物の腸や糞便由来の脂肪が残存していた可能性があることを示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上[7]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[8,9]。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表２に示す。コレステロールの含有量は全般的に多いが、コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料中で0.6以下であった。

表２　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
5	8.00	42.29	0.19
6	3.94	42.83	0.09
7	11.16	47.35	0.24
8	9.98	66.33	0.15
9	5.79	67.89	0.09
10	10.72	24.72	0.43
11	18.42	50.48	0.36

以上、試料中に含まれている動物性コレステロールと、コレステロールとシトステロールの分布比から、辻遺跡の土壌には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることがわかった。

５．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に同じ福岡県太宰府市内の遺跡で出土土壌を土壌墓と判定した大宰府条坊跡遺跡、前田遺跡および出土土壌を再葬墓と判定した石穴遺跡[10]、出土した焼土壌内で火葬が行われたと判定した宮ノ本遺跡第５次調査区[11]、出土した土壌を再葬墓と判定した宮ノ本遺跡第７次調査区[12]、出土土壌を再葬墓と判定した同じ福岡県諸田仮塚遺跡[13]、出土した配石遺構にヒト男性遺体が埋葬されており、遺構内での遺体配置状況を推測した鹿児島県西丸尾遺跡[14]、出土土壌を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡[15]、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡[16]、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡[17]、ヒトの骨油、イノシシ、ニホンジカのような現生動物試料など、各種遺跡試料の脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い資料を選び出し、再びクラスター分析により

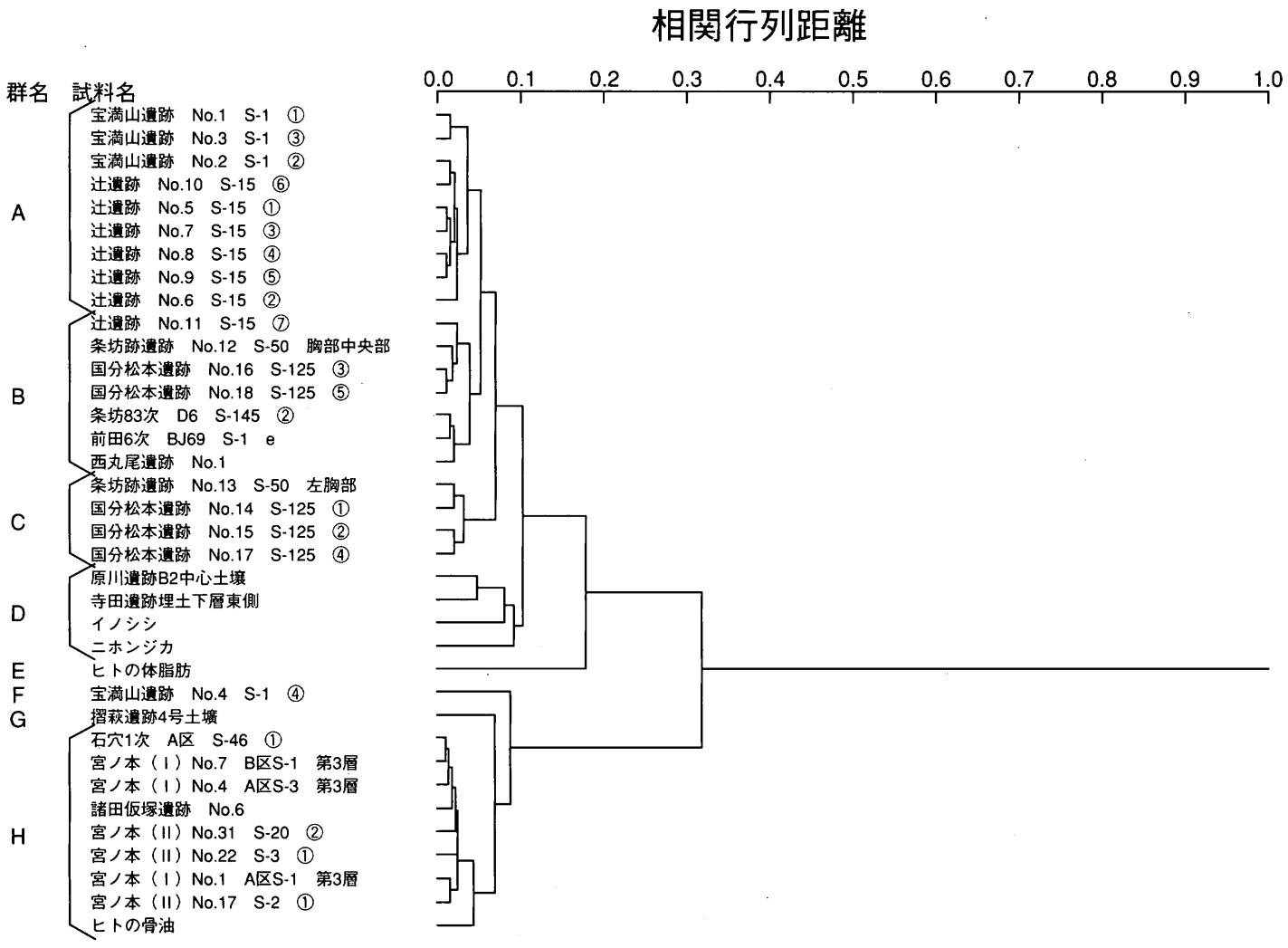


図4 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

パターン間距離にして表したのが図４である。

図からわかるように、宝満山遺跡の試料No.１～No.３と辻遺跡の試料No.11を除くすべての試料は相関行列距離0.05以内でＡ群を形成し、非常によく類似していた。辻遺跡の試料No.11、条坊跡遺跡のNo.12、国分松本遺跡のNo.16、No.18と対照試料である条坊跡遺跡83次、前田

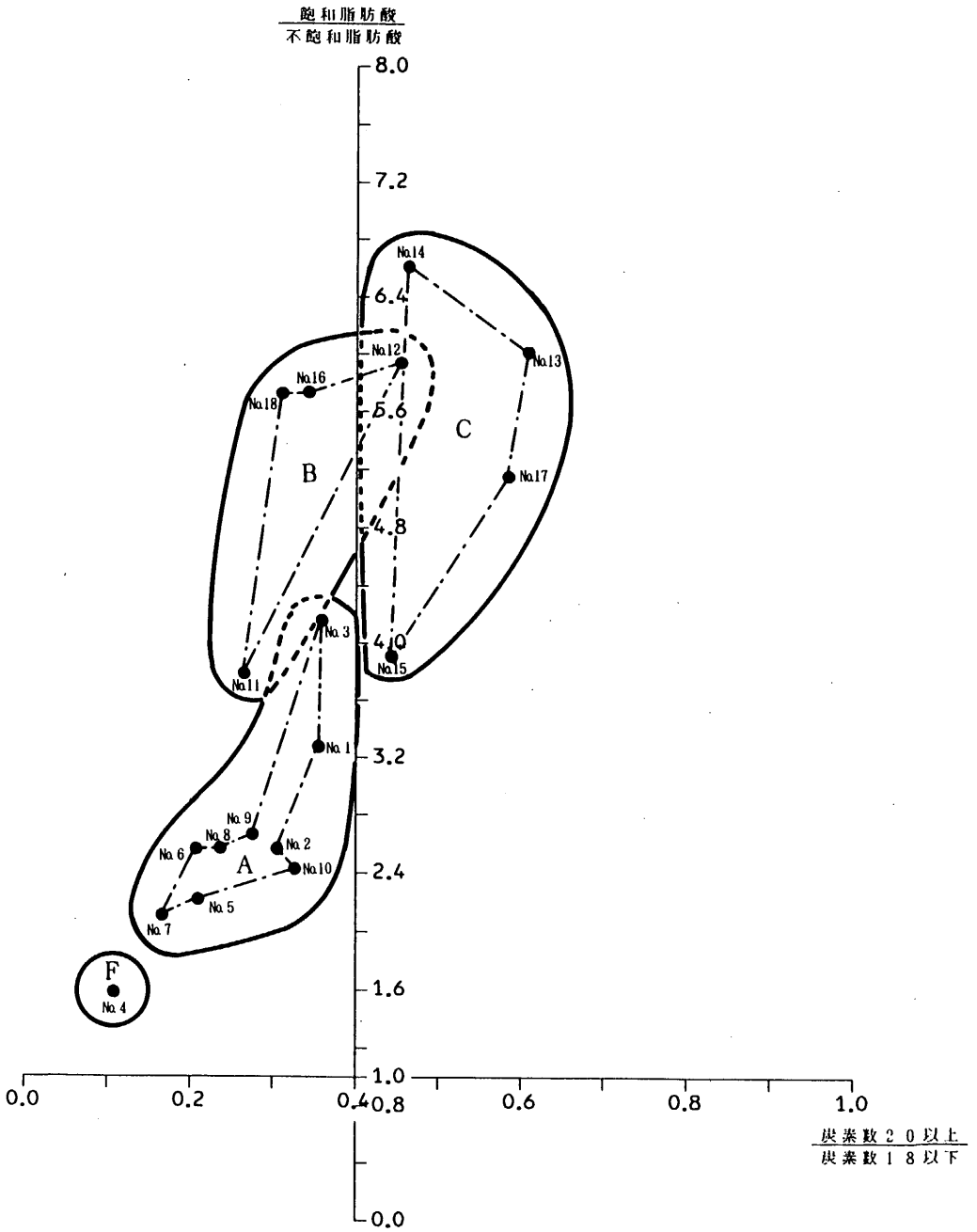


図５　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

遺跡、西丸尾遺跡の試料は相関行列距離0.05以内でB群を形成し、非常によく類似していた。条坊跡遺跡の試料No.13、国分松本遺跡のNo.14、No.15、No.17は相関行列距離0.05以内でC群を形成し、非常によく類似していた。宝満山遺跡の試料No.4は単独でF群を形成した。対照試料のうちヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やイノシシ、ニホンジカのような動物試料、ヒトの体脂肪試料はD群、E群を、ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油試料はG群、H群を形成した。これらの群のうちA、B、C群は相関行列距離0.1以内の所にあり、互いによく類似しており、このA、B、C群はD、E群とも相関行列距離で0.2以内の所にあり類似していた。また、F、G、H群は相関行列距離0.1以内の所にあり互いによく類似していた。

以上、辻遺跡の試料に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料、イノシシやニホンジカのような動物試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。出土状況を考え合わすと動物脂肪はヒトの体脂肪と推測される。

6．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。辻遺跡の試料が第1象限から第2象限にかけて、主として第2象限内に広く分布した。これらの分布位置は試料中に残存している脂肪が主として高等動物の体脂肪や骨油、また血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆している。

7．総括

辻遺跡から出土した土壙の性格を判定するために、土壙内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で、高級脂肪酸も多く含まれていることがわかった。

残存する脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、試料中に残存する脂肪は、すべてヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料、イノシシ、ニホンジカのような動物試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。種特異性

相関からは、試料が第１象限から第２象限にかけて、主として第２象限内に広く分布し、試料中に残存している脂肪が主として高等動物の体脂肪や骨油、また血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、各遺跡の試料中に含まれている動物性コレステロールと、コレステロールとシトステロールの分布比から、辻遺跡の土壙には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることがわかった。

以上の成績から、辻遺跡の土壙内に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬した場合の試料やヒトの体脂肪試料と類似することがわかった。

参考文献

(1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle：「Food identification of samples from archaeological sites」，『Archaeo. Physika.』，10巻，1979，pp260.

(2) D.A.Priestley,W.C.Galinat and A.C.Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」，『Nature』，292巻，1981，pp146.

(3) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle：「Analyse fruhgeschichtlicher Gefassinhalte」，『Naturwissenschaften』，70巻，1983，pp33.

(4) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」，『歴史公論』，第10巻(6)，1984，pp124.

(5) M.Nakano and W.Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」，『Hoppe－Seyler's Z.Physiol. Chem.』，358巻，1977，pp1439.

(6) 中野益男：「残留脂肪酸による古代復元」，『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』，田中　琢，佐原　眞編，クバプロ，1995，pp148.

(7) 中野益男，伊賀　啓，根岸　孝，安本教傳，畑　宏明，矢吹俊男，佐原　眞，田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」，『脂質生化学研究』，第26巻，1984，pp40.

(8) 中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」，『真脇遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』，能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団，1986，pp401.

(9) 中野益男，根岸　孝，長田正宏，福島道広，中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」，『ヘロカルウス遺跡』，北海道文化財研究所調査報告書，第３集，1987，pp191.

(10) 中野寛子，明瀬雅子，長田正宏，中野益男：「前田遺跡抽出試料残存脂肪分析」，『未発表』，福岡県太宰府市教育委員会.

(11) 中野寛子，明瀬雅子，長田正宏，中野益男：「宮ノ本遺跡抽出試料残存脂肪分析（第１次報告)」，『未発表』，福岡県太宰府市教育委員会.

(12) 中野寛子，明瀬雅子，長田正宏，中野益男：「宮ノ本遺跡抽出試料残存脂肪分析（第２次報告)」，『未発表』，福岡県太宰府市教育委員会.

(13) 中野寛子，明瀬雅子，長田正宏，中野益男：「諸田仮塚遺跡の土坑に残存する脂肪の分析」，『未発表』，福岡県教育庁.

(14) 中野益男，中野寛子，明瀬雅子，長田正宏：「西丸尾遺跡の配石遺構に残存する脂肪の分析」，『未発表』，鹿児島県教育委員会.

(15) 中野益男，中野寛子，福島道広，長田正宏：「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」，『未発表』，兵庫県芦屋市教育委員会.

(16) 中野益男，幅口　剛，福島道広，中野寛子，長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」，『原

川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』，第17集，（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所，1988， pp79.
(17) 中野益男，福島道広，中野寛子，長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」，『未発表』，宮城県教育委員会.

辻遺跡第１次調査の種実・昆虫同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．目的

14～15世紀のものとみられる遺構（Ｓ－190）から検出された種実と昆虫の同定を行い、当時の環境や植物利用に関する情報を得る。

２．種実同定

１）試料

試料は、Ｓ－190の灰色砂層から検出された種実遺体２ケース（同一試料）である。

２）方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

３）結果

同定の結果を以下に示すように３種類に同定された。形態的特徴について示す。

・センダン（*Melia Azedarach* L.var.*subtripinnata* Miquel）センダン科センダン属

核が29個検出された。褐色で堅い。側面観は楕円形で、上面観は星型。大きさは1.2cm程度。縦方向に数本の陵が見られる。

・ウメ（*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zicc.）バラ科サクラ属

核が３個検出された。褐色、核の形は楕円形で扁平である。大きさは1.5cm程度。丸く大きな臍点がありへこむ。側面の一方には縫合線が発達する。表面は不規則にくぼみが配列する。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）バラ科サクラ属

核が２個検出された。褐色～黒褐色で大きさは３cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

４）考察

検出された種実遺体のうち、ウメとモモは、食用や観賞用として栽培される渡来種である。

一方、センダンは山野に自生するが、庭木として植栽されることも多く、薬用や仏具(数珠)としても利用される種類である。これまでの事例をみると、中世末の集落である草戸千軒遺跡でも多くの種類が出土する（パリノ・サーヴェイ株式会社,1995ａ，ｂ)。これらの種類は草戸千軒をはじめとする多数の遺跡で検出されていることから、広く利用されていたことが伺われる。

3．昆虫同定

1）試料

試料は、Ｓ－190の灰色砂層から検出された昆虫遺体１ケースである。

2）方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類の同定・計数を行う。

3）結果

同定の結果以下に示す。試料には甲虫類の上翅１点と前胸背板１点があった。これらはサクラコガネ近似種（cf. *Anomala daimiana* Harold）に同定された。

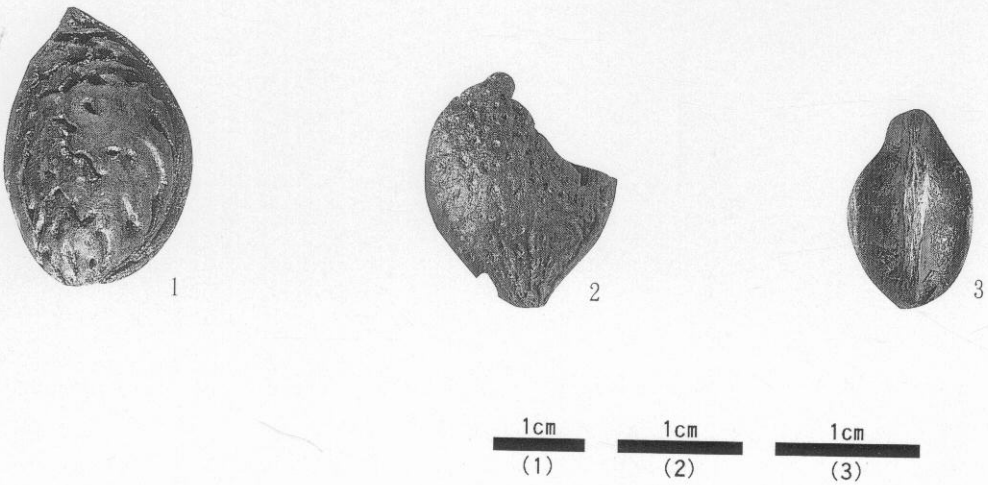
4）考察

サクラコガネ近似種は、明るい樹林や草地・畑地にみられる種類であり、当時も周囲に生息していたものとみられる。

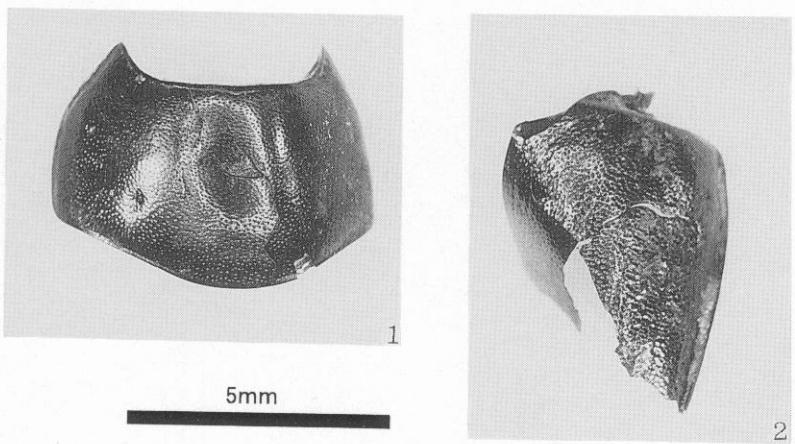
〈引用文献〉

パリノ・サーヴェイ株式会社（1995ａ）草戸千軒町遺跡第36次調査出土の植物種実同定報告.「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ　南部地域北半部の調査」, p.253－278, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1995ｂ）草戸千軒町遺跡第37次～45次・第48次調査出土の植物種実同定報告.「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ　南部地域南半部の調査」, p.201－228, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編.



1. モモ（S-190 灰砂）
2. ウメ（S-190 灰砂）
3. センダン（S-190 灰砂）



1．サクラコガネ近似種（前胸背板）
2．サクラコガネ近似種（右上翅）

図6　辻遺跡第1次調査種実・昆虫

辻遺跡出土資料の螢光X線分析

1．目的

報告にあるように辻遺跡第1次調査からは、多種多様な遺物が出土している。その中で2、3の遺物に肉眼観察では判断し難い付着物があった。そこで化学成分による判断が可能かどうかを検討するために螢光X線分析装置を使用して化学成分の同定を行った。分析対象とした試料は以下の出土資料である。

a．4区　暗灰褐色土　灰釉陶器　小椀見込み部に付着した赤色顔料の成分。(Fig. 31－6)

b．2区　表土　土製品の付着物の成分。

c．4区　S－10黄茶色土　坩堝内部の付着物の成分。

d．4区　S－202　坩堝内部の付着物の成分。(Fig. 21－29)

以上4点を分析に供した。

2．方法

分析対象箇所が小さいことによって非破壊分析を前提としなければならないこと、定量分析を実施するための適正な標準試料の入手ができていないこと等から、今回の分析は定性を目的とした[1)]。したがって分析に先立つ処理は、分析箇所の器体表面を無水アルコール（エチル・アルコール）を用いた表面洗浄のみにとどめた。分析装置は微小部エネルギー分散型螢光X線分析装置（テクノス社製微小部螢光X線分析装置TREX650）を用いた。分析条件は以下の通り。

【分析条件】

・X線管電圧：40kV　・X線管電流：3.00mA　・コリメーター：0.30㎜　・フィルター：なし

・測定時間：300sec　・分析環境：真空

分析箇所は、各試料ごとに分析目的に適した箇所を設定した。

3．結果

分析の結果を各試料ごとに記述する。

a．灰釉陶器　小椀見込み部に付着した赤色顔料の成分（図7）。

灰釉陶器　椀類の見込みに赤色顔料が付着した例は、大宰府条坊跡第87次調査SD018黒茶色土出土資料（太宰府市教育委員会、1996）をはじめとして、太宰府市域にて散見できるが、成分分析に供した例はなく赤色顔料の付着としか判断できなかった。今回の分析では、見込み全体に赤色顔料が付着しており、かつ研磨した痕跡が見受けられることから、顔料を摺りつぶす道具として使用されたものと考えられる。この赤色顔料が濃く付着した部分2ヶ所と、素地土の成分とを比較する目的で体部外面を1ヶ所、測定点に選んだ。

その結果、比較点として分析した素地土の組成に比して、赤色顔料部分の化学組成は鉄のenergy－peakが高く、結果としてこの赤色顔料は鉄を主成分とするものと考えられ、弁柄である可能性が高い。

b．2区　表土　土製品の付着物の成分（図7）。

坩堝内面の付着物は、鉄・銅・鉛・カルシュウムが検出された。4種の元素の中で、鉄・カルシュウムについては胎土中にも含まれる成分であるが、胎土面の分析によって得られたenergy－peakより顕著に高い点がある。ただしenergy－peakがどれ程の量に結びつくのかは、今回の分析では定かではないものの、他の分析点と比較してみると明らかに異なる状況が看取できることから、鉄・銅・鉛に関しては、溶解物質として間違いないであろう。またカルシュウムに関しても溶融剤としての添加物の組成が検出されたものと考えられる[2)]。

c．4区　S－10黄茶色土　坩堝内部の付着物の成分（図7）。

坩堝内面に付着している物質について、3点の分析点を設定して定性分析を行った。その結果、鉛・錫・銅を主成分とした金属であることがわかった。おのおのの金属の分布は一様ではなく、表面が剥離した箇所から錫の検出が見受けられる。原因については、金属の晶出過程を物語るのか、坩堝最終使用以前に錫を溶かしたものなのかの判断は、今回の分析だけではつき難い。詳細な溶解金属の種別と工程に関しては、遺物断面の定性分析等を経なければならず、今回は推定にとどめておく。

d．4区　S－202　坩堝内部の付着物の成分（図7）。

坩堝内面の付着物は、鉄・銅が顕著に検出され、ほかの金属は検出されなかった。したがって鉄については坩堝本体の鉄のenergy量に比して、多いことから鉄を溶解したものと考えて大過ないであろう。また銅についても在地の土器の胎土中には含まれていない成分であることから、溶解物質として誤りないものと考える。

註

1）現在のところ、以下の試料に関しての定量分析が可能となっている。

・地質構成物質（塩基性岩～酸性岩）および地質構成物質によって製作された遺物。

・ガラス製品（鉛－バリュウムガラス）

ただし、分析装置の特性から非破壊での試料全化学組成の定量分析は不可能である。

2）添加物に関しては、以下の報告に詳しい。また民俗例を記載した文献も参考になる。

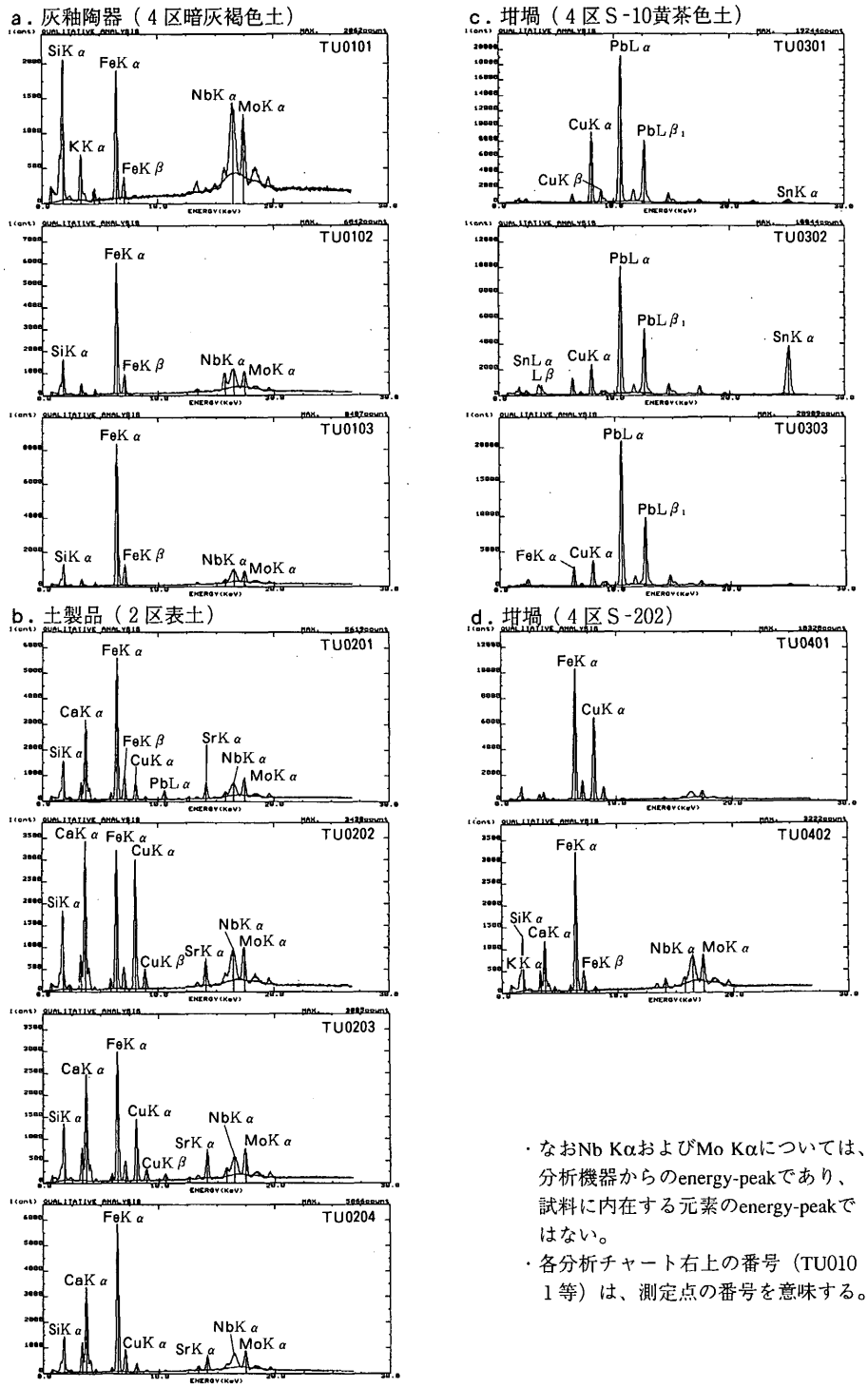
高塚秀治・桂敬（1988）「鉄滓の成分分析からみたわが国古代の製鉄技術」『考古学と自然科学　第20号』pp. 65－79

中山光夫（1991）「豊前小倉・室町遺跡の鋳鉄溶解炉について」『鋳造遺跡研究会資料』pp. 23－26

枚方市教育委員会・㈶枚方市文化財研究調査会（1990）『枚方の鋳物師（一）』この文献のp. 53に民俗例の記載がある。

引用文献

太宰府市教育委員会（1996）『大宰府条坊跡　Ⅸ』



・なおNb KαおよびMo Kαについては、分析機器からのenergy-peakであり、試料に内在する元素のenergy-peakではない。

・各分析チャート右上の番号（TU0101等）は、測定点の番号を意味する。

図８　螢光Ｘ線分析による元素のenergy－peak

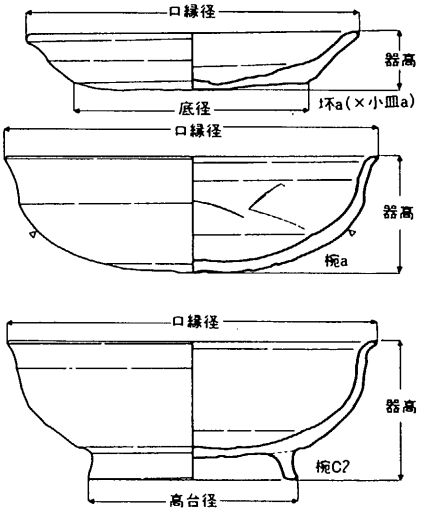
別　　表

凡　例

1）検出遺構一覧
・地区番号はグリット南東部の番号によって示される。
・遺構の先後関係は、古→新によって示す。
・本報告書記載の遺構のみ、遺構性格記号を付与した番号を記載している。

2）出土遺物一覧
・原資料を記載するという意図から、遺構性格を加味した記号を用いなかった。対照表として検出遺構一覧を見ていただきたい。
・器種記載内容において、「A×B」の記載については、AないしBに分類できる可能性があり、判断が難しいという意味を持つ。
・瓦の項目において、()内記載は叩き痕跡の状況を表している。
・数字記載は、以下のように理解される。
3 ＝3個体　③＝同一個体3片（1個体）　（3）＝別個体3片
ただし、厳密な定量作業に基づく数値ではない。

3）土器計測表
・計測表中における各項目は以下の要領で理解できる。
A：見込み部のナデの有無
B：底部における板状圧痕の有無
・各計測位置は下図に示す位置にておこなっている。
・計測値の表現として、「□+」の記載は、残存する箇所の計測値を示す。
・A・B項目の記載記号は以下のように理解される。
○：有る　　×：無い
－：観察箇所が有るにも係わらず、器面磨耗等によって有無の確認が困難なもの。
未記載：観察箇所が残存していないもの。



(椀aなど底部の丸いものについては、底部屈曲の看取できる箇所(△印)での計測値を示す)

辻遺跡第1次調査遺構番号台帳

S番号	遺構番号	種別		地区
1		撹乱　S－10からの混入多い	現代	AE19
2	1SB005h	ピット　2～8で掘立柱建物を構成	奈良	AI21
3	1SB005g	ピット	奈良	AH21
4	1SB005f	ピット	奈良	AH21
5	1SB005e	ピット	奈良	AG21
5a	1SB005a	ピット	奈良	AI21
6	1SB005b	ピット	奈良	AH21
7	1SB005c	ピット	奈良	AH21
8	1SB005d	ピット	奈良	AG21
9		土壙	奈良	AF19
10	1SD010	溝　SD170と同一遺構　SD180と対になると考えられる	8～9c前半	AFライン
11		ピット		AG23
12		ピット群	古代	AF23
13		ピット群	古代	AE22
14		土壙　1SD010→S－14	古代	AF24
15	1ST015	墓（石敷き土壙）　S－27→1SD010→1ST015	13c	AF23
16		土壙		AF24
17		ピット		AF23
18		ピット		AF23
19		ピット		AC19
20		ピット群	古代	AE28
21		ピット		AC19
22		ピット	古代	AB20
23		凹み	奈良	AB21
24		ピット		AB22
25		凹み	平安	AC18
26		ピット		AB22
27		凹み		AF23
28	1SX028	土壙	14c	AC23
29		凹み	古代	AE22
30		凹み	古代	AB18
31		ピット群	古代	AC23
32		ピット	古代	AB23
33		ピット	古代	AC26
34		ピット群	中世	AE26
35		ピット		AB19
36		ピット	中世	AE25
37		ピット	古代	AF25
38		ピット群		AF25
39		ピット群		AF26
40		土壙　焼土あり	古代	AB18
41		ピット		AF26
42		土壙	中世	AF26
43		ピット群		AF26

44		ピット	中世	AH26
45	1SX045	溜まり　1SX045→1SD010		AE28
46		凹み	古代	AC27
47		凹み	平安	AC28
48		ピット群		AD28
49		ピット群	平安	AD28
50	1SK050	土壙　焼土あり	奈良？	AB19
51		ピット群		AD27
52		ピット群	平安	AE28
53		ピット群	平安	AE28
54		撹乱		AE27
55	1SX055	赤色系粘土の整地、もしくは貼床。SX060と同一遺構の可能性大。	奈良？	AC19
56		ピット群	平安	AE27
57		ピット群		AC18
58		ピット		AC18
59		ピット		AB18
60	1SX060	小規模な整地？	奈良	AB19
61		ピット	平安	AC20
62		凹み	平安	AF26
63		ピット群	平安	AE27
64		ピット	平安	AE25
65		ピット	古代	AC19
66	1SX066	ピット群	古代	AF27
67		ピット群	12c中	AF27
68		ピット群	平安	AG27
69		凹み	古代	AF28
70	1SX070	たまり	奈良	AC19
71		欠番		
72		ピット		AE28
73		凹み	平安	AE23
74		ピット	平安	AF23
75		欠番		
76		凹み		AF23
77		凹み	平安	AD21
78		ピット		AC22
79		ピット		AD23
80		欠番		
81		ピット	奈良	AB23
82		ピット群	奈良	AB21
83		ピット群		AB20
84		ピット		AB20
85		欠番		
86		ピット群	奈良	AB19
87		ピット群	奈良	AB19
88		ピット群	奈良	AE28
89～100		欠番		
101		ピット	奈良	AK40

102		ピット	奈良	AI40
103		ピット群	平安	AI40
104		ピット	平安	AI40
105	1SX105	土壙	X期	AH40
106		ピット群	平安	AI40
107		ピット		AH40
108		ピット	平安	AH40
109		ピット群	平安	AH40
110	1SX110	土壙	VIII期？	AI39
111		ピット群	平安	AI39
112		ピット	平安	AG40
113		ピット		AI39
114		ピット	平安	AH38
115	1SE115	井戸　青灰色粘土→暗茶色粘土→明茶色土	IX期	AI33
116		ピット群		AI38
117		ピット	平安	AH39
118		ピット		AH39
119		ピット群	平安	AH38
120	1SX120	長方形土壙	奈良？	AG34
121		ピット群	平安	AH38
122		ピット群	平安	AG38
123		ピット群	平安	AG38
124		ピット		AG38
125	1SX125	土壙	平安	AG37
126		ピット群		AG38
127		ピット		AG33
128		ピット群	平安	AF33
129		ピット群	奈良	AG33
130	1SB130	掘立柱建物　実測遺物なし	平安	AG35
131		ピット		AF34
132		ピット		AF34
133		ピット	平安	AF34
134		ピット群	平安	AH40
135		欠番		
136		凹み	平安	AH38
137		ピット	平安	AG37
138		ピット	平安	AH37
139		ピット群		AH37
140		欠番		
141		ピット群	平安	AH37
142		ピット群	平安	AH37
143		ピット	平安	AI36
144		ピット		AG34
145		欠番		
146		ピット		AG34
147		撹乱	現代	AG34
148		ピット		AG34

149		ピット		AH34
150		欠番		
151		ピット群	平安	AH38
152	1SX152	土壙		AH37
153		ピット	平安後期	AG36
154		ピット		AG36
155		欠番		
156		ピット	中世	AG36
157		ピット群	古代	AG35
158		ピット群	古代	AF35
159		ピット群	古代	AG35
160		欠番		
161		ピット		AH35
162		ピット群	平安	AF40
163		土壙	平安	AF40
164		土壙	古代	AF39
165		土壙	平安	AF40
166		ピット群		AF39
167		土壙	奈良	AF40
168		ピット		AF39
169		土壙		AF40
170	1SD170	溝　SD010と同一遺構　SD180と対になると考えられる	9c前半	AFライン
171		ピット	平安	AF38
172		ピット群	古代	AF38
173	1SX173	不整形の土壙	平安	AF38
174		撹乱	現代	AF38
175	1SX175	撹乱	現代	AE38
176		ピット	平安	AF38
177		ピット	9c後半	AF38
178		ピット	古代	AF37
179		ピット群		AF37
180	1SD180	溝	9c	ADライン
181	1SX181	土壙	6c	AE38
182		ピット群	平安	AF35
183		ピット		AD35
184		欠番		
185	1SE185	井戸	平安	AI38
186～189		欠番		
190	1SD190	溝	14c	ACライン
191～194		欠番		
195	1SE195	井戸	平安	AE37
196～199		欠番		
200	1SE200	井戸	平安	AE36
201	1SX201	土壙	XIII期か	4区
202	1SD202	溝	XIII～XIV期	4区
203		試掘トレンチ		4区
204		撹乱		4区

205		欠番		
206		撹乱		4区
207		撹乱		4区
208		凹み	平安	4区
209·210		欠番		
211		凹み	平安	5区北
212	1SX212	凹み	古代	5区北
213		撹乱		5区北
214		撹乱		5区北
215		欠番		
216		凹み	古代	5区北
217		土壙	古代	5区北
218		ピット	古代	5区北
219		ピット		5区北
220		欠番		
221		ピット	古代	5区北
222～229		欠番		
230	1SD230	東西溝	平安	BBライン
231		凹み	平安	BA21
232		ピット	古代	BB12
233		凹み	古代	AY11
234		ピット		AY11
235		欠番		
236		ピット		AX13
237		土壙	古代	AR12
238		土壙	古代	AR14
239		欠番		
240		土壙	古代	AP26
241		ピット	13c	AO27
242		ピット群	12c後半	AO27
243		ピット	古代	AO27
244		ピット群	12c後半	AO27
245	1SX245	長方形の土壙	11c後半	AO25
246		ピット	平安後期	AN27
247		凹み	古代	AN27
248		ピット群	平安後期	AN27
249		ピット群	平安後期	AN27
250		撹乱		AR22
251		ピット	13c	AN26
252		ピット群		AO26
253		ピット		AN27
254		ピット群	古代	AN26
255		ピット		AU27
256		ピット群		AN26
257		ピット群		AM26
258		ピット群	12c～	AM25
259		ピット	中世	AO26

260	1SB260	掘立柱建物　a～g	古代	AV19
261		ピット群	12c～	AO26
262		ピット群	古代	AO25
263		ピット群		AN25
264		ピット		AO24
265		凹み		AV27
266		ピット		AM23
267		ピット	古代	AW23
268		凹み		AO22
269		ピット		AM22
270		溝	11c～	BA26
271		ピット群		AM27
272		ピット群		AP27
273		ピット群		AP26
274		ピット		AP25
275		流路	11c～	AX20
276		ピット群		AP24
277		ピット群	古代	AP23
278		ピット群		AP22
279		ピット群	平安	AP22
280		欠番		
281		凹み		AM21
282		ピット		AM20
283		土壙	古代	AL19
284		凹み		AM19
285		欠番		
286		土壙	古代	AM19
287		土壙		AM19
288		凹み		AO19
289		ピット		AP19
290		欠番		
291		ピット群		AV26
292		ピット群		AV26
293		ピット		AV21
表土		表土		
試掘トレンチ		表土		
排土		表土		
Z		表土		
茶褐土		包含層		
暗灰褐土		包含層		
明黄褐土		包含層		

辻遺跡第１次調査出土遺物一覧

S－1

須恵器	壺、坏c、蓋3、皿a
土師器	坏a、甕、椀c
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－2

土師器	破片

S－3

土師器	破片

S－4

須恵器	坏

S－5

須恵器	破片
土師器	破片

S－5b　柱痕

須恵器	坏c
土師器	破片

S－5b　裏込

土師器	破片

S－5e　明茶灰土

土師器	破片

S－5g　柱痕

土師器	破片

S－5g　裏込

土師器	破片

S－6

土師器	破片
黒色土器A	破片

S－7

土師器	破片

S－8

土師器	破片

S－9

須恵器	壺、甕、蓋３、蓋c
土師器	甕、椀c
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－10

須恵器	壺b、甕、蓋1、蓋3、蓋c、坏a、坏c、皿a、高坏
土師器	把手、坏a、坏a（イト？）、坏c、坏d、高坏、壺、甕 小皿b（イト）、椀c、蓋c
	焼塩壺
土師質土器	すり鉢
須恵質土器	甕？
灰釉陶器？	破片
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、すり消し）、丸瓦（縄目叩）
石製品	軽石、砥石×すり皿
土製品	ふいご羽口、瓦玉？
金属製品	不明鉄製品、銅片

S－10　黄茶色土

須恵器	甕、蓋、坏c
土師器	把手、坏a、小壺、甕、椀c、蓋c
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩）、軒丸瓦（破片）
石製品	鏃
土製品	坩堝×とりべ
金属製品	鉱滓

S－10　暗茶褐色土

須恵器	甕、蓋3、高坏
土師器	把手、坏a、椀c、かまど、坏d
陶器	水柱×壺？（広東産？）
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩）、軒平瓦（破片）

S－10　灰色土

須恵器	甕、蓋3、坏a
土師器	甕、坏a、椀c、高坏
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（破片）
土製品	立方体

S－11

瓦類	破片

S－12

須恵器	甕
土師器	破片

S－13

須恵器	破片
土師器	破片

S－14

須恵器	壺、甕、蓋1、坏a
土師器	破片

S－15

須恵器	甕、壺
土師器	破片
陶器	壺IV?
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（破片）、軒丸瓦
石製品	平玉石

S－15　暗茶褐色土

須恵器	坏c
土師器	坏a
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－15 明茶褐色土

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	平瓦（破片）

S－16

土師器	破片

S－18

須恵器	破片

S－19

土師器	破片

S－20

須恵器	甕、壺
土師器	椀c×坏c
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦（斜格子叩）

S－21

瓦類	平瓦（破片）

S－22

土師器	破片
瓦類	平瓦（破片）

S－23

須恵器	甕、蓋3
土師器	破片
瓦器	丸瓦（破片）

S－24

土師器	破片

S－25

須恵器	甕、壺
土師器	椀c
	製塩土器
瓦類	平瓦（縄目叩）
石製品	安山岩

S－26

須恵器	甕
土師器	破片

S－27

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	破片

S－28

須恵器	甕、蓋c
土師器	坏（イト）
須恵質土器	破片
青磁	高麗×瀬戸；鉢×碗
白磁	椀；破片
瓦類	丸瓦（縄目叩）
石製品	砥石

S－29

須恵器	壺、坏
土師器	破片
瓦類	破片

S－30

須恵器	甕、壺
土師器	甕
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－31

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片

S－32

須恵器	甕、蓋
土師器	甕
瓦類	破片

S－33

須恵器	破片
土師器	破片

S－34

須恵器	破片
土師器	破片（イトあり）

S－35

瓦類	破片

S－36

須恵器	破片
土師器	破片（イト）
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－37

須恵器	甕、蓋c
土師器	破片（イト）
瓦類	軒平瓦

S－38

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	平瓦（破片）

S－39

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	破片

S－40

須恵器	坏
土師器	甕
	焼塩壺？

S－41

土師器	坏a（イト？）

S－42

須恵器	破片
土師器	坏a（イト）
瓦類	破片

S－43

須恵器	坏
土師器	破片

S－44

土師器	坏（イト）

S－45

須恵器	蓋3
土師器	坏a（イト？）
石製品	鏃

S－46

須恵器	坏c

S－47

須恵器	甕、蓋c、蓋3
土師器	小皿×坏
瓦類	平瓦（斜格子叩）

S－48

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	破片

S－49

須恵器	甕、坏c、蓋？
土師器	破片
白磁	皿；VI－1×VII－1（1）
灰釉陶器	破片
金属製品	不明鉄製品

S－50

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）
土製品	鋳型、炉壁？
金属製品	鉱滓

S－51

須恵器	蓋
土師器	破片
石製品	破片

S－52

須恵器	破片
土師器	小皿a

S－53

須恵器	蓋c、甕
土師器	破片
白磁	椀；IV（1）
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－54

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	軒丸瓦

S－55

土師器	甕
金属製品	銅片

S－56

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－57

土師器	破片
土製品	焼土塊
金属製品	鉱滓

S－58

土師器	破片

S－59

土師器	破片

S－60

須恵器	大蓋c、蓋c3、坏c
土師器	蓋4
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－61

須恵器	甕
土師器	甕、坏（イト）

S－62

土師器	破片
瓦類	破片

S－63

須恵器	甕
土師器	坏a（イト・ヘラ）、蓋c
瓦類	破片

S－64

土師器	坏
青磁	長沙？水柱×壺（1）

S－65

須恵器	破片
土師器	甕、坏c×椀c

S－66

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）
石製品	黒曜石

S－67

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a（イト）
瓦類	破片

S－68

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	破片

S－69

須恵器	蓋
瓦類	破片

S－70

須恵器	甕、蓋c
土師器	蓋3

S－71

土師器	坏（イト？）

S－72

土師器	破片

S－73

須恵器	坏
土師器	破片
白磁	碗
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－74

土師器	破片
瓦類	破片

S－76

土師器	破片

S－77

土師器	甕

S－78

須恵器	甕
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－79

土師器	破片

S－81

須恵器	蓋3
土師器	破片

S－82

須恵器	蓋
土師器	高坏

S－86

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－87

須恵器	蓋3
土師器	破片
金属製品	鉄製品

S－88

須恵器	甕

S－101

須恵器	甕
土師器	破片

S－102

須恵器	破片

S－103

土師器	破片

S－104

須恵器	破片
土師器	椀c
瓦類	破片
石製品	安山岩
土製品	焼土塊

S－105

須恵器	甕
土師器	甕、坏a（ヘラ）、椀c
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I－2（1）、I（1）、II（1）
陶器	盤III（1）
瓦類	丸瓦（斜格子叩、格子叩）
石製品	砥石、滑石破片

S－106

須恵器	破片
土師器	椀c
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－107

土師器	破片
瓦類	破片

S－108

須恵器	破片
土師器	破片
越州窯系青磁	椀；I（1）

S－109

須恵器	破片
土師器	椀c
瓦類	破片（縄目叩）

S－110

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏a、甕、椀c
越州窯系青磁	椀；I（1）
瓦類	平瓦（斜格子叩）
金属製品	不明鉄製品

S－111

土師器	甕

S－112

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	平瓦（格子叩）

S－113

瓦類	破片

S－114

土師器	甕

S－115

須恵器	転用硯、甕、坏c
土師器	皿c、甕、碗c、坏a、鍋×鉢、小皿c（ヘラ？）
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
越州窯系青磁	坏I（1）
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦（斜格子叩、格子叩、縄目叩）、丸瓦（斜格子叩）
石製品	鏃

S－115　青灰色粘土

土師器	坏a（ヘラ）、椀a（ヘラ）、椀c、甕b
黒色土器A	椀c

S－115　暗茶色粘土

土師器	甕、甕b、椀c、坏a
黒色土器A	椀c
須恵質土器	鉢（東播？）
瓦類	平瓦（縄目叩）
石製品	滑石製品

S－117

土師器	椀c

S－118

土師器	甕
金属製品	不明鉄製品

S－119

土師器	破片

S－120

須恵器	甕、蓋、高坏
土師器	甕、坏
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（破片）
金属製品	鉄製刀子

S－120　上層

須恵器	甕
土師器	蓋c
瓦類	破片

S－120　下層

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－121

土師器	椀c

S－122

土師器	破片
瓦類	破片

S－123

須恵器	甕
土師器	甕
黒色土器A	椀c

S－124

土師器	破片

S－125

須恵器	甕、蓋c
土師器	坏a、椀c
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦（格子叩、縄目叩）
金属製品	鉱滓、不明鉄製品

S－126

須恵器	坏c
土師器	破片
越州窯系青磁	椀；II－2－f（1）
金属製品	鉄製品

S－127

土師器	破片

S－128

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	黒曜石剥片

S－129

須恵器	蓋2？
土師器	坏

S－130a

土師器	甕

S－130b

土師器	坏
越州窯系青磁	椀；II（1）
瓦類	破片

S－130c

土　師　器	破片
越州窯系青磁	椀；I（1）

S－130d

土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（縄目叩）

S－130e

須　恵　器	破片
土　師　器	破片

S－130f

須　恵　器	破片
土　師　器	破片
越州窯系青磁？	破片（1）

S－130g

須　恵　器	甕
土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（斜格子叩）

S－130h

土　師　器	甕、坏

S－130j

土　師　器	破片
越州窯系青磁	椀；I（1）

S－130k

須　恵　器	甕、皿a、坏c
土　師　器	坏d、甕、蓋3
瓦　　類	平瓦（縄目叩）
金属製品	鉄製丸釘

S－130l

土　師　器	破片

S－131

土　師　器	高台
越州窯系青磁	皿；I（1）
瓦　　類	破片

S－133

土　師　器	破片

S－134

土　師　器	破片

S－136

須　恵　器	甕
土　師　器	椀c
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I（1）
瓦　　類	平瓦（格子叩）
金属製品	不明鉄片

S－137

須　恵　器	甕、蓋
土　師　器	甕
瓦　　類	平瓦（格子叩、斜格子叩）
金属製品	鉱滓

S－138（AH37）

須　恵　器	蓋
土　師　器	坏×小皿a
黒色土器A	破片
瓦　　類	平瓦（格子叩）
金属製品	鉄釘

S－138（AE38）

須　恵　器	蓋c、皿a、壺、坏c、甕
土　師　器	甕、坏a、皿
黒色土器A	椀c
瓦　　類	平瓦（縄目叩、格子叩）、丸瓦（斜格子叩）

S－139

土　師　器	破片
石　製　品	安山岩

S－141

須　恵　器	破片
土　師　器	甕
瓦　　類	平瓦（破片）

S－142

土　師　器	高台、坏
黒色土器A	破片

S－143

須　恵　器	蓋、壺底部
土　師　器	破片
黒色土器B	破片
石　製　品	滑石片

S－144

土　師　器	破片
瓦　　類	破片
石　製　品	砥石

S－146

土　師　器	破片
石　製　品	滑石片

S－147

須　恵　器	破片
土　師　器	破片

S－148

土　師　器	破片

S－149

須　恵　器	破片
土　師　器	破片

S－151

須恵器	甕
土師器	坏a、甕、椀c
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀；I（1）、II（1）
石製品	滑石片

S－152

土製品	焼土塊

S－153

土師器	小皿a（イト）

S－154

須恵器	甕
土師器	破片

S－156

須恵器	破片
土師器	坏a（イト）
瓦類	破片

S－157

須恵器	蓋3
土師器	破片
瓦類	破片

S－158

瓦類	平瓦（縄目叩）

S－159

須恵器	蓋3、破片
土師器	破片
瓦類	破片

S－161

須恵器	破片
土師器	破片

S－162

土師器	坏a、椀c
瓦類	破片

S－163

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（斜格子叩、縄目叩）、軒平瓦

S－164

須恵器	蓋1、壺蓋？
土師器	破片
石製品	平玉石

S－165

須恵器	甕、蓋
土師器	椀c、坏a
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（破片）

S－166

土師器	破片
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S－167

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－168

越州窯系青磁	不明；I（1）

S－169

須恵器	破片
土師器	破片

S－170

須恵器	蓋1、蓋3、蓋c、甕、坏c、皿a、壺
土師器	甕、坏a、蓋c、皿a、椀c、蓋3
	焼塩壺？
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、塼
土製品	瓦玉、炉壁
石製品	石鏃（黒曜石）
金属製品	鉱滓

S－171

須恵器	破片
土師器	甕、椀c
黒色土器A	椀
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；I（輪花）（1）
瓦類	平瓦

S－172

土師器	椀c、破片
黒色土器A	椀c
瓦類	破片

S－173

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	高台片
黒色土器A	破片
縄文土器？	破片
瓦類	破片
石製品	軽石

S－174

土師器	破片
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；I（1）
国産陶器	破片（1）
金属製品	丸釘

S－175

須恵器	壺（篠）、坏c、甕
土師器	椀c、坏a、甕
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	その他；I（輪花）（1）
中国陶器	A'b（1）
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）、文字瓦、軒平瓦 丸瓦（縄目叩、斜格子叩）
土製品	ふいご羽口
石製品	滑石石鍋、砥石、安山岩

S－176

土師器	破片
瓦類	破片

S－177

須恵器	蓋3
土師器	坏a、甕
瓦類	破片

S－178

須恵器	蓋、坏c
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)、軒平瓦、丸瓦(格子･斜格子叩)

S－179

須恵器	破片
土師器	破片

S－180

須恵器	壺、坏c、蓋c、蓋3、甕
土師器	椀c、坏、小皿a、高台片
	焼塩壺？
越州窯系青磁	椀；II－2（1）
白磁	椀；V（櫛目）（1）
	その他；破片（1）
中国陶器	Bb（1）
肥前系磁器？	破片（1）
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）、丸瓦（斜格子叩） 軒丸瓦
土製品	土管（現代）

S－181

須恵器	高坏

S－182

須恵器	破片
土師器	坏、甕

S－183

土師器	破片

S－185

須恵器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）、丸瓦（格子叩）、軒平瓦

S－190

須恵器	坏c、甕、破片
土師器	坏a（イト）
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	その他；I（壺×水注）（1）
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）、丸瓦（斜格子叩）

S－190　灰色砂

須恵器	蓋1、甕
土師器	坏a、坏c、椀c
龍泉窯系青磁	椀；III－2（1）
白磁	椀；VI（1）
瓦質土器	擂鉢、火鉢
須恵質土器	鉢
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）
石製品	滑石石鍋

S－190　粘土

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）
木製品	漆片

S－195　枠内

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－195　暗茶色土

須恵器	坏c、甕、蓋3、高坏、鉢?
土師器	坏a×小皿a、坏、甕
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I－2（1）、I（1）、I（輪花）（1）
	その他；坏I（1）
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）、丸瓦（スリ消し）
石製品	滑石石鍋

S－200　淡茶色粘土

須恵器	甕、蓋3、壺、坏c、鉢
土師器	坏a、坏c×椀c、小皿a？、甕
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；I－2（1）、I（1）
	その他；坏I－3（1）
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）、丸瓦（スリ消し）
石製品	砥石（砂岩）

S－200　青灰色粘土

瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩）、埠

S－201

須恵器	甕、鉄鉢
土師器	坏a、丸底坏a、小皿a？、甕
瓦器	椀c
白磁	椀；V－2（1）、IV（1）
須恵質土器	鉢
弥生土器	甕
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）、丸瓦（縄目叩、格子叩）
石製品	安山岩

S－202

須恵器	甕、壺、坏c、高坏、皿a、坏a、擂鉢
土師器	坏a（イト、ヘラ）、丸底坏a、小皿a（イト、ヘラ）、鍋
	椀c、高坏、坏d
	焼塩壺
瓦器	椀c、小皿a
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	その他；I？（1）
同安窯系青磁	椀；III（1）
白磁	椀；II－1×2(2)、IV－1a［1］(3)、IV(5)、II(1)、破片(9)
	皿；VI－1a（1）、未分類（1）
須恵質土器	鉢
中国陶器	破片（1）
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）、丸瓦（格子叩）
	軒平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、塼
石製品	砥石、安山岩
土製品	るつぼ、土錘、不明土製品
金属製品	鉱滓

S－203

須恵器	甕、坏×皿、蓋
土師器	坏a（イト）、椀c、小皿a、坏、甕
瓦器	椀c
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩）、丸瓦（縄目叩、格子叩）

S－204

瓦類	平瓦（縄目叩）

S－207　撹乱

須恵器	蓋c3、坏c、甕
土師器	甕、小皿a（イト）
黒色土器B	破片
白磁	椀；V－4×VIII－3（1）
肥前系磁器	破片（1）
瓦類	破片

S－208

須恵器	甕、壺、鉢
土師器	椀c、丸底坏？、坏、甕
瓦類	平瓦（縄目叩）、破片

S－211

須恵器	甕、壺×甕
土師器	丸底坏a、坏a、皿
瓦類	破片

S－212

須恵器	蓋1、壺
土師器	甕、坏d？
瓦類	平瓦（縄目叩）、軒平瓦（偏行唐草）

S－213

現代磁器	灰皿、鉢

S－214

須恵器	甕、壺、蓋3、破片
土師器	高坏、坏、椀c、破片
肥前系磁器	破片（3）
瓦類	平瓦（縄目叩）
金属製品	不明鉄製品

S－216

須恵器	坏c、壺、蓋1
土師器	坏c、坏a、椀c、甕、把手
灰釉陶器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）
土製品	焼土塊

S－217

須恵器	坏
土師器	破片

S－218

須恵器	椀c、壺
土師器	甕、破片

S－219

土師器	甕
瓦類	破片

S－221

土師器	椀c

S－230

須恵器	蓋1、蓋3、蓋c、甕、壺
土師器	甕、丸底坏a、椀c、高坏、破片
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩）、破片

S－231

須恵器	破片
土師器	坏、破片
瓦類	平瓦、破片

S－232

土師器	甕
瓦類	平瓦

S－233

須恵器	坏c、蓋
土師器	坏？、甕
	焼塩壺
瓦類	平瓦（スリ消し）、破片

S－234

瓦類	丸瓦

S－236

須恵器	破片

S－237

須恵器	蓋4、甕、破片
土師器	破片

S－238

須恵器	蓋3、甕
土師器	甕×壺、破片

S－240

須恵器	蓋1、甕、坏c、壺、破片
土師器	甕、坏a、破片

S－241

須恵器	坏a（イト？）、破片

S－242

須恵器	蓋1、甕
土師器	坏、破片
越州窯系青磁	椀；I（1）
龍泉窯系青磁	椀；I（1）

S－243

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦

S－244

須恵器	蓋3、破片
土師器	坏×小皿a（イト）、破片

S－245

須恵器	甕、蓋3、壷×甕、坏c、蓋1
土師器	坏、甕、破片
黒色土器A	破片
白磁	椀；IV（1）、II（1）
	皿；VI－1a［1］
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）、丸瓦
石製品	滑石石鍋

S－246

土師器	坏a、破片

S－247

須恵器	蓋3
土師器	破片
白磁	椀；破片（1）
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－248

須恵器	破片
土師器	坏a（イト）
龍泉窯系青磁	椀；破片（1）

S－249

須恵器	壷、破片
土師器	坏×小皿a（イト）

S－250b

土師器	破片
染付	近代以降破片（1）
瓦類	破片

S－250f

須恵器	甕、破片
土師器	破片
不明青磁	破片（1）
白磁	その他；破片（1）
金属製品	薄板状片（銅）

S－250f　柱痕

須恵器	破片

S－250g

須恵器	破片
土師器	破片

S－250k

須恵器	破片
土師器	破片

S－251

土師器	小皿a（イト）

S－252

須恵器	破片
土師器	小皿a、破片

S－253

土師器	坏a×小皿a（イト）

S－254

須恵器	甕×壷
土師器	破片
瓦類	平瓦

S－255

瓦類	丸瓦（縄目叩）

S－256

土師器	破片
龍泉窯系青磁	その他；破片（1）
瓦類	破片

S－257

土師器	坏？　破片
龍泉窯系青磁	椀；I－6a（1）
白磁	その他；破片（1）
瓦類	破片

S－258

土師器	坏、鍋
白磁	その他；破片（内面クシ目）（1）

S－259

須恵器	破片
土師器	破片
国産陶器	破片（野間焼近代～）（1）
瓦類	平瓦
金属製品	不明銅製品

S－260g

須恵器	蓋4
瓦類	破片

S－261

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏（イト）、破片
龍泉窯系青磁	その他；I（4）
中国陶器	Dc（1）

S－262

須恵器	蓋、破片
土師器	破片
灰釉陶器	皿
瓦類	破片？

S－263

須恵器	破片
土師器	破片

S－264

土師器	破片

S－265

須恵器	破片
土師器	把手
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－266

須恵器	破片
土師器	破片

S－267

須恵器	蓋4

S－268

須恵器	破片
土師器	破片

S－269

土師器	甕

S－270

須恵器	坏c、甕、壷
土師器	把手、椀c、小皿a、甕、高坏、丸底坏？、坏a（ヘラ）
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（縄目叩）

S－271

土師器	破片

S－272

須恵器	破片
土師器	破片

S－273

土師器	破片
瓦類	破片

S－274

土師器	破片
瓦類	破片

S－275

須恵器	蓋3
白磁	椀；IV（1）
瓦類	破片

S－276

須恵器	坏、破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－277

須恵器	坏
瓦類	平瓦

S－278

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片

S－279

須恵器	蓋、破片
土師器	坏
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－281

須恵器	破片
土師器	甕、破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－282

須恵器	壷
金属製品	鉄製鑽（現代？）

S－283

須恵器	蓋、破片
土師器	蓋4、甕
瓦類	平瓦（縄目叩）
石製品	黒曜石

S－284

須恵器	蓋

S－286

須恵器	蓋、甕
土師器	坏、甕
瓦類	平瓦（縄目叩）
石製品	砥石

S－287

瓦類	平瓦（縄目叩）

S－288

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－289

須恵器	破片
土師器	甕
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－291

須恵器	甕
越州窯系青磁	椀；I (1)
瓦類	平瓦（縄目叩）

S－292

土師器	破片
瓦類	破片

S－293

土師器	甕

表土

須恵器	甕、蓋3、壷、坏c、椀、鉢、皿a、高坏、蓋3c、硯蓋
土師器	坏a・c・d、小皿a、丸底坏a、甕、高坏、椀c、蓋c、竈
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；II2a (1)、I (2)
	水注；(1)、壷×水注 (1)
龍泉窯系青磁	椀；I (1)、破片 (1)
白磁	椀；IV (4)、IV－1a (1)、V－1×VIII－2 (1)、V～VIII(1)
	II (1)、破片 (6)
	皿；VI－1a (1)、II×III (1)
灰釉陶器	壷 (1)、破片 (1)
土師質土器	火鉢
須恵質土器	鉢
国産陶器	破片 (2)
国産磁器	肥前系 (2)、肥前？(2)、近現代 (4)
瓦類	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦（縄目叩、斜格子叩）、丸瓦、埠
縄文土器	破片
金属製品	鉱滓
土製品	炉壁？、鋳型、取瓶、植木鉢（現代）
石製品	滑石石鍋、斧、剥片（安山岩、黒曜石）、鏃

試掘トレンチ

土師器	坏、甕、破片
瓦類	平瓦（縄目叩）
土製品	土管（現代）

排土

須恵器	甕、壷
土師器	皿c、小皿a、椀×丸底坏a、甕、椀c
黒色土器A	破片

Z

須恵器	甕、蓋3、坏c
土師器	坏a、丸底坏a
龍泉窯系青磁	椀；I
白磁	椀；IV
	皿；破片
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）、丸瓦（格子叩）
土製品	焼土塊、土管（現代）

撹乱

須恵器	甕、蓋3、坏c、鉢
土師器	坏a、坏c、小皿a
白磁	椀；IV (1)、V－4×VIII－3 (1)、破片
磁器	染付、猪口、椀
瓦類	平瓦（縄目叩、斜格子叩）
金属製品	鉱滓、鉄製品？

茶褐色土

須恵器	甕、蓋1・3・4、壷、坏c、椀c、鉢、蓋c、鉢×甕
土師器	坏a・c、小皿a、丸底坏a、高坏、大蓋c、焼塩壷
瓦器	椀
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；II－2 (1)、I（タテヘラ）(2)
	壷×水注；I (1)
龍泉窯系青磁	破片 (1)
同案窯系青磁	椀；III (1)　破片 (1)
白磁	椀；IV (4)、II－1×II－2 (1)
	破片 (1)
灰釉陶器	壷
瓦質土器	鉢
須恵質土器	鉢
国産陶器	破片（近世）(8)
国産磁器	破片（近世）(7)
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）、丸瓦（縄目叩）
弥生土器	甕
金属製品	鉱滓、鉄製品
土製品	ふいご羽口、焼土塊、土管（現代）
石製品	斧、剥片（安山岩、黒曜石）

暗灰褐色土

須恵器	甕、坏c、高坏、壷、皿×坏a、蓋3、蓋c、鉢
土師器	坏a・c・d、小皿a、丸底坏a、甕、鍋
瓦器	椀
同安窯系青磁	椀；III？(2)、I－1－b (1)
白磁	椀；II (1)、IV (9)、IV－1－a (1)、II－3 (5)、V－2 (1)
	V－4×VIII－3 (1)、V～VIII (7)、破片 (8)
	皿；VI (1)
灰釉陶器	椀
須恵質土器	鉢
陶器	壷×水注Ab (2)、天目？(2)、壷E類 (1)、鉢I (1)
瓦類	平瓦（縄目叩）、丸瓦（格子叩）
石製品	滑石片
金属製品	鉄製品

明黄褐色土

須恵器	甕、坏、蓋c、坏c
土師器	坏、甕
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩）、丸瓦（格子叩）

辻遺跡１次調査出土土器計測表

1SD010

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	001	6	14.8	3.0	10.6	○	×
須・皿a	1	002	2	17.0	2.0	13.7	×	×

1SD010　灰色土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋3	1	001	1	18.0	1.5+		○	×

1SD010　暗茶褐色土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ？）	1	001	5	12.9	3.2	7.0	×	×

1SX060

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・蓋c4	1	005	7	20.0	3.4		—	—
須・蓋c3	1	001	3	15.2	1.9		○	—
	2	002	5	13.8	1.9		○	—
	3	003	4	12.7	2.4		○	—
須・坏c	1	004	6	14.6	3.4	10.9	○	—

1SE115

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿c（ヘラ？）	1	001	3	11.2	1.9	6.55	×	×

1SE115　暗茶色粘土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	002	5	11.0	2.0	7.85	○	—
土・碗c（ヘラ）	1	003	7	14.6	6.0	8.6	—	—
碗c（不明）	2	004	6	13.2	4.5	8.4	—	—
	3	005	8	15.8	5.5	8.4	○?	—

1SE115　青灰色粘土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	001	11	10.8	1.9	7.6	○	×
	2	002	12	11.8	1.7	8.4	○	—
土・碗a（ヘラ）	1	003	13	12.4	3.6	7.4	○	×
土・碗c（不明）	1	004	16	11.3+	3.9+	7.1	—	—
碗c（ヘラ）	2	005	15	13.6	4.75	7.8	—	○
	3	006	14	12.2	4.35	7.4	—	×
黒A・碗c（不明）	1	007	18	15.2	4.8+		×	—
碗c（ヘラ）	2	008	19	14.3+	4.1+	8.7	×	○
碗c（不明）	3	009	17	13.95	5.65	7.65	×	×

S－156

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（イト）	1	001		12.05	3.2	7.7	—	×

1SD170

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・皿a（ヘラ？）	1	014	12	14.4	1.5	11.5	—	—
須・皿a	1	003	7	17.3	1.85	14.5	○	—
須・蓋1	1	004	5	19.0	2.2+		—	—
	2	008	4	16.6	1.7+		○	—
須・蓋3	1	011	6	15.0	1.3+		○	—
須・坏c	1	007	8	9.1+	1.9+	6.5	○	×

1SD190

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（イト）	1	001	1	12.2	3.1	7.1	○	○

1SX201

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	001	1	9.3	1.5	6.4	○	○
	2	002	4	10.0	1.3	8.2	○	○
	3	003	2	9.5	1.4	6.8	○	—
	4	004	3	9.7	1.4	7.7	○	○
土・丸底坏a（ヘラ）	1	005	12	17.2	3.4		—	○
	2	006	8	16.2	3.4		—	○
	3	007	11	16.6	3.3		—	○
	4	008	7	15.7	3.2		—	○
	5	009	10	16.4	3.3		—	○
	6	011	6	15.6	3.1+		—	○
	7	012	9	16.4	3.1+		—	○
	8	013	5	14.8	3.3		—	○
瓦・碗c	1	010	14	16.0	5.8	7.0	—	—
土・小皿a（ヘラ）		a－001		10.8	1.6	8.7	○	○
小皿a（イト）		a－002		9.8	1.3+	8.2	○	○
土・丸底坏a（ヘラ）		a－001		15.2	2.5+		—	○
丸底坏a（不明）		a－002		15.8	3.3+		—	—
瓦・碗		a－001			1.4+	6.6	—	—
		a－002			1.9+	6.8	—	○
		a－003			1.5+	7.8	—	—

1SD202

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（イト）	1	001	4	9.2	0.9	7.4	○	○
	2	002	7	9.6	1.0	8.0	○	○
	3	003	6	9.6	1.0	7.7	○	○
土・小皿a（ヘラ）	4	004	10	9.8	1.3	7.7	○	○
	5	005	8	9.6	1.6	7.8	○	○
土・丸底坏a（ヘラ）	1	011	20	16.8	3.5		—	○
	2	012	21	17.2	3.1+		—	○
	3	013	17	15.6	3.3+		—	○
	4	014	19	16.5	3.3+		—	—
瓦・小皿a	1	006	24	11.0	2.2		—	—
土・小皿a（イト）		a−001		9.0	1.0	7.2	○	○
		a−002		8.6	0.8	6.6	○	○
土・小皿a（ヘラ）		a−003		10.0	1.3	7.6	○	○
		a−004		10.0	1.1	8.0	○	○
		a−005		9.8	1.2	6.8	○	—
		a−006		8.6	1.2	6.6	○	—
		a−007		9.6	1.0	6.8	○	—
土・丸底坏a（不明）		a−001		17.4	2.6+		—	—
		a−002		16.0	2.4+		—	—

1SD202西隅トレンチ

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	001	13	10.0	1.5	8.4	○	○
	2	002	14	10.4	1.4	9.1	○	○
	3	003	11	9.8	1.2	8.1	○	○
土・小皿a（イト）	4	004	2	9.1	0.9	8.8	○	○
	5	005	3	9.2	0.9	7.6	○	○
	6	006	5	9.4	1.0	8.1	○	○
	7	007	12	9.8	0.9	8.4	○	×
	8	008	9	9.8	0.85	8.1	○	○
土・丸底坏a（ヘラ）	1	009	23	17.6	3.2		×	○
	2	010	22	17.2	3.2		×	○
	3	011	15	15.2	3.5		×	○
	4	012	16	15.3	3.1		×	×
	5	013	18	16.6	3.0		×	×
土・小皿a（ヘラ）		a−001		10.4	1.45	8.4	○	○
		a−002		9.6	1.5	7.8	○	×
		a−003		9.2	1.4	7.0	○	○
土・小皿a（イト）		a−004		9.2	1.2	8.2	○	○

S−203

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	001	2	9.8	1.2	7.3	○	×

1SD230

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・丸底坏a（ヘラ）	1	001	1	15.3	3.0		×	○

1SX245

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋1	1	001	3	14.2	1.8+		—	—

S−251

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（イト）	1	001		8.1	1.2	5.6	○	×

暗灰褐色土

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	001	3	9.6	1.25	6.4	○	○
	2	002	2	9.6	1.45	7.3	○	○
土・小皿a（イト）		a−001		9.6	1.0	8.0	○	○
小皿a（ヘラ？）		a−002		9.8	1.0	7.7	○	○

北隅トレンチ暗灰褐色土

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（イト）	1	003	4	10.0	0.85	7.4	○	○
土・丸底坏a（ヘラ）	1	002	5	16.4	3.5		—	—

茶褐色土

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・碗c	1	003	1		2.2+	8.3	○	×

表土

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	001	1	15.0	5.45	9.75	○	○

排土

器種	番号	R−	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a（ヘラ）	1	001	3	10.8	1.6	7.9	○	○
土・小皿c（ヘラ）	1	002	4	11.5	1.6	7.5	○	○

御笠団印出土地第８次調査出土遺物一覧・土器計測表

試掘

須　恵　器	小壺、蓋（古墳）、蓋3、大甕、鉢b
土　師　器	坏a、高坏、椀c1？
瓦　　類	平瓦（縄目叩、格子叩）

青灰色土

須　恵　器	坏c、坏d、蓋c（転用硯）、蓋（古墳）、蓋3、甕、壷a？
	皿a、大椀a
土　師　器	坏a、椀c1（穿孔）、甕a（角閃石）、壷
	焼塩壷
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	その他；壷
緑釉陶器	破片
土　製　品	カマド
瓦　　類	平瓦（縄目叩、格子叩）、丸瓦

茶色砂質土

須　恵　器	坏c、坏d、硯、蓋4、蓋c3、甕b、甕、大甕、高坏
	壷、大椀c、平瓶、高坏×蓋2
土　師　器	坏a（イトあり）、坏c、椀c1、甕a、大甕a、甕b、大鉢
	坏d（赤塗り）、皿a、小壷、高坏、把手、器台
	焼塩壷
黒色土器A	椀c1、坏?
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	その他；破片
木　製　品	炭化物
土　製　品	カマド
石　製　品	サヌカイト、滑石、黒曜石、瓦玉
瓦　　類	平瓦（縄目叩、格子叩）、文字瓦
そ　の　他	現代陶器

茶灰色シルト

須　恵　器	蓋1？甕
土　師　器	甕a

黒褐色土

須　恵　器	蓋3、坏、壷?甕
土　師　器	坏c（坏dに高台）、坏d、坏、甕a
	焼塩壷
緑釉陶器	皿（全面施釉）
土　製　品	カマド
瓦　　類	破片（縄目叩）

青灰色土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋	1	007	1	12.3	4.0		○	—
	2	006	2	14.0	4.0		○	—
須・蓋c3	1	004	3	15.4	1.8		○	○
須・皿a	1	002	5	17.4	1.9	14.6	—	—
	2	003	6	19.9	1.9	17.0	—	—
須・坏a	1	014		—	1.5+	8.2	—	—
須・碗a	1	001	4	16.1	6.7	10.6	○	—
土・坏a（ヘラ？）	1	009	7	11.5	2.7	6.9	—	—

茶色砂土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋	1	006	2	11.6	4.1		○	—
	2	008	1	12.7	3.3+		—	—
	3	009	3	14.0	2.7+		—	—
	4	002	4	15.2	3.2+		—	—
須・蓋c3	1	030		14.2	1.4		○	—
須・坏	1	017	6	11.3	2.7+		—	—
	2	015	7	11.9	3.8+		—	—
	3	001	5	12.7	4.3+		—	—
須・坏c	1	005	10	16.4	5.2	10.5	○	—
須・坏d？	1	031		—	1.1+	9.5	—	—
須・皿a	1	007	11	19.9	2.2+	16.8	—	—
土・坏a	1	022	14	11.3	2.8	7.5	—	—
	2	012	13	11.6	2.8+	8.1	—	—
	3	018	15	12.3	2.6+	8.7	—	—
土・坏c	1	011	16	13.7	3.9	7.9	○	—

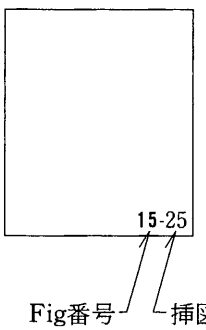
黒褐色土

器種	番号	R－	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋	1	004	1	12.3	4.1+		○	—
	2	002	2	13.5	4.0+		—	—
	3	001	3	15.1	4.5		○	—

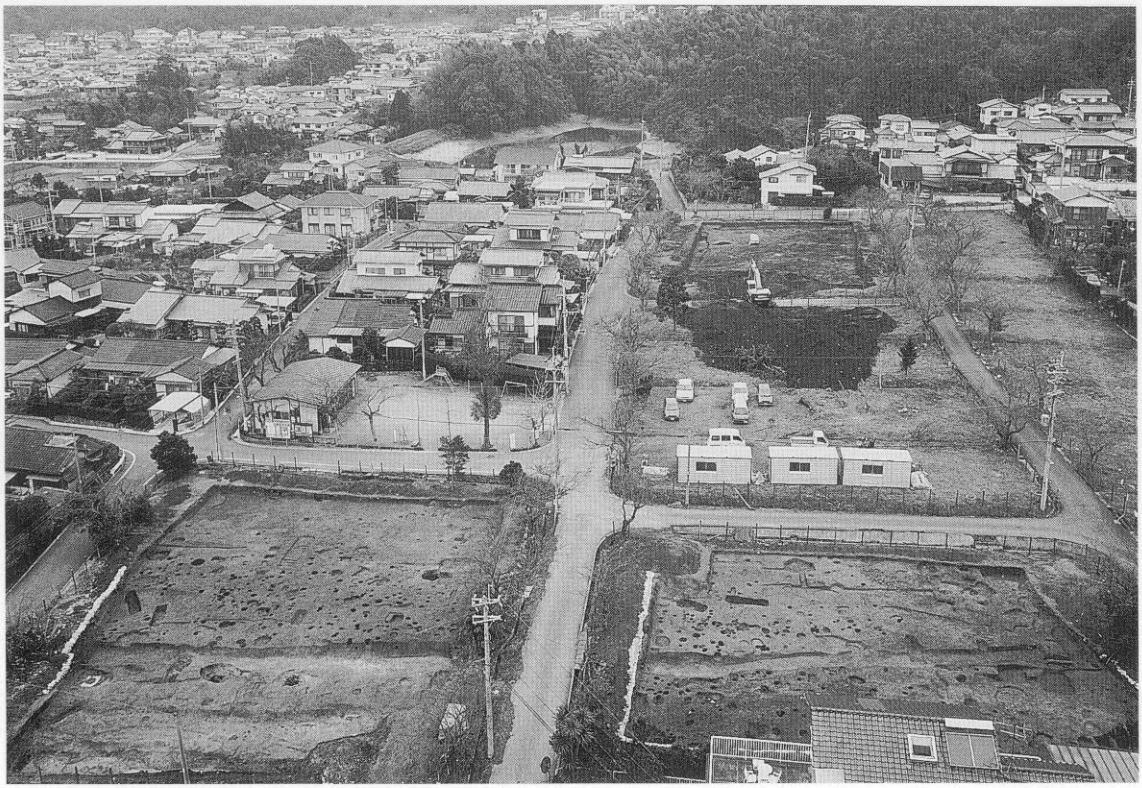
写　真　図　版

凡　例

写真図版右下の番号は、
以下の要領で理解できる。



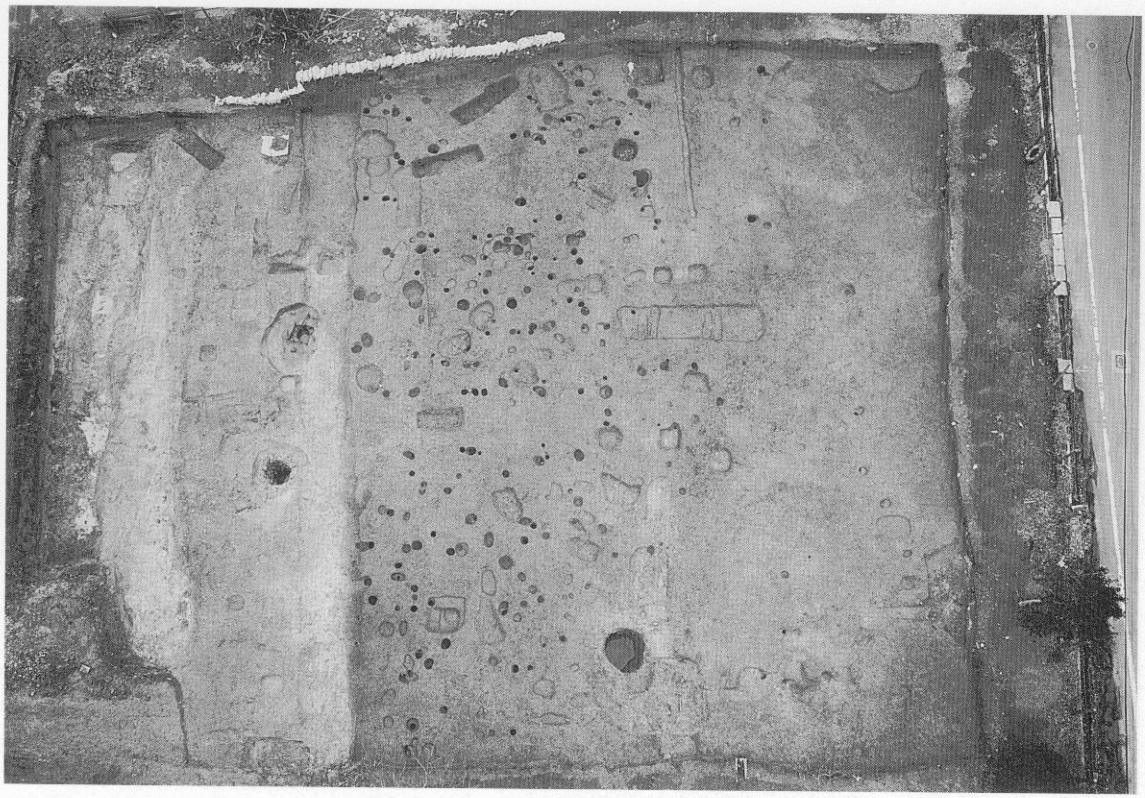
PL. 1



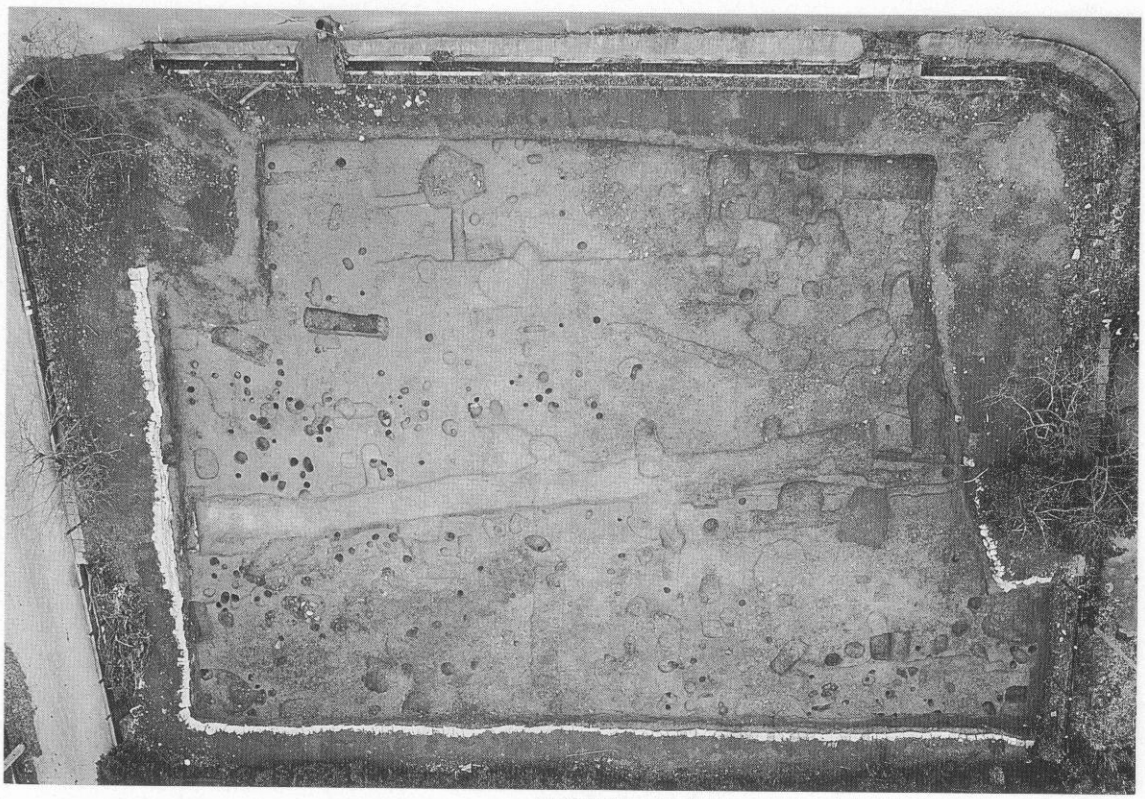
辻遺跡第１次調査調査区全景（南から　空中写真）



辻遺跡第１次調査　１・２区完掘状況（上が北　空中写真）

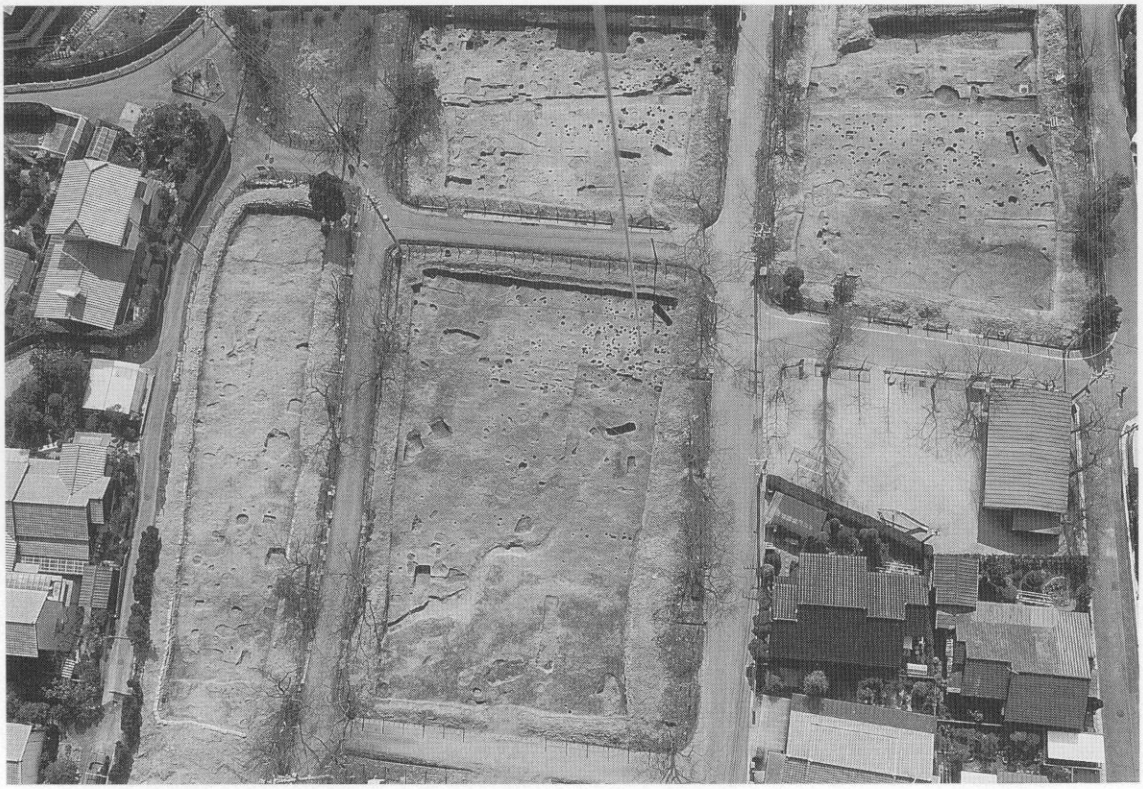


辻遺跡第１次調査　１区完掘状況（上が西　空中写真）



辻遺跡第１次調査　２区完掘状況（上が北　空中写真）

PL. 3



辻遺跡第１次調査　３区および５区南半完掘状況（上が南　空中写真）



辻遺跡第１次調査　３区完掘状況（上が西　空中写真）



辻遺跡第１次調査　４区および５区北半完掘状況（上が北　空中写真）



辻1SB005完掘状況（東から）

PL. 5



辻1SB260完掘状況（西から　空中写真）



辻1SE195完掘状況（東から）



辻1SE200完掘状況（東から）



辻遺跡第１次調査　１区1SD170・180近景（上が北　空中写真）

PL. 7



辻1SD010土層断面（東から）



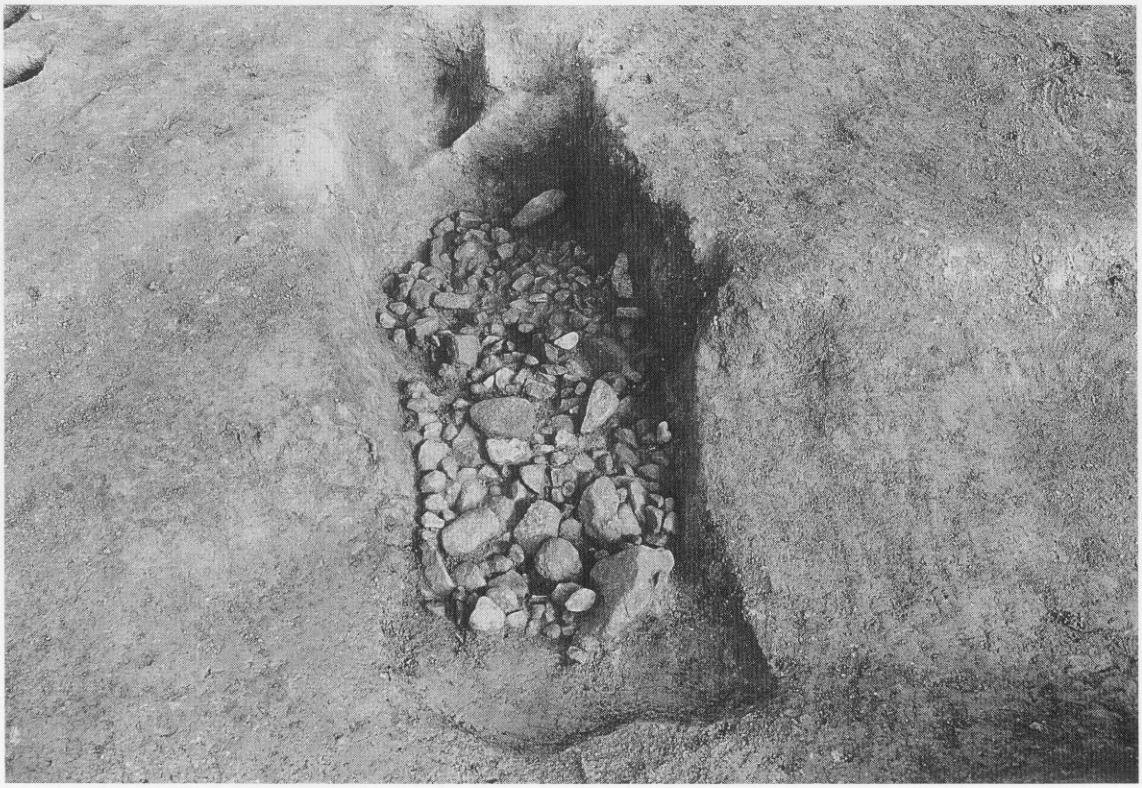
辻1SD170土層断面（東から）



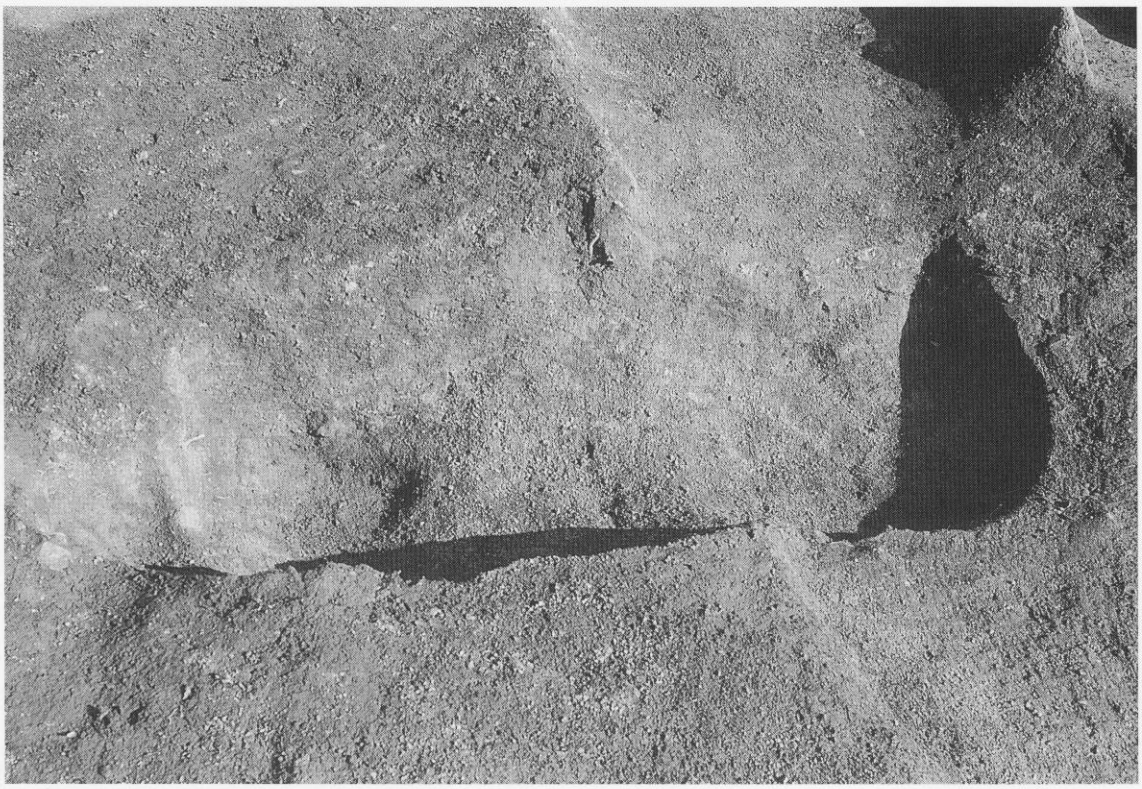
辻1SD190土層断面（東から）



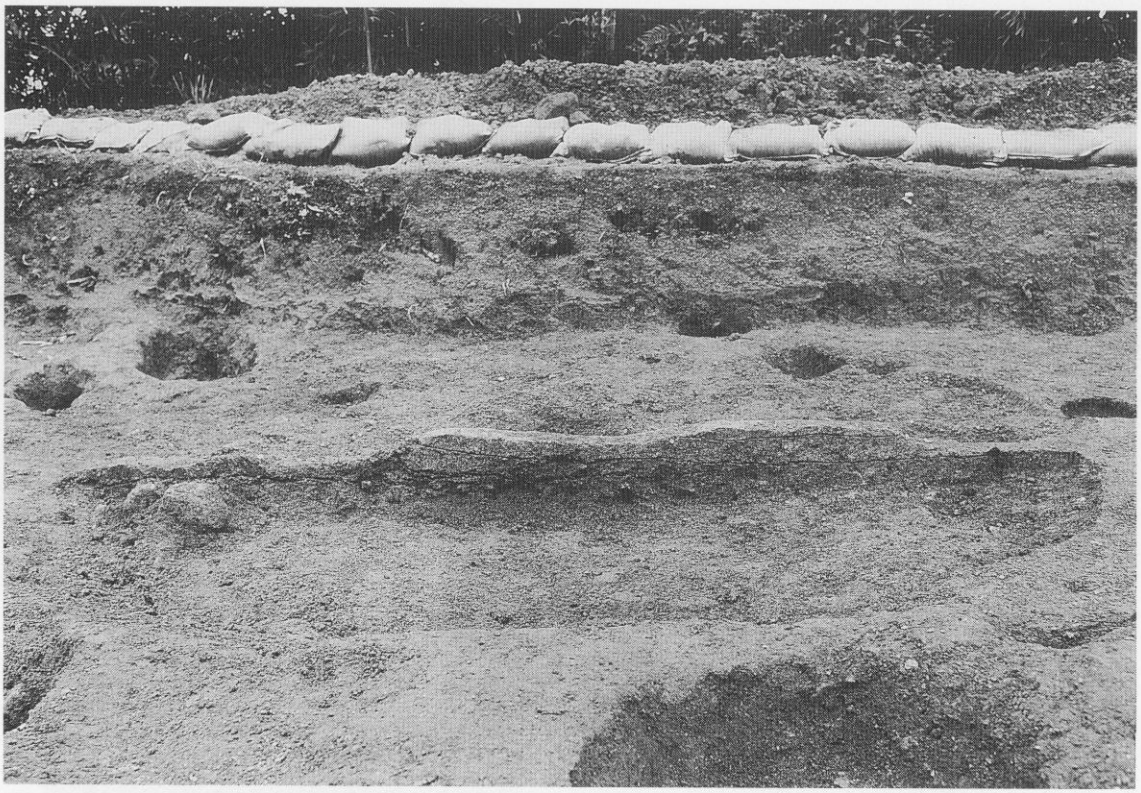
辻1SD202完掘状況（南から）



辻1ST015石敷検出状況（南から）



辻1ST015完掘状況（西から）



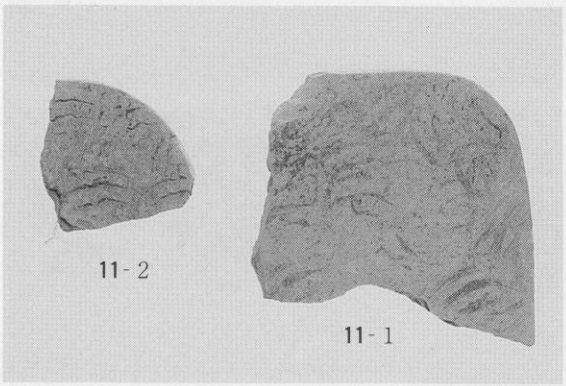
辻1SX060付近土層断面（北から）



辻1SX060遺物検出状況（北から）

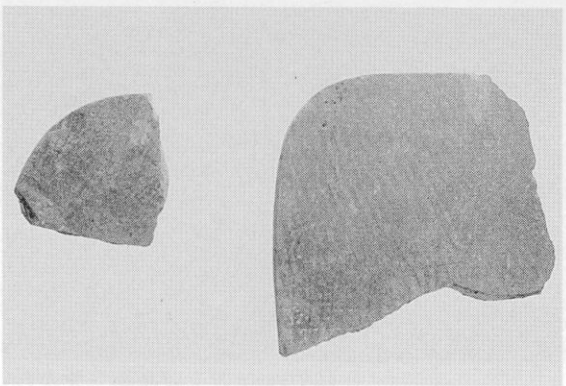
PL. 11

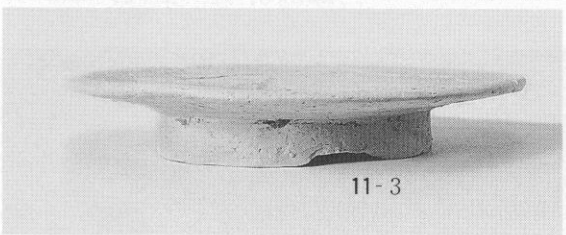
辻1SE115明茶色土



11-2

11-1





11-3

辻1SE115暗茶色粘質土



12-5



12-7

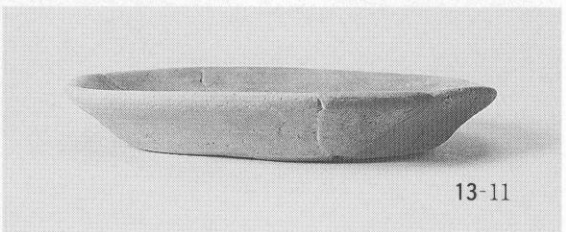


12-9

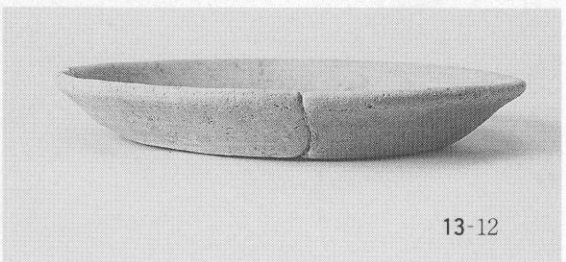


12-10

辻1SE115青灰色粘質土



13-11



13-12



13-14

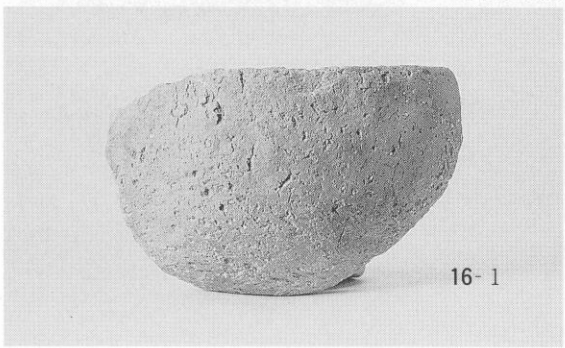


13-17



13-20

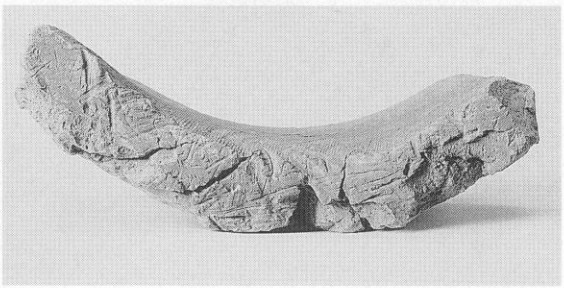
辻1SE200



16-1

辻1SE195



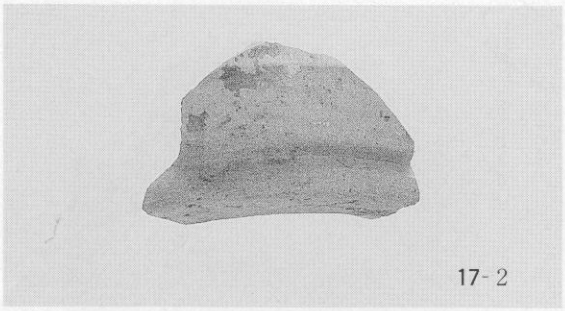




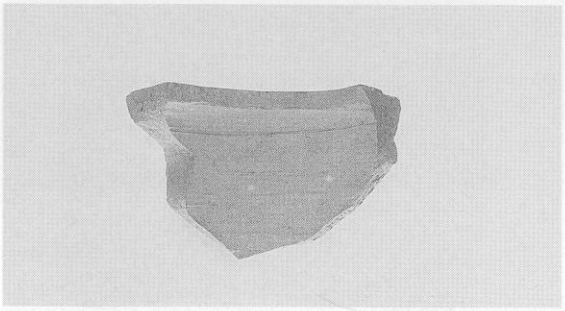
15-4

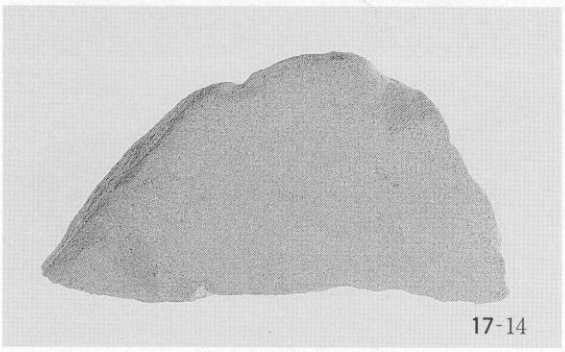
PL. 13

辻1SD010

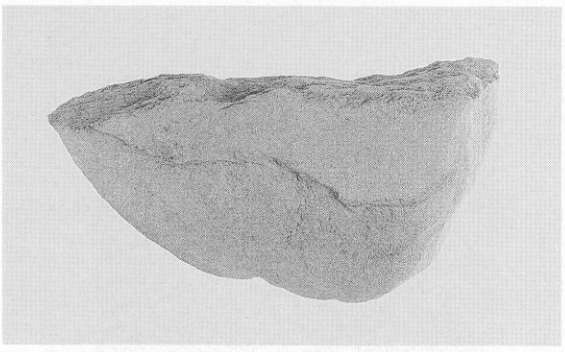


17-2





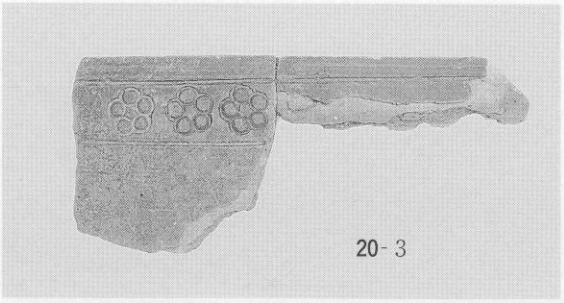
17-14



辻1SD190

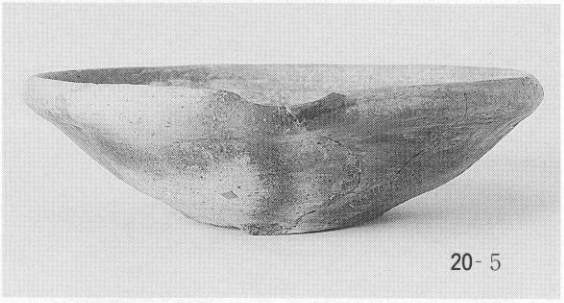


20-1



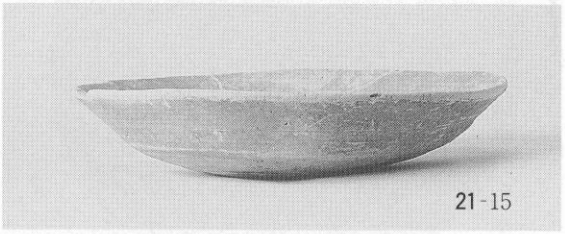
20-3



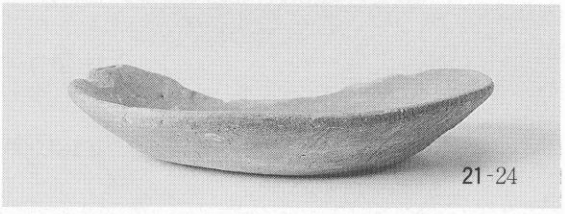


20-5

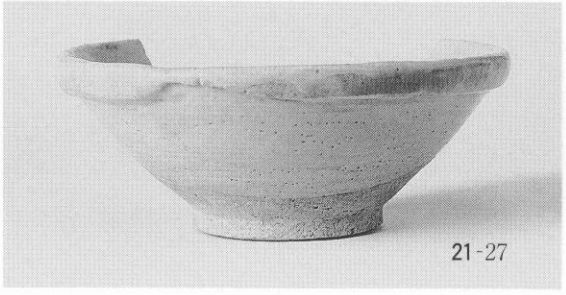
辻1SD202



21-15

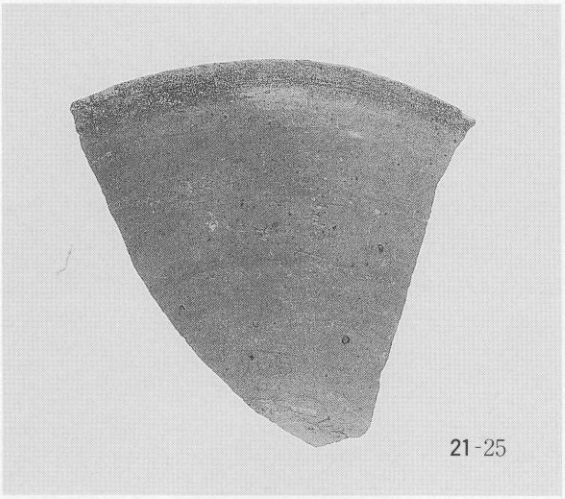


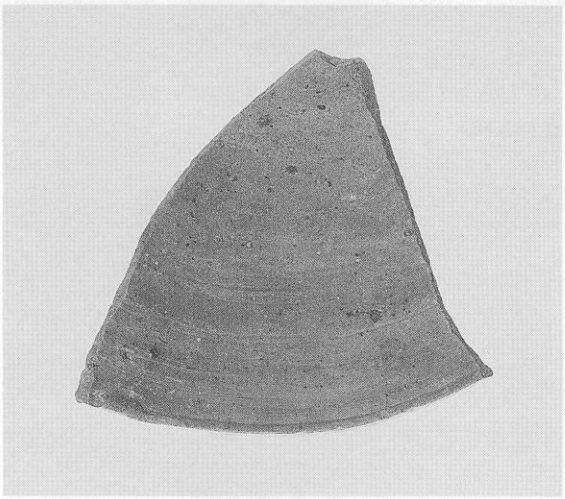
21-24

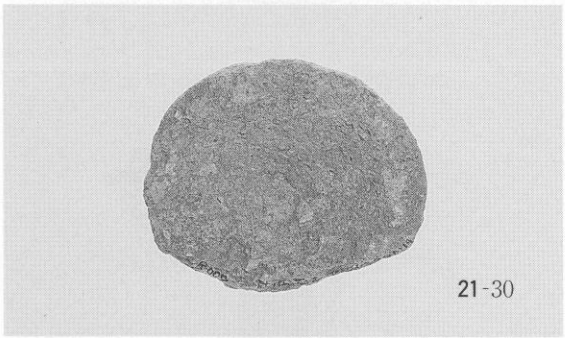


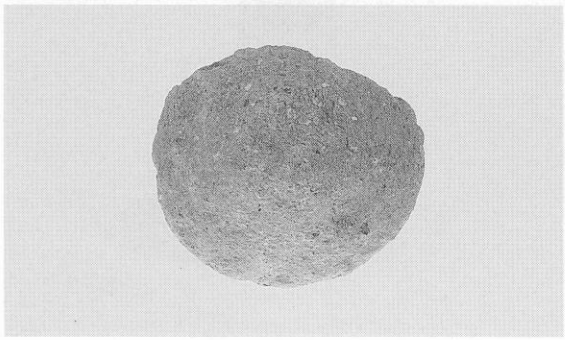
21-27

PL. 14

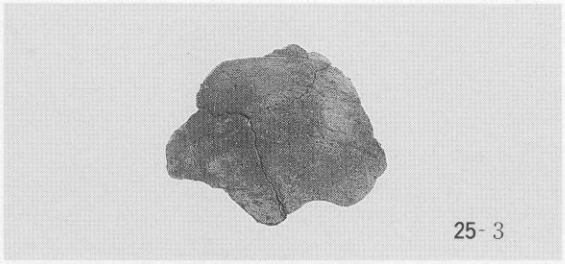

21-25

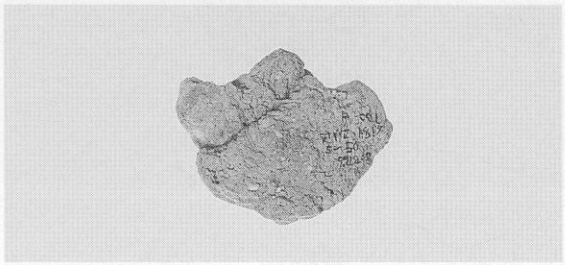


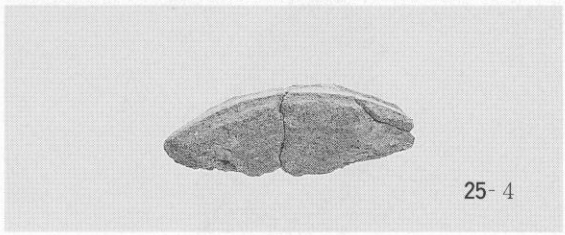

21-30



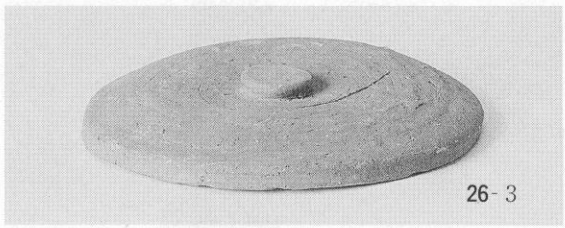
辻1SK050


25-3

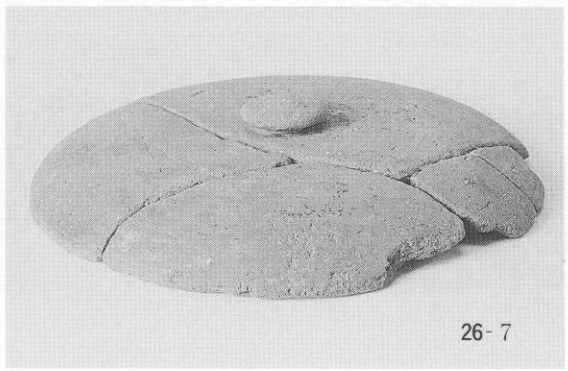



25-4

辻1SX060

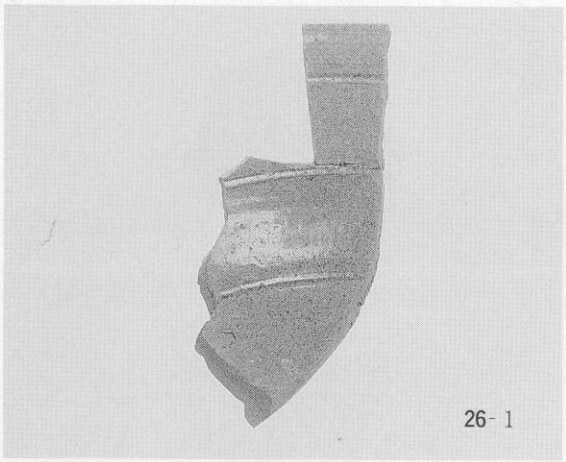

26-3


26-5

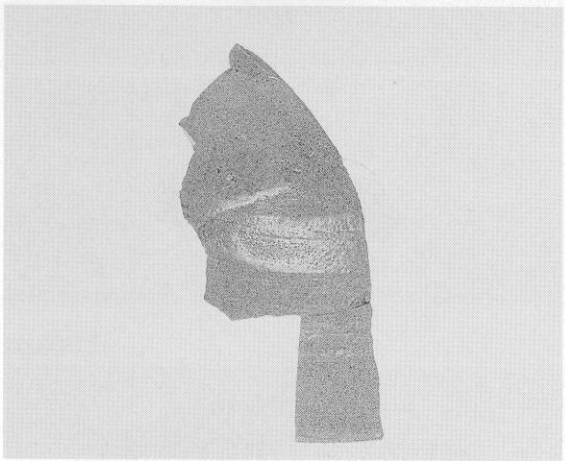

26-7

PL. 15

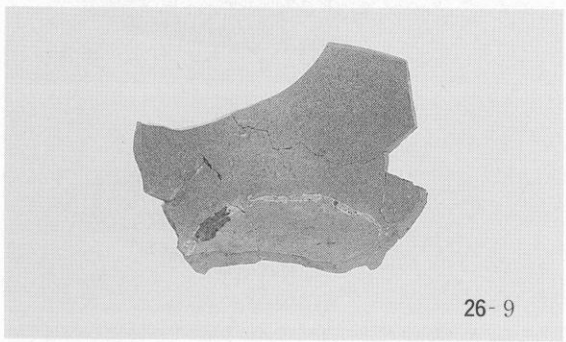
辻1SX028



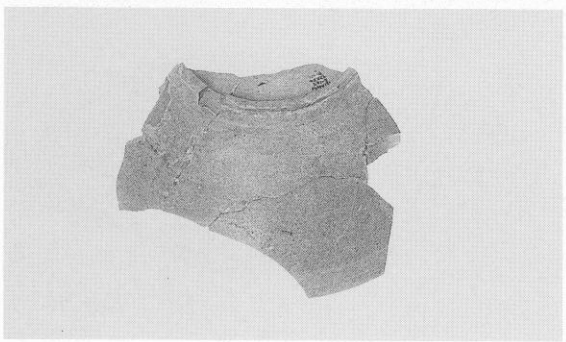
26-1

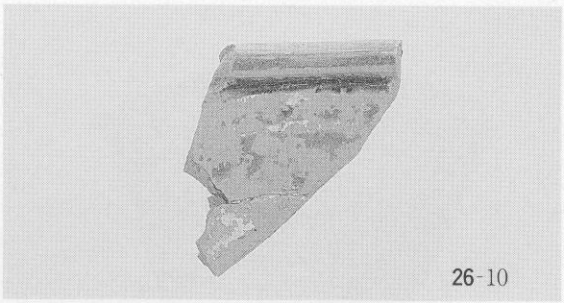


辻1SX105

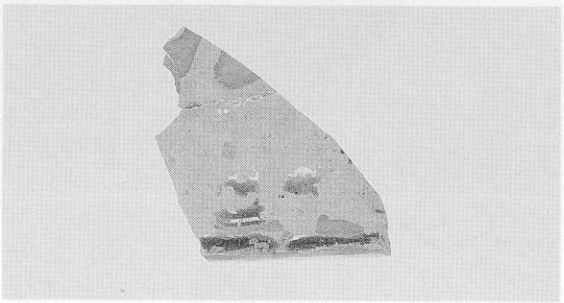


26-9





26-10



辻1SX181

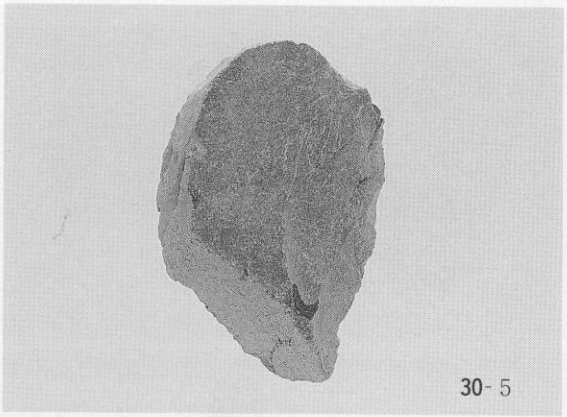


27-1

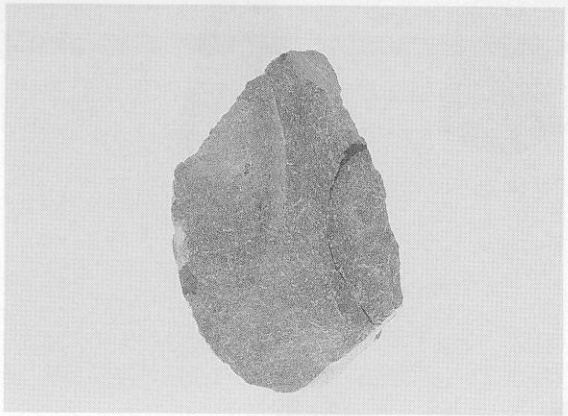


27-2

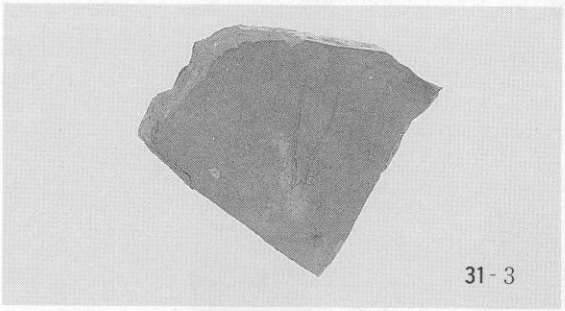
辻1下層包含層



30-5



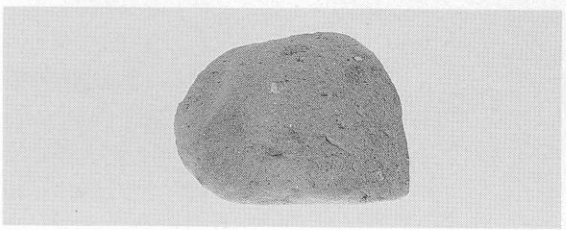
辻1包含層



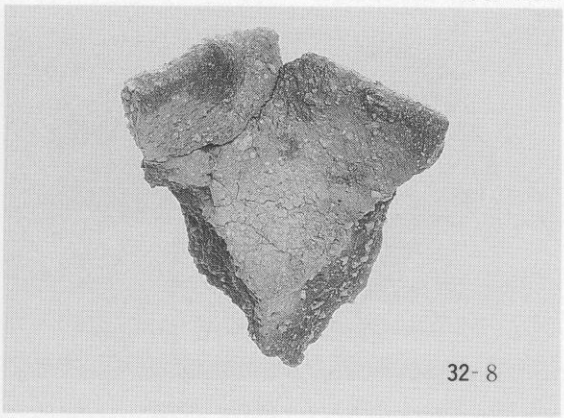
31-3



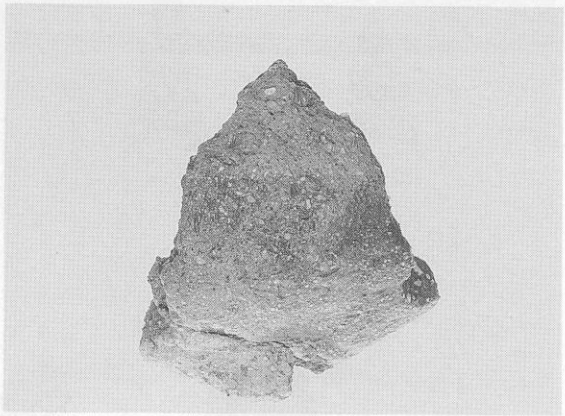
31-8

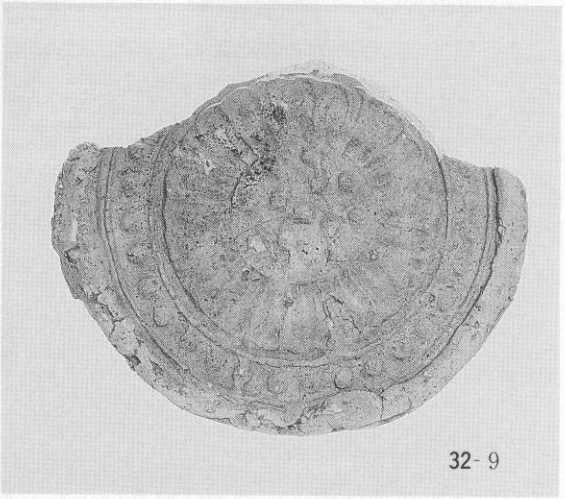


辻1表土



32-8





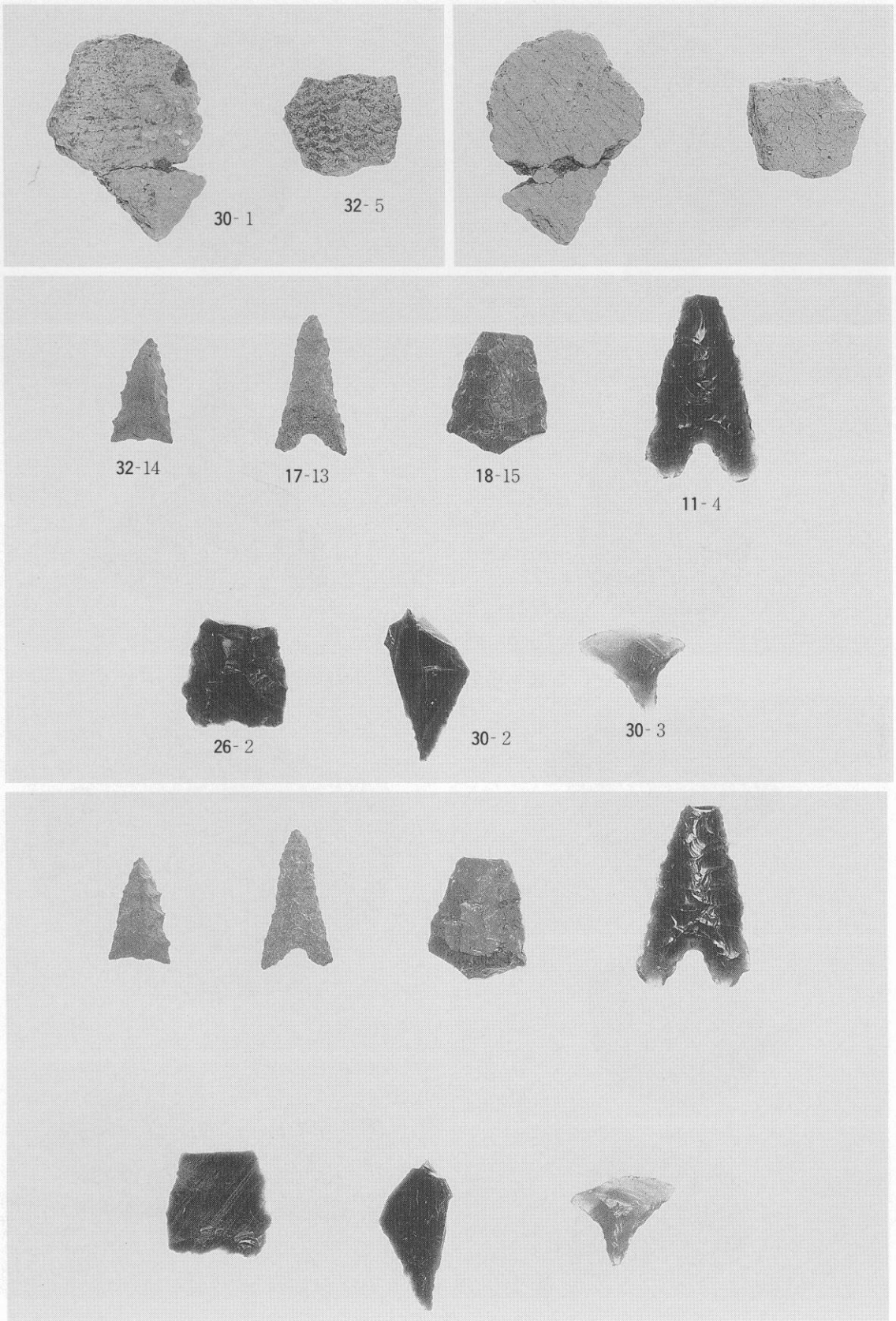
32-9



32-11

PL. 17

辻１各層出土縄文土器・石器





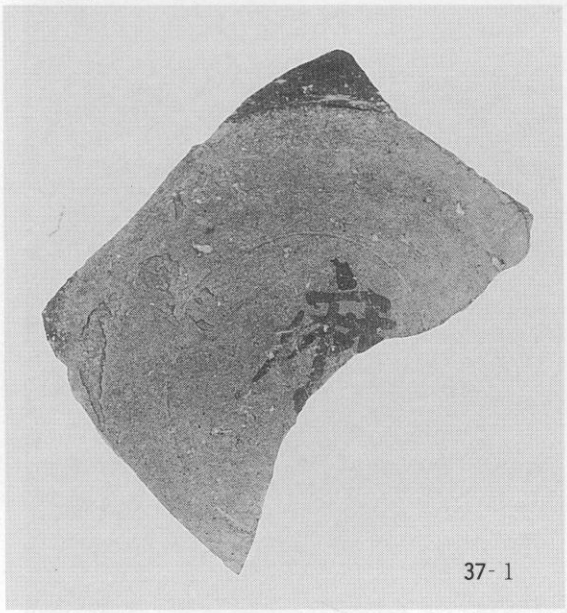
御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査　調査地遠景（北から　空中写真　中央工事中の部分）



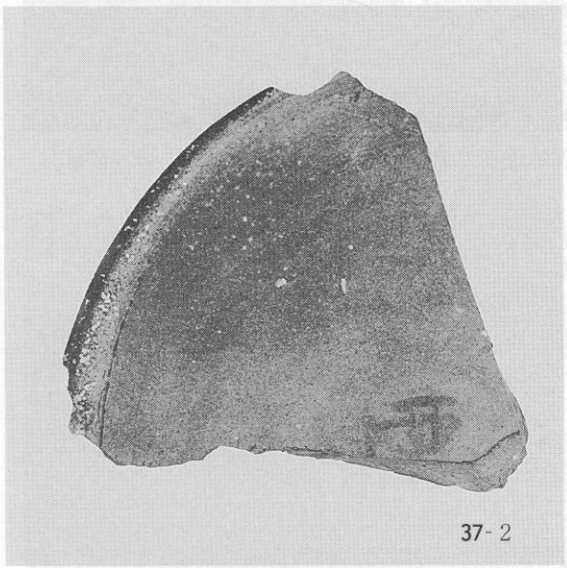
御笠団印出土地周辺遺跡第８次調査　調査区東壁土層断面（西から）

PL. 19

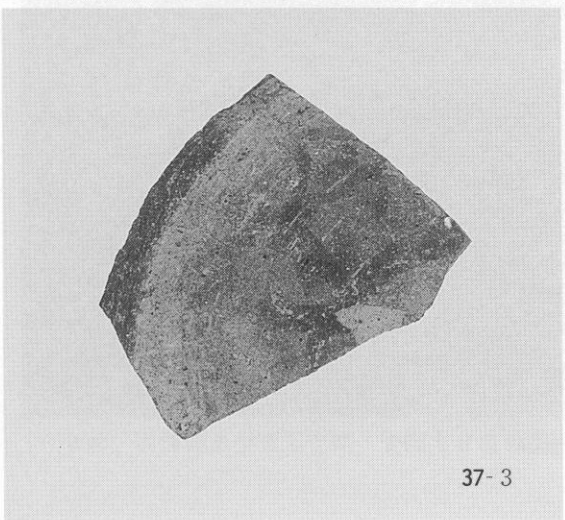
御８各層出土墨書土器



37-1



37-2



37-3



太宰府市文化ふれあい館全景

太宰府市文化ふれあい館の設計と建設

1．文化ふれあい館の性格と建設の経緯

太宰府市を東西に横断する形で建設されている、「歴史の散歩道」の中核施設として本館は位置づけられる。したがってそのガイダンス的機能を主体としながらも、保有している機能は多義にわたっている。

1）「歴史の散歩道」の散策者が、歴史を感じながら憩える機能。

2）太宰府市民が、文化財をはじめとした歴史・文化関係資料の観察と活用に親しみ、生涯学習の観点から地域の歴史、文化が形成されてきた過程を学び体験するとともに、市民の文化遺産を保有し、文化を創造してゆこうという意欲を醸成するための機能。

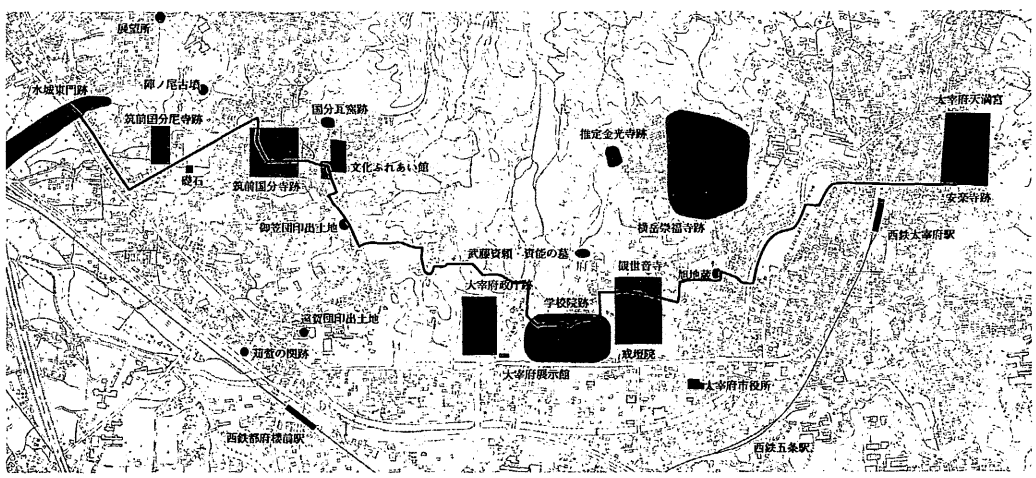
3）埋蔵文化財の発掘調査、資料収集、整理、研究及び保存、分析のための機能。

4）市史資料室の併設及び市民の歴史・文化的事業への利用。

以上の4つの機能が本館の主体となる。

通常これらの機能を有する施設の建設にあたっては、それぞれが独立したものとして基本構想がなされ、その設置目的に沿って位置、規模、施設・設備内容、事業内容等の基本構想がなされる。しかし今回の場合は、「歴史の散歩道構想」の一環として、位置、敷地面積、建築面積（容積率等）等が確定したなかで「文化ふれあい館構想」が固められたことから、上記した4つの機能を合わせ持つ複合施設として建設される運びとなった。そのためこれらの各機能が本来の目的を十分に発揮するために、複合施設としての相乗的利点を最大限に生かした計画がなされなければならず、各機能を有する部屋の設計はより多目的に利用できることを前提とし、備品についても同様な観点から選択することを心がけた。

また学習できる館として、外観や広場についても同様の機能を有することを前提としたことから、本館の屋根は隣接する史跡筑前国分寺跡出土の瓦を基調に本瓦葺きで仕上げ、館のシン



第1図　「歴史の散歩道」概念図

ボル的機能を有するものも歴史的復原物に限定して検討し、同史跡にかつて存在した七重塔の1／10模型を建設することとなった。

このように今回の文化ふれあい館建設にあたっては、施設の多くの部分で可能な限り学習素材を提供することと、多目的に施設を利用することに配慮した設計を行ったつもりである。

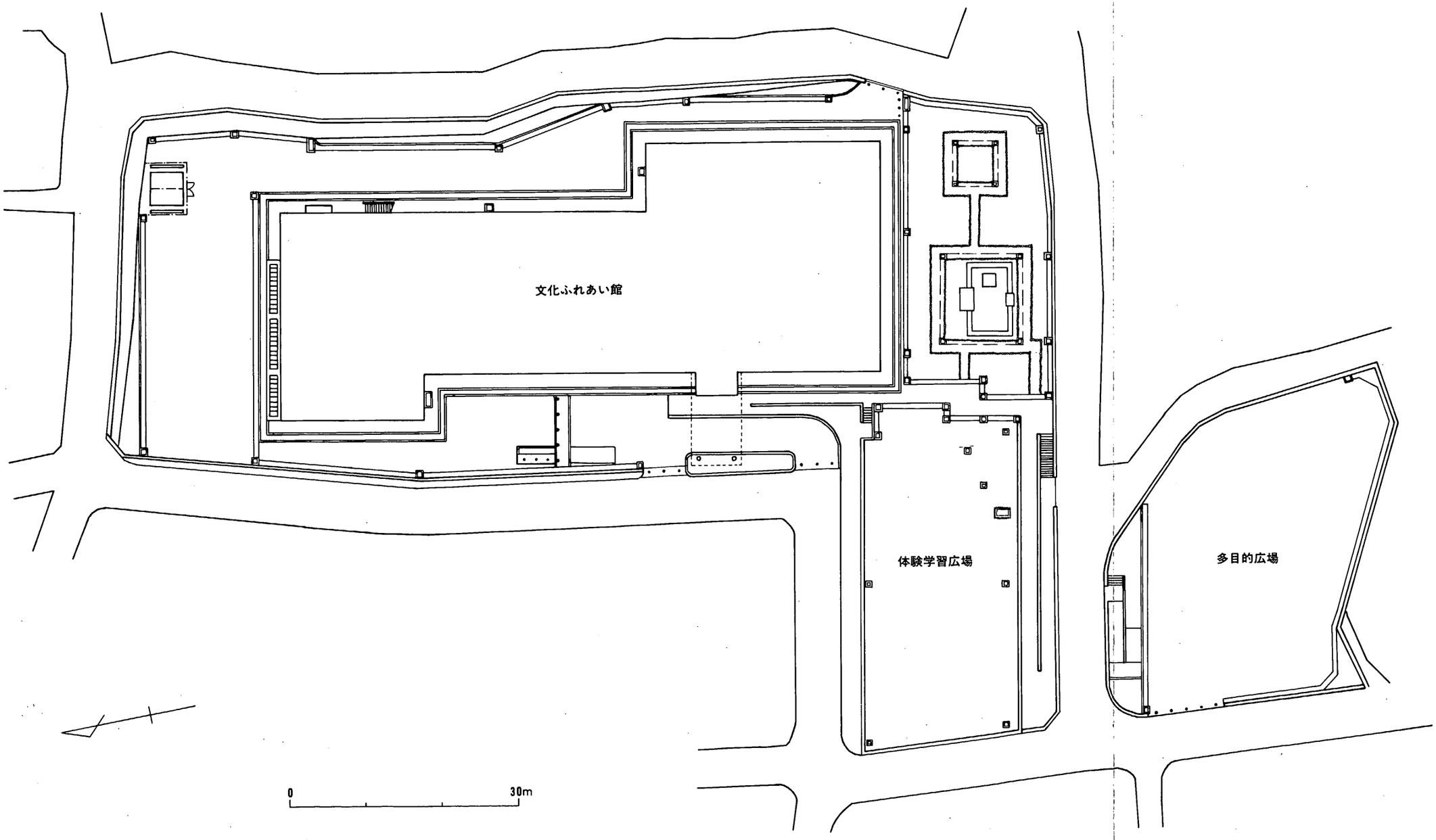
さて、この施設の建設はまちづくり特別対策事業（自治省）として行われ、地域総合整備事業債で建設された。建設までの経緯の概略を記すと、平成元年度に福岡県から当該用地の払い下げに関する打診があり、早急に内容検討を行い要望書を提出。平成2年度には基本構想等の予算が計上され、以後関係課会議、調整会議等が複数回実施され、館の内容について協議がなされた。そして平成5年5月に市長から内容の再検討の指示があり、関係課会議において埋蔵文化財センター的機能を館内に設置する件で検討が行われ、定例庁議により決定された。これを受けた文化課長は筆者に設計の担当となるよう指示し、以後は協議に文化財の専門職員が入ることとなった。その直後には一部の造成設計、同工事が開始され、秋には建築設計を担当する設計事務所も決定し、本格的な事業がスタートした。これに併せて同年10月には文化ふれあい館準備室を文化課内に設置した。そして翌平成6年夏には建築工事が開始され、平成7年度末までにほとんどの移転業務を完了させ、平成8年4月27日にめでたく開館した。

なお本稿は、このような経緯の中で建設された文化ふれあい館を末永く活用してゆくにあたって、担当者が交替しても当初の設計の概念や目的を理解して運営や管理が可能なように備忘録として記述するものである。また類似施設の建設が各地で行われ、それに伴う視察もかなりの数に達している。すべてにわたって担当者が直接対応することができない現実があり、それの資料としても活用されることを念頭に置いている。

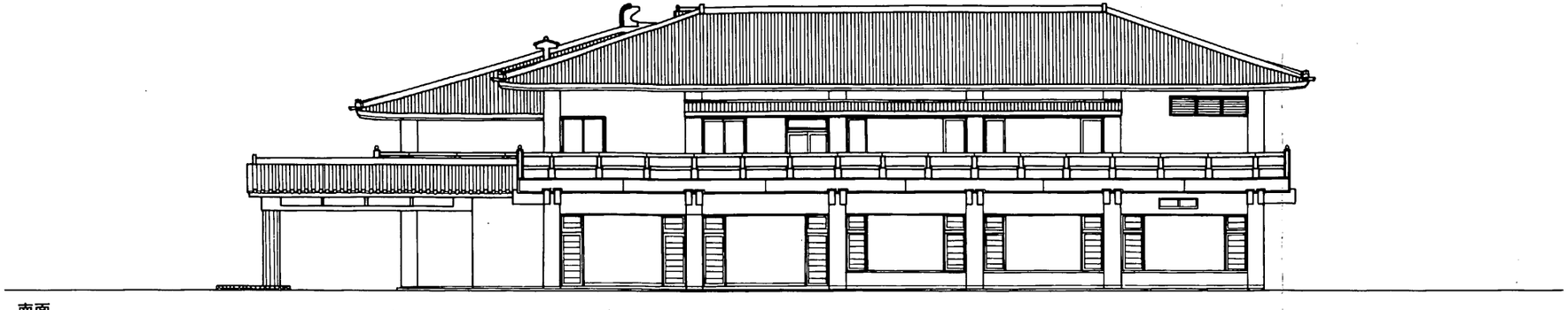
2．設計における留意点

上記した性格を満足させるためには、各部屋が十分に機能しなければならない。各部屋は基本的には個別に機能するものの隣接する部屋どおしは業務上及び事業上において関係あるものでなければならない。その視点に立脚して各部屋の配置は決定されるべきである。決してデザイン的感覚のみで配置されてはならない。したがって設計での基本理念は、使いやすいものであることが第一である。これを真に実現するには、実際の運営者及び利用者が設計に参加すべきである。

さて、これに基づいて、利用者本意に設計されるべき部分と運営者本意に設計されるべき部分を選別する必要がある。本館ではこれをできるだけフロアーで分離し、便宜を図ることを考慮した。建築サイドの立場からみても設計にあたっては動線が重要なポイントである。これを十分に配慮しないと、利用者が不便であるだけでなく、業務にも混乱をきたし決してよい結果が生まれないことは明白である。そしてこの最も重要な視点がフロアーによる住み分けで実現すると考えた。



第２図　太宰府市文化ふれあい館　配置図（１／600）



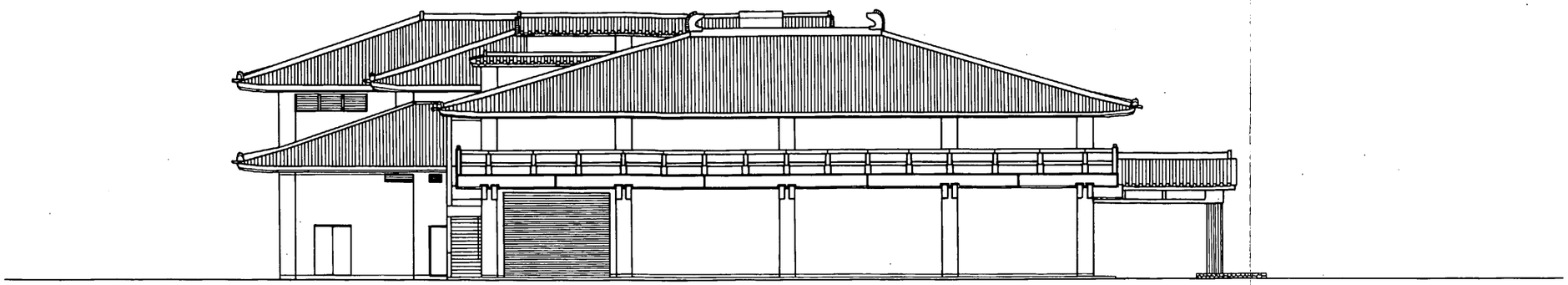
南面



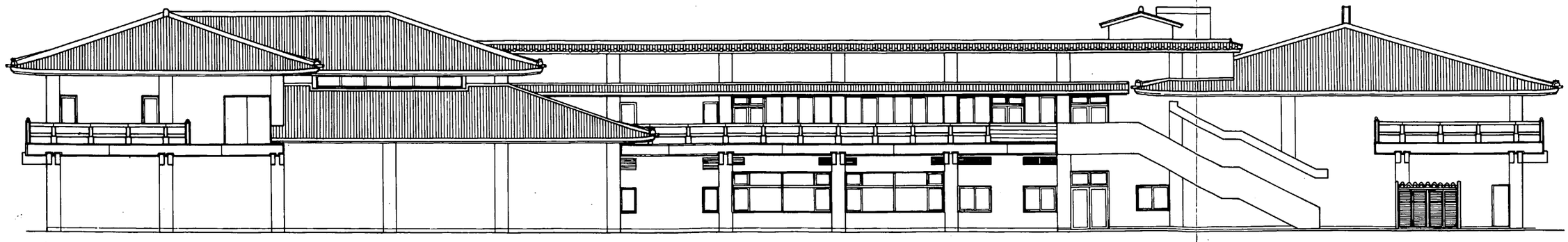
西面

0　　20m

第3図　太宰府市文化ふれあい館　立面図1（1／250）



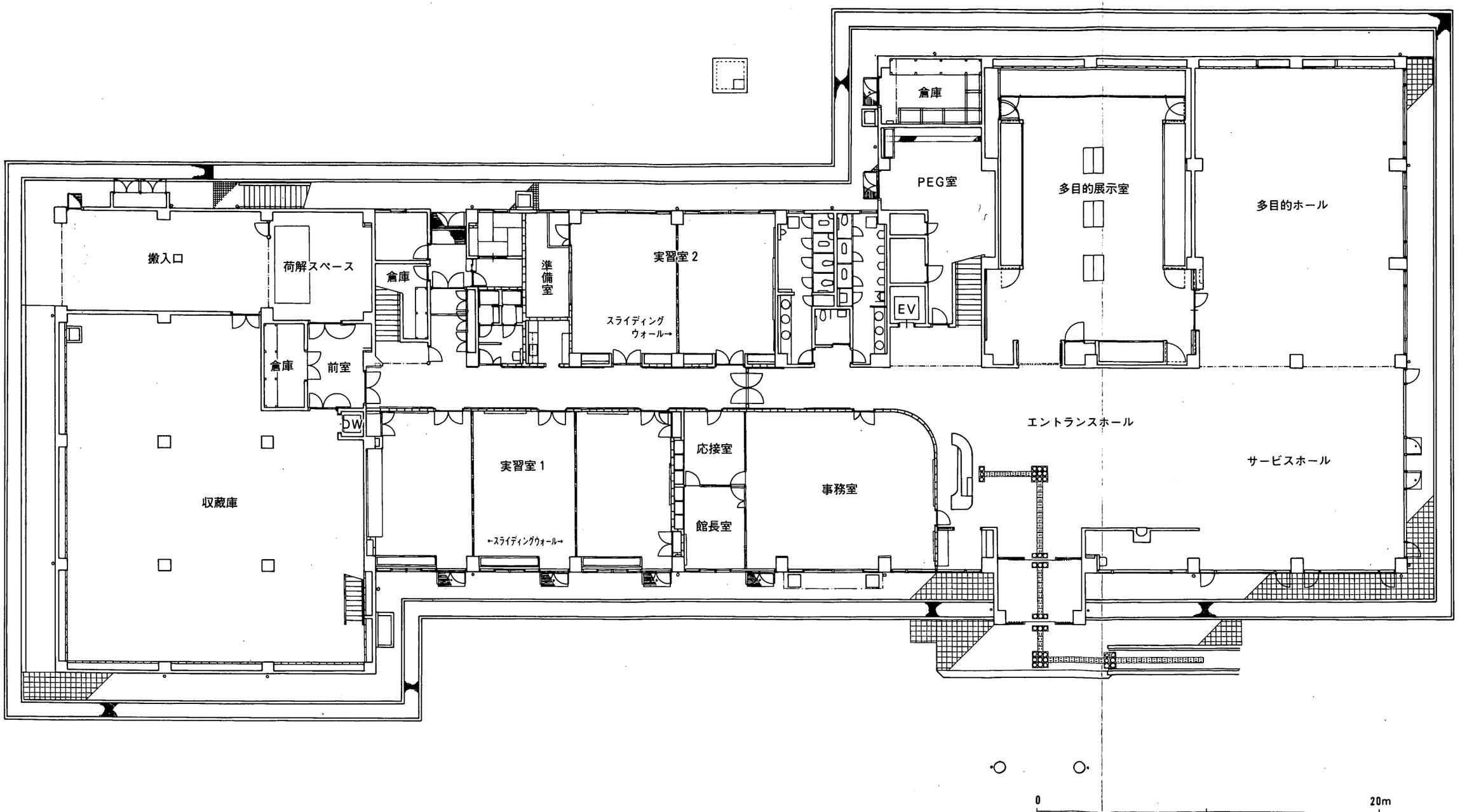
北面



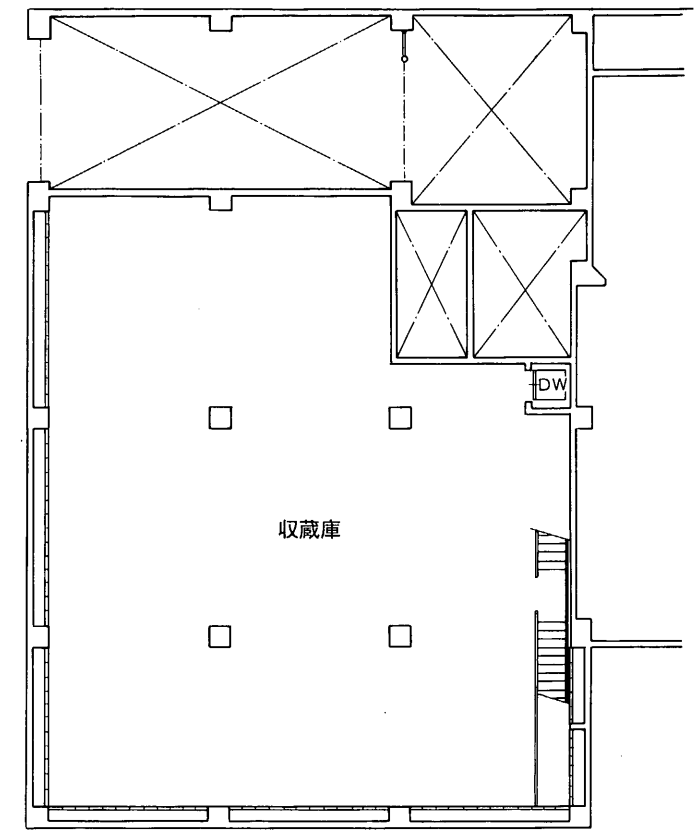
東面

0　　20m

第4図　太宰府市文化ふれあい館　立面図2（1／250）

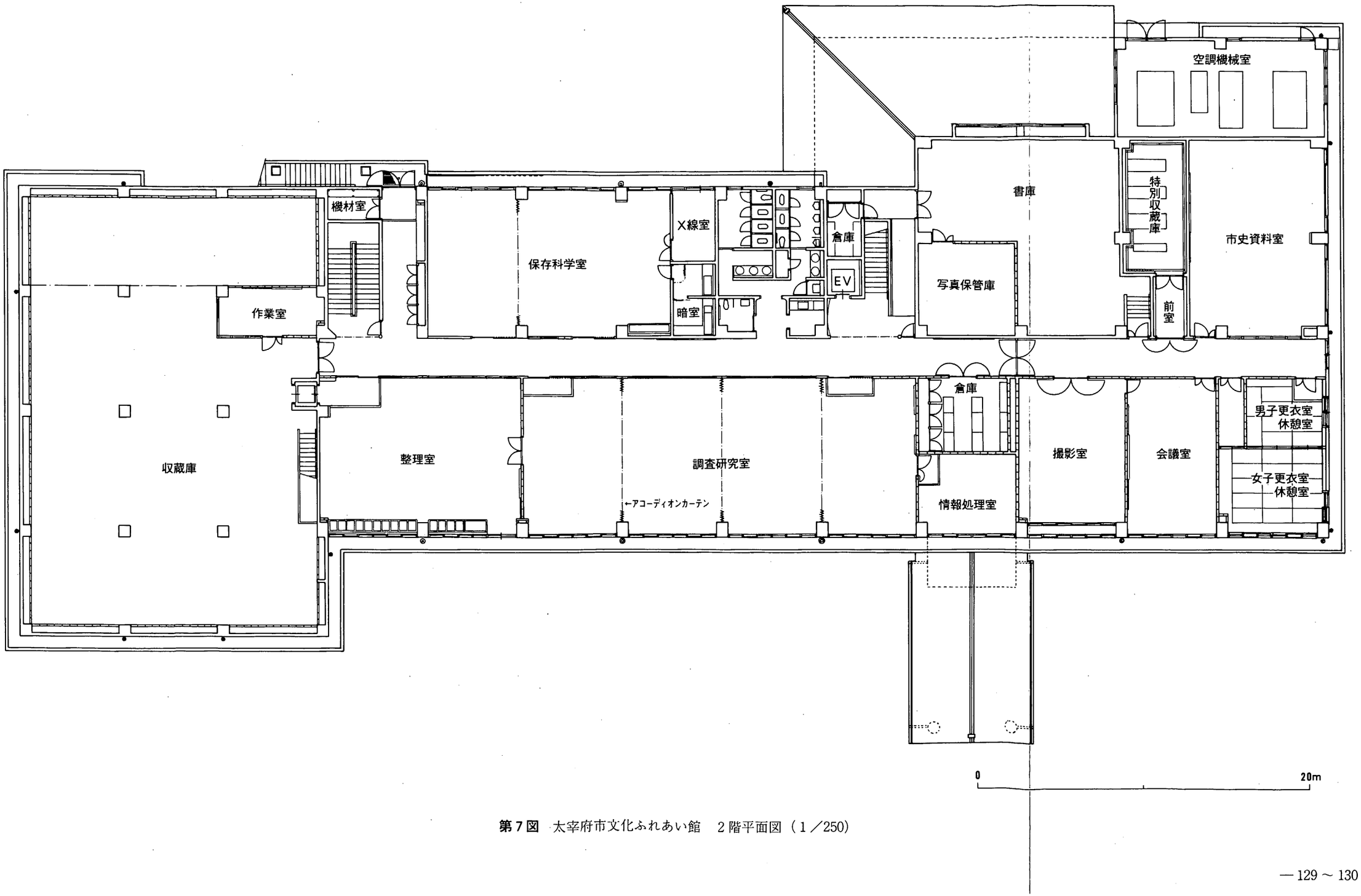


第 5 図　太宰府市文化ふれあい館　1 階平面図（1／250）

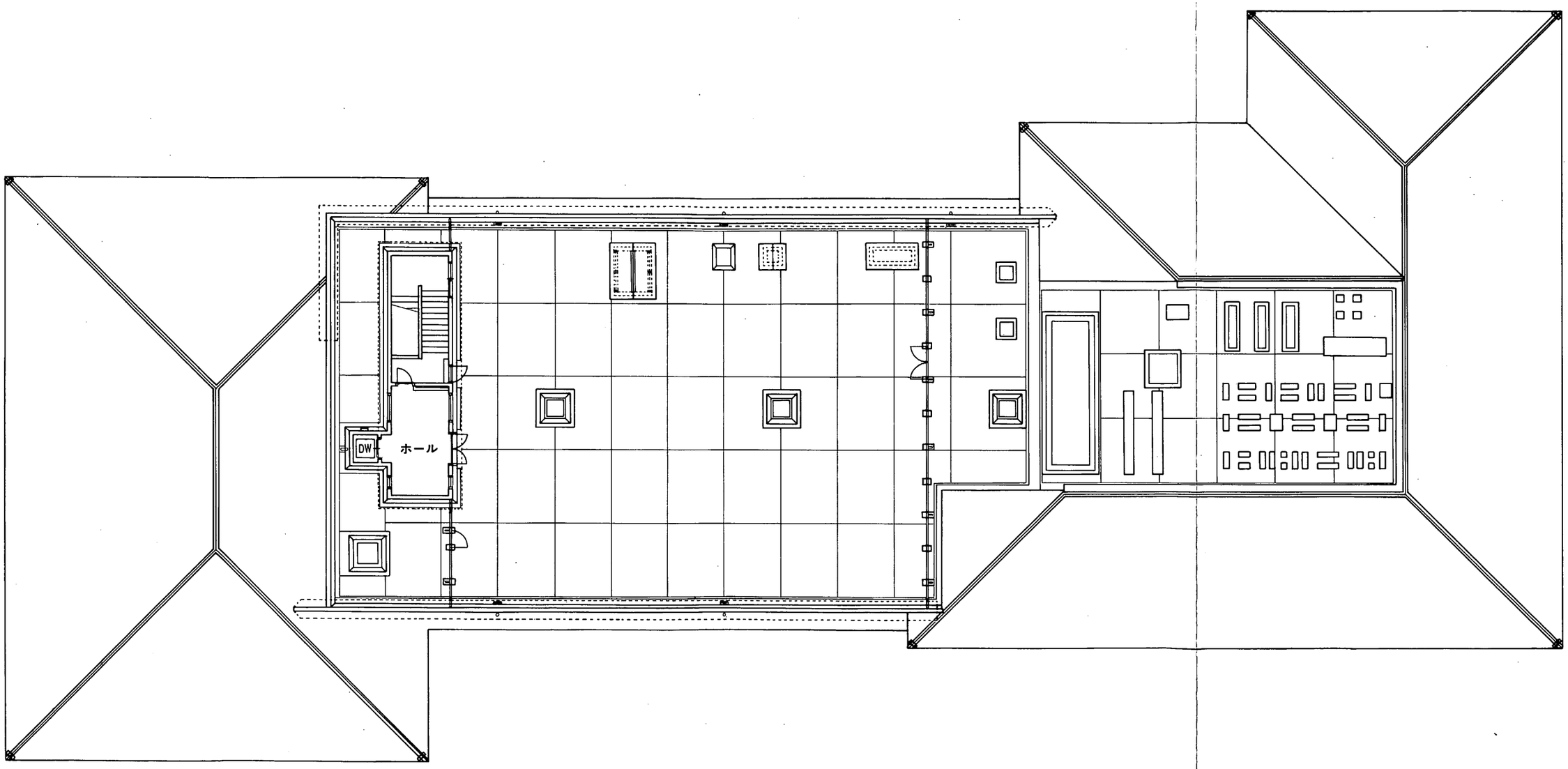




第6図　太宰府市文化ふれあい館中2階平面図（1／250）



第7図　太宰府市文化ふれあい館　2階平面図（1／250）



第8図　太宰府市文化ふれあい館　屋上平面図（1／250）

それは前面に出る啓発事業部門とその背後で事業を支える調査研究部門を明確にすることである。両者は常に相関関係にあり、どちらが手薄になっても良い事業は行えない。つまり調査・研究した成果は常に啓発部門で公開されてゆくべきであり、逆に啓発事業で出てきた様々な要望や問題点は調査研究部門で調査・分析されなければならない。このサイクルが十分且つ円滑に機能すれば、常に新しい情報が公開され、また入手されることになり、利用者の要求に迅速に答えられることとなる。これが実現すれば利用者の急激な減少や事業内容の行き詰まり、マンネリ化はある程度防げるのではないかと考える。

しかし、これが最も重要な点であると考えられるにもかかわらず、残念ながら既存の資料館や博物館の多くでは実現できていないという声を聞くことが多い。やはりこれを克服することが真に住民に根ざした文化施設の建設であると言えよう。さらにこうした公共施設は国民の税金によって建設される。利用者、運営者ともに使いやすい建物でなければ永く活用されることは期待できないし、多くの部分で改造を続けなければならない。何が税金の無駄使いを生むのかをよく考えれば、自ずとその答えは出てくると思われる。

(1) 部屋の配置

上記したフロアー分離の観点から、住民が利用する空間を1階、我々専門職員が利用する空間を2階とすることを原則として配置案を作成した。まず、1階は正面入り口近くに受付を含むエントランスホール、サービスホールを置き、入り口正面奥に多目的展示室、それに隣接して多目的ホールを配置した。不特定多数を対象とする空間をフロアーの南半分に集中させたことになる。これらのスペースを南側に置く理由は、館の南側が広場及び庭園的空間であり、くつろぎの場との隣接に重点を置いたことによる。もちろん日当たりも考慮してのことである。次いで受付の背後には当然事務室を置き、館に関わる事務を行うとともに事業を中心に行う学芸担当者はここに詰めることになる。そして、それに隣接して実習室を配置した。実習室は廊下を挟んで東西に分割したが、東側には講座を中心とした事業を主体に考えた部屋を置き、西側には古代食の調理や土器作り、拓本などの実習を中心にした部屋を置いた。この部屋を西側に置いたのは、ちょうどこの部屋の外側に小規模な庭を設定できたことによる。これは外部空間と内部空間の両方を相互に利用することが可能になり内外部で一連の実習がしやすくなると考えたからである。この配置によって特定の人（申し込みによる事業や学校の学級単位など）を対象にした事業を行う部屋を館の中央から北側に集中させたことになる。これ以外には美術品搬入口、収蔵庫、PEG室、倉庫（現場道具庫）などがあるが、搬入口が展示室や特別収蔵庫からやや離れていること、搬入口から展示室までの動線が途中で屈折していることは大形の資料搬入に対して問題点として残るものである。

次に2階であるが、利用者が活用することの少ないものを中央の階段から南側に配置した。つまり、書庫（閉架式が原則）、撮影室、倉庫、休憩室、市史資料室である。中央階段と北側階段との間には調査研究室、保存科学室、整理室を配置し、ガラス窓を廊下に配置して外部か

らの見学を可能とした。この三つの部屋は埋蔵文化財の整理作業の中枢を占めるものであり、見学者の便宜を図るというよりも集中して配置することに意義がある部屋と考える。その中で調査研究室に附属して情報処理室を配置した。これは、データの中枢部分を調査研究室が管理することを基本とした配置であると言える。

ここで収蔵庫の位置について述べておく。収蔵庫は1・2階吹き抜けで建設し、内部の積層棚を3層にして建設した。1階では搬入口と直結しており、資料の運搬の便宜を図った。上層への運搬はダムウェーターで行い、2階整理室にも取り出し口を設定した。これが整理室を収蔵庫に隣接させた最大の要因である。またダムウェーターは屋上までつながっており、土器乾燥スペースを屋上に求めることが出来るようにした。このように収蔵庫の位置はこれらの部屋の位置関係から決定されるべきであろう。ただ、撮影室も本来は整理室または収蔵庫の近くにあるべきであり、書庫もより調査研究室に隣接することが望ましいと考えるが、今回は実現できなかった。

では以下に各部屋の概要を記すこととするが、内容は主に文化課サイドからの要望に基づいて設計された部分を中心に記載しているため、建築の基本的な部分や建築設計固有の専門的な部分にまで踏み込んで記載したものではないことを付記しておく。

(2)　1階各部屋の設計

エントランスホール・サービスホール及び受付

玄関を入ると左に受付を配置した。受付には2人が常時勤務できるようにし、それに必要な長さを確保した。カウンターテーブルは大理石で製作し、前面の一部に切り込みを設けてショーウィンドー風とし、向かって左側に段差を設けてパソコンを置けるようにした。このパソコンは館のインフォメーションではなくLANに接続し、来館者に対して文化財の写真情報を提供することに主眼を置いたものである（実際の利用状況をみると後述するCD－ROM「大宰府」の閲覧が主体になっている)。受付担当者側の設備としては、書類等を入れる引き出しが必要であるが、これは使用状況によって移動が可能なように可動式として設置した。また、冬場には広い空間に長時間座ることを考えて足下に電熱器を設置できるようコンセントを用意した(実務を行ってみると足下に奥行きが少なく、電熱器が近くなりすぎるようである)。また手元には螢光灯を用意し、簡易な事務作業を可能としている。

床面は御影石を敷き詰めるが、方形のタイル状を呈していることから、館の軸に対して45度に斜行して並べるよう指示をした。古代の寺院などに敷かれる塼をイメージした配置である。この結果、視覚障害者用のタイルを斜行させることができないため、その部分について不整合が生じたが完成してみると特に違和感はない。

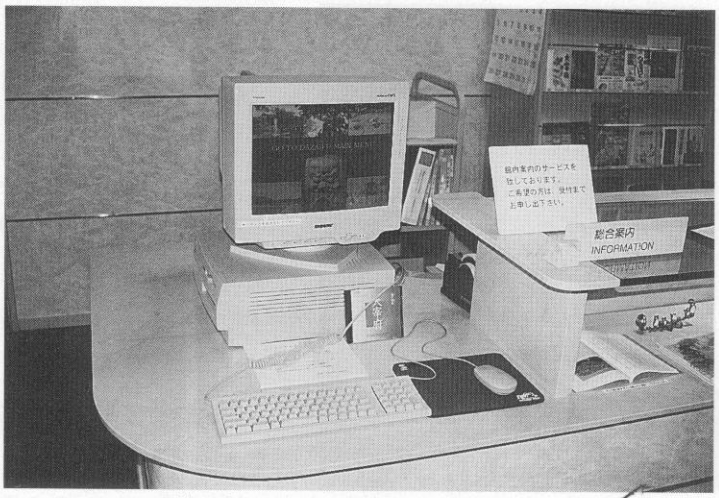
さて、この空間の問題点は天井までの高さにある。この建築は建築基準法により建物の総高が12m以下に抑えられており、ロビーを吹き抜けにするなどの措置をとると2階に配置した各部屋の面積を十分に確保することが不可能となることから、天井高を3mに抑えている。通常



第9図　エントランスホール全景



第10図　受付



第11図　受付に配置したパソコン

みられる文化施設では館の顔とも言うべきロビーやエントランスホールは天井が高く、広々とした感覚を入館者に与えている(※1)が、ここではやや圧迫感がある。ただ南側に館のシンボルを配置していることから、南側と西側は全面透明ガラスとし、採光するとともに外の風景を見やすくした。

ホールには来館者に対応するための備品がいくつか配置されなければならない。この館でのメインはやはり太宰府天満宮の樟木を利用した大きなテーブルと衝立であろう。この樟木は太宰府天満宮の中門脇にあったものだが、残念ながら枯死し平成5年（1993年）に切り倒される結果となった。その材は小石原村の森山銘木で保管されていたが、天満宮のご厚意により一部をこの館のために利用させていただくこととなった。

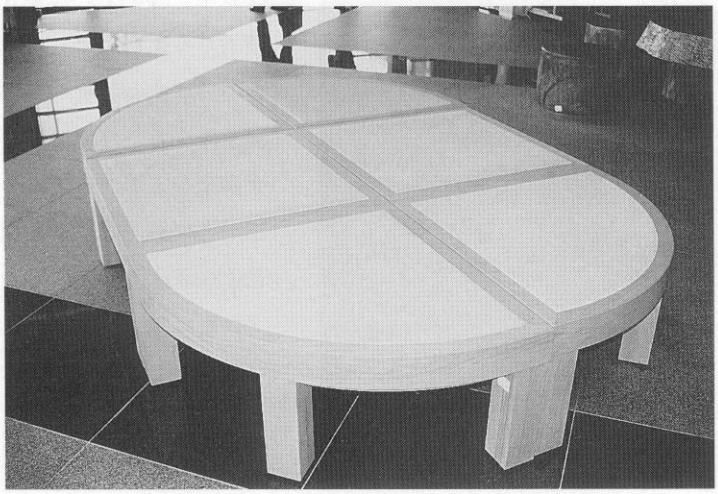
大机は長方形のものと円形のものがある。長方形のものは長さ4.91m、最大幅1.4m、板の厚さ0.12m、天板までの高さ



第12図　天満宮樟木利用の長机



第13図　天満宮樟木利用の衝立

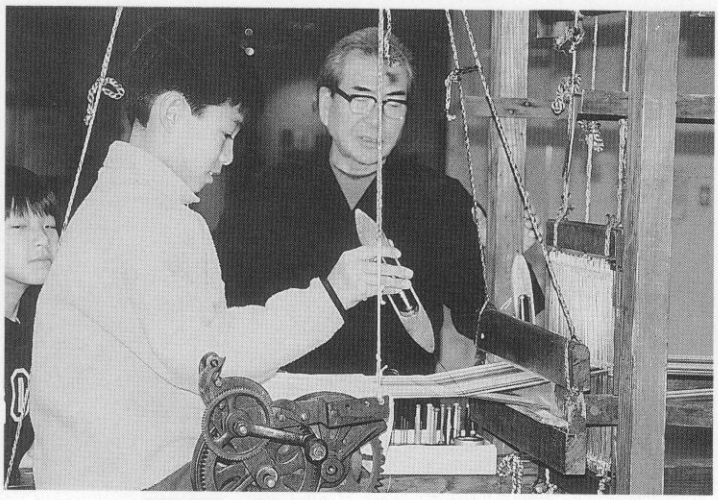


第14図　特注した「ばんこ」

0.51mで３つの脚で支えられる（脚は枝や根を利用）。円形のものは径2.2～2.4m、厚さ0.2m、天板までの高さ0.58mである。いずれも根や枝を利用した椅子が数個づつ配置されている。また衝立は円形のテーブルを立てたようなもので、径2.35～2.40m、厚さ0.16m、床からの高さは2.53mを有し、大きな脚によって支えられている。衝立と円形テーブルの表面は年輪が明瞭で、現状では270年分（衝立）が観察されるが、中央が空洞になっており、実際にはさらに約40年分程度は存在したであろうから、樹齢310年程度ということになる。1993年から計算すると1683年頃に芽生えたこととなり、江戸幕府全盛期で徳川綱吉の時代にあたる。ちなみに1687年には生類憐れみの令が発布され、約20年後の1702年には赤穂浪士の討ち入りが世間を騒がせている（残念ながらこの部分の年輪は空洞部にあたり失われている）。

さらにホールに置く備

品として組み合わせ式のばんこ（茶店風の長椅子）を製作した。先述の天満宮樟木利用のテーブルや衝立と併せて配置して、違和感のないように配慮したつもりである。結果として夏に行われた企画展では、茶店の雰囲気を演出することになり評判は上々である。



第15図　多目的ホールでの機織り体験

これら以外の設備として館のインフォメーションやクイズ等を行うパソコンを数台設置した。LANとの対応も可能なように随所にその端子を設けており、併せてコンセントも多めに配置した。このことにより、多目的ホールも含めて館内の模様替えに際しては、少なくとも柱単位でパソコンの位置を変更することが可能である（システムの内容については後述する）。またホールの一角に自動販売機コーナーを設けたが、その仕切壁を利用して磁石による掲示板を配置した。文字や内容はパソコンで記載され、それを掲示板に流し込むだけの作業で終了するきわめて簡易なものであるが、掲示の内容を迅速に変更したり、簡易な画像も取り込めるなど便利なものである。さらに受付の近くには図書閲覧コーナーも設けた。

（※1）実務のみを考えた場合、各部屋をより広く取ることが望まれる。この点で極端に高い天井は不必要であり無駄な空間とも理解できる。建築面積に余裕がない場合はやはり実務面を優先すべきであると考える。

多目的ホール

サービスホールと連続するが、床をタイルカーペットとし外見上分離した。使い方は学芸サイドに任されるが、その名前のとおり多機能となるよう計画した。まず部屋の大きさからみて200人程度の講演会が行えるよう、東側に昇降式のスクリーン、昇降式のバトンを設置し、簡易ながら放送



第16図　多目的ホール全景



第17図　多目的ホールを利用した講演会

設備も整えた。椅子は備品で確保し積み重ねて収納できるタイプを選択し、併せてステージも折り畳みの可動式とした。講演会を行わない通常は、これらの備品すべてが収納されており、広い空間が確保されることになる。また南側が大きな窓となっており通常は明るさを確保しているが、スライド上映などに際しては電動の暗幕を用意した。

さらに天井をシステム天井とし、スライディングウォールで間仕切りを行えるようにした。これは展示空間の確保に際して有効ではないかと考えたことによる。これによって仕切られた空間は照明がやや暗くなることも考えられ、展示物及びパネルへの個別照明も配慮する必要から可動式のスポットライトを用意した。またパネルの掲示が簡易に行えるようスライディングウォールすべての上部にピクチャーレールを設置した。なお小さいことだが、スライディングウォールを収納するとその部分の壁コンセントが使用不能となることが判明したが、収納状態でわずかながら腕の入り込む空間が存在することが明らかとなり、その部分に合わせてコンセントの位置を変更した。

多目的展示室

展示室はケースの中が明るく感じるよう部屋自体の照明は極力落とし、室内に露出展示したり、小型のショーケースを直上から照明する場合を想定してスポットライトの設備は取り付けた。また部屋の高さは他の部屋が３ｍに抑えられているのに対して、この部分のみ４ｍを確保した。また動線の関係から出入口を２箇所に設けたが、両者とも防火扉である。

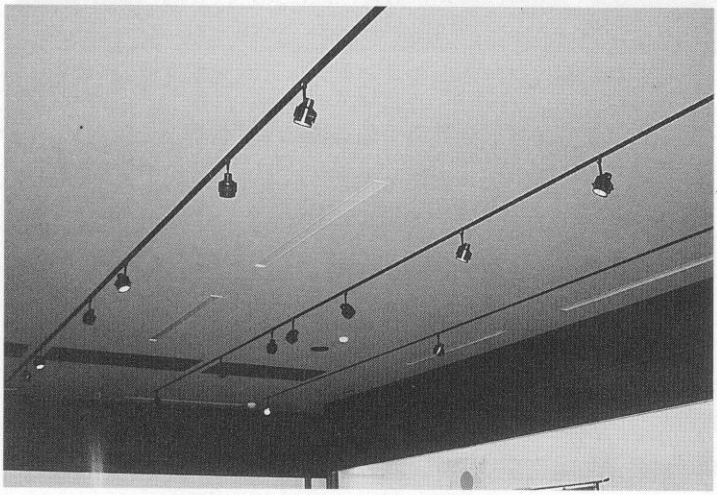
さて、従来の博物館・資料館等では常設展示室と企画（特別）展示室の２室を保有していることが多い。本館においてもそうした案がないではなかった。館の性格上、「歴史の散歩道」のガイダンス施設としての性格を維持する観点から常設展示の必要はあった。しかしながら、その観点に立脚した展示内容は既存の「九州歴史資料館」や「大宰府展示館」の展示内容と重複することが極めて多く、したがって太宰府市を訪ねる多くの人々に同じものを３回も見せることになること、展示する遺物が３箇所で重複し複製を大量に製作する必要が生じること、特定の資料を見せることに目的を置いた建物でないこと、さらに常設という性格の展示自体が２回目以降の来館者に対して訴えるものが小さく、展示の企画立案に時間と費用をかけた割には



第18図　多目的展示室



第19図　ウォールケース内のスポットライト



第20図　天井のスポットライト

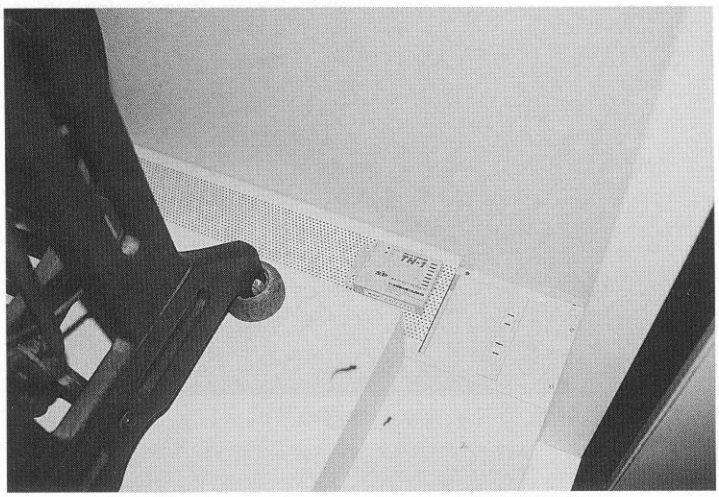
年月の経過とともに不評となっていく現実があることなどの点で、常設展示室を置くことは断念した(※２)。このことから展示設計を切り離さず、建築設計の中に組み込んで設計を実施することとなった。

このように本館の多目的展示室は企画（特別）展示専用として計画されることとなった。この点で最も難題となったのは展示ケースの規格である。常設展示の場合、中にどのようなものを展示するかが予め決定しているのでそれに合わせたものを作ればよいが、それが全くの未定となると様々なものをどのようにでも展示できるという融通性が求められなければならない。設計段階でイメージした展示品は、土器・陶磁器・瓦などの考古資料、文書、掛け軸や絵巻物などの絵画資料、手箱や仏具などの工芸資料、仏像・神像などの彫刻資料である。しかしこれらの資料はそれぞれで材質や形状が異なることは周知のとおりであり、すべてをカバーする展示ケースを作ることは至難の業であろう。

したがってここでは通常みられる展示ケースより奥行きをやや広げること（A）、エアタイトケースを最低一つは確保すること（B）、高さは制約があるものの最大限に確保すること（C）、ある程度の重量に耐えられる掛金具（ハンガー）があり、自由に移動あるいは付け替えが可能なこと（D）、照明に注意を払うこと（E）などに重点を置いた。また建築開始後しばらくして阪神淡路大震災が発生したことから、出来る限りの地震対策もおこなった（F）。

さて、Aは彫刻など奥行きのある資料を考慮したが展示室自体のスペースに限界があり、1.2～1.4m程度で妥協せざるを得なかった。したがって等身大の仏像（特に座像）などは蓮台の幅が大きくなるため展示がかなり困難である。しかし、奥行きが通常よりも広いという事は展示作業を楽にするという利点があり、展示作業中に資料を傷めないよう配慮するには広いにこしたことはない。なお、展示ケース内の床は広くなる分だけ強度(特に重量)に注意を払った。

Bは指定物件を展示するには必要不可欠なケースである。現在のエアタイトケースは調湿剤の加減でかなりの範囲まで湿度を調節できることから、文書とか金属などと限定して設計する必要はなくなった。なお温湿度の管理はデジタル式のものを採用した。コンパクトなものであり、置く場所に制約を受けず、展示中もその存在に気づく人は少ないであろう。またデータがフロッピーで管理・保管できることから長期間にわたるデータ収集に対しても場所を取らず便利である。



第21図　ケース内のコンセントと温湿度計測器

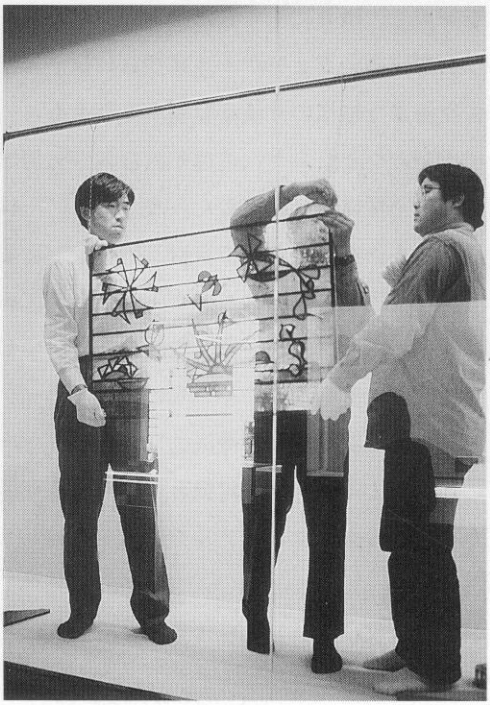
なお他のケースはノンエアタイトで、室内の空調によってケース内の調整が出来るように設計した。

C・Dは軸物の展示をイメージしたことによる。涅槃図や曼荼羅図などはかなり大きく、高さや重量も相当なものになる。現状でケース内の高さは3m程度であるが、よほどのものを除けばカバーできる寸法である。

Eは特に記載するまでもなく展示の常識で、調光はすべてのケースで行えるようになっている。ウォールケースではスポットも必要に応じて増減が可能である。また管球の取り替えを展示中に行う必要が生じた場合、展示ケースの中に入って取り替えることは展示物に対してあまりにも危険が多い。そのため展示ケースの外から取り替えが可能な設計になっている。ただ下からの照明を行っていないため、展示品によっては別途下からの照明器具を用意する必要がある。ショーケースでは中に展示台を置いた場合、平面的な資料ならば上からの照明で十分対応



第22図　ライトの取り替え風景



第23図　展示替え作業風景

が可能であるが、立体的な資料を置いたときにはかなり閲覧がしにくい状況となる。それはケース内の床と上部照明器具との距離が狭い上に、実際に閲覧するガラス面と照明器具が近すぎることから生じるもので、資料の下面に照明が必要な場合を考慮してケース手前側下部に照明器具を設置した。また高さがガラス面近くまで達する資料については、天井からのスポット照明で対応することとした。

Fは設計が出来上がり本体工事もはじまり、工事図面を製作している頃であったので大幅な変更は不可能であった。したがって次の点を確認し、若干の変更を行ったに留まる。

・展示ケースのガラスは耐震性のあるものを用いても、揺れには強いが転倒物・落下物に対する衝撃には弱く、破損すると鋭利なガラス片が散乱し、展示物に壊滅的なダメージを与える場合があり採用できない。最良のものとしては飛散防止ガラスにフィルムを貼る案が最も効果的で安全性が高い。しかし今回は飛散防止ガラスは採用できず、フィルムを内面から貼ることで対応した。飛散防止フィルムの選択は難しいが、閲覧者を専門家に限定しているわけではないので、透過性の良いものという条件にとどめた。

・小型のショーケースは元来移動可能なものであるが、横揺れに弱いことが明らかとなった。これへの対応として、キャスターを2隅につけるが4隅には固定脚も取り付け、展示中は必要な固定脚をおろし安定させる。地震の際には2隅のキャスターが揺れを逃がす役目を果たすと予想される。また当初から安定性を重視して脚（キャスター）は短か目に作り、ケース底と床面の間を狭くした。さらに床面の素材を検討し、吸音、吸湿、埃防止に優れたタイルカーペッ

トを採用し、滑りにくくした。

なお背の高いショーケースは揺れに対する転倒の状況についてデーターを収集し、安全な比率になるよう縦横の寸法を変更するとともに、固定が可能な構造に変更した。

・大型のウォールケースはそれ自体が転倒すれば観覧者に多大な被害を与えかねないので、背後で柱乃至は壁に固定した。またルーバーは通常はめ込み式となっているようであるが、地震によるルーバーの落下で資料に損傷を与えるため、すべて固定式とした。

・ケース内の展示台は当初から固定されているものではないが、これが振動して展示物を破損に至らしめる可能性が考えられた。展示中に何らかの固定方法を考える必要があるが、ケース内の床の素材を滑りにくいものとした。

・その他照明器具類は徹底的に固定化を行うよう指示をした。

これらによって、地震対策としてはある程度の配慮はできたと考えている。今後はこれを踏まえて本館の耐震マニュアルを作成し、館としての展示資料及び観覧者への姿勢を示すべきであろう。

さらに消火にはハロンガスを用いるようにしたが、これ以外に備え付ける消火器も粉末のものとした。

このほか展示ケース内にコンセントを設けて、掃除機などが持ち込めるように配慮したが、内容によって手前から小さなスポットを当てたり、電気製品を使用する展示を行うような場合のためにさらにコンセントの数を増やすことが望まれるし、ケース内面の手前側にも若干量のコンセントを設けるべきであった。

なお、パネルの展示空間として廊下も活用できるよう、１・２階とも廊下天井部分の両サイド（壁面上部）にはピクチャーレールを設置した。使用してみると廊下の位置によってはやや暗い部分が存在し、簡易のスポットライトを設置できるような配慮が必要であった。

（※２） 常設展示は原則として行わないことに決定したが、「歴史の散歩道」のガイダンス施設という性格上そのコースにある遺跡や名勝を解説したパネル及び若干の資料は常に館内のどこかに配置しておく必要があると判断されたため、通常は多目的ホールをそれに充てることとした。したがってそれに伴うパネル作成と若干のレプリカ作成は行っている。しかし、実際に館が運用されはじめてみると企画展示の内容によっては多目的ホールまで取り込んだ企画となったり、大人数の講演会が度々開催されるなど常設展示については当初のイメージどおりには必ずしもなっていない。このあたりが設計の難しいところと言える。

事務室・館長室・応接室

受付の背後（北側）にこれらの部屋を配置した。事務室には空調や警備などの機能を集中管理する必要からすべての機械の操作盤が設置されることとなり、かなりのスペースを奪われた。また開館にあたって、当初計画していた人員を大幅に上回ることとなったため、結果として人数の割には確保した空間は狭い。なお床はOAフロアとし、タイルカーペットを敷いた。

室内には磁石による掲示板を制御するパソコンのほか、LANに接続されたパソコンも置き

情報の連携を図っている。また開館後にこの部屋へ直通となるISDN回線を引き込みインターネットへの対応に備えることとした。



第24図　事務室

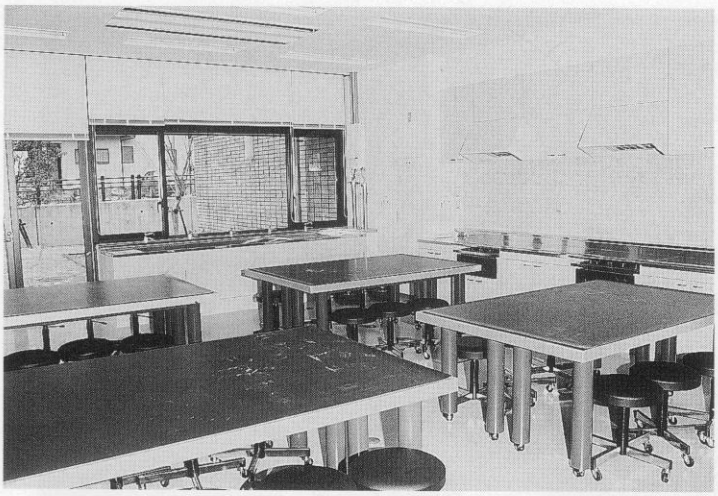
実習室１

実習を目的とする部屋で３室に分割可能な設計とした。実習という言葉で設計に際してイメージしていたのは、拓本実習、古代料理実習、昔の子供のおもちゃ作り、季節行事の小物作りなどである。これらについて基本設計段階では小規模で性格を特定した部屋が並んでいたが、本館がすべて多目的に活用できることに主眼を置いていることから、使用目的をなるべく限定せず、さらに使用人数によってもある程度の対応が可能なようにする必要が感じられた。したがってまず大きな部屋を作り、それをスライディングウォールで区切ることを考え、基本的には３室が同じ様な機能になることを考慮した。しかし料理実習をイメージした場合、ガスコンロ、換気扇といった設備や炊飯器、冷蔵庫、食器棚などが必需品として揚げられる。これらを３室に設置することは逆に無駄となり、北側の１室を一応その専用空間として位置づけ設計を行った。ただし、ガス栓や水道管を室内の中央にまで配置すると完全に固定された目的にしか利用できなくなり３室に分割可能にした意味がなくなる。そこで将来、料理関係の実習や貸し室利用が増加するようであれば専用の部屋として改造することとし、設備のみを整え、あえてガス栓や水道管を中央部に配置することはしなかった。またコンセントも床には配置しなかった。コンセントが床にあると便利であることはわかっていたが、使用時にはかならず数cm程度が床面から飛び出し、未使用時でも完全に床が平坦になる構造のものがないため、机の移動や貴重品の移動時に躓いて事故につながる可能性が高いと判断したことによる（実習室２も同じ）。実際の使用においてうまい運用を望むものである。

さて、一般的な作業に対応するために簡易の流し台だけはすべての空間に配置し、ホワイトボードも同様に配置した。空調も３室別々に調整できるようにした（事務室で制御）。音響設備も確保したが、南端の部屋に中枢部を置いた関係で、例えば中央の部屋のみで音響設備が使用できないという状況になっていた。

また部屋の性格上、工作ができ、料理ができ、講座や会議もできなければならないという観点から、多目的に活用できる机を特別に設計し発注した。

机はまず講座、会議ができるという点から450×1800㎜の天板を有するものを作成し、３人



第25図　実習室１（机にはラバーを被せている）



第26図　実習室１における実習風景



第27図　作業机（手前が基本的な形状）

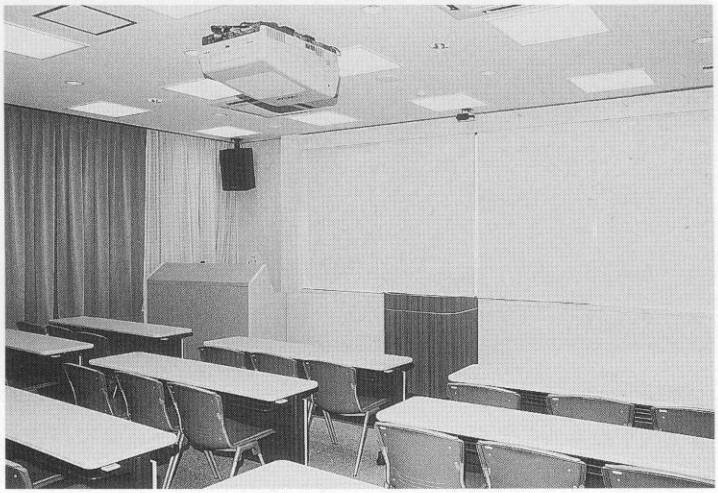
掛け程度をイメージした。しかし工作や調理には机上の面積がこの倍は必要であると判断し、実習では両者を組み合わせて使用できるよう天板の裏側に簡易のジョイントを用意した。これで900×1800㎜となり作業台として活用できる面積が確保できる。ただこのまま使用すると中央の接合部分に小さな溝ができることと、天板に多数の傷が付くことは避けられないことから、机上面積に合わせたラバーを用意し実習では机の上に被せることとした。さらに料理実習に際しては机上の水分が速やかに除去できるようにしなければならないことと、傷が付きにくいことなどを考慮してアルミのカバーを作成し、合体した机をすっぽりと覆う形で作成することとした。なお移動を考慮してキャスター付きとするとともに揺れを少なくするよう脚の構造を強化した。

この机は全部で24台製作し、８台づつ３室に分散している。現状では実

習に際して十分に活用されているようであるが、使用時点での問題点としてラバーがやや厚くなりすぎ取り外しに際して重いことと、簡単には巻けないことが揚げられる。またアルミ天板も大きなものとなり、外した時の保管場所に苦慮する状況である。

実習室２

講座を中心とした設計とし、72人分の机（３人掛け）を用意した。会議等にも利用可能なように部屋を２分割出来るようにしているのは実習室１と同じである。



第28図　実習室２

この部屋には視聴覚のシステムとしてパソコンを活用することとした。館内は情報処理室を中心としてLAN回線を張り巡らせている。これを利用して館で収集した情報を本室内のスクリーンに投影しようとするものである（館内の情報設備は後述する）。

またパソコンの特性を生かして瞬時に情報をキャッチし、集計するシステムを導入した。開館に併せて製作したCD－ROMあるいはクイズのシステムと合体させてその回答を集計し、講座に活用しようとするものである。特に小学生を対象とした講座には有効と考えられ、遊び感覚を取り入れながら学習することをめざす観点から、興味ある手段と言えそうである。

さらに写真情報は一般的にはスライド上映を行うが、すでにデジタル化された写真や、講座までにファイルに取り込めた写真は、パソコンを通じてスクリーンに投影される。この場合、拡大や縮小が自由自在であること、２枚以上の写真を並列して比較検討が可能なこと、写真の上に線や記号を解説しながら書き込めること（書き込んだファイルを上書き保存しなければ原版は傷まない）、図面や文章も同様に投影できることなどスライドにくらべて活用の幅は大きい。

なお、音響設備等もパソコンによる制御で遠隔操作が可能となり、ビデオやCDなどを制御するとともに、スクリーンや暗幕に至るまでパソコン制御とした。

PEG室

保存科学室に接続してもよかったが、廃液処理の関係から１階に配置する必要があった。PEG含浸処理装置の廃液を溜めるタンクを外部に設け、それに直接排水できるよう室内に排水溝を設置した。また水洗が可能なように流し台の設置も行った。

ただ機器類の設置は設計から切り離されて別に契約を行ったため、設計事務所との打ち合わ



第29図　PEG室

せが円滑にいったとは決して言えない。そのため導入した機器類の排液口の位置と躯体に設置した排水溝の位置が離れすぎ、実際の廃液では僅かながら支障が生じる可能性が残されてしまったことは惜しまれる。

また、多目的展示室設計時に柱と壁の位置関係から展示ケース裏に、わずかながらまったく使用不能となる空間が出来ることが判明し、壁の位置を展示ケース側に移動することによりこの部屋の空間を若干広げることに成功した。

さらに、PEG処理には多量のPEG溶剤が必要となり、それを保管しておくスペースを特に設計していなかったが、この部屋が階段下の部分を含んでいたことから、利用不能となるスペースを応急的にそれに充てることができたことは幸いであった。

なおこの部屋には、真空凍結乾燥機も置いている。

搬入口

通常の美術品搬入口と同様の設計である。運搬車導入のための面積は、館への交通事情および敷地内の車両進入スペースから4tトラック程度が限界であり、それに対応するだけのものを確保した。荷解きスペースにはテーブルリフトを設置するとともに、シャッターによって車両搬入口を仕切れるようにした。排気ガスによる資料の汚染防止対策の意味がある。

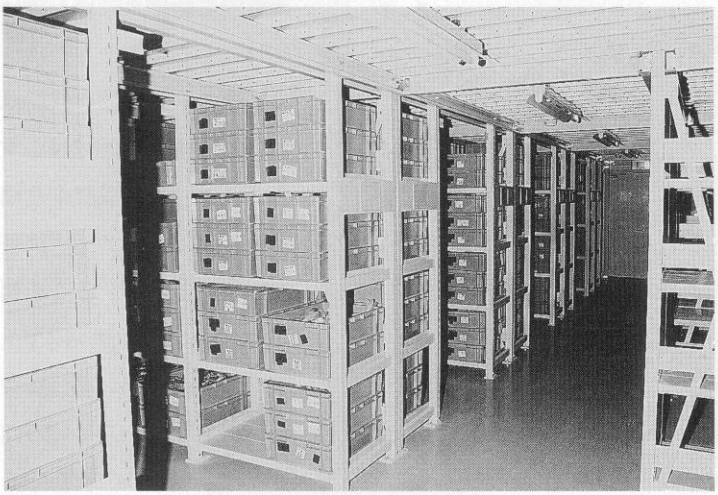
収蔵庫

太宰府市が発掘調査を実施した、埋蔵文化財の出土品を管理することを目的として設計した。設計段階で太宰府市が保有している文化財資料のうち最も量の多いものがこれであり、従来は3箇所にあったプレハブ事務所に保管していたものである。これを基本的には統合し、市としての管理箇所を少なくしようとするもので、現在は1箇所の事務所を除いて他は管轄から除外した。

さて、収蔵庫の構造から解説する。館の北端の大半を利用し、室内は天井までの吹き抜けとした。設計当初の建築基準法では、途中に床を設けると容積率が規定をオーバーすることから天井近くまで届く棚を設置して、棚内の遺物は移動式のリフトを利用して収納しようと考えていた。しかしこれでは高所の資料を出し入れする際に危険がいつも伴うことが懸念されていた。また編み目の板（グレーチング）を途中に渡して仮の床とする方法も考えられたが、特定行政



第30図　収蔵庫（３層目）



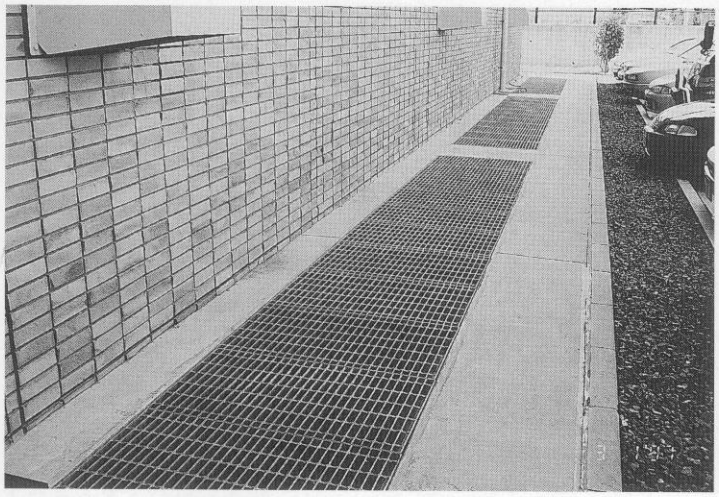
第31図　収蔵庫（１層目）



第32図　収蔵庫内の給排水設備

庁との打ち合わせにより棚の中程に床を設けられることが明らかとなった。これを受けて再度検討を重ね、内部を３層とし、下段と中段は固定式の棚を配置し、上段はレールを敷いて移動式棚（免震装置付き）を配置することとなった。重量計算の結果、これでも十分に下の棚は上部を支えることが明らかとなり、単純な床面積に対して３倍の床面積を確保したこととなった。さらに移動式の棚を設置したことにより、その部分は固定式棚の２倍近い容量となり、合計で４倍近い収容量を確保できる結果となった。ただ、棚収納にそぐわない資料（甕棺などの大型遺物）もあることから、３層目の一部では棚を取り付けず、将来棚が設置可能なようにレールのみを敷いている。現在その部分に大型遺物を置いている。なお棚内に一般的なコンテナを置くとすれば、15372箱が収容可能である。

また１層目の一角を出土木製品専用とした。そ



第33図　屋外の木器保管用水槽



第34図　収蔵庫内の陶磁器コーナー

の内容は所定の部分の棚をすべてステンレス製とし、水分による腐食を防止できるよう配慮した。さらに現状では多くの木製遺物は真空パックされて保存処理を待っているが、その作業以前の木製品は直接コンテナに水をはって収納しているため、どうしても水の管理が必要となる。このため収蔵庫内に給排水設備を設けて対応することとした。

大型の木製遺物の収納は室外に水槽を設けて対応することとした。収蔵庫北側の軒下に若干のスペースがあったことから、そこを幅1.6m（内法）、長さ7.0m（1つのみ5.6m）、深さ1.7m（ウォーターレベル1.3m)に掘りくぼめ水を貯えることによって対応している。水槽は全部で3層あり、水の管理は自然の雨水が流れ込むように配慮し、一定の水位に達するとオーバーフローして排水されるようにした。北側に設置したことから日当たりの悪いことが幸いし、藻や昆虫の発生はほとんどみられなかった。また清掃に際して強制排水が可能なように電動のポンプを用意し、近くにコンセントを設けた。

資料の搬入には搬入口を用いることにし、直接出し入れ可能なように1階の2箇所に出入口を設けた。収蔵庫に伴う出入口は2階の廊下につながるものと併せて3箇所設定した。

ところで太宰府市では、これまでの調査で輸入陶磁器の出土量が博多遺跡群と並んで大量であることから、陶磁器の分類や編年を中心とした研究が進んでいた。これに対して日本全国あるいは東アジア諸国から資料の見学が絶えず、このニーズにも応えられるよう陶磁器の分類コーナーを設けてみた。従来は塩化ビニール製の箱に収納していた白磁や越州窯系青磁などを直接、一般市販品の透明トレー棚に移しただけのものであるが、すでに複数の見学者があり好評

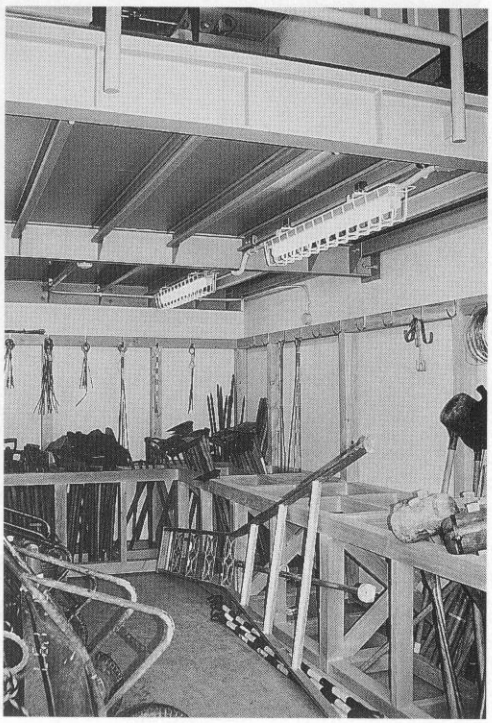
を得ている。ご活用いただくことを切望している。

この陶磁器コーナーの横に小規模な作業室を設置した。見学者が実測作業などを行うときに活用してもらっているが、本来の目的は報告書作成に関わる遺物選別作業を行う場所である。太宰府市では遺物洗浄後、実測資料抽出までの過程で発掘調査担当者がすべての資料をチェックし記録する作業を行っているが、報告にあたって最も重要な作業であることから時間と場所を要するものである。収納スペースにこの空間を確保してからは作業の流れが円滑に進み、選別後収納されるものはそのまま収蔵庫の所定の場所に入り、抽出資料は隣接する整理室において所定の作業に移行するという仕組みとなった。

なお室内の空調は吸気・排気のみで自然の環境に近い状態である。したがって金属製品や紙・布等の温湿度に対してデリケートに反応する資料は収納できない。また遺物の昇降はダムウェーターを設置して行うこととし、整理室、屋上とも直結している。

道具保管庫

発掘調査で使用する道具類を保管する場所として設計した。多目的展示室に隣接した位置で計画したため天井高が4.4mと高く、内部を2階建てにし、シートや土嚢袋などの軽いものを2階に置き、唐鍬やスコップといった道具類を1階に置いた。唐鍬などを立てて保管する棚は特注した。



第35図　道具保管庫

以上、1階に配置した主要な部屋を概観したが、このほか1階には実習での汚れを洗い流すために簡易のシャワー室を設けたほか、警備員室（人的常駐警備が必要な場合の備え）、清掃員控え室がある。全体を通じて雑多な用具類を収納するスペースが不足していることは否めない。収蔵庫は設計当初から埋蔵文化財の保管以外に利用は考えていなかったことと併せて、設計段階では想定できなかった様々な在庫品の管理や展示に使用した看板やパネル類などが日を追って増えているのが現状である。そのすべてを保管する必要性がある訳ではなく、スペースの狭さを念頭に置いた再利用や思い切った処分が必要となるであろう。また清掃は業務委託したが、道具類は常備することとなり階段下の倉庫で対応したことも倉庫不足の要因である。



第36図　調査研究室



第37図　調査研究室の遺物実測空間

(3)　2階各部屋の設計

調査研究室

埋蔵文化財の整理作業の中枢で、土器の洗浄や復元作業を除いた他の作業をここで行っている。つまり実測、トレース、レイアウト、原稿作成等である。

さて、部屋は長さ24m、幅9.6mとかなり広い。広い空間を確保した要因はいくつかあるが、簡単に言えば次のとおりである。図面や出土遺物の整理には広い空間を確保しておく必要があること、将来何らかの要因で埋蔵文化財部門がこの館から外れたとしても、広い空間を最初から維持しておけば異なった目的に速やかに変更することが可能であること、個別の部屋を多数作ることで個人の空間を維持しようとする人も少なくないが、公共施設としてそうした狭い空間を多数作ることは閉鎖性を強調することとなり、一般的に好まれることではない。大きくはこの3点から広い空間を確保した。

ところで、この空間はアコーデオンカーテンによって4分割され機能によって概略を区分している。区分する必要性は省エネである。担当者の多くは日中は現場に出かけており、不在となることが多い。こうした状況では照明や空調はまったく必要ない。したがって電灯、空調ともにブロック毎に操作可能とし、且つ担当者の作業する空間を集中させ、不用な電力を使わないことに努めた。

またこの部屋は事務所としての機能は保有せず、あくまでも作業場としての位置づけから職員の事務机を置くことは認められなかった。そこで技術職員一人当たりに作業台を2つ用意して広い作業空間を確保し、キャスター付きワゴンで書類等を管理することとした。この程度の

作業空間があれば十分な作業が行えるものと信じている。

他の空間（南北両端）は、遺物実測専用の部分と写真・図書等の整理専用部分に分けている。強いて分割する必要性はないが、写真整理部分については作業内容から大きめの作業台を確保するとともに、その部分の窓には紫外線カットガラスを用いて僅かでも写真に与える悪影響を少なくする配慮を施した。

さらに床は廊下よりも若干高くしてフリーアクセスフロアとしフローリング仕上げとした。床下にはLANの配線を充実させるとともに、床コンセントについては変更可能な構造となるようお願いした。

なお作業全体が見学出来るよう整理室、保存科学室とともに廊下に面した壁はガラス張りとなっている。しかし作業事態が特殊なものであり、なかなか見学だけでは理解していただけない場合もあるとの指摘から、ガラス張りの一部を閉鎖して作業内容理解のための展示空間として改造する予定である。

整理室

遺物の洗浄、注記作業、破片接合及び復元作業を行う部屋で、給排水設備と作業台、用具整理用の棚等で構成される。収蔵庫と直結させる意味からダムウェーターの出し入れ口が部屋の一角に設けてある。



第38図　整理室

まず洗浄に際しては、従来から本市で使用している遺物篭がちょうど納まり、且つ取り出しに際して手が差し込める程度の大きさの流し台を特注した。洗浄作業は濯ぎも伴うことから、一人が二つの水槽を利用できるようにした。水槽は水が溢れ出ないようある一定の水量に達するとオーバーフローする口を設けた。また蛇口は作業に支障をきた



第39図　遺物洗浄作業風景

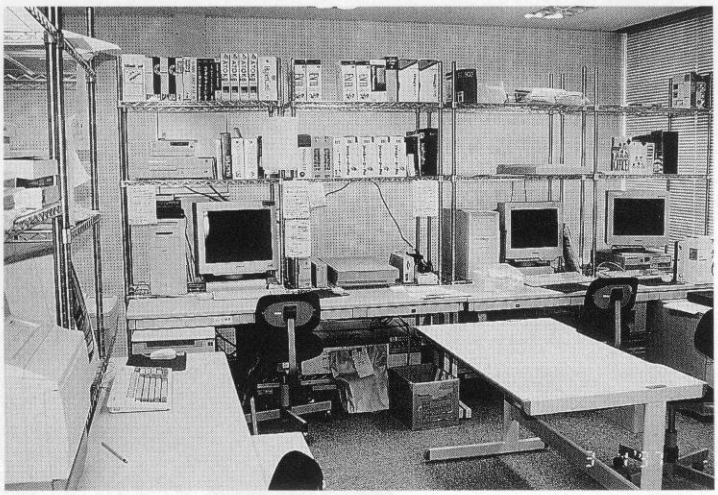
さないよう高く上げ、レバーも簡易にした。冬場の洗浄に際して給湯設備を設置できるよう、ガスの配管までは行っている。

遺物の乾燥は屋上に遺物をダムウェーターで移動し行っているが、臨時的に洗浄した少量の遺物については西側のバルコニーで干せるよう、この部屋のみバルコニーへの出入口を設けた。

他の作業には一般備品を応用しているが、作業台には卓球台を転用している。天板が広いだけでなく折り畳み式でもあり、安定度もあるため作業には向いている。なお、余剰となるネットの利用方法があればご教示願いたい。

情報処理室

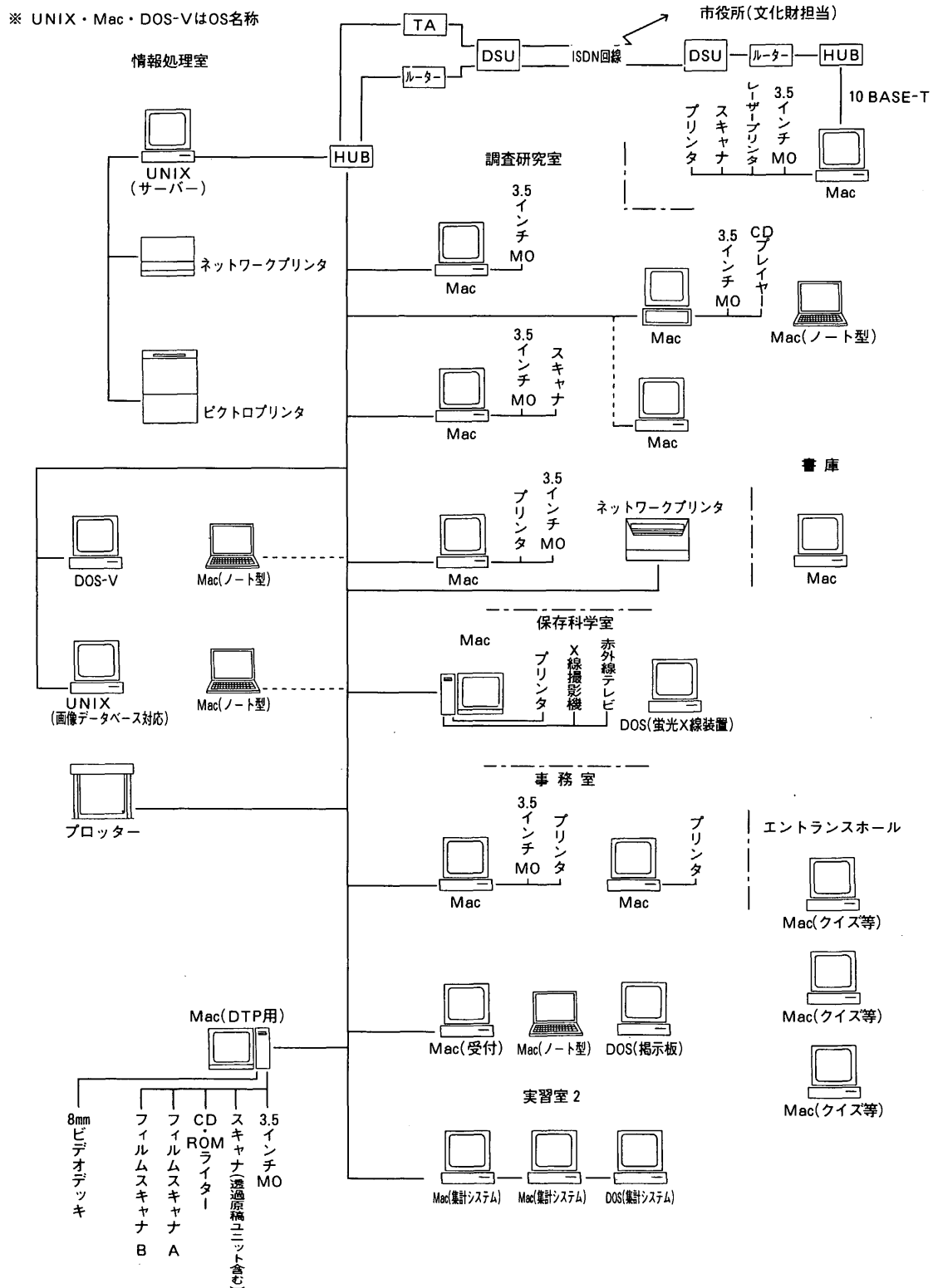
館内のLANの制御及び外部とのアクセスをはたす情報の中枢を司る空間である。ファイルサーバーにユニックス系のパソコンを配置し、クライアント機にはMacOSを搭載した機種を主体的に採用した。クライアント機をMacとした理由は、操作性と画像処理の優秀さにある。まず操作性では年配の臨時職員でも比較的簡単に扱えるという経験から、必要な入力業務を簡単に指導できることにある。文化系職員の多い本館ではパソコンを使いこなす知識と学習する時間に限界があり、こうした観点からのOSの選択も十分考慮すべきではないかと思われる。また文化財に関わる事業は、画像（写真や図面）がかなりのウエイトを占めていることは言うまでもない。したがって画像処理にすぐれているとされるOSの採用は当然のことであろう。



第40図　情報処理室

しかしながら一般社会でのシェアはDOS機が大きなウエイトを占めている。したがってDOS機への対応が不可能であるならば、狭い範囲の情報処理に終始する可能性も否めない。また、保存処理室に導入した一部の機器の制御、実習室に設置した視聴覚システムの制御はDOSで行っている。こうしたことからもDOS機との接点は重要な事項であり、多大な専門知識が必要なユニックス系パソコンの採用は、これを解決する点でも必要なことであった。

さて、情報処理室内にはファイルサーバーとDTP用のパソコン、Photo-CDデータベース用サーバー機とそれらに付随する周辺機器を設置した。機器類は東と南の壁に棚を設置して置き、その前に机を置くという配置を採った。原則として机の上にはキーボードとマウスのみとした。パソコンを置く棚（移動式）は壁から人一人が通れる空間を空けて設置し、コンセント（すべてアース付き／全館この仕様とした）もかなりの数を壁近くの床に配置した。パソコン背後の

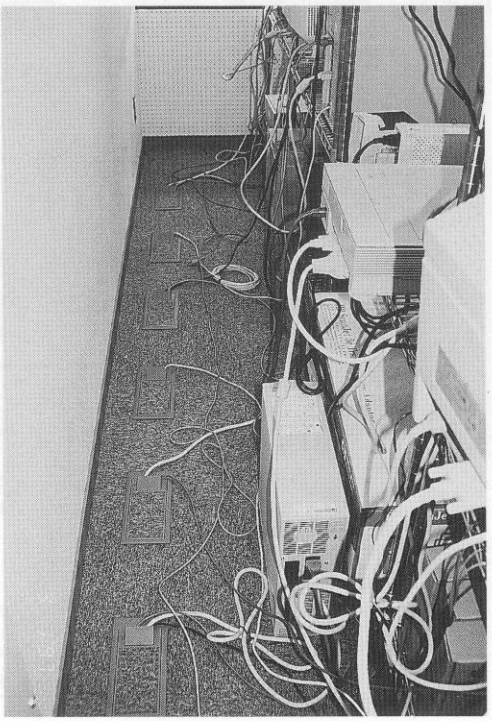


第41図　文化ふれあい館内のCPU配置図

空間はSCSIケーブルの取り付け、取り外しなど背後にまわることが多い理由から必要不可欠な空間であり、コンセントの床への配置は作業時に少しでも空中にケーブルがあると躓く危険性が高いと判断した事による。

床は当然のことながらOAフロアを採用しており、調査研究室よりも一段高くなっている。このことによって部屋への出入りは上履きが自然な形で強制できる。またクライアント機は、調査研究室、保存処理室、事務室、実習室２に配置したが、その他の部屋もLANに接続が可能なように設備は整えてある。

外部とのアクセスは、ISDN回線による。またスイッチングHUBからサーバーまでは大容量に対応するためにFDDI回線を採用している。



第42図　パソコンの裏側

設置に関与して思うことだが、パソコンの操作はそんなに困難な作業ではない。しかしパソコンのシステム設計にはかなりの専門的知識が必要となり、業界の一般的なレベルに達するだけでも莫大な学習時間が必要である。文化財関係者で業界に匹敵する専門的知識を有する人はごく限られた人数しかおらず、また設計を担当する者がその知識を十分なものにするには時間がかかりすぎる。現在ではパソコンレベルで我々文化財サイドの人間が必要としている多くのことは、専門的には可能となっていると言える。しかし、実務的には人的配置（※３）や組織における資料の前処理（※４）に問題が多く、実現させるためには乗り越えなければならないハードルはまだまだ高くて多い。特に後者の問題は大きな組織になるほど困難が伴うと思われる。

（※３）　文化財専門の施設を作ろうとする自治体や団体には、複数の専門職員が存在することが多くなっている。その中の誰かがパソコンに対して何らかの知識を有していれば話はかなり前進するし、業界からの提案内容も分析が可能である。しかしどの組織も人員に余裕のあるところは少なく、わずか１名をOAの専門担当者として位置づけるのは困難な現状であろう。設置が決定するとその前後の時期には、専任とまではいかないまでもOA担当者を決定し、その人の持つOA以外の業務を周囲の理解と協力によってかなり軽減する必要がある。また文系専門知識とOA専門知識の両方を有している有識者に協力を依頼し、複数回の協議をもってシステムを実現することをお奨めしたい。

文系専門職員が多数存在する大きな組織では、OA設置業務はその上層部のみで企画・立案され、デジタル化に理解ある若い世代の意見が反映されにくい状況もあると聞く。未来あるシステム作りには従来の機構を飛び越えた若い世代の活用が必要不可欠であることを理解していただきたいものである。

（※4） パソコンの導入によって管理しようとする資料のすべてがデジタル化されるわけであるから、それに対応した資料の前処理が必要となってくる。ここに言う資料の前処理とはどういうことを指すのか簡単に記載しておく。

最も重要なものに資料記載方法の統一がある。特に用語の統一は不可欠なもので、同じものでも一字が異なれば違うものとして扱われ、検索にかかりにくくなる。遺物の名称はもとより、遺跡―遺構―遺物、あるいは地図―図面―写真を関連させて抽出するデーターベース作成には一貫した調査方法や整理基準を組織内で設定する必要があり、これまでよく見られた担当者単位の調査・整理方法の集積では、最終的に目的とする一貫した資料管理には到達しにくい。大きな組織になるほど過去の蓄積が多く、また一貫していないのも現実である。ある特定の年度から統一した調査・整理の基準ですべての作業を実施し、過去のものは徐々にそれに合わせたスタイルで整理しなおすようにすることが現実的で、結果的には早くデジタル化が実現するであろう。

ただ用語の統一で困難を究めるのは資料の分類である。特に考古資料は分類・編年という作業が基礎作業として重視されているものの、未だ発展過程にあり（永久にそうかも知れない）様々な案が提案されているのが現状である。ここでどの案を採用するかがポイントとなり、担当者個人の意見が大きく分かれてしまうところである。ここではやはりある程度の妥協を必要とすると思われ、多くの担当者が理解できる分類の範囲に止めるとか、年代観については一つの項目に複数持たせるなどの配慮が必要である。つまり個人での研究レベルと組織での整理レベルは常には同居するものではないという認識に立つ必要があると言うことである。

また図面や写真、あるいは遺物に至るまで調査担当者の権限が蔓延っているのも障害の一つと言える。報告済み・未報告に関わらず資料はすべて公共の財産であることに変わりはなく、個人の管理を速やかに離れ、組織の管理にするべきである。しかし統一された管理方法がないと逆に個人の手から離れにくくなり、ますます障害が増幅されるにすぎない。この現実は担当者が退職したり、死亡したりした場合、他の職員では報告書の形に出来ないと言う状況を生みだし、未報告資料が増加するだけであることを物語っている。そんなに遠くない将来、多くの機関で資料のデジタル化が現実のものになると思われるため、一日でも早く調査・整理の組織内での統一が必要となるであろう。

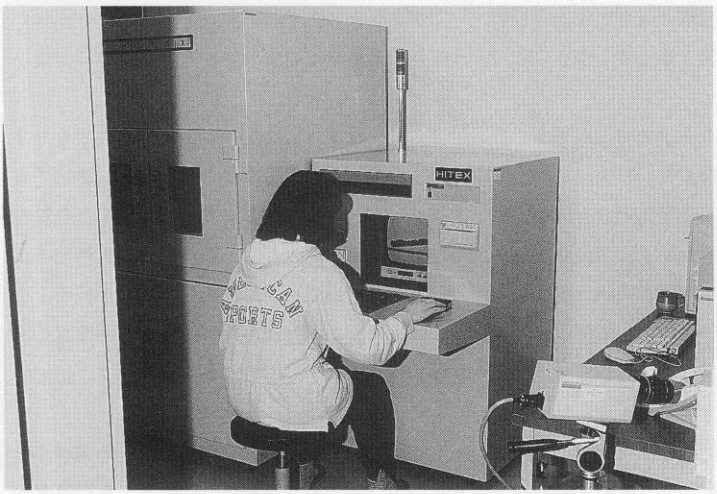
こうしたことを前提に考えると、一度に大きなものや複雑なものをデーターベース化するのは困難であることに気づく。将来すべてを連結させることを前提に最初から大きなリレーショナルデーターベースは作らず、写真カード、遺物カード、審査情報などを時間の許す限り個別のデーターベースとして作成しておき、写真、図面といった資料も機会ある度に徐々にデジタル化して保管しておけば、将来のシステム作成段階にはすぐに利用可能となる。予算や人的環境を考えれば結果的にはこれがもっとも近道といえる。

保存科学室

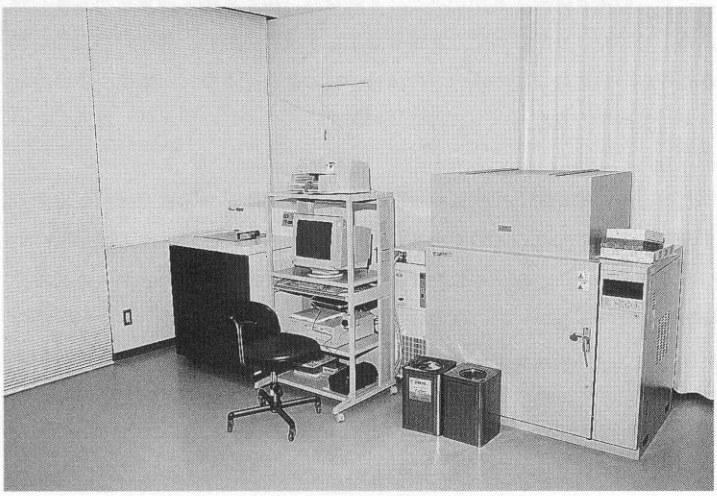
特殊な機器類を収納し、円滑に作動させることに重点をおいた設計を心掛けた。

まず、部屋は大きく二分割することができるようにした。その理由は主に空調と照明のロスを少なくすることにある。全体の電気量からするとわずかであろうが、節電対策のひとつである。ただし大きな遺物を扱う場合や、広いスペースが必要な場合を考慮して、アコーデオンカーテンによる仕切りとした。

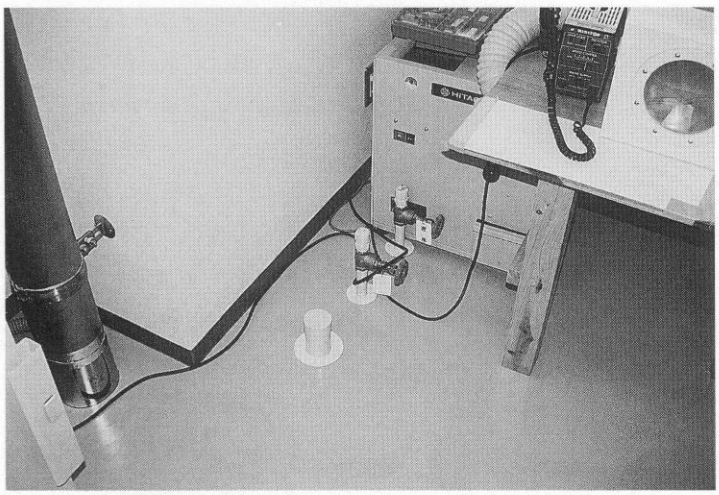
さて、この部屋に配置した機器類には次のものがある。金属減圧含浸装置、螢光X線分析装置、赤外線テレビカメラ、ドラフトチャンバー、恒温乾燥機、脱塩装置、純水装置、ドライキ



第43図　保存科学室（X線室）



第44図　保存科学室（螢光X線分析機など）



第45図　将来に備えた設備（X線回折分析機対応）

ャビネット、X線撮影装置、実体顕微鏡、生物顕微鏡、鉱物顕微鏡、電子秤などである。個別の機器類の機能はここでは記さないが、設計にあたって機器類はまず部屋のどの位置に何の機械を配置するかを考えることからはじめた。機械は重量的に移動が困難なものが多く、初めから機械の設置位置を指定することで電気、給排水の位置を特定することにある。これは配管、配線が床や壁を這い回らないようにするためであり、一つのコンセントに多大な電力をかけないことに配慮したものである。

またX線撮影装置は壁による仕切を設けて別空間に配置した。当初は、部屋全体を撮影空間とするため鉛材によるX線漏洩防止の壁にすることを考えたが、必要量の鉛厚を用いた壁では重量がありすぎて2階に設定することが好ましくないという結論に至り、撮影装置自体の構造を（撮影空間が著しく狭くなるが）漏洩防止策の施されたボックス式に変更して、壁には放射線散乱防護品を用いた。

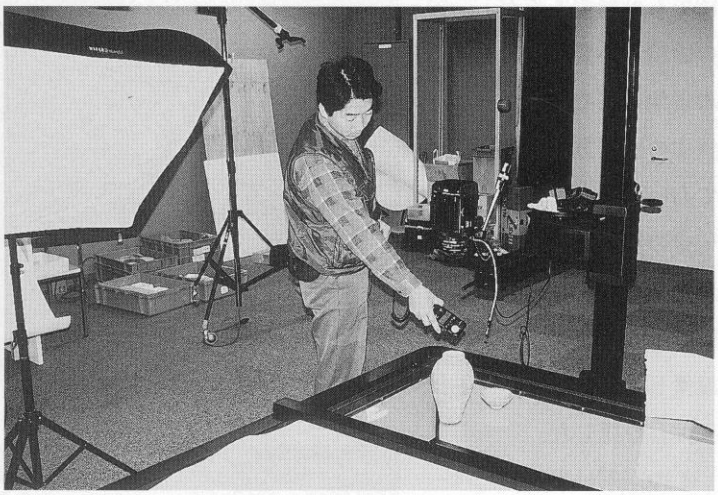
なお、今回の当初段階で購入しない機器のうち将来購入の可能性が考えられ、且つ消費電力の多大なもの、給排水が必要なものについてはあらかじめその配線と配管を行い、将来に備えた。その一つとしてX線回折分析機がある。これは上記した条件に該当しており、将来の設定を予想して全ての設備を準備した。ただし電気については空配管のみであるが部屋の北西隅に設置した分電盤までは必要な電力が準備されており、設置段階で空配管内に必要な配線を行うことで、設置が可能な状況になっている。

さらにこの部屋の一角に暗室を設置した。暗室は一般には撮影室とセットになっていることが多いが、撮影室の面積確保とX線フィルム現像の便宜、館における水廻り位置（館の水廻りは北側半分に集中している）の限定等からこの部屋に隣接させた。

その他、床材には薬品に強い材質を選択した。ダクトは通常の部屋では天井に取り付けられているが、ここではそれ以外に柱単位を基準として配管を床上10cm程度まで下ろしている。空気より重い薬品があることによる対応である。これには追加工事として恒温乾燥機の排気を直接つなぐ作業を行った。

撮影室

振動が少ないにこしたことはなく、通常の見学ルートより奥側に設置した。幅6.5m、奥行き8.7mを確保した。天井は当初の設計で３m程度しか確保できなかったが、空調設備がある東半分を除いて４mまで高くした。その部分には背景紙を吊る設備を設置し、手動によって上下を微調整することが可能となるようにした。部屋の中心軸に出入りする扉の中心をあわせ、被写体の大きさあるいは使用するレンズの長さによっては廊下の一部にまでカメラがさがれるように計画した。これで最大でさらに２m程度バックできるようになる。



第46図　撮影室での撮影風景

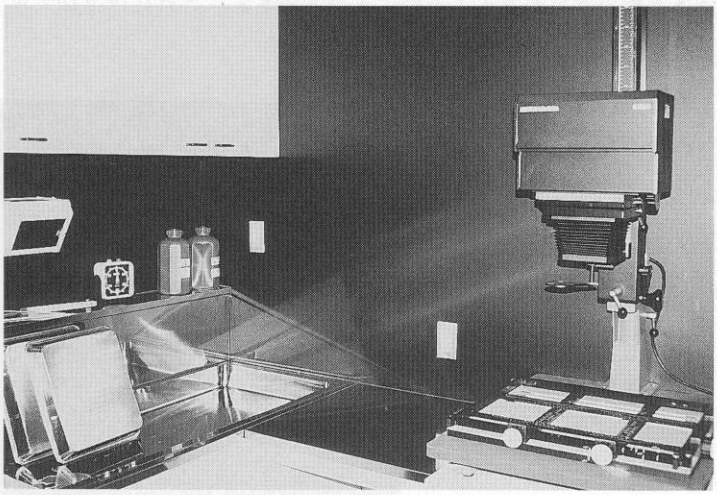
壁は無反射のグレー（反射率18%程度）、天井は同じくブラックで仕上げ、床はグレーで毛の短いカーペットを用い、可能な限り附属する設備も同色に変更した（例えば螢光灯の反射板、コンセントなど）。部屋の西側は直接外部へ通じる窓になるが、前面を目隠しすると外観が著しく損なわれるという観点から少し内側に遮光窓を設置して、光の流入を遮断した。とにかく部屋全体は照明を点けない限り暗黒に近い状態である。さらに螢光灯は、消灯していてもストロボ等の光源が反射する可能性があるので、出来る限り天井の隅に平行に配置し、中央部には

設置しないようにした。併せて内部に置く備品も限定し、撮影以外の作業は基本的には行わないことを前提とした。

ただし、大量の遺物を撮影する場合、遺物の順番設定や仮配置、被写体のメモなど撮影の前準備が若干必要である。こうした空間は隣接する会議室で行えるよう、会議室との境に出入口を設けた。撮影時における不必要な光を遮断することを目的とするが、暗い空間ではできない作業を隣接した位置で行い、作業の効率化を図ろうとした結果である。

暗室

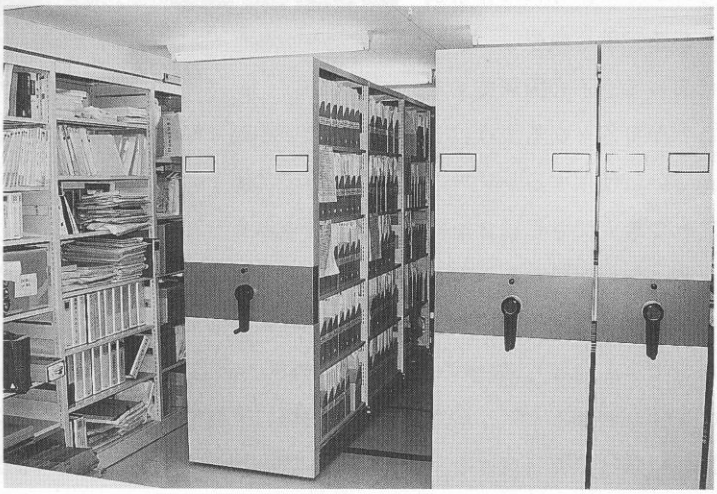
必要最小限の面積を確保することで十分機能する部屋である。その部屋もさらにフィルム現像用の空間と印画紙焼付用空間に分割した。まず焼付用空間は焼付機を置く机の設置と印画紙、薬品類を置く棚の設置、印画紙現像、定着等の作業を行う流し台の設置を行った。机は椅子に座って作業をすることで必要な高さを確保したが、実際の作業は立つことが多い。流し台はバットが入る程度の幅と深さで設計した。水洗は同じ空間でも可能であるが、一定の面積が必要なのでフィルム現像空間でも行えるよう仕切の壁に方形の穴を開けておいた。また現像液等は一定の温度を確保する必要があることから備品で保温機を購入したが、給湯器も設置した。併せてダクトは天井に設置した。



第47図　暗室（焼付用の空間）

この空間は出来るだけ一人で連続した作業が可能なようにコンパクトにまとめたつもりであるが、右利きの人間には少々不便な配置となってしまった。

フィルム現像用空間は作業台と棚、簡易な流し台で構成される。これだけで十分である。



第48図　書庫

暗室に入る扉には遮光ガ

ラリを設置し、さらに内部に暗幕のカーテンを配置し遮光している。

書庫

多目的展示室の直上に位置するもので、展示室の天井高を４ｍとした関係から２階にある通常の部屋の床よりも１ｍほど床が高くなっている。したがってこの部屋の天井高は2.4mと低くやや圧迫感がある。この点から常に職員が勤務する空間とするには相応しくないと判断し、必要な時のみに入室する性格のものを配置するべきであると判断し、書庫及び写真保管庫をここに充てることとした。部屋の配置の点では調査研究室のほぼ向かい側にあたり、市史資料室にも近い点で場所的にはまずまず便利な位置となっており、出入口も両者が別々に利用できるよう２箇所に設けた。

この部屋に設置した棚はすべて移動式（手動）のもので、空間に比べて容量が大きくなり有効である。棚は複数の奥行きのものを用意したが、Ａ４サイズの図書を基準としたものを中心とし、他は本市で使用している図面ケースの寸法に併せて設計した。なおこの部屋の棚には免震機能がないため、地震に対して整理された図書や資料が落下しないよう、棚前面に簡易に取り外しができるバーを付加した。

また近年、航空写真測量による図化が増加し、原図や第二原図がロール状態で納品されることが増えてきた。これらは円柱あるいは角柱の筒に入っており、管理に苦慮していた。これを一定の企画の筒に入れ替えるとともに、その筒が十数本で一まとまりになるような専用の筒立てを作成した。これで一気に整理が進んだが、書庫の天井が通常の高さを確保できていれば、これらは天井から吊り下げる方法で設置するのが最も場所を取らない方法と考えられる。



第49図　図面筒収納状況

写真保管庫

書庫の一角を利用して写真保管専用の空間を確保した。外光遮断の観点から窓を作らず、内部は書庫同様移動式棚を配置したが、本市の写真整理方法として４×５サイズフィルム及びカラーリバーサル２ＢサイズフィルムについてはＢ６サイズのカードに整理しており、それを保管するキャビネット（市販品）も設置した。

室温は16～20℃、湿度は30～40％という条件をクリアするように設計したが、空調機器類の配置を考えればこの空間を書庫内の現在位置（北西隅）から反対の位置（南東隅）に設置し、特別収蔵庫と連続させたほうが効率的であったかも知れない。



第50図　特別収蔵庫



第51図　市史資料室



第52図　機材室

なお写真資料の取り扱いについてはPhoto-CDデーターベースの作成のところで述べる。

特別収蔵庫

通常の資料館などに設置されるものと変わりはない。壁・床・天井ともに杉の板材で製作され、棚も木製である。温湿度も24時間体制の管理である。また火災時の消火には二酸化炭素を使用している。

棚については先の多目的展示室と同様に地震に対する備えが要求される。特に土器・陶磁器類はそのまま並べると隣り合うものとぶつかり合って破損する恐れが高く、当然のことながら転落による破損は壊滅的な破損に結びつく。収納には個別に箱に入れるなどの措置を採るとともに、棚は手前と奥側に段差を設け滑り落ちることのないよう配慮した。ただ通常の出し入れには少々不便さを感じる。

市史資料室

太宰府市史編纂事業を行う部屋である。企画課及び市史編纂室の要望により床はOAフロアとした。通路側は調査研究室等と同様に

内部での作業が観察できるようガラス張りとした。

機材室

２階通用口を入ったところで、測量用具やカメラの一部など常時現場に持ち出すもので現場には放置できないものを管理する部屋である。管理するキャビネットは市販のものを使用しているが、測量用脚を保管する棚は特注した。この部屋は本来１階に置きたかったが、スペースの関係と管理者の居場所が２階であったためここになった。毎日の出し入れはやはり大変な作業で、場所については不評である。

以上が２階各室の概要であるが、他に会議室、男女休憩室、倉庫が若干設置できているほかは余剰空間は全くない。

なお、廊下は通常の電灯とは別に、省エネ対策として屋上から自然光を採光する構造となっている。火災時の排煙口を利用したもので、天気の良い昼間はパネル展示の部分を除いて通行にはほとんど支障がない明るさを確保している。

⑷　屋上

塔屋

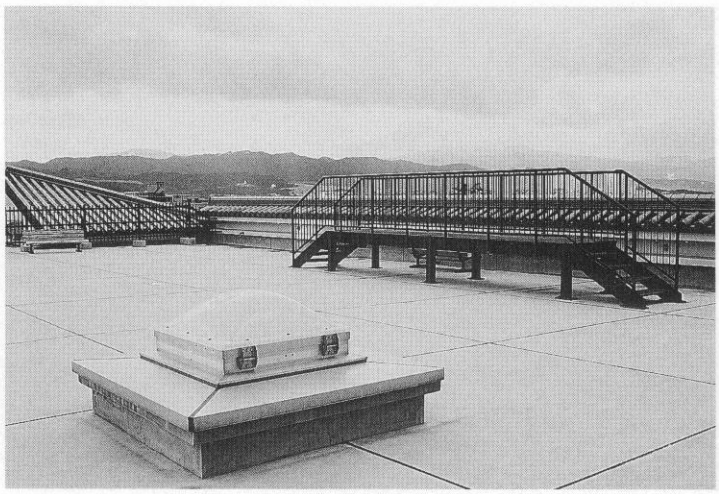
ダムウェーターの取り出し口があり、その前面には若干の空間を設けた。洗浄済の遺物類はここに一旦保管され、天気の状態をみて外部に出される。したがって夜間や雨天時の仮置き場としての役割もはたす。



第53図　塔屋内の状況

屋上

南半分は空調設備やテレビアンテナなど様々な機器類で占められているが、中央部の空間は開放されている。原則として常時公開はしない（安全管理上）が、必要に応じて開放することとした。屋上からは水城跡、筑前国分寺跡など太宰府市の西半分はほぼ遠望可能で、



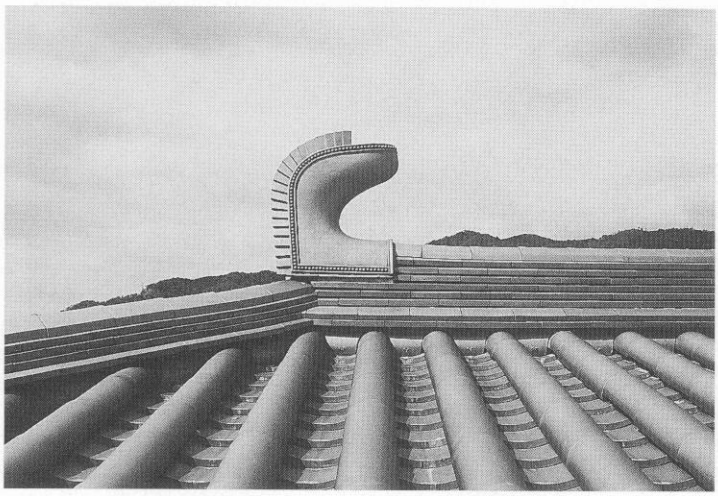
第54図　屋上（追加設置した見学台）



第55図　屋上からの風景



第56図　収蔵庫の屋根と説明板（写真左下）



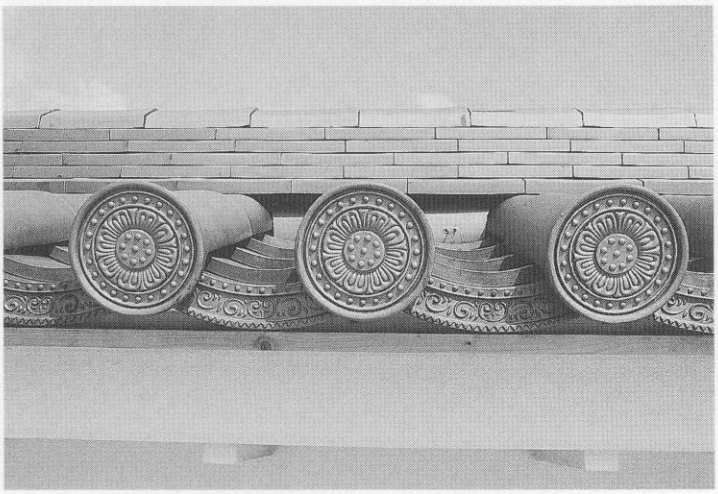
第57図　屋根の棟にのる鴟尾

視覚に訴える学習も行うことができる。それに伴って屋上の西側に寄せて見学台を追加設置した。見学に際して水城が如何にして現在の位置に建設されたかを周辺の地形とともに観察することによって学習でき、さらに周囲を遠望することにより大野城・基肄城と水城、さらには大宰府の位置づけが理解できるものと考えている。

(5)　建物本体の外観

本館建設地は、買収直後の状況が緩い段差を形成する宅地の連続する地形であったが、館建設に伴って敷地全体を概ね水平に造成した。したがって北側では周辺の宅地より６ｍ余り低くなるのに対して、南側では逆に高くなる。

こうした地形の上に法律上から高さ12mを超えず（第一種住居専用地域）、勾配屋根の建物（太宰府市景観保全に関する指導要綱）を建設すると北側からはどうしても屋根が目立つこととなる。この点を利用して屋根自体を学習の素材にしようと考えた。古代建築の大屋根をイメージさせるわ



第58図　軒丸瓦と軒平瓦



第59図　鬼面文鬼瓦

けである。古代の建造物の屋根は、現存しているものからの復原的研究で今見る勾配よりもかなり緩かったことが分かっている。これをイメージし採用することは単純に屋根を教材とするだけでなく、緩い勾配ゆえに高さを抑えるという効果が期待できる。そこで北側収蔵庫部分の屋根を緩い勾配（法規制の関係で当初の計画より緩いものとせざるを得なかった）の寄棟造りとし、大棟の両端には鴟尾を配置した。また隅棟の先端には鬼瓦を置き、瓦は本瓦葺とした。さらに軒先を飾る瓦は軒丸・軒平ともに本館の近くに所在する筑前国分寺の創建瓦をモデルとした。また鬼瓦は大宰府跡出土の鬼面門鬼瓦（筑前国分寺でも同笵とみられる破片が出土している）、鴟尾は大宰府出土例では全体を復原し得ないので、奈良時代の代表的な鴟尾である唐招提寺金堂大棟西側のものをモデルとした。軒先瓦は拓本及び原物からの型取り資料によって復原し、鬼瓦は複数の写真をもとに見本が作成され、中間検査段階で若干の手直しを要請し完成した。鴟尾は公表されている実測図が東側のものであったが、それを基本として写真等で補うこととした。なお鴟尾と隅棟の取り付き方法は、奈良時代当時の状況が解明されていないことから、現状の唐招提寺金堂に採用されている方法を用いることとした。

またその他の屋根も基本的には本瓦葺で仕上げ、軒先瓦と鬼瓦は同形のものを使用した。

これ以外で外観設計において特別に要望した部分はなく、他は設計事務所の提案する図面をもとに検討し、現在みる景観となった。

⑹　建物以外の設計

広場の活用と設計

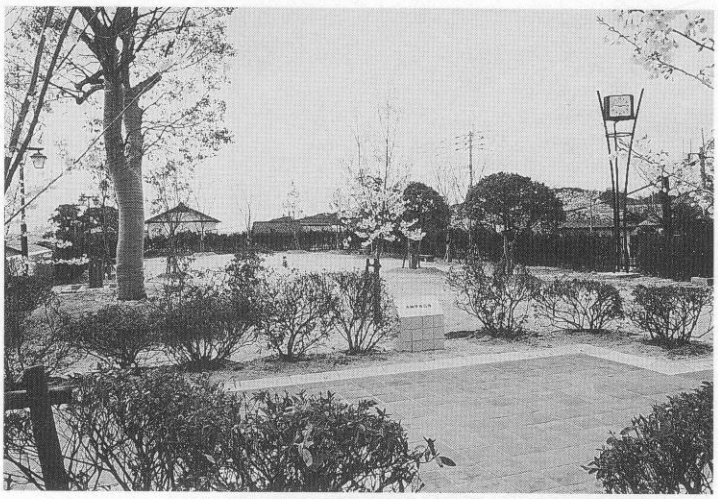
広場は敷地の関係から2箇所に設定し、体験学習広場と多目的広場と命名した。

体験学習広場は東と西のブロックに大きく分けられる。東側は館のエントランスホールに面していることから庭園的な機能を合わせ持たせ、後述する塔の模型を配置し、簡易な散策路を設定した。西側は基本的には広場とし、様々な実習事業に活用できるよう樹木等は出来るだけ周囲に配置し空間を残している。当初は採集生活を行っていた原始時代の体験学習が実施できるよう、樹木の選択に際してクヌギやシイ、クリなどを取り入れるよう要望していたが完全には実現していない。

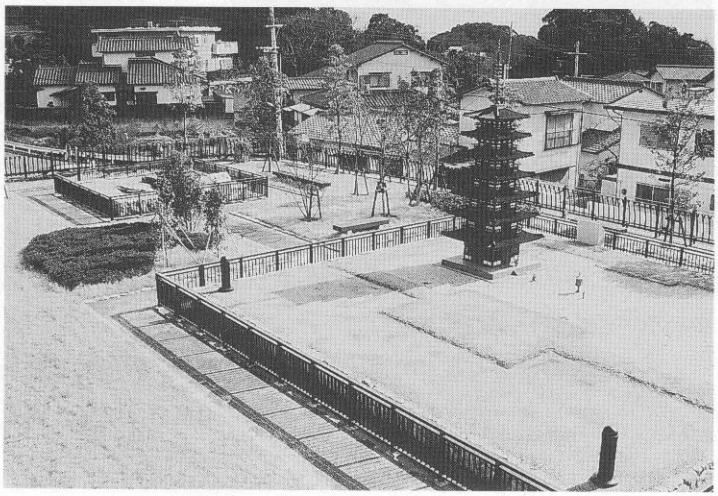
また、散水用として給排水の設備や外灯などの電気設備を整えたが、将来模擬発掘体験講座や野菜作り実習などの実施で広場内を掘り返すことが予想されたため、配線や配管はできるかぎり広場の周囲を通すようにしている。



第60図　多目的広場



第61図　体験学習広場（西半部）



第62図　体験学習広場（東半部）

石棺の展示

体験学習広場内で塔の模型のある東側の一角を設定した。太宰府市内で過去に調査をし破壊を余儀なくされた遺跡から持ち帰ったもので、宮ノ本遺跡と成屋形遺跡の箱式石棺である。成屋形遺跡のものはながく福岡市立日佐中学校に、宮ノ本遺跡のひとつは太宰府市立水城西小学校に展示されていたが、いずれも校庭改修等で居場所を失い、太宰府市の発掘事務所で保管されていたものである。

復原展示にあたっては、過去の写真及び実測図に基づいて忠実に再現することをめざしたが、石の損傷や欠失の見られるものがあり、一部は未だ完全な姿にはもどっていない。また棺の周囲はまったく装飾を行っていないことから、現状で他の施設に比べて殺風景となっている。周囲を花壇にするなどの修景作業が必要である。

七重塔模型

館のシンボルとして相応しいものを選択すべく協議を重ねた結果、シンボルとして単純に位置づけるだけでなく学習の素材としても活用できるようなものが望ましいと判断し、館との位置関係も近い位置にある筑前国分寺跡にかつて建立されていた七重塔模型を建設することとなった。奈良時代の建造物は九州管内に残存しておらず、模型とは言え当時の面影を忍ぶには十分であり、前述した館の屋根とともに奈良時代という時代をイメージする素材として活用したいと考えている。

さて、その規模は１／10とすることで決定したが、その建設位置について協議がなされ、本館の高さが建築基準法によって12m以下に規制されており、１階の天井高を最大でも４m程度にしかできないことから、高さが６m前後と予想される模型は屋外に建設することとなった。さらにその位置は、館内のサービスホールから見えるように配慮したために、本館南側に隣接して建設されることとなった。その地点は庭園的機能を配慮した部分であるところから、塔のみを建設するのではなく、伽藍配置を盛り土によって復原し、その中に塔を位置づけることにした。

こうして決定した屋外展示であるが、風雪に耐え得る素材を選ぶ必要性が生じてきた。そこで木造、石造、FRP（Fibre glass Reinforced Plastic／ガラス繊維強化プラスチック）の三者から選択するとして費用面、耐久面、管理面などから検討を行った。まず木造の場合、外観から内部の組み上げまで完全に復原できることで極めて魅力的であったが費用面でかなりの高額になることが揚げられ、また屋外に展示した例がないことから、腐食による耐久面で不安な点が指摘された。なお、木造の例として大分市歴史博物館の豊後国分寺七重塔模型（１／10）が知られるが、館内に展示されている。次に石造の場合、費用面では次のFRPと大差なく、木造と比べて半分強の費用負担で完成するとともに石という性質上耐久性では他に勝るものがない。しかし日本の木造塔婆で最も魅力的とも言える建築部材の表現が、各部にわたってかなり省略しなければならない点が指摘された。なお石造の例として讃岐国分寺跡に復原されている七重塔

模型（１／10）が知られ、屋外展示が行われている。最後にFRPであるが、材質の耐久面は特に心配なく、費用面も石造並である。縮尺にもよるが細部の表現もかなりのレベルまで可能であり、彩色も自由に出来る点で今回はFRPで製作することに決定した。FRPでの屋外展示の例は東武ワールド（栃木県日光所在）に薬師寺、法隆寺をはじめとした様々な模型（ほとんどが１／25程度）が展示されており、短い期間ながらも一応の実績がある。この展示の視察で注意されたのはその彩色と退色である。東武ワールドにおいて薬師寺東西両塔の復原模型を比較した場合、その退色の度合いが西塔模型で大きく、東塔模型ではほとんど感じられなかった。これは西塔模型では柱を朱色に塗装するが、東塔模型では古色に仕上げられていたことによると判断された。朱色の退色が著しかったのである。このことを参考にして今回の復元模型製作にあたっては、外観を古色仕上げにし、創建段階の塔が今日まで遺っていたらこのような風景になったのではないかという観点で彩色を行うこととし内部合意が得られた。

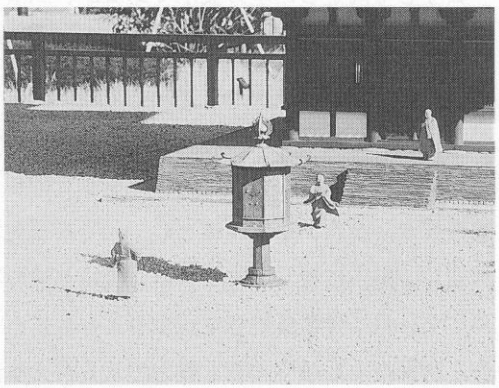
設計は、豊後国分寺七重塔模型の設計者である細見啓三氏に依頼した。また彩色については奈良元興寺五重小塔にみられる彩色の残存状況を参考とした。そのほか相輪は奈良当麻寺西塔、風鐸は京都高麗廃寺出土鋳型、風招は太宰府の般若寺跡出土品、瓦は筑前国分寺跡出土品を参考とした。

また、伽藍配置を平面的に復原したことから塔の前面に大きな空間ができることとなった。そこで伽藍の中央に燈籠の模型を建て、スケール表示として僧侶２人と官人１人、計３体の人形を配置した。燈籠は総国分寺とされる奈良東大寺金堂院（大仏殿院）の中央に置かれる銅燈籠をモデルとし、人形は博多人形師山村延華氏の手になるものである。

塔の周囲には柵を巡らしたができるだけ低いものとし、復原伽藍のレベルは地表から0.5mほど高くした。これは大人の目線が塔の２層目あたりにくることを前提としたものである。伽藍を復原した部分は回廊内に豆砂利を敷き詰め



第63図　筑前国分寺七重塔模型



第64図　模型の前に配置した人形と燈籠

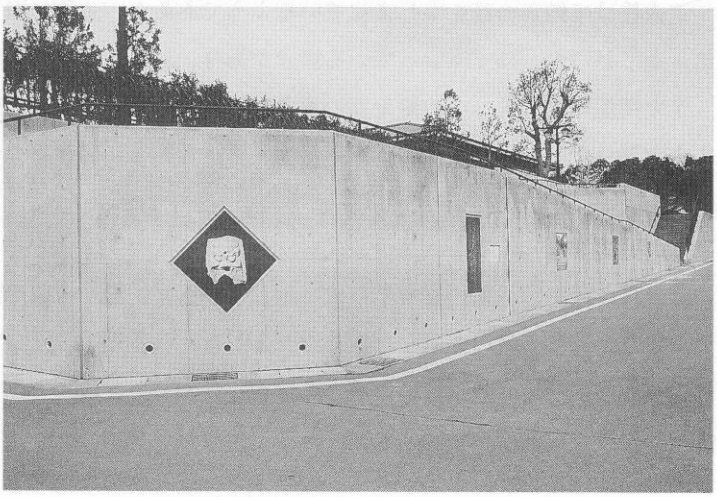
たほか、盛り土は雨によって崩れにくいよう薬品により強化した。さらに将来のことだが、伽藍の立体復原が可能なように中門と金堂の下にはコンクリートの基礎を作り、重量のある模型に対応できるように配慮している。

なおこの塔の復原に関する詳細は、『筑前国分寺跡I』（太宰府市の文化財第32集）に付編として掲載したので併せて参照されたい。

擁壁の装飾

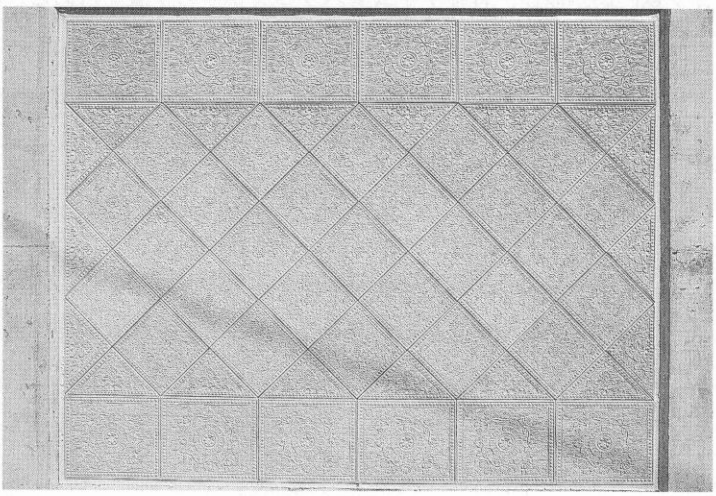
本館の敷地は北側で６ｍの段落ちとなり、南側では最高3.3mの擁壁が建設されることとなった。この擁壁部分は周囲の民家と道路を挟んで接しており、住民に与える圧迫感は相当なものになると予想された。また擁壁表面はコンクリート打ち放しであったことから、風景としても決して好まれるものではなく、何らかの装飾を施すべきであると判断した。

そこで擁壁を部分的に方形や菱形に彫りくぼめ、そこに写真陶板をはめ込むこととした。写真は太宰府市内の史跡や関連資料とし、歴史の散歩道のガイダンス施設として相応しいものと判断されるものを選択した。



第65図　南側壁を飾る陶板

また、２箇所のみ同じ陶板ながら写真ではなくレリーフ（テラコッタ）とし、実際の歴史資料を復原製作した。一つは大宰府学校院跡出土の文様塼である。文様塼は出土数も少なく当初の配置についてはもとより使用されていた建造物も明らかではない。しかし古代大宰府の文化を代表するものであり、当時の大宰府に伝わった大陸的文様はやはり当時のイメージで伝えられるべきであると考える。そこでこれまで知られている３種類の塼を原寸大で復原し、敢えて当時の並べ方



第66図　文様塼の復原

を想定して配置してみた。現代人の感覚では想像できないような文様表現となり、奈良時代の文化の一端が忍ばれるものとなった。いま一つは、大野城跡の一角にある岩屋城跡の裾で中世の信仰の対象となっていた岩屋磨崖石塔である。岩屋磨崖石塔は宝塔、宝篋印塔、梵字仏などが知られているが、このうちの宝塔について原寸大で作成しはめ込んだ。実際の磨崖石塔を見学するには若干の登山を必要とし、足に障害や不安のある方にはきわめて困難なところに所在し、磨崖という性格上切り離して博物館に展示すると言うことは不可能である。また基礎部分には銘文も彫り込まれており、資料的にも貴重なものであることからこれの複製に踏み切った。あまり知られていない大宰府の中世文化の一端を忍んでもらえれば複製製作の意味は達成されたといえる。

なお製作は原物を痛める可能性がある型取りは原則として行わず、写真や拓本をベースとしてコンピューター処理し、担当者が工場検査を行って製作するという方法を採った。

完成後は来館者の目を楽しませているようであるが、道路に面していることもあり不法駐車によって見学がしにくくなっている場合があり、対策に苦慮している。

また開館時点ですべての壁を埋めることをせず、若干の余白を残している。将来目を見張るような発見があったり、伝えるべき情報があった場合に製作してはめ込む予定である。

3．開館準備

開館にむけては、他の資料館や博物館と変わらず、展示準備や開館セレモニー、パンフレットの作成、各種事業の準備など様々なことが行われるが、こうしたこと以外に早い段階から準備に取り掛かったものについて簡単に記載しておく。

(1) パソコンによるクイズ・インフォメーションの作成

パソコンはインターネットブームのなかで一般社会の中に大きく浸透した。町の中にはパソコン専門店が並び、各種ゲームもパソコンがその主流を占める。学校でもパソコンは教材として活用されている。

こうした状況に敏感なのは子供たちであり、彼らの興味を引く上でもパソコンの導入と公開は本館の運営にとって不可欠な材料と考えられた。そこで他の資料館や博物館に設置され公開されているシステムを参考として製作を行った。

まずその内容をクイズとインフォメーションに分割し、クイズにはゲーム的要素を多数取り入れることとした。10問程度連続するクイズでは終了する毎に問題がシャッフルされ、いくつかは問題が入れ替わるようにし、連続して挑戦した場合に答えの順番だけを覚えても正解にならないようにした。さらに双六形式のものも作成し、手順良く進まないと終点に到達しにくいものなどもある。なお、自分たちで作っておきながら未だ最後まで到達できないという、情けない状況であることも告白しておく。

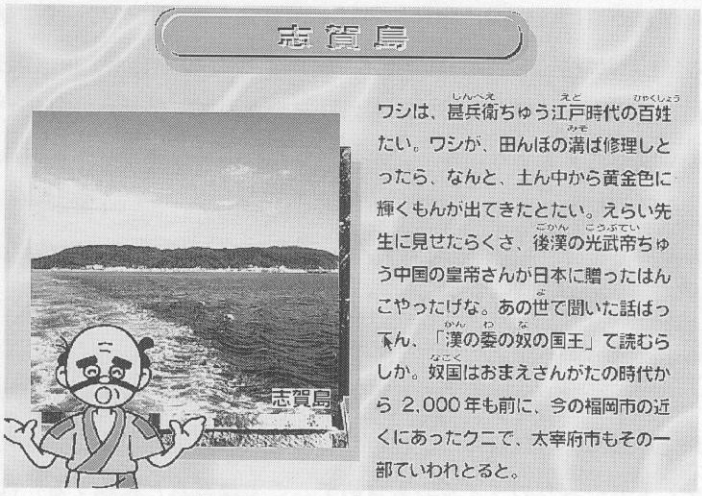
また、インフォメーションには動画を多く取り込んだ。いずれも内容は太宰府の歴史や文化

を題材にしたもので、小学校高学年程度を基準として作成した。製作には本市技師の全員が関わり協議を重ねながら行ったが、予想以上に膨大な時間を要した。

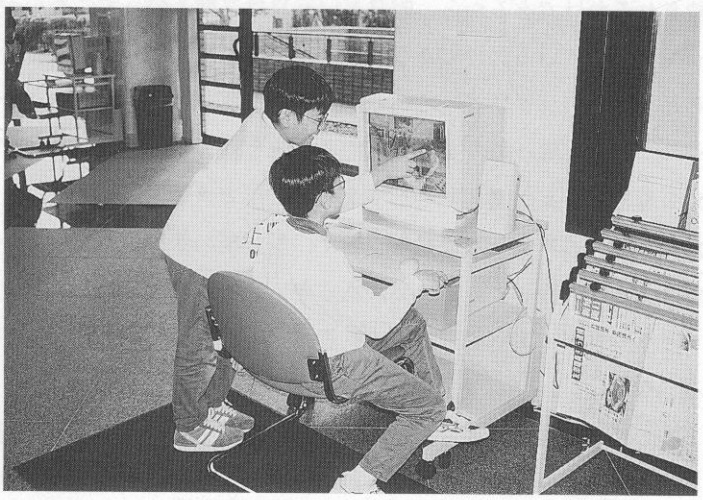
操作はタッチ画面とし、出来るだけ簡素にした。簡素にする理由は年配の方でも操作が可能であるように配慮したためである。またキーボードやマウスを設置しないのは、操作を熟知した子供によるいたずら防止である。

さらにこれらのソフトは計画当初から固定化したものとはせず、職員による加工や追加が可能な柔軟性のあるソフトであることを前提に作成した。これは各地の資料館や文化施設、博物館での実務における反省に立脚したもので、こうした柔軟性、変化性を保有することにより来館者を複数回訪れる気持ちにさせることに主眼がある。

さて、開館当初は予算等の関係から専用機を３台用意し、エントランスホールに配置した。これらはLANに接続せず単独で作動しているが、データーの流し込



第67図　クイズ画面のひとつ



第68図　パソコンで遊ぶ子供達



第69図　館の案内をしたCD-ROM

みなどの際にはLANに接続することが可能な状態にしている。ただ受付の近くに配置したものはLANに接続しており、受付で使用するだけでなく、市（調査研究室）が管理している写真や蔵書を受付担当者の管理下で検索できるようにした。現状で写真資料は保有資料の約１／４を閲覧できるようになったが、図書については現在データーベースを作成中である。

今回の製作にあたって電子図書館（CD-ROM）という副産物が生まれた。業務受託業者からの提案で製作し、内容は館のために製作したシステムの抜粋である。館の案内をCDで行うもので、著作権等の問題をクリアした上で販売も行っている。

(2) Photo-CDデーターベースの作成

埋蔵文化財だけでなく文化財の写真あるいは風景や風俗など時代を反映するものが写し込まれた写真は、それ自体が文化財であるとする考え方がある。写真（焼き付けられたものだけでなくネガやポジのフィルムも含めてここでは写真と総称する）はある瞬間が停止した状態で維持されるわけであるから、昨日という日は二度と帰ってこないが昨日撮った写真は昨日のある一瞬を止めているわけである。例えば手元にある古い写真－自分が子供の頃の写真等を見てみると、そのバックに写っている町の風景や周りの人々の衣装は今では見ることはできないし、それが二度と帰ってこない一瞬であることが分かる。これはすでに当時の社会を考える上で重要な資料と言え、文化財として十分に活用できるものと言えよう。また測量用に撮影された写真は一般の写真よりも情報量が多く、測定用の基準点が写っていることで（もちろんその基準点のデータも残っている必要があるが）地図として復原が可能であるし、さらに今ではコンピューター処理によって三次元の世界で町並みを復原することも不可能なことではなくなっている（※５）。

このように写真は通常考えられているよりもはるかに多くの情報を持っている点で価値が高く、且つ図面や文章に比べて客観的な情報であることも重要な点と言える。こうした写真資料は他の文化財と同様に永く保存されるべきであり、文化財を管理する立場の者は写真原版の保存を真剣に考えなければならない。この立場で本市では写真保管庫を設置して写真資料の保存に努めることにしているが、写真はまた広く活用されてこそその意義は深まるものでもある。

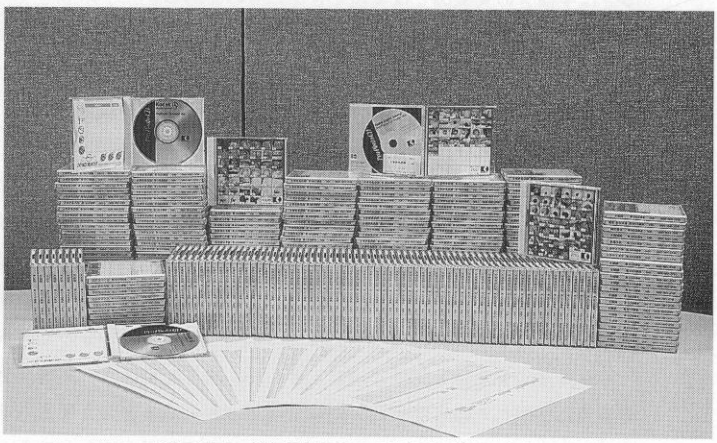
写真はスライド上映にせよ印画紙に焼き付けるにせよ、活用に際して光源を通す必要がある。この光源が写真の保存には逆効果となる。さらに原版を移動させることによって環境の変化する空間に写真を置くことになり、カビや埃の付着する要因となる。したがって出来る限り移動せずまた光にさらさないようにしたいが、活用を考えるとそういうわけにはいかない。この矛盾を解決してくれるのが写真のデジタル化である。

デジタル化の利点は、色情報が信号で管理されるため退色・変色の心配がないこと、複製が簡単に作成でき且つ精度が変化しないこと、写真がCDで管理でき保管環境の維持が簡単であり場所も取らないことなどが揚げられる。さらに電話回線の利用で他所へ簡易に転送できることや、出力機の精度によっては一般の写真となんら変わらないものが提供される。またコンピ

ューター処理によって色調を補正したり、退色したものも本来の情報に近づけることができるなどその持つ特性は計り知れないほど多い。

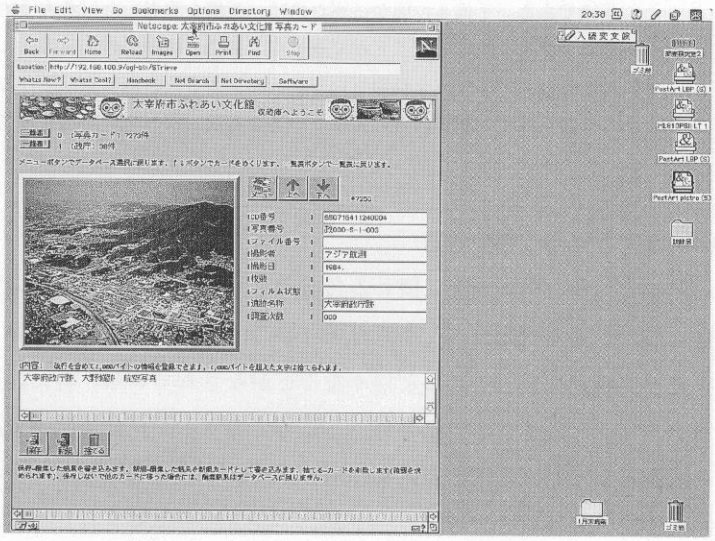
こうした考え方に立脚して今回採用したものはKODAKのPRO-PhotoCDで、35mmカラーポジの場合16ベースまで、４×５及び２Bのカラーポジでは64ベースまでの入力とした。64ベースの場合、ポジに復原することも可能であり、重要な写真資料はこれにすべきであろう。また通常のPhoto-CDとの比較では入力に際しての管理の状況が全く異なり、埃やカビのチェックと除去などを含めてPRO-Photo-CDに及ぶものではなく、２B以上のサイズはPRO仕様でないと実現しない。また入力時に色補正が可能なのもPRO仕様である。写真資料を永久的にしかも優れた状態で保管し続けていこうとする文化財事業の場合はPRO-Photo-CDにすべきであると考える。

さて、本市が保有する文化財関係の写真資料はすでに膨大な量に達している。これらを整理し管理し、必要な時に必要なものを迅速に取り出すには画像データーベースの作成が有効である。この画像データーベースを作成するにあたり、まず数年前から開始していた写真資料の前処理（記録の整備）作業を急ピッチで終了させ、保有する写真の全リストを作成するとともに、カラー情報を保有したもののデジタル化を実施した。



第70図　発掘調査の記録を納めたCD

開館までの作業として文字情報のデーターベース化は終了させていたため、これと画像を合体させる作業を行うのみであった。しかし、市販のカード型データーベースソフトウェアでは画像を貼り込むと容量が極端に大きくなることから、数枚のカードを作った程度



第71図　写真管理用データーベースの画面

でほとんど機能しなくなってしまう。幸いこれを解決するソフトウェアの照会を受け、検討の結果導入に踏み切った。

現在8000枚近い写真がこのデーターベースで管理されており、年々資料を追加させてゆく予定である。なおこの資料はLAN内ですべての端末からアクセス可能となっており、受付に配置したパソコンからも閲覧することが可能である。現在電話回線でアクセス可能とするために整備中である。

（※5） 写真測量について近年では文化財の発掘調査に活用される事例が増加してきた。行政全体の考え方として民間活力の導入という観点から推進されている背景があり、また広域の調査区を人力によって実測する速度に加えて写真測量、とくに航空機を利用した写真測量は迅速で精度も極めて高い。こうした利便性が強調されて写真測量を導入している自治体も少なくないであろう。しかし、写真測量の活用はそれだけであろうか。筆者はもっと違う観点で写真測量を捉えるべきであると考える。それは本文中にも記したように写真自体が文化財であるという捉え方であり、測定点の写し込まれた写真の持つ情報量の多さは手描きの実測図では実現できないものである。

現在の写真測量は解析図化機の発達で、図面自体がデジタル化されている。したがって各ポイントに属性を細かく与えレイヤー分けしておくと、必要な情報のみ表示したり、あるいは逆にそれを重ねて表示することができ、これまで一枚の図面を属性毎に何度もトレースしていたことを考えるとはるかに有効である。また地理情報システム（GIS）との連携で地図上に表示が可能であり、レイヤーの設定次第では時代別遺構分布図や遺構種別を限定した分布図などが短時間で作成でき、文化財行政・考古学研究を行う上で有効な情報を素早く取り出すことが可能となる（次項の文化財地図情報の整備参照）。これは写真測量のデジタル化によって実現したことだが、三次元で常に捉えられている写真測量はこれ以外にも多大な情報を持っており、予算が許す限り、あるいは通常の写真を撮影するのと同じ様な扱いで予算を確保し、せめて測定用の写真だけでも残しておきたいものである。

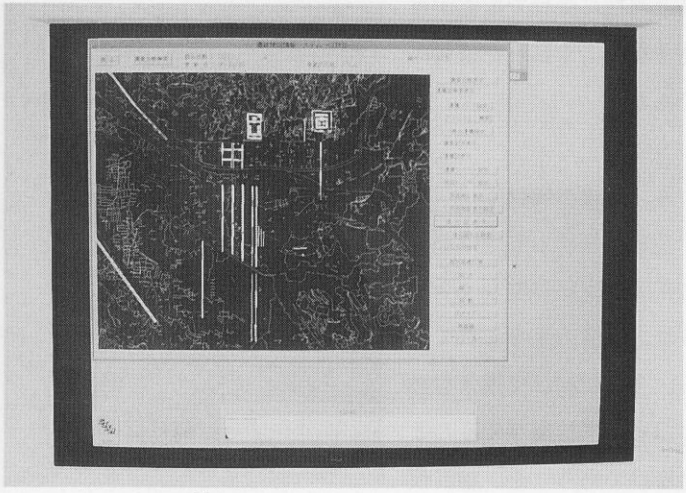
写真測量の有効性を簡単に述べてきたが、決して手描きの実測図を否定しているわけではない。遺構実測図は発掘した担当者が自分自身で描くべきであるという考え方は基本的には変わらない。図面だけを臨時や外部の作業員に描かせて、それを「手描き実測図」と言うなら写真測量のほうがはるかに早くて正確である。手描きの図が必要なのは、遺構を調査した（考古学的知識を有した）本人でなければ分からない情報を記入することができる点にある。手描きの実測図はこの点で主観的でなければならない。この図面は同一基準点を利用した写真測量による全体図に組み込むことも可能であり、両者の利点を生かした活用方法が望まれるのである。写真測量が担当者の手抜きの産物という捉え方は、すでに時代遅れと言える。

(3) 文化財地図情報の整備

埋蔵文化財の発掘調査に関わる各種の事務作業は、今や行政の責務として国及び地方公共団体において開発行為に対して記録保存のための発掘調査が必要かどうかなどの審査をしたり、文化財の指定や買収事務など様々なことがなされている。特に開発に伴う審査事務は公平性はもとよりその迅速さが要求されるところであり、文化財地図情報の整備は各自治体でも急がれる課題としてしばしば話題にあがる。

太宰府市では早くから、カード化という方法で審査を行った各地点の番号化と審査内容を記録してきた。これは地道な作業ながら審査担当者が交替しても同一地点において異なった回答

をしたり、過去の協議がどのようになっていたかなど一歩間違うと大きなトラブルの原因となる事象を確実に防いできた。さらに文字情報については数年前にデーターベース化するとともに、地図についても最新情報を盛り込んだものに書き換えるなど更新を繰り返してきた。しかし15年を超える事務作業の蓄積は膨大なものであり、混乱もないではなく、迅速性に欠ける部分も生じてきた。



第72図　GISシステムの画面

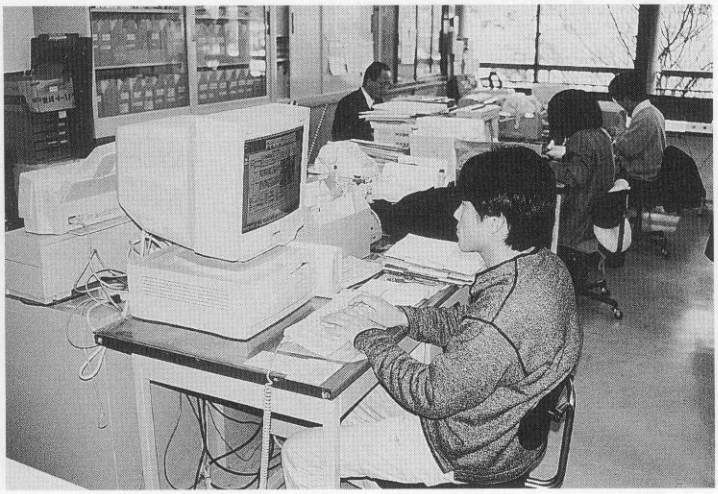
そこで本館建設に際して導入するパソコンのシステムの一部として地理情報システム（GIS）を導入することとした。地図に関するシステムは各種のものが開発されているが、文化財サイドで活用され都城関係遺跡に有効なシステムと考えられるものを導入することにした。以下にその概要を記しておく。

このシステムのベースになる地図は、最新版の太宰府市都市計画図（1／2,500）をラスター・ベクター変換し、道路・畦畔・水路・等高線など20以上のレイヤーにわけて取り込んだものである。各地点の情報は先述したカードをテキスト化し別に取り込んだものを用意し、この地図上には座標（国土調査法第II座標系）に基づいてボタンを自動で設置し、そのボタンをクリックすることによってその地点のカードを呼び出そうとするものである。これが完全な情報として機能すれば審査業務は迅速になり対応も正確さを増すことは疑いない。

さらに今回は発掘調査で得た遺構の情報も盛り込むこととした。太宰府は他の都城遺跡に類似して条坊制が施行されていたと考えられ、これまでいくつかの復原案が提示されている。これを画面上で見せることによって、審査の参考とするとともに試掘調査でのトレンチの設定位置あるいは方向を決定する参考にしようとするものである。そしてこれらのデーターは発掘調査の図面から導き出され、将来はまた追加変更されるべきものであるため、発掘遺構の実測図も取り込めるようにした。この情報も複数のレイヤーからなっており、当初は遺構を石や木という素材を中心としたレイヤーに分かれていたが、今回は井戸・土坑・建物など遺構の性格によるレイヤーを追加し活用することとした。このデジタル化された図面は先述のボタンと連動し、画面表示が可能となる。

なお本庁と本館とは電話回線で接続し、サーバーは本館に置くが本庁からこのシステムを操作することが可能なようにし実際の業務に反映することとした。また情報を再整理して写真資

料と同様に受付で閲覧が可能となるように現在検討中である。



第73図　市役所での作業風景

4．今後へ向けて

現在、管理と運営は(財)古都大宰府保存協会に委託され、筆者の手を離れている。今後に向けて運営自体に筆者が直接関与することはないであろうが、設計段階から気付いていたことを記しまとめとしたい。

設計当初から最も懸念されていたのが、本館の立地である。公共交通機関が近くを通過していないだけでなく、大型バスが入り込める道路もない。埋蔵文化財センター機能だけの行政の実務のみを行う施設であるならば問題ないが、市民の来館を対象とした施設であるだけに入館者数の増減は今後、この施設の評価を左右してしまうであろう。

この問題の解決は、運営担当者の努力にかかっていると言ってしまえば簡単だが、運営の実務を行い易い環境を作っていく周囲の協力が欠かせないであろう。

また、設計時に案として提出していた様々な実習事業については、各地の事例を収集したにとどまり実質的な経験が筆者には乏しかった。したがって各部屋の設計を行う際に実務に応じた形に組み上げられなかった部分も多いと思われる。今後の利用状況を見ながら再考を要する必要があろう。

さらに近年の展示で注意されているものに地震への対策がある。多目的展示室の項で述べたことと重複するが、阪神淡路大震災が発生したとき本館ではすでに建築が開始されており、若干の変更を行って対応したものの免震機能は完璧とは言えない。展示に際しては資料を貸し出す側の立場に立って、日頃から十分に対策を練っておく必要があろう。また地震時の来館者に対する対応も日頃から訓練されておかなければならず、学芸担当者だけでなく常に展示室の近くにいる受付担当者も熟知しておく必要がある。こうしたことから耐震マニュアルの作成は重要であり、早急な対応が望まれるとともに日々情報を取り入れて改訂を重ねるべきものであろう。

次に設計段階で検討したが採用しなかったものに燻蒸室と屋外トイレがある。燻蒸すべき資料の取り扱いをまったく行わないわけではないが、周囲が一般の住宅街であり薬品の取り扱いに不安な点があったことと、必要スペースを確保するのが困難になってきたこと、燻蒸が必要

となった時の対応として出張燻蒸のサービスを行う業者が存在することなどから、本館では燻蒸の設備は設置しなかった。ただ荷解スペース横の前室にある倉庫は機密性を高め、簡易の出張燻蒸を行えるようにしている。また屋外トイレは、夜間や休館日の管理上に問題が多く、完全休館日が他の類似施設にくらべてきわめて少ないことや建蔽率の制約があることから建設しなかった。

開館後に行うとして当初の設計から外したものに電気窯の設置がある。土器作りや陶芸実習で使用を考えているもので、当初は職員駐車場の隅に建設を計画していたが、諸事情で先送りとなった。将来の建設に向けて、電気の配管は必要個所まで延ばしてあり条件整備が整ったところで建設は可能となる。

ここで残されている課題について少し述べておく。太宰府市が保有している考古資料以外の文化財には民俗資料が若干存在する。これらの収集や保管に関しては周辺の市町村と協議をし、類似の資料は出来るだけ重複して保有せず、必要時に借用し展示するようにしている。このことによって保管スペースを圧縮でき、且つ必要な資料は身近にあるという好ましい条件が確立される。しかし、そのような対策を施していても資料は増加するものであり、近未来には民俗文化財を収納する専用の空間が必要になってくるであろう。また、彫刻、絵画、工芸、文書といった資料類は現状では保有していない。しかし市史編纂事業によって貴重な資料類が見出されており、早急な対応が必要となっている。当面は本館の特別収蔵庫がその役割を果たすであろうが、将来的にはさらに大規模な専門収蔵施設が必要となってくるであろう。

最後に私事ながら、今回こうした業務を行ったのは当然の事ながら初めての経験である。建築について全く知識がないところに加えて、いろいろな種類の業務が重なって進行していた。少なくとも営業担当者と同程度の話ができないとこちらの思いどおりの構図が描けない上に、どの部門をとってもすべて専門的であり、一日のうちに内容の異なる数件の営業担当者や技術担当者と打ち合わせを行うことが続いたときは、頭の中がどうかなるのではないかと思ったほどである。

こうした状況は開館後には急激に減少し、打ち合わせの相手が絞られるとはいえその専門性については変わるものではない。一人ですべてに対応することは、発掘調査や学芸業務を抱えながらでは絶対に不可能である。したがって内部で担当者を決定し、その担当者はできるだけその部門の専門性を高め、業務に対応することが望ましいと考えられる。実際、いくつかの部門ではそれを実行しており、筆者の手を離れたものも多い。

また、幸い本市では周囲の仲間が筆者に対し設計業務に専念できるような環境を作り出し、且つ数多くの意見を提示してくれたことでなんとか無事大役を終えることが出来たが、今後こうした施設を建設される機会を持たれる方があれば、できる限り設計段階から中心となる担当者のほかに、専門的業務について意見を述べる担当者を置き、業務の分散を実行されることをお奨めしたい。

最後になったが、今回の設計や建築に際して次の方々、機関からご指導、ご教示をいただいた。感謝申し上げる次第である。ただ、すべてを反映させることができなかったのは、筆者の不徳によるものとしてご寛恕いただきたい。（順不同、敬称略）

坪井清足、三浦定俊、佐野千絵、大塚英明、細見啓三、伊東太作、山中敏史、杉山洋、佃幹男、牛島茂、横田義章、石丸洋、石山勲、川述昭人、西山洋一、辻村泰善、藤澤典彦、岡本広義、辻純一、宮原健吾、清水尚、片桐孝浩、亀山隆、江浦洋、日高正幸、岡紀久夫、中嶋亨、山中（伊藤）幸子、

文化庁、東京国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、京都国立博物館、奈良国立文化財研究所、平泉郷土館、仙台市立科学館、東北歴史資料館、多賀城市埋蔵文化財センター、滋賀県立安土城考古博物館、（財）京都市埋蔵文化財研究所、奈良大学、元興寺、（財）元興寺文化財研究所、松戸市立博物館、千葉県立房総のむら、印旛郡市文化財センター、清瀬市郷土博物館、東京都埋蔵文化財センター、広島県立歴史博物館、豊北町立人類学ミュージアム、（財）松山市埋蔵文化財センター、高松市歴史博物館、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、福岡市立博物館、福岡市埋蔵文化財センター、豊津町歴史民俗資料館、福岡県立求菩提資料館、小石原村役場、佐賀県立名護屋城博物館、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、大分市歴史資料館、鹿児島県立埋蔵文化財センター

設計及び建築関係者は次のとおりである。

設計監理	㈱赤松菅野建築設計事務所
	梶原和光、徳永　工、占部直樹、原　博文、小宮山清
建築工事	佐藤工業・ナガタ建設・大森工務店建設工事共同企業体
	脇山末人・姫田憲二・高倉　浩・龍　秀弘
電気設備工事	㈱九電工
	佐藤文信・林田純一
空調設備工事	三建設備工業㈱
	西村浩行
給排水設備工事	㈱筑紫商会
	和田豊一

屋根瓦	合資会社坂井正記商店、石野瓦工業株式会社
３層式物品棚	金剛株式会社
陶板設置	大塚オーミ陶業株式会社
展示工事	株式会社岡村製作所
模型製作	トータルメディア開発研究所、株式会社トリアド工房
造園工事	松田造園土木

電話工事	日本電信電話株式会社、沖電気工業株式会社
	有限会社アイ・ユーサービス
保存科学機器	ミツワ理化学工業株式会社、関西保存科学工業
	ハイテックス株式会社
CPU関係	ソニーコンピューターシステム株式会社、キャノン販売株式会社
	松下電工株式会社、株式会社かんこう、（有）システム・レコ
	株式会社内田洋行、海援社、株式会社エムエム、株式会社ビュー
	株式会社アドバンス・ビジネス・ジャパン
	株式会社堀内カラー大阪現像所、株式会社環境総合研究所
特殊備品関係	イトーキ、進藤木工、森山銘木

建築に関係した企業や個人はここに記載した方々に留まるものではなく、背後で建築や設計を支えている方々は数え切れないほど多い。特に暑い日も寒い日も現場で頑張っていただいた作業員の方々、設計・建設に際してご提案いただいた業界の方々すべてに対して感謝の意を表したい。

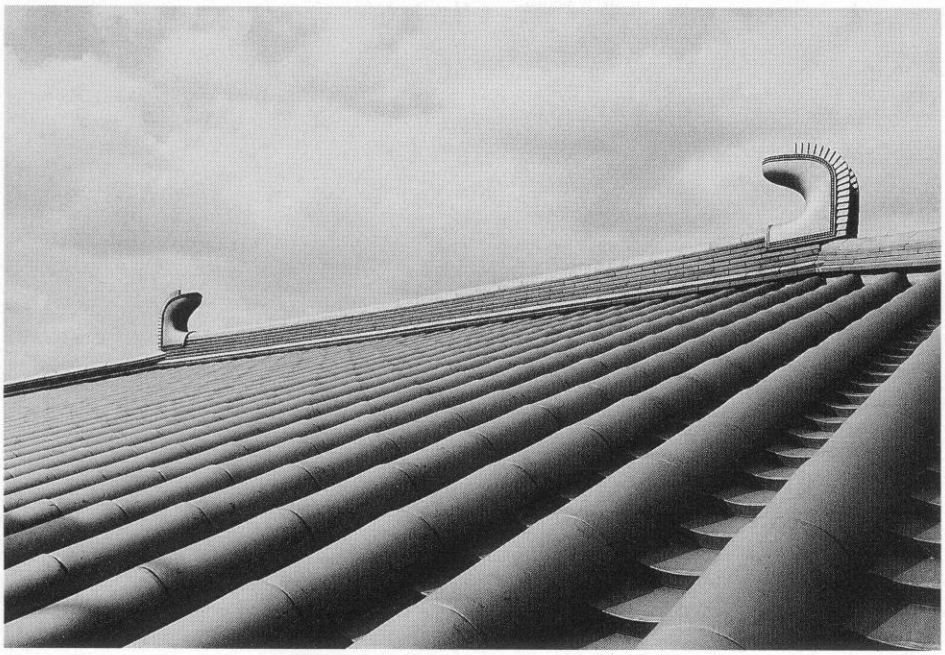
なお、最後に建設段階（平成７年度）での太宰府市役所の担当者を記載しておく。

太宰府市長	伊藤　善佐（～４月）
	佐藤　善郎（４月～）
助役	今村　　覚
教育長	長野　治己
建設経済部長	井本　邦彦（～８年２月）
建設課長	石橋　正直
工務係長	森田　純一（～６月）
	大江田　洋（６月～）
主任技師	山野　克弘、原口　信行
教育部長	白木　三男（現文化ふれあい館館長）
文化課長	花田　勝彦
文化振興係長	大田　重信
文化財保護係長	高田　克二（～５月）
	和田　敏信（６月～）
主任主事	川谷　　豊
文化ふれあい館準備室	高木　康生、小川浩一郎、井上　正和
主任技師	狭川　真一

なお、開館後の事業内容作成については主任技師山村信榮が中心となって行なった。また設計や事業作成にあたっては、山本信夫、城戸康利、中島恒次郎、井上信正、髙橋学、下川可容

子、松川博一（以上文化課）が協議に加わり、一部の実務を分担した。本稿に使用した図面の浄書は宮崎亮一が行い、一部の写真はエスエス九州、堀内カラー、（財）古都大宰府保存協会が撮影したものを使用した。

（狭川真一）



収蔵庫大屋根を飾る一対の鴟尾

第1表　各部屋別床仕上げ及び面積一覧表

階	室名	床仕上げ	面積
1	収蔵庫（階段・DW含む）	防塵塗装	332.21
1	PEG 室	塗り床	55.51
1	倉庫1	防塵塗装	24.00
中2	収蔵庫（階段・DW含む）	ニードルパンカーペット	343.66
2	保存科学室	長尺ビニールシート	132.52
2	X線室	長尺ビニールシート	11.17
2	撮影室	タイルカーペット	63.65
2	暗室	長尺ビニールシート	13.35
2	電算室	タイルカーペット （フリーアクセスフロアー）	30.00
2	調査研究室	複合フローリング（OAフロアー）	227.37
2	整理室	長尺ビニールシート	117.69
2	機材室	長尺ビニールシート	6.48
2	作業室	長尺ビニールシート	20.88
2	収蔵庫（階段・DW含む）	ニードルパンカーペット 長尺ビニールシート	430.73
	ホール・DW	長尺ビニールシート	22.92
1	多目的ホール	タイルカーペット	213.71
1	多目的展示室	タイルカーペット	212.13
1	荷解きスペース2（搬入口含）	搬入口　塗り床	72.00
		荷解きスペース長尺ビニールシート	39.70
1	サービスホール	御影石	147.12
1	自販機コーナー	御影石	16.10
1	エントランスホール	御影石	196.96
1	図書閲覧コーナー	御影石	8.60
1	事務室（館長室・応接室含む）	タイルカーペット（OAフロア）	136.68
1	荷解きスペース用倉庫	長尺ビニールシート	12.70
1	前室	長尺ビニールシート	19.06
2	市史資料室	タイルカーペット（OAフロア）	98.29
2	会議室	長尺ビニールシート	51.54
2	特別収蔵庫	杉板	32.80
2	前室	杉板	8.36
2	空調機械室	防塵塗装	75.12
1	実習室 1	長尺ビニールシート	170.34
1	実習室 2	タイルカーペット	108.36
1	準備室	タイルカーペット （フリーアクセスフロアー）	17.18
1	シャワー室	長尺ビニールシート	12.26
1	風除室	御影石	19.12
1	男子・女子便所	タイル	50.29
1	身障者用便所	長尺ビニールシート	4.84

階	室名	床仕上げ	面積
1	湯沸室	長尺ビニールシート	6.97
1	警備員室	長尺ビニールシート・畳	14.20
1	清掃員控室	長尺ビニールシート	9.72
1	廊下・階段・EV	長尺ビニールシート	107.33
2	書庫	塩ビ系タイル	120.23
2	男子更衣室・休憩室	長尺ビニールシート・畳	21.18
2	女子更衣室・休憩室	長尺ビニールシート・畳	41.93
2	男子・女子便所	タイル	42.16
2	身障者用便所	長尺ビニールシート	6.32
2	湯沸室	長尺ビニールシート	5.33
2	倉庫1	長尺ビニールシート	21.18
2	倉庫2	長尺ビニールシート	7.38
2	廊下・階段・EV	長尺ビニールシート	234.45
2	写真保管庫	塩ビ系タイル	33.73
PH	階段室	長尺ビニールシート	22.68
1	その他（PS等）		54.68
2	その他（PS等）		54.88
	各室小計		4373.38
	外部敷地		4994.60
	多目的広場		1312.58
	合計		10680.56

文化ふれあい館設置の保存科学処理機器

文化ふれあい館には、太宰府市が収蔵している木製・金属製遺物の保存処理作業の実施のための保存処理機器および、これら保存処理に先立つ前処理としての材質鑑定の必要性から分析機器が設置されている。各種保存処理関連機器が設置されたことにより、これまで委託事業として外部へ発注していた事業の内部処理を可能にしたばかりでなく、高額の委託事業費を軽減し、目的に向かって軽微にかつ即応する利便性をも兼ね備えた設備となった。保存処理事業については、長期的計画に基づく処理の面と、発掘調査によって突発的に出土する各種遺物の応急処置的側面の二面性を有しており、そのどちらにも対応することが可能になったといえる。しかし実際に運用する人的な面でまだ解決しなければならない問題もある。

さて、文化ふれあい館に設置された保存科学関連の主要な機器は、以下のとおりである。

保存処理機器

・PEG含浸装置　関西保存科学工業社製　IW - 200型

・真空凍結乾燥機　関西保存科学工業社製　AP - 10（特）型

・金属減圧含浸装置　関西保存科学工業社製　IF - 90型

・脱塩処理装置　平山製作所製　AUTOCLAVE DSM - 421K

・恒温乾燥機　タバイエスペック社製　SPH - 201

分析処理機器

・赤外線TVカメラ　浜松ホトニクス社製

・X線テレビジョンシステム　ハイテックス社製　HI - 150型

・エネルギー分散型微小部螢光X線分析装置　テクノス社製　TREX650

各種処理機器については、現在試行段階の機器から実際運用へと移行し可動している機器の二者があり、将来的には太宰府市が収蔵している木製・金属製遺物の計画的な保存処理を実施し、市民への展示資料として活用される遺物を生み出していくことになる。また肉眼では見ることのできない情報を遺物から引き出し、歴史資料および市民への展示教育資料として活用されることになる。

保存処理機器の設置によって、木製・金属製遺物の劣化を防止することが可能となり、また展示資料として活用が可能になってきた。また一方分析機器の設置によって、これまで肉眼観察に頼っていた歴史情報を、細かい視野から情報を引き出すことが可能となり、歴史情報に幅を持たせることができるようになった。しかし太宰府市が収蔵している各種遺物から得られる情報量は自ずと限界があり、特に比較情報としての成果には大きなものがあるため、市域外の資料を比較資料として分析に供することも生ずる。そこで太宰府市が収蔵する各種遺物の理解に役立てる手段として、市域外からの出土資料の分析を実施してゆくにあたり、以下に示す基準を定めることにした。

有形文化財の分析受託に関する基準

第1章　総　　則

第1条　総　　則

本基準は、太宰府市が管理所有する保存科学分析機器（以下「分析機器」という。）を使用する受託事業に関する諸基準を定めたものである。

第2章　基　　準

第2条　審　　査

分析受託の適否については、この基準に基づき審査を行うものとする。審査者は、文化財課長、文化財調査係長、保存科学分析を担当する文化財技師（以下「担当技師」という。）の三者によっておこなうものとする。

第3条　基　　準

受託の審査基準は、次のとおりとする。

1　太宰府市の有形文化財（『文化財保護法』第2条第1項第1号に該当するものを指す。以下「文化財」という）を理解する上で、有益と考えられるもの。

2　太宰府市の行う諸事業に支障をきたさないもの。

3　分析機器の使用条件に適合するもの。

4　第4条に規定する条件を受け入れるもの。

第3章　委託者側への条件

第4条　受託にあたっては、以下に示す条件を委託者へ付す。

1　太宰府市が行う諸事業への公開活用行為ならびに改変行為を許諾すること。

2　分析時の事故による文化財破損に関しての損害賠償請求権を放棄すること。

3　分析時に委託者に起因する事故が生じた場合、機器損料の支払い義務を受諾すること。

第4章　分　　析

第5条　各種分析にあたっては、委託者との協議に基づき、受託者が実施する。その際、特に必要と認められる場合を除き、委託者側の立ち会いを義務づけるものではない。

第5章　成　　果

第6条　報告と活用

分析の成果ならびに活用にあたっては、文化庁次長通知（昭和56年　庁保記第17号）にあるように文化財への理解を促す観点から、委託者の希望により受託者は報告する義務があるが、第3条第2号の基準に抵触しない範囲に留めるものとする。

第6章　協　　議

第7条　本基準に定めのない事項については、文化財課長、文化財調査係長、担当技師の三者によって協議し定めるものとする。

第7章　改　　訂

第8条　本基準の改訂にあたっては、文化財課長、文化財調査係長、担当技師の三者によって協議し、適時実施するものとする。

附則

この基準は、平成9年4月1日から適用する。

この基準の目的は、事業原因の主体者が太宰府市側から生じる場合と太宰府市外から生じる場合の二者があり、後者の場合に対応する側面も含んでいる。しかし前述したように太宰府市が収蔵する資料から得られる情報の限界を補うということを考え作成している。また無作為・無計画な分析行為を戒める役割をも担っている。なお契約関係や金銭収受が生じるものではなく、あくまでも太宰府市の収蔵する文化財を理解するための情報収集の一環として実施するものである。

本書の印刷仕様
B５版（中性紙使用）
表紙　　アートポスト紙（220K)
見返　　上質紙（135K)
本文　　上質紙（90K)
　　アート紙（90K)

写真図版　アート紙（90K)
　　スクリーン線数175線
カラー図版　アート紙（90K)
　　スクリーン線数200線

太宰府市の文化財　第33集

辻遺跡

平成９年３月

編　集　**太宰府市教育委員会**
発　行　太宰府市観世音寺１-１-１

印　刷　**株式会社昭和堂印刷**
福岡市博多区榎田２-２-52 徳重ビル



付図1　辻1次調査遺構配置図(1/200)



付図２　辻１次調査略測図(1/200)